
僕と兄貴と銀河天使と

HIGU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と兄貴と銀河天使と

【Nコード】

N68830

【作者名】

HIGU

【あらすじ】

ある日中二病患者の彼が目覚ますとそこは自分のあこがれた世界『ギャラクシーエンジェル』と酷似していて・・・

自分がギャルゲーを好きになるきっかけの作品の世界に生まれ変わった少年の話です。

Arcadiaさんの方に投稿していたものを、諸事情によりこちらにもあげてます。

『第1章日常世界』から『第7章現代ファンタジー』の構成でした。（前書き）

この小説は、元々別のところに載せていたのですが、諸事情により
そちらにしばらくの間投稿できなくなってしまう、こちらでその間
進めていこうと思い投稿しました。

いずれは、違う展開になる予定です。

それではどうぞ

『第1章日常世界』から『第7章現代ファンタジー』の構成でした。

『第1章日常世界』から『第7章現代ファンタジー』の構成でした。

やあ！俺は 蒼龍 刹那

日本人みたいな名前だけど 母親はイギリス人で

髪の毛は金色 目の色は青。身長は188cmの18歳

あんまり大きな声じゃ言えないけど、俺実はトリッパーってやつなのだ。

死んだ時に神様に会って、ちょっと力を貰って転生した俺は、いろんな世界を回って平和を維持している。

具体的には自分のことしか考えない、自己中心な厨二的オリ主を倒すのが俺の役目さ！

どんなやつでも俺の闘気を圧縮して打ち出す技 「神破断滅弾」で一撃だぜ！

まあ、昔俺が未熟だった頃は、たくさん失敗したけどな。そのせいであいつも…………。

おっと、今話すことじゃなかったな。忘れてくれ。

でも最近悩みがあるんだ、妹分の幼馴染と、近所のお姉さんがどーも仲が悪そーなんだ。

朝起こしにくる時とか、昼の弁当の時とかいつも争っている。昔は仲良かったのにどうしたのだろうか？

他にも、クラスメイトとかに俺がお礼を言ったりする時、笑って「ありがとな」っていうと急に皆よそよそしくなるのだ。

本当にどうしたのだろうな？

おおっと！出勤の連絡だ！ やっぱ俺は今日も闘わないとな！戦場がオレを呼んでるぜ！！

TTOTJ (Trippers Team Of Justice)
の切り込み隊長 SETUNA SORYU として！！

14歳の時の「僕の来世帳」
黒歴史ノート）抜粋

第4章最強系

候補7

より（通称

「あああああ~~~~!!!!!!!!!!!!誰か僕を殺してくれ
!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

えーと、始めまして、絶賛絶叫中の僕は
大田達也 19歳

どこにでもあるような名前と、何所にでもいそうな外見の持ち主だ
身長170cm 体重75kg 黒髪に茶色の目、若干猫背ぎみ。
体格はいいけど特にスポーツをやっていたわけではないので、べつ
に喧嘩とかに強いわけでもない。

彼女いない暦14年。これだけはゆずれない、人生〃じゃないのだ。

さて僕のことを長々と語ってもつまらないし、現状を説明すると…

……

「えーと、今度は人外とのハーフ系か……なになに……」「やめ
ろ~~~~!!!!!!!!!!!!」

えーと、引越しを友達に手伝ってもらったのが運の尽き、仕舞って
あったブツを発見されて僕の目の前で読まれている。

何とか阻止しようとしているのだが、さすがに3人で押さえつけら
れたら身動きなんて取れない。

四対一とか卑怯だろう、常識的に考えて。

「悪魔と天使のハーフの父親と、世界一の魔法使いである母親を持
つ俺の名前は『闇の番人』ラザフォードⅡⅡカイザー……………英語

とドイツ語のごっちゃにかよ……うわー。しかもラザフォードって苗字だぞ」

もう止めてくれえええええ！！！！！！！！！！！！！！！！

「ああ……酷い目にあつた。」

あいつらが帰って2時間後。あいつらが一通りからかって引越しの
手伝いも終わらせて帰ったあと。

僕は4畳半の和室で仰向けに倒れていた。きつと今鏡を見たら、ハ
イライトの消えた目が見えると思う。

経験のある人はわかるかもしれないけど黒歴史ノートは暴露されると本当にきついね。

親にベッドの下に隠してあるアレなものを机に出されるのより精神的に来るものがあるよ。

「畜生……僕が何をしたって言うのだ。」

あんなやつらもう、友達と呼ぶものか!!……………あれ？僕ってそう
するともう友達がいらないよーな……………。

ええーい！そんなことどうでもいい！今は荒んだこの心を癒すべく
ゲームをするぞ。

「さて……………昨日インストを終えたばかりの奴でもやるかね。」

さつきは言わなかったが、僕はいわゆるオタクと呼ばれる人種だ。
人種ってなにさ。みたいな方もいるかもしれないが、僕はそう思う
から割合する。

僕は、アニメとかラノベより、ギャルゲーのほうが好きで、ほとん
どコレにお金をつぎ込んでいる。

生まれて始めてやったギャルゲーはギャラクシーエンジェルシリ
ーズだ。

僕の一番のお気に入りで、今でもついやってしまう作品だ。

何よりも好きだ！！みたいなヒロインはいないけど、一部の例外を
除いてはどのキャラクターも嫌いじゃない。

シグルト・ジードマイアとかぐらいだね、嫌いな。あとその参謀。
エオニアだって、彼なりの考えがあったのだと思うし、レゾムだっ
てどこか憎みきれない馬鹿さがある。

ついつい語ってしまったが、実を言うと僕はこんなにもG Aが好き
なのに『?』をやっていないのだ。

なんというか、ストーリーは知っているけど、手をつけていないの
だ。

理由は笑っちゃうような物だけど、自分で攻撃できるモードがある
のがどうも気に入らない。

やっぱり、タクトの指揮下で指示によって動く戦闘にあこがれるの

だ。

とまあ建前はそういう事にしている。本当のところは、

「エンジェルと肩を並べて戦える主人公に嫉妬して感情移入できない気がする。だよな……………やっぱり。」

そう、やっぱり僕も男の子である、年齢〃彼女いない暦ではない（ココ重要）が、それでもやっぱりそういう感情はあるのだ。

え？ゲームのキャラクター相手に何言っちゃっているの？だって？ふつ……………貴様は今世界中の人間の数割を敵に回したようだな……………。

え？多すぎだと？いやいやきつとそんな事ないよ。コレぐらいが妥当な割合だよ。

まあいいや、とにかく僕はいわゆるオリ主みたいな存在になるのにすごく憧れていたのだ。

だからこそあのノートだしね……………。

さて、こんな話おいといて……………ってあれ？

ゲームを起動しようとしたPCの画面を見ると、ディスプレイいっぱいには黒い背景に白地でメッセージが書かれていた。

「何だ、これ？ 『おめでとうございます。あなたは別に選ばれたわけではないけど、こちらの一身上の都合により、転生してもらいます。』 だ〜？」

おいおいおいおい、テンプレだよ。この後画面に吸い込まれるか意識が真っ暗になるのだろ？きつと。

やべーよ！オリ主だよ！オリ異世界か？それともどつかの作者が書く二次創作か？ うおー！テンション上がってきた！！

「お！続きが出た！『能力を差し上げます。なにかはおのずと解るでしょう。では5秒後に開始します。5・4・3・2』おおー！！」

そのとき僕はその能力にすぐ期待していた……。でもまさかあんな能力を貰うなんて思いもなかったのだ……。

みたいなこと言うと最強形じゃなくなるから決して言わないぜ！さあ、カウントが0になるぞ！

『1・0　いつてらっしやい』

その文字を僕が読みきった瞬間。昔のコントみたいに床がぱっかり割れて僕は落ちていった。

やあ！僕は太田達也だったものさ、今の僕の名前はタクト・マイヤーズ　そう、ギャラクシーエンジェルの主人公さ！！

彼みたいな柔軟な発想が出来るかわからないけど、今の僕は原作知識を持っているからね……子供のうちから勉強すればなんとか代役くらいは出来るだろ。レスターもいるし。

さーて、早くエオニアクーデター始めないかなー。エンジェル隊は皆僕のものだぜ！！

なんて展開にはなるわけもなく

普通に僕は転生した。まあ憑依じゃなくて転生って言っていたものね。

現在の僕の名前は……

「ラクレット、お父さんが呼んでいるから来なさい。」

「はい。」

今呼ばれた通り僕『太田達也』の名前は ラクレット ラクレット・ヴァルターって名前になった。

確かスイスカ、フランスだかのチーズの名前だった気がするのだけどまあ気にしてもしょうがないのでいいや。

髪の色と目の色は限りなく黒に近い青です。普通に黒に見えるけど、よく見るとダークブルーってやつ。本当に濃い色だけど。

ちなみに家族ではこの色は母さん似だ。父さんや兄さんたちは、薄いブルーだ。そして、家族みな美形だ。僕は前世の顔ほぼままだ。理不尽である。

僕の住む星は辺境であるクリオム星系にある星で、

特に名前はないというらい田舎な星だ。便宜上、クリオム星系第11星というらしい。エリアならぬ、プラネット11ですね。

星の大きさも結構小さい、と言っても前の世界の月と同じくらいだ

けど。

重力とかそういうのは、ゲームだからなのか知らないけど、皇国内では共通だそうだ。

まあ重力発生装置があるのだしその辺を使っているのだとは思うけど。

さて、ここでちょっとこの世界について説明しておこうと思う。

まず、トランスバル皇国には3種類の星がある。皇国の直轄星（通称直轄星）と、皇国貴族領星（貴族星）、そして、現地政府の自治権の認められている星（自治星）の3つだ。

直轄星は、その名の通り皇国の直轄領で、トランスバル本星を中心に、全体の4割ほどだ、辺境に行けば行くほど少ない。

貴族星は貴族の領地でおおよそ全体の3割ほど。だいたいが直轄星を囲むように存在している。

最後の自治星も3割ほどで、コレは基本的に辺境の星となる。

まあ自治と言っても、軍の規模とか、中央への上納金の額とか決まっているから、属国みたいなものだね。

僕の住む第11星は、当然自治星となっている。

ともかく、これから僕はどうかと悩んでいたら母さんに呼ばれたのだ、いや、父さんか。

何で悩んでいるかというところからの介入予定についてだ。

そもそもこの世界には先ほど軽く述べたとおり貴族制というものがある。

こんな辺境にすんでいる人物はよほどの努力をしない限り、中央で何かを成すなんてことは出来ないのだ。

まあ、軍の士官学校に通うくらいならそこそこのお金さえあればいけるんだけどね……… 基本的に慢性的人材不足だし。

問題なのはどのような兵科に行くかだ。普通に考えて、原作介入には指揮官とかになるのが一番なのだろうけど。

自分レスターみたいに優秀な人物でもないのだ。

かといって、既存の紋章機の……例えば『カンフーフアイター』のパイロットになったら、ヒロインたちの誰かとは会えないし、原作から離れすぎるし、何より自分に適正があるかどうかもわからないのだ。

何気にこの世界って、市民Aからの原作介入が難しいのである。まあ、前例というか二次創作が少ないのも原因なのだろうけど。

リリカルな世界とか少年魔法先生の世界みたいに、前例が山ほど確立されているわけじゃないからね。

「で、何か用事？父さん？」

「ああ、今日でラクレットも5歳になるからね。ちょっと見せたいものがあるんだ。ちよつとついてきてくれないか？」

そういえば、今日は僕の5歳の誕生日だった。

そう言っただけで我が父の背を僕は歩いて追いかける。

さて、歩いている間暇だからこんどは僕の生活について少し説明しておこうか。

この星の生活水準だけど、結構高い、イメージして欲しいのは、地球の現代でヨーロッパのほうの田舎暮らしだ。

水は湧き水だけど、電気はあるし、ガスもある。普通に地球と同じだ。

まあ、惑星間移動とかが出来るからね……田舎でも大して差はないのかね。

家族構成は両親と兄二人だ。もともと兄さん達は今学校のため別の星に行っていて、年末くらいにしか帰ってこないけど。

上のエメンタール兄さんは、クリオム星系の本星にある学校に通っている。僕の9歳年上で、いま14歳のはず。やっていることは普通の勉強らしい。将来は家を継ぐから、いずれは農業関連の勉強をしたいといっていた。まあ、普通の人だ。

下のカマンベール兄さんは、7歳上。12歳ですでに、トランスバール本星の大学院で研究をしている。何かロストテクノロジーの研究をしているらしいが、詳しくは解らない。「ロストテクノロジー研究の若き天才」とか呼ばれていた。いずれはどこかの研究所で働きたいらしい（ロストテクノロジー研究の総本山の白き月の巫女はまだ男性ではなれないらしい）結構な変わり者で、よく独り言をつぶやいていたりしている。

両親の職業だけど、父さんはなんとこの星の総督だ。と言っても名前だけでやっていることはたいしたことはなく、会社でいうと、日本の企業の海外支店長みたいな役目らしい。何でそんなことやっているかというと、昔々ご先祖様がなんかこの星の開拓をしたんだと。クリオム星系は星系でひとつのまとまりなっていて、エメンタール兄さんが行っている星に国会があり、そこで決めた内容に従うというのがそれぞれの惑星の役目みたいな感じである。

イメージ的には、農業用プラントの代表者（名前だけで権力は無い）みたいな感じかな？

第11星は、住民のほとんどが農業に携わっているから。まあ祭りの時とか何かあるとき以外は普通に、執務室でなんかやっているだけだよ。ちなみに家の畑は別の人が管理してくれている。

母さんはいわゆる専業主婦に近い。たまに父さんの仕事を手伝って

はいるけど基本的にはそうだ。使用人とかいても、家事が好きな母は自分でやるのだ。

ちなみに、アニメとかエロゲとかによくいる年齢不詳の母親じゃない。でもなぜか父親は無駄に外見が若い。14の子供がいるくせに、20台くらいにしか見えない。どうよ、それ？

家はまあ、田舎ならこんなもんだろうつてぐらいには広い。1000m四方くらいの土地に家が建っている。回りは皆畑で、最寄りの町まで車で30分。

なんでも昔からの名家らしく、代々総督なのだそうだ。まあ、名前だけで基本的に権力持たないのだけど。貴族じゃないからね。

しかも上の兄さんが後継ぐから、僕は好きなものになっていいそうだ。この辺は感謝だね。

「父さん、見せたいものって何？」

「ああ、ヴァルターの家が代々受け継いできたもので、裏山の洞穴の奥にあるものさ。」

「代々受け継いできたもの？」

おいおい、なんか面白そうなものじゃないか。コレはオリ主パワー覚醒アイテム入手イベントか！

魔王…失礼、魔砲少女のところのデバイス見たいな感じの。

「ああ、なんでも、ご先祖様が使っていたものらしく、『意志では

なく、その友により、この翼は動かされん』っていわれていてね。」

その時僕はピン！と来たね、オリ紋章機きた！……！……って。コレで僕が乗れて覚醒イベントですね解ります。

「へー、どんななの？」

「それは見てからのお楽しみさ。」

（おいおいおいおい、なんだよこれ……）

裏山の洞窟についた僕は、父さんの案内で奥に進んだ。

中はひんやりしていて、そんなに奥まで深くも無く、懐中電灯があれば余裕で見渡せるくらいだった。

1分ほど歩いたら少し開けた場所に出た。

そこにあっただのは、青色の装甲を持つ、僕の主観からすれば巨大な戦闘機のような形のモノだった。

「驚いたか、これはな、我が家に伝わる、ロストテクノロジーかも知れないものだ。」

というか、すごくマイナーだと思うが、これはプリズムアークに出てくる攻速天使ラディエルに少し似てる。

アレは装甲が赤いが、それを丸々黒色っぽい青に変えたものだ。僕の髪と同じ色だ。

うん、ぶつちやけ紋章機っぽいもんねあれ。翼あるし。

両手は、装甲とくっ付いたジャベリンではなく、剣のようなものを握っている。

「これに乗れるものが生まれた場合、そのものに授けよ。と代々言われていてな、俺も5歳の時にやったがうんともすんといわなくてな。もちろんエメンタールたちも試してみたけど、動かせなかったんだ。二人ともたいして気にしなかったけどな。」

「つまり、僕が動かせたら、あれ、僕になるの?」

「そうだ、100年以上前に来た調査団も、この洞窟から出すことが出来なくてな、動かせたらあげるといわれてしまったよ。このはしごを上って中に入ってみろ。そして座席に座って両手でレバーを握る。それで動いたらお前のものだ。」

この洞窟は、入り口は狭いけど、紋章機がおいてあるところはホルミみたいな吹き抜けになっている。

この上から吊り上げようとしても、紋章機自体が固定されていて起動しないと動かないそうだ。

にしても、うんともすんともいわないとかいうのから考えて、オリ紋章機か……いや、それとも漫画版かな?確か2つくらい別のものの正式名称不明みたいのがあったし。

まあいいや、今わかることでもないし。

「じゃあ、乗ってみるね。」

僕はそう言って、設置されている梯子を上りコックピットに入った。

そして僕は、紋章機を起動させることに成功した。

しかしながらピーマンは好物です

はいはい、どうも主人公のラクレットです。

紋章機をあつさり動かせるようになった僕は、現在7歳です。

アレからすでに、2年たっているのだよねー。

最近では、紋章機を実家の上空で飛ばしたり、許可とって近くの小惑星帯で訓練したりしています。

しかも、僕の紋章機は変形するのだ！！戦闘形態と移動形態のふたつに！！

戦闘形態でも速度はカンフーファイター並で、装甲はハッピートリガーより少し弱い程度、さらに燃費は物凄く良い。

移動形態は攻撃がほとんど出来ないけど、カンフーファイターより少し速く飛べる。というチート性能！！

すごく順調な、僕のオリ主ライフ！！

このまま原作まで突っ走るぜ！！

今回は別に嘘は言っていません。

僕は、紋章機を動かせることがわかった後に、とりあえず白き月に報告しようと思って、ちょっとしたコネクションを持っている兄に頼んだ。

ぶっちゃけると、シャトヤーン様が見たかったって言うのもあったのだけれど。

今まで説明してなかったから言うけど、僕が生まれたのは、398年 解りやすく言うと、ヴァニラの一個上になる。

だから、僕が5歳になったのは原作開始9年前、だいたいシャトヤーン様がシヴァ皇子を出産したくらいになるのかな。占領と同時に妃になっていたからね。

それはともかく、そういう理由で、謁見は難しいかなと思っていたのだけど、案外半年後にあっさり謁見することになった。やっぱ、紋章機ってというのは大きいね。

「ここが、白き月か……外から見た以上にでかいな……とても人工の天体だとは思えない。」

今僕は白き月の謁見の間に向かって案内されている。家から、トランスバール本星にある白き月までいろいろ経由しなければいけないから4日かかる。子供が一人で行くのは少し長い旅程だと思ったのだけど、両親は別に僕一人で行くことを許可してくれた。まあ、カマンベール兄さんみたいにもっとしっかりしている人もいるしね……。

それで、白き月の港についてから、移動用の乗り物（名称がわからない、エレベーターみたいになっているから暫定的にそう呼ぶことにする。）に乗って移動して。さらにその後今20分ほど歩いている。

「ええ、とても驚いたでしょう？ここにはたくさんのロストテクノロジーがあつてね、私や貴方のお兄さんはそれを研究しているの。」

僕を案内してくれているのは、兄さんの知り合いというか、大学時代同じカリキュラムをとっていたらしい、タルトさん（25歳）だ。

僕の口調が若干大人びすぎているのにも特に気にしない良い人だ。大抵の人は驚くものなのだけど。

まあ、直接聞いてみたら「君のお兄さんで慣れているよ。だって、6歳で私と同じ大学に入ったんだよ？」　だそうだ。　なるほど、確かにそうだね。

「さて、この扉の先に、白き月の聖母シャトヤーン様がいらっしゃるから。決して粗相の無い様にね。」

「はい。ありがとうございます。」

僕が、扉に近づくとブウウンという音とともに緑色の光があふれて、扉は開いた。　無駄に凝った自動ドアだと思う。

そのまま中に入ると、そこには

「貴方が、ラクレット・ヴァルター君ですね。私が白き月の聖母シャトヤーンです。」

僕が始めて見る原作キャラがいた。正直見惚れてしばらく声が出なかった。皇帝が戦争をしてまで妃にしたのも解った気がした。

まあ、どんなことを話したかは詳しくは省くけど、

許可はするから、緊急時になったら力を貸して欲しい。

てことを言われただけ。　僕も元からそのつもりだったし、僕の紋章機についていた、『クレジットカード大の発信機』を渡した。（どーせ、使わないからね……、この後、市販の民間用つけたし）

これで、9年後に白き月からエルシオールが出る時、シャトヤーン様がルフト准将に渡してくれば良い。

一応将来何かあって脱出しなければいけないときが来たら、それがある場所へ駆けつけます。みたいなことを言っておいた。さすがに黒き月の事は言わなかったけど軽くほのめかしておいた。

無理でも僕の紋章機所持の許可のために契約書を書いてもらったからそれでいいし。

あと、「将来は白き月の斯衛隊に入ってくれとありがたいのですが」て言われたけど、まあそれは、僕が大きくなってからということでお茶を濁した。

だって、これからかなり体制が変わるからね。

さて、一応僕の紋章機は、分類的に金持ちの持つ小型の宇宙船扱いになった。

速度は戦闘機を余裕で越えるのにね。

何でそんなことになったかというところ、シャトヤーン様の許可が出たからもあるけど、何よりの理由は。

この紋章機 「武装がない」 のだ。

腕みたいな部分が剣を握っているだけで、レールガンも、レーザーも、ミサイルも、フライヤーも、アンカークローも、ナノマシンもない。

剣にしたって、僕が乗って『クロノストリングエンジン』を動かして初めて使える。（剣の周りに、エネルギーが展開されて青白く輝く）

要するに燃費がいいのは、剣しか武器がついてないからなのだ。

そして、戦闘機が持つ剣は、皇国の法では、兵器ではなく装飾品になるのだ、実際に切れるにもかかわらずに。

つまりは、所持はシャトヤーン様に、使用は皇国に認められたのである。

だから、一応税金を払っとけばそれでいいのである。

「よし！！行くぞ！！」

そうやって僕は、左右のレバーを握る。頭上に天使の輪の様な『^{エン}天使^{ジェルリング}使環』が展開する。

『Human-brain and Artificial-brain Linking Organization System』通称『H.A.L.Oシステム』が起動し、僕の精神と紋章機のシステムがリンクする。

『クロストリングエンジン』から、エネルギーが全身と紋章機にめぐるのが解る。

戦闘形態から離陸して移動形態に切り替える。

今僕がいるのは、スペースデブリの集積場の入り口だ。と言ってもただの小惑星帯だけだ。

ここはよく僕が訓練に使う。さっきも言ったが僕の紋章機は、弾薬が全く搭載できない。

だから訓練中の武器代でお金がかかることもないし、燃料も『クロノストリングエンジン』から発生するエネルギーなので、問題ない。

パーツの劣化とかは当初心配していたが、ナノマシンによる修理をしてくれる会社があるのでそこに頼んでいる。

そのお金は親が出してくれている。

と言ってもこの訓練自体二ヶ月に一回くらいだし、たいした事はないから、半年に一回で済んでいる。

出力も、自分のテンションで引き出せる3割くらいでしか動かさないことにしているし。

上下左右、直角に曲がったり、回転したり。時には機体を90度傾け縦にして。

とにかく進む、このゴミの山の中。さっき軽く言っただけ僕がやっているのは訓練だ。

『クロノストリングエンジン』を使つての高速移動で、障害物のすれすれを通ったり。それを慣性飛行でやったり。戦闘形態に切り替えて、自分より大きなデブリに近づいて切りつけたり。要は近接戦の練習だ。

この訓練は、もう1年以上続けているけれども、正直あんまり上達した感じはしない。紋章機の操縦自体はかなり簡単だった。まあ、乗れるか、乗れないかの問題がメインだったと言うのもあるし、ミルフィーユルートですらミルフィーユはエースだけど紋章機の腕はそこまでじゃない、見たいなことを言われてたんだから。

もちろん上達した部分もある。僕は最初からどうやって動かすのが

理想的なのかなんとか解った。けれど、どうやって攻撃すればいいのかよくわからなかったのだ。とりあえず両手についている剣で、いろいろ切りつけていると、なんとなく最適な使い方が解ったのだ。他にも、慣性飛行やら、そういう普通に動かす以上のやつは何度かやってみてコツを掴む必要があるのだ。

あと、一回だけ全力で動かしたけど、別に普通に小惑星のなかを潜り抜けることが出来た。

なんかよくわからないけど、周囲の状況が頭に伝わってくるのだ。そういえば、紋章機というより、『H・A・L・Oシステム』には予知能力があつたからそれか、または僕のオリ主補正のどっちかだろうと思う。

そんな感じで、この小惑星帯の9割くらい進んだところで、自分の集中力が最大になったのを感じた。

目の前にあるのは、直径80メートルくらいの星だ。

僕は自分の集中力を解き放ち叫んだ。

「今だ！！ コネクティドウ……ウィル！！」

僕のその言葉に反応して既に戦闘形態になっている僕の機体の両手の剣がよりいっそう輝く。

両手に持つ剣を合わせてより一つの大きな剣へと変える。

そのまま星の中心よりやや上部に突っ込むと剣が流れるような動きで、何度も星を切りつける。その剣の太刀筋は剣術のとある型の模

倅に過ぎないが、それでもこの程度の物を砕くのには十分だ。
その勢いのまま、星の上半分を貫通して、僕は小惑星帯を抜けたの
であつた。

僕の紋章機につけられていた名前は『エタニティーソード』だ
つたのだ。

特殊兵装は この、紋章機自体にプログラムされてある剣術の型ど
おりに高速で剣を振る『コネクティドウィル』

なんというか……すごく、ソユートとを思い出す名前だ（破壊神？
誰それ？）。特に特殊兵装が。

名前にしたって、あれは The Spirit of Eternity
Swordだつたし。

まあ、名付けた人が同じく転生者だったとか、偶然だとかそんな理
由だろうけど、気にしてもしょうがないので、深く考えないことに
する。

そんなこんなで、たまに訓練とかしているけど、原作に対しては布石を打つとただけで介入はしなかった。

あ、一応言っておくと、僕は6歳から普通に学校に通っている。そのうち飛び級でもしようと思っっているけど、忙しくなるのである程度操縦の訓練をしてからにしようと思っっているからね。

そんな生活がしばらく続き、僕が9歳になってしばらくした頃、エオニア皇子がクーデターを起こした。

もつとも、2週間ほどで、ジードマイヤが裏切ったことで早々に決着はついたけど。

そんなことより問題だったのは、国外追放になったエオニア皇子の

映像を見たときだ。

彼の後ろには、もちろんシェリーだと思われる人がいた、けどそれだけじゃなくてその横に

僕の兄 カマンベール・ヴァルターがいたのだ。

ハーレム野郎？誰だ、それは？ b yカマンベール

ハーレム野郎？誰だ、それは？ b yカマンベール

いきなりだが、俺には前世というものが二つある。

一つ目は、ただただ過ごしていた平和な人生。

もう一つは、自分の出来ることを最大限にした、戦いの日々。

おっと、自己紹介が遅れたな。俺の名前は カマンベール。

カマンベール・ヴァルター だ。

3回目の人生を送っている、しがない技術者志望の人間さ。

俺がまだ、転生というものを信じていなかった頃の話だ。俺は朝起きたらいつも通り会社に行った。

その途中のフリー・ウェイで起こしてしまった交通事故であっさり死んだ。

俺は留学して医学部に入るために渡米した。でもいろいろあって、コンピューターにはまって、必死に勉強しながらマイクロソフトに入った。

こっちは日本と違って、比較的簡単に学部を変えられたから楽しかった。

まあそんなこんなで、就職してから自分の好きな仕事が出来るといって、人生でも有数の幸せな時間を過ごしていた俺だが。

さっきも言ったようにあっさり死んでしまった。

まあ、短いけど充実した人生だったなって思っただけで目を閉じて気がついたら。

もう一回生まれた。

名前も姿も生まれた場所も時代も全然違ったけど、前の『俺』の記

憶があつたのだ。

その世界の歴史はどうやら俺の知っているものとは全然違って、宇宙人？と戦争をしているらしい。

しかも人類は圧倒的に劣勢だそうだ。

俺が生まれたのは武家で、両親は二人とも軍人だった。

だったというのは、俺が15になる時に、死んでしまったからだ。

俺は思った、こんな前世の記憶を持つなんて変なガキでも育ててくれた両親。

そんな両親が命をかけた守った国を守りたいと。

他の人から見れば、たいした物でもないことかもしれないし、何より世間的には民のために戦う家に生まれたのだ。

そんなの当たり前だといわれるかもしれないけど、俺は確かにそう思ったのだ。

だから俺は、技術廠に入った。

先ほども言ったが、俺はとある武家の次男に生まれたから、特に何かはいわれなかった。

そこで俺は、現在主力として使われている、二足歩行のロボットを、どうにかして強くする研究を始めた。

無人操縦の時の効率運用のためのAIを組んだり、無人操縦の時に後方から同時にかつ迅速に指揮を送ることの出来るシステムも作った。

他にも、普通にOSの改善を試みたりとかもかした。

結果的にそれがどれだけの人の役に立ったかはわからない。でも俺は精一杯やれたはずだ。

人類の運命をかけたある大きな作戦が終わってしばらくした後、俺の作ったシステムが正式に国の軍で使われるように決まったのを俺が聞いた時にはすでに俺は、持病で余命わずかだったから。

俺は二回目も人生を送れたことに感謝して、そのまま死んでいった。
なのに！！

「だからきゅぷおんすまゝいる、てんしのしんぷおゝに」

「うつせーぞ、ラクレット！！ 通信つないでいきなり歌いだすな
！！！！！」

さらにもう一度転生してしまったのである。

今度生まれたのは、物凄く文明の進んだ世界だ。

皇国自体は400年くらいしか歴史は無いけど、地球なんてのはもう地図にすら載ってない（元々無かった可能性もあるが）

人類が宇宙に出てからすでに何万年もたっているそうだ。

俺は、なんか金持ちの家の次男に生まれた。両親は普通に優しいし、兄貴はすごく普通な人だし、弟は普通におかしい。

そんな極平凡な家に生まれたが、俺が5歳の時に我が家の伝統ということで、戦闘機を見せられた。

この世界は、結構技術が発展しているけど、旧暦という時代はもっ

と発展していて、クロノクエイクという災害が起こって、文明が衰退したそうだ。

その戦闘機は、どうやらその時代の産物らしい。うんともすんとも動かないから、我が家の所有物になっているけど。

それを見たとき俺は強く思った、「素晴らしいと」　こんなにも優れた機械があるなら自分も見たい！！　というシステムで動かししているのか気になる！！

俺はその時それを強く願った、それ以来俺は、ロストテクノロジーを解析して理解する能力を貰った。

頭の中で声がしたのだから、そういうことなのだと思う。

実際に乗ってみたなら戦闘機は動かなかったが、当たり前だ。俺は技術者で研究者だ。

その後俺は両親に頼んで、本星の博物館に連れて行ってもらったときに、学者先生に頼み込んで本星の大学に進むことが出来た。

この辺は運の要素も強かったが、もし出来なかったら、自分で論文を書いて送るつもりだったから結局変わらなかっただろうけど。

まあ、ともかく今12歳の俺は、去年占領された白き月のことで今一層盛んな、ロストテクノロジーの研究に力を入れていた。

そんな中、確か5歳になった弟から連絡があつたのだ。

弟はなんか変だ。なんというか、俺と似ている感じがするからすごく変なのだと思う。

まあともかく、連絡してきて、いきなり歌い始めるとは、よほどいいことでもあったのか？

「で、どうしたんだ？いきなり歌いだしてご機嫌じゃねーか。」

「うん、実は僕、紋章機のパイロットになったんだ！やべーよ、オリ主的覚醒だよー！」

「オリ主ってなんだよ……。にしても紋章機って……。ああ！あれか、あの戦闘機動かせたのか？」

「そっか、あれ紋章機っていうのか、知らなかったぜ。ラクレットは時々良くわからないけど名前を知っていたりするからな……」。

「何でかと聞くと「原作知識によるチートだ！」って訳解らないことを言うからスルーしてるけど。でも基本的に後で調べるとあっているから侮れないというか。」

「おう、それでだけどさ、一応はうちのものになっているわけだけど、ロストテクノロジーだし一度くらいは白き月に報告とかすべきかなーと思ってさ。ロストテクノロジーなら兄さん詳しいでしょ？」

「なるほど、それで俺にか。うーん、一応白き月にいる知り合いに聞いてみるから、明日のこの時間に連絡しろ。」

「了解したぜ！」

そう言つて、ラクレットは通信を切つた。いいねーすごく人生楽しそうだ。

まあ、そういう俺も結構楽しんではいるのだけど…………。

「もう、50年以上生きているのだが…………。彼女が欲しいぜ。」

俺が、仕事というか、好きなものにのめりこみすぎる傾向のためか、今まで彼女が出来たことがない。

最初の人生では、魔法使い一歩手前だったし。前の人生でも、兄貴にはいた婚約者も、俺は体が弱くていなかったし。

もつとも、俺は付き合つても仕事にのめり込むのは変わらないだろうから、仕事についてこられるくらい頭の良い女が理想だな。

欲を言うなら、さらに可愛い感じがいいな。

まあ、そんなの早々ないだろうけど。

「さてと……………あ、こちらカマンベール・ヴァルターですが研究員のタルトさんは…………。」

あれからしばらくたったが、どうやらラクレットは白き月の聖母シヤトヤーン様に謁見することになったそうだ。

まあ、そんなことも関係なく、研究に没頭していた俺は、彼の接近に気付けなかったのは当然といえるだろう。

「えーと、この前発見された自身の体を構成する物質を一時的の他のものに交換することができる機械だけど……………」。

その日俺は、いつものように、自分のやりたいように研究をしていた。

俺は、ロストテクノロジーがどのように使われていたのかを推測したり、それをどのような形で発展させるかみたいな研究をしている。

前世の影響で軍事転用の方向に発想が行きがちになっているから、今の主流とは違うこともありやや日陰者な俺は、一応自分の研究室もあるので、そこにずっと籠っているようなものだ。

だから、少し前から周りが慌しかったり、上司が自分のデスクや、研究室の清掃に余念がない様子に気付けなかったのである。

そういうわけで後から知ったのだが、その日はある人物が査察に来る日だったそうだ。

「うーん、運用するためには、実際にコレを使用したであろう物を見てみないと使い方が解らないな。」

「お前が、カマンベール・ヴァルターか？」

俺は、名前が呼ばれたので顔を上げると、軽く180cmを超えている物凄くかっこいい男が立っていた。

着ている服はいかにも高貴なものが着そうなものだった。

しかも後ろに付き人のような女の人と黒服のSPまでいる。

「はい、そうですけど……。えーと、どちらさまで？」

「余は、エオニア・トランスバールだ。お前は、ロストテクノロジー

「の軍事運用について研究しているようだな。しかもなかなか優秀だといわれている」

エオニア・トランスバール

確か、現皇王の甥っ子で、王位継承権は存在しない人物だった気がする。

にしても何で俺なんかのことを知っているのだ？

「もったいないお言葉です。皇子」

「謙遜せずとも良い。お前の作った、『レーザー銃に対する防弾シールド発生装置の小型化』はコストはかかるが、大変素晴らしいものだと思う。」

ああそれが、最近発掘された、エネルギーを歪曲させる装置を使ってみたやつだ。

「さて、いきなりの本題だが、我の下に来ないか？お前のような男こそ、余が理想とする皇国にふさわしい男だ。」

「はあ？……失礼。私がですか？」

いきなりの言葉に少々無礼な物言いになってしまった。反省反省。

「そうだ、カマンベール、余はロストテクノロジーを使えば、皇国の領土拡大などはたやすいと常々思っており。それは、研究をしているお前が一番わかるであろう?」

「ええ、正直規格外なものや良くわからない物も多いですが、概ねその通りかと。」

そうだ、ロストテクノロジーは正直 最初の人生で見た青い狸の秘密道具と同じレベルだ、ほとんど覚えていないけど。

もう、40年以上前だからな。仕方ないけど少し寂しいな。

「しかしながら、白き月を占領しても直轄領にただけで何も変えないとは。全くもって理解不能だ。(それどころかシャトヤーンの為とは……呆れて物も言えぬ)」

そう言うところエオニア皇子は俺の前まで来て俺の顔を見る。座っている俺とは(立っても155cmしかないが)物凄い身長差だ。

なんだよ、今まだ13になってないのだ。別にそこまで低いわけでもないだろう。

にしても本当に綺麗な人だな、髪も長いし女の人みたいだ。

「白き月は、現在女性の研究者しか受け入れていない。その理不尽に思うところがないわけでもないであろう？（もっとも数年すれば、そこその数の男性研究者がいけるように成るとは思うがな。今は、少しでも臣民の人気を取らないと、占領が理由でただでさえ低い支持率はがた落ちだからな。叔父上。）」

そうだ、俺だつて最高の環境に行きたい、なによりこんな研究所に俺がいるのは年齢のこともあるが、きつと俺が男だからだ。（研究の内容も、あまり受け入れられてはいないが）

研究者を性別で差別するなと何度思ったことか。

「もう一度言う、余と共に来い。正しい形に皇国を戻すのだ。」

その言葉に俺は、また自分の中で何かが変わったのを感じた。

よくある、この人のために、何かをしたいとか、カリスマに飲まれたとか。

そういうのじゃなくて、もっと単純にただ

こいつについていけば、面白いことが出来そうだ。

というふうに思えたのだ。我ながら打算的すぎるが。

だから俺は

「この非才なる身にかけて。」

と返し、彼の前に跪いたのであった。

忠誠とかそんなの全くなくただ自分の欲望のために。

前世のバーゲンセール

前世のバーゲンセール

それは、久しぶりにエメンタール兄さんが、家に帰ってきた時だった。

僕はその時9歳、エメンタール兄さんは18歳で、ハイスクールの休暇を利用した帰省の時だった。

直接来たわけじゃなく、首都星でやってたアイドルのコンサートに参加してきたらしい。

遠回りなのに……よほどのファンなのであろうね、興味ないけどね。

兄さんが家に帰ってきたあたりでクーデターが始まったらしい、2週間くらいで鎮圧されてたけど。

何気なくテレビを二人で見ていた時、エオニア廃皇子国外追放というテロップを見て、ようやくエオニアが出て行ったなーと考えていた時だった。

画面が切り替わり、写真の右後ろ、エオニアの背後にいるシェリーの、横にいる家の兄貴に気がついたのは……………

「「な！！なんで兄さん（カマンベール）がシェリーの横に！！！」」

奇しくも、エメンタール兄さんとタイミングと台詞がかぶってしまった。

その後は、執務室にいる父さんのところに兄さんが走って行って、僕は画面を保存して、録画を始めて急いで母さんのところに行った。

僕と兄さんはほとんど同時に母さんたちを連れて戻ってきた。兄さんが父さんたちに説明しながら動画を見せている間、僕は兄さんの研究室に連絡を入れてみた。

すると、クーデターが始まる頃から、自分で休暇を入れていたらしい。よって全く知らなかったそうで、今ニュース見て研究所でも騒ぎになっているそうだ。

無論兄さん個人に繋いでみても反応は無かった。父さんと母さんたちのほうを見ると、ショックで茫然自失としていた。

それからしばらくのことはあまり思い出したくない。（疲労的な意味で）

母さんはショックで気絶してそのまま寝込んでしまった。父さんは確認の為だ。と言ってトランスバール本星に行った。

兄さんは、僕に母さんを任せると父さんについていった。

別に、僕は転生していたから精神年齢が高いからよかったけど、普通の子供ならどう考えてもトラウマものだろ。

だからそれを受け取ったのは僕が一番初めだった

「母さん！！兄さんから手紙が来ている！！」

いつもの太陽がちょうど真上に昇ったときくらいに来る郵便配達のおじさんから受け取ったのは、カマンベール兄さんからの手紙だったのだ。

後から知ったことだけど、クーデターが始まってすぐに別の星を経由して送っていたらしい。この時代は、手紙は小包みたいなのがメインで郵便はそこまで送られない。通信が便利すぎるからね……………。

兄さんからの手紙にかいてあったのは、

5年位前からエオニアと会っていて、たまに使えそうなロストテク
ノロジーの軍事転用が出来れば報告したりしていたらしい。

自分は、今のままじゃ、満足に自分のやりたいように研究が出来な
い。

だからエオニアに付いて行けば、自分の好きなことが出来そうだから自分は付いたのだと。

それと、自分の名前を出さないことを条件にしてもらっているから、
家族には迷惑をかけるつもりは無いとも書いてあった。

後は両親と兄に対する謝罪が書かれていた。（僕には書いてなかった。）

ただ最後に『自分は前世の記憶がある。しかも一つだけじゃなくて
二つも。』と書かれていて、そんな俺でも育ててくれてありがとう
という言葉で締められていた。

コレを読んだ母さんは、僕の予想を裏切り泣いたり取り乱したりしなかった。というか、「だからあの子あんなに頭良かったのねー。」とかいってニコニコしていた。

正直今まで寝込んでいたのはなんだったのかと思っただが、本人曰く、「自分のやりたいことが出来ないのなら仕方ないわ。」とのこと。

なんでも母さん実はとある貴族の次女に生まれたけど、父さんと会って半場駆け落ちのごとく結婚したのだそうだ。最終的には認めてくれたらしいけど、物凄く苦労したのだそうだ。

だから、本当に自分がやりたいことならそれはしょうがないのと。

「じゃあ、あの時寝込んだのは何でさ？」

「いきなり、息子がクーデターに加担していて、首謀者とともに国外追放だったら驚くでしょ？」

いや、まあ確かにそうですが……。お母様切り替え早すぎでは？

さて、母さんの問題は思ったよりずっとあっさり片付いたけど問題なのは、カマンベール兄さんがトリッパーだったことだ。

正直、理解できないほど高度なことをやっていたって言う点から、気付こうと思えば気付けたはずだ。

だって、そんな六歳から大学に通う様な人だぜ？

しかもその後の研究成果に『重力制御を利用した頭につけると飛べる竹トンボ型の飛行機械製作に關しての論文』とか書いているんだぜ？

青狸のアレだろ……。何で気付け無かったのだと自分に言いたい。父さんや兄さんは手紙が届いた三日後に戻ってきた。一応手紙内容はメールで送っておいたけど。

そして、二人曰くカマンベール兄さんは、行方不明者扱いに成るそうだ。皇王自らが投資している研究所の職員が、エオニアと一緒に付いて行った事は皇国的には秘匿したいそうで、ニュースを流していたテレビ局に圧力が掛けられたそうだ。

まあ、顔が一度出てしまっているのでそれがどれだけ効果があるかはわからないけど、それでもやらないよりはマシだっていうことだね。結果的に家族に迷惑はかからなかったのだし。

というより原作の時には、5年たつわけで、16歳の兄さんが（タクトと同じ年）21になればそれなりに顔も変わってるから問題ないか。

「にしても、カマンベールには前世があったのか。どうりで頭が良かった訳だな。」

「夫婦そろって同じ台詞かよ。」

「ハハハ、俺と母さんの愛は最強だからな。」

うぜーよ親父、外見はともかく。実年齢考えろよ。もう50手前だろが。

母さんも笑って「もー、アナタったら。」じゃねーよ。

そっぴえば氣になつたので祖父のことも聞いてみたが、父さんに家任せたあとどっかにふらりと旅に出てそれっきらしい。

「カマンベールは、自分のやりたいことをするためにエオニアに協力した。その結果国外追放になった。それはもう変えられない。だろ？父さん」

兄さんが、年齢を考えない馬鹿夫婦によつて、この微妙になつてしまった空気を元に戻してくれた。

この役目はいつもエメンタール兄さんの仕事だ。いつもご苦労様です。

「それで、エメンタールが母さんとお前に言いたいことがあるそう

だ。」

「僕と母さんに？なにさ、兄さん？」

せつかく思ったよりずっとあっさり片付いたんだから蒸し返すようなことは言って欲しくないのだが。

今僕はエオニアが5年後攻めてくるという歴史が変わったかどうか、実際に戦う時にどうしようか？悩むことは多いのだから。

「ああ、母さん、ラクレット。俺も実は前世が有るんだ。自分が覚えてる限り3つ。」

……………エ？。イマナント？

「驚くのも無理はないと思うのだが……………それと、多分ラクレット。お前もだろ？」

ちよー！！何いきなりカミングアウトした後に暴露していますかこの人は！！にしてもなぜ解った？

自慢げに原作知識で物の名前とかをカマンベール兄さんに教えている時か？それとも、よく歌っていた時か？前の世界の曲を。

あーもう、別にもうなんか言ってもいいけど、このタイミングでかよ……。息子が国外追放されたすぐ後に、息子たちが全員前世持ちでしたとか。

普通の親ならショックで気絶するぞ？

「……………そうだけど……………別に今言わなくなっただっていいだろ？」

「今言わなかったら何時言っただよ？むしろタイミング的は最高だろ？」

「確かにそうかもしれないけどさ……………母さんたちのにはどうなのそれ？」

そういつて僕は母さんのほうを見る。するといつもどおりニコニコ笑っていた。父さんのほうも別に驚いた様子も無く……………まあ兄さんから聞いていたのだろうけど。その表情は何時も通りのそれだった。

「別にお前たちの前世がなんだろうと、何か変わるわけでもないだろ？」

「そうよ、エメンタールも、カマンベールも、ラクレットも皆私たちの可愛い息子でしょ？」

いや、まあそうだけど。ここはもっと、

オリ主的に、こんな元々生まれたかもしれない人格を塗りつぶしているかもしれないのに、自分を本当の子供として扱ってくれてありがとう。

的なイベントにシーンだろ？もったこう感動的というか、BGMが流れているとかCG一枚手に入ったりする様なイベントだろ？涙を誘うシーンだろ？

「なんとなくお前が何を期待しているかわかるけど、案外そんな物だろ？両親共々すんごい緩いから特に。」

前もそうだったしなー。とエメンタール兄さんは言う。「喉が渴いた」と言つて、台所に向かうためにリビングから廊下に出て行った。

父さんも「仕事が滞っているから。」残して兄さんに続いた。

「こんなにあっさりでいいのかよ……………」。

そうつぶやいて、残された僕は二人の出で行った扉のほうを呆然と見つめていその場に立ち尽くしていた。

そんな僕に母さんは一言

「さて、この部屋も掃除しちゃうから、部屋に戻って宿題でもしてなさい。」

といって。

なんかもつとつでも良くなった僕は部屋に戻るのであった。

閑話 長男エメンタール

オレは、多分銀河最強の存在だ。
自惚れでは無くそう思う。

そもそも、これから起こり得る未来をある程度まで把握しているし、チートな能力も持っているのだ。

エメンタール・ヴァルターそれがオレの名前。

全く、エメンタールと言えば、チーズの王様ではないか、俺にふさわしい。

オレは、何回も生まれ変わりと云うものを体験している。

神に会った事は無い。なぜ生まれ変わり続けているのかは知らない。

最初は、主人公の双子の兄して生まれ、幼少時に故郷が悪魔の襲撃にあった。

その時に弟は父親の杖を、オレは魔法の呪文が書いてある紙を貰った。

そのまま、最強オリ主としてのテンプレのような生活を続けて、封印されていた吸血鬼を救い。

何もかもハッピーENDとして生を終えた。

二度目は、全く知らない世界だった。だが、生まれながらにして最強だった。

その前の世界の、能力がそのまま使えたのだ。

だが、オレは調子に乗りすぎて、全世界に狙われるようになってしまった。

結局、死ぬ直前オレが思ったのは、自重するべきだったと言う後悔だった。

そして、今、ギャラクシーエンジェルという、また知っている世界に生まれた。

前と違い、魔法と呼ばれる力は一切使うことが出来なかった。

オレなりの考察だが、コレは、E D E Nと呼ばれる銀河に魔法と言う概念が存在しないからではないかと思う。

つまり、N E U Eに行けば使えるかもしれないという事だ。

しかし、前回で学んだ俺はそんなに勢いよく介入しようと思わない。オレは、介入して原作が崩れたら・・などと気にすることは無い。

オレ以外がやるなら勝手にやれ、責任は自分で。仮に世界が滅びても、まあこれだけ生きているならばもういいかとも思えるからか？ だけど、何もしないと言うのは面白くないから、安全そうなイベントには参加してみようと思う。

と言うか、戦闘以外ならいくらでもだ。

また、コレは5歳になったときに気付いたことだが、俺の能力の本質と言うのは、

一度手に入れたものを、もう一度手に入れる

という、なんともまあ、中二臭漂う、転生者向け名能力だった。

とりあえず、自分の最初の世界で使っていたノートPCを何も無い

ところから取り出してみたり、いろいろ試してみたら、無機物なら何でもいけるみたいだ。

きっと、自分の能力である、魔法もすでに身についてはいるのだが、世界の法則ゆえに発動できないのであるう。

そして、今10歳のオレは、ひたすら普通に生きるフリをしつつ、良く二次創作で見る。現代日本のサブカルチャーで金儲けと言うのをやっている。

最初は、自分のホームページに冗談半分で、とあるアニメに字幕をつけてアップしてみたところ、物凄い量のアクセスがあったのだ。

人の数が多いから、広告料が入ること入ること。一日に300万人も来るのだ、正直阿保かと、馬鹿かと思うような勢いで僕の講座にお金が入ってきた。

なんでも、アニメーションという文化はあるものの、ここまで娯楽に特化したものはロストテクノロジーであり。

しかも、全く知らない言語で話している辺りが、歴史的価値すら有ると言われたのだ。

殺到する、誰が作ったと言うメールには、無回答のまま3ヶ月ほどそのようなペースで回してたある日。

俺は、いろいろよからぬ事を思いついたのだ。

どうせ親の仕事をついで暇になるのだから、自分で商会でも作ってみよう。

そうして、アニメ、漫画、ゲーム、小説、音楽、他エンターテイン

メントなど。

娯楽を与えることに特化したグループ「チーズ」を立ち上げたのであった。

弟が、原作に介入したいと言っている。オレが転生者だとわかってから、その手の話題をよく振ってくるようになった。

こいつは、自分の紋章機を手に入れてから、どんどん自分に酔って来ている。

学校の通信簿に、奇怪な言動が目立つと書かれるくらいだ。

どーやら、こいつの原作知識は1と、2のストーリーくらいしかないみたいで、エルシオールについていきたいと言っている。

まあ、それは問題ないので、頑張れと言ってやった。

オレは、原作ヒロインとかあまり興味ないし。

一目見ればそれでいいくらいかな？ 弟が、接点持ってくれるなら、むしろありがたいくらいだ。

と言うより、大学で彼女で来たし。

彼女もいるし、将来も安定しているし、副業（こっちのほうで収入がすごい）もかなりの成果を挙げている。

適当に引き出したアニメなどを字幕つけて渡せば、勝手に声を当てたりなどしてくれるのだ。

オレが、実質の最高責任者だと知っているやつはほとんどいないので、気楽なもんだ。

いろいろ、ノウハウをつませたり模しているので、オリジナルの作品もそろそろ評価を受けてきている。

そして、一つの作品ごとに、その関連商品まで売れるのだ。製造はこちらでやって、販売はブラマンシュに任せている。

あとオレの指示で、とある艦を作らせている。コレは原作介入をするために使おうと思いつている。

まあとにかく、銀河有数の金持ちで、恋人もいるオレは。

「保険も作らずに命を懸けて原作介入なんて、割にあわねーよ。」

コレに尽きるわけである。

閑話 長男エメンタール（後書き）

こいつは、消極的介入程度しかないというポリシーです。

擬似的に中世モノのチート内政的なこともやっていますし。

閑話 白き月

閑話 白き月

その日トランスバール星系に無数の無人艦隊が迫っていた。後にエオニア戦役と呼ばれる戦いの始まりであった。

「謎の艦隊がトランスバール星系から少し離れた宙域にドライブアウトした。」との報告があったとき、トランスバール本星周辺軍の対応は正直見られたものではなかった。

最初はまだ良かった、伝令に懐疑的な上層部が偵察機を送り確認したのである。

しかしながら、なかなか鮮明な絵がとれずに意見がまとまらなかった。

その間に進行ルート上の軍基地が敵の圧倒的な数によっていくつも壊滅状態にされていく。

さらにその事実の報告を目の前にしてもまともに取り合うのは一部の者のみ。大半の幹部たちは「我らが無敵のトランスバール軍の艦隊がそのような目にあうわけがない。」といって、まともに考えな

かったのである。

後にこの発言は「確かにこの時の皇国は ” 無敵 ” だったのであるう。」といわれるのだが。

閑話休題、彼等が信じる事が出来なかったのも無理も無いのかも
しれない。

なぜなら先にも述べたように、届いた映像は不鮮明で、通信の状況
も悪かったのである。

そのため恒星から発せられた電磁波か何かかもしれないなどの意
見が出たのである。しかしながら結果として黄金よりも貴重である
う時間を溝に捨てるようにして費やしたのである。

第一方面軍の艦隊のうち2割が沈んでようやく状況が動いた。

いや、動いたというより、変化したであろう。

今度は責任の擦り付け合いを始めたのだ。

やれ、あの基地の司令は何をやっている！！など、どれその艦隊
の艦長がこの沈んだ船の責任を取るべきだ。

結局、本星ならびにその衛星に駐留する軍隊が防衛線を張り終えた
のは、正体不明の艦隊の到着予定時刻まで3時間になってからだっ
た。

敵艦隊がトランスバール皇国本星に来るまでに8つの軍基地を壊滅
させていた。

しかも対峙した艦隊の4割が沈み、3割は大破、無傷と言ってもい
い艦は1割程度しかなかったのである。

この時点で、戦闘を行っていた第四方面軍が首都星近辺に撤退。その後急遽第一方面軍に組み込まれ、本星近衛軍とともに防衛線の構築を開始したのである。

その防衛線に動員された戦艦の数は、皇国の全戦力の55パーセントという膨大な数であった。

しかしながらエオニアの無人艦は、その倍の数であった。

本星に防衛線が張られた頃、白き月では、急ピッチでエルシオール
の発信準備が行われていた。

これはすべてシャトヤーンの指示によるものであった。彼女はこ
まで強大な戦力を作り出せるものを1つしか知らない。

もう何度も代替わりをしたために記憶は劣化しているのだが、一つ
覚えていることがある。

そのものが来るのならば十中八九本星は堕ちる。そのため彼女はや
や無理やりだが脱出の準備を始めていたのである。

白き月防衛軍司令であるルフト・ヴァイツェンもエルシオールの発信準備のために、動いていた。

彼はあくまで司令であるので研究員が主である白き月において出来ることはあまり多くなかった。

しかしながら彼はエルシオールを動かすためのスタッフとして、近隣の防衛衛星の人員を彼の権限を使ってエルシオールに配備させようとしていた。

そんな中、彼は白き月の聖母シャトヤーンに呼び出されたのである。彼は、彼女が脱出するための段取りかと思いつぐに向かうのだあった。

「すみませんね、ルフト司令。このような状況でお呼びいたして。」

「いえ、私はこの司令官ですからな。指示さえ出してしまえばほとんどすることがないですよ。」

確かにそれは事実であつたが、まじめなルフトがそれだけで自分の仕事を切り上げるわけもなく、逃走ルート of 検討やら、補給する場合の算段やらと考える必要はないこともあるのであるが。

シャトヤーンもそれが解っているが、あえて口に出さずに本題を切り出す。

「エルシオールですが、最優先でしていただきたいことがあります。」

「最優先ですか？」

シャトヤーンの表情が真剣なものになったために、その神秘的で神々しい雰囲気になんか押されるルフト。

ルフトのそんな様子を気にせずシャトヤーンは続けた。

「はい、ある人物をのせて、白き月から脱出して欲しいのです。」

「はあ、その人物とは？」

「シヴァ皇子です。彼をここから逃がしてあげてください。」

「シヴァ皇子ですとな！？」

ルフトはシャトヤーンの言葉に驚きを隠せなかった。

シヴァ皇子は白き月が皇国の直轄地になってから生まれたもつとも若い皇子である。

しかし彼は噂だと「地位の低い母親の子供のために、どこかの養護施設に預けられている」といわれていた。

実際は白き月で生活していたのだが。

「はい。エルシオールにある皇族専用の部屋の準備の指示は出しておきました。ですから、後は本人の説得です。そちらも私がいたしますので。ルフト司令には移動中の皇子の警護を頼みたいのです。」

「了解しました。全身全霊を持って勤めさせていただきます。」

自分の知らないところですでに準備が終わっていたことに少々面食らいつつも、彼はシャトヤーンの要請を承諾した。

「護衛のために、エンジェル隊の指揮権を差し上げますので。どうかよろしくお願いします。」

「エンジェル隊をですか。それは心強い。」

エンジェル隊とは、白き月で発見されたロストテクノロジーである紋章機を繰る5人の天使たちである。

紋章機は一機で戦艦を打倒しゆると言われていて、故国では最強の存在である。

しかしながらパイロットになるためには特別な適性がなければならず、さらに性能がパイロットのテンションによって変動するという軍においてはかなり使いづらい性質を持った機体であった。

白き月の最高戦力ではあったが、白き月には強力な防御フィールドが展開できるので、戦闘機が何期あるうが関係ないのでエンジェル隊もエルシオールとともに逃げるようにシャトヤーンは言っているのだ。

ルフトは、防衛線での迎撃に成功するのならはこの動きはすべて無駄に終わるのだが……と思いつつもそこまで樂觀出来る訳でもないので、気合を入れなおした。

シャトヤーンはルフトのその返事に満足したのか少し微笑むと、彼女の横の机に置いてあったカード大の大きさのものを手に取りルフトに渡す。

「それと、これを受け取っていただきたいのです、」

「これは……発信機？」

シャトヤーンから受け取ったそれは、大変小型ながら、皇国で現在使われている戦闘機の発信機と同じ規格の物であった。

受け取ったルフトはどうしてこのようなものを？と思いシャトヤーンのほうを見る。

「それは、エンジェル隊以外の人物の発信機です。もう10年近くも前になりますが、長い間保管されていたそれを動かせるものだったので。ですが、紋章機自体は個人の所有物扱いでしたので、エンジェル隊には入りませんでした。年齢もまだ若かったのですが。」

「そのような人物が……するとコレは？」

「それは、彼が『万が一白き月から逃げるような事態に成った時に、駆けつけるからその目印に』と私に渡してくださったものです。」

ルフトはそのような事態を予想した人物に少々驚きながらも、一部シャトヤーンの言葉に気になったことがあったので質問をした。

「彼ということは……その人物とは男性ですか？」

「ええ、当時5歳になったばかりの少年でした。」

「5歳ですか！？それは……」

ルフトはその異常なまでに若い年齢に驚くが、最年少のエンジェル隊員であるヴァニラ・Hは10歳から乗っていると考えれば年齢

は関係ないのかもしれないと思った。
もっとも5歳はさすがに若すぎ、いや幼すぎだとも思ったが。

「その家のしきたりだそうです。それで、もし彼が来た場合に彼が自分の意思で力になってくれた場合は、受け入れてあげてください。」

「了解しました。では、私は撤退準備に戻ります。」

「はい、このような忙しい事態に呼びつけて申し訳ありませんでした。」

「いえ、お気になさらずに。」

ルフトはそう言って、謁見の間から退室し、自分の執務室に心なし早歩きで戻ったのである。

「あの兄弟は、一体皇国にどういった風をもたらすのでしょうか…」

閉まった扉を見つめつつ、彼女はそう呟くのであった。

この5時間後、防衛線は突破され、エルシオールはクロノドライブにて逃走を開始することになった。

オリ主らしい……？

オリ主らしい……？

僕はラクレット。フリーの傭兵さ！

いや、別に今まで戦闘経験があるわけじゃないのだけどね。

まだ僕は14歳になったばかりなのだし。

ああ、学校は今、クリオム星系の第4星ハイスクールに通っている。エレメンタリーから直接入学した。ミドルスクール分を丸々飛ばしたことになる。

ちなみに飛び級です。トランスパール皇国では結構一般的に行われているからね……。

僕が学校を選んだ理由は、学校の制服が黒のどっかで見たことある学ランだからというただ一択。

制服の上に白い陣羽織（ブラマンシュ社製）を着て、準備完了。最近伸ばし始めたツンツンとはなた髪と一緒に、まんまソウユートです。本当にありがとうございました。

まあ、あくまで格好だけで、転生しても顔は良くも悪くも無く（自

己評価）だから、似てないけど。目つきとかむしろたれ目だし、僕。

いや、僕がやりたくてコスプレ……もといリスペクトしているのだから……。

エメンタール兄さんはコレを見せた瞬間に、牛乳吹いていた。アナタもこっち側の人でしたか…。

あ、兄さんにその後、『求め』のレプリカ貰った。作ってもらったらしい。

そのお金は何所から……と突っこみたかったし、何でこんなに精巧なデザインなのか聞きたかったけどとりあえずスルー。

結構重いし、何故か実際に切れる。

毎日素振りをしてる。まあ、筋トレ見たいな物だね。どーせつかわないろーし。趣味みたいなものかな？

さて、いきなりだけど今は、
皇歴412年
ターの起こる年。というか

つまりクーデ

現在進行形で起こっています!!!!!!
しかも、原作より若干規模が大きいです!!

おそらく、兄さんのせいです。きっと何か発明しているでしょうあの人が!!
と言っても、エオニアが制圧した本星とその周辺の宙域の範囲が広くなっているだけです。

だからそこまで原作に関係ないよね……とか思っていたのだけど。
よく考えるとそれって、エルシオールの本星宙域離脱が難しくなることだよな？

原作でも確かしばらくエルシオールが動かなくなるくらいだったのだし。

ヤバイ……エルシオールが沈んだら……ヴァル・ファスクに勝てないじゃん……。

いまさらどうすることが出来るわけじゃないけど……。

それに今のところは大丈夫みたいだ。だって、シャトヤーン様に渡した『エタニティーソード』も発信機が動き続けている。

まあ、発信機の信号が受信できる位置に来るまで不安で胃が痛かったけどね…………。

とにかく今は、タクトたちの船が、エルシオールにミルフィーたちの先導で向かったから、それを追いかけることにする。近づくと気付かれるからすぐ離れてだけ…………。

さて…………ここからが本番だね…………楽しみだよ。

ルフト・ヴァイツェンは、ブリッジで歯がゆい思いをして戦況を見ていた。

このクリオム星系の端まで逃げてくる為に幾度となく戦闘を行ってきた。

そろそろ限界が見えた頃にようやく、自分の教え子であるタクト・マイヤーズとレスター・クールダラスと合流できたのだ。

しかしながら、その後修理の終わる前にエオニア軍の士官に見つかってしまい戦闘に移行したのだ。

通常時であるのならば、紋章機で難なく撃退できるであろう敵だ。しかし今では連戦によりエルシオルの移動ならびに攻撃もできないという悪条件のもと戦っている。

頼みの紋章機のほうは、かろうじてきちんと整備された状態ではあるが、連戦によりパイロットたちの疲労の色が濃い。

当然だ、ここまで一日24時間警戒態勢でなおかつ、数の減らない得体も知れない敵と戦ってきたのである。むしろよくがんばっているほうだ。

こつも過酷な状況で、自分の半分も生きていない少女たちにすべてを任せて、自分はせいぜいダメージコントロールしか出来ないこの現状に対して彼は歯がゆく思っているのである。

「『カンフーフighter』は一度下がれ！！『ハーベスター』はナノマシンで『カンフーフighter』の修理を。二機の抜けた穴は『トリックマスター』がカバーしてくれ！！」

タクト・マイヤーズが『高速式リンクシステム』により動き続ける戦況の中、必死に指示を出している。

流れるように動く状況の中、こうも的確な指示を出し続けている彼は優秀な指揮官なのである。

戦略家としては優秀だが、普段はサボってばかりの彼だが、この状況下では誰よりも思考して勝利を目指す。

この作戦の目的はあくまで、指揮をしているであろうイノシシの乗る敵旗艦の撃退だ。そのため無人機をすべて無視して突っこませるのが有効だ。

しかし複数の方向からこの動けないエルシオールを狙われているので、そうもいかない。

タクトが乗ってきた艦隊だけではとても守りきれないのである。

「こちら『ラッキースター』 エネルギーが10パーセント切りまし

た！！」

「こちら『ハッピートリガー』 エネルギーがもうない！！補給を要求するよ！！！」

そんな中でも、どんどん状況は動く。今まで、攻撃の要であったミルフィーユ・桜葉の操縦する機体のエネルギー残量は警告域に達したのだ。

彼女の機体は総合的に高い性能を持っているが、そこまで燃費が良い機体でもない。

高速で戦場をカンフーファイターと共に駆け回るが、カンフーファイターよりも燃費が悪いため先に燃料が切れてしまうのである。

最高攻撃力を持つハッピートリガーはもっと燃費が悪い。二機とも早いうちに補給が必要だ。

しかし今は戦闘中。無理やり補給しようものならかなりの時間を要してしまう。この刻々とせまる状況では、一秒の時間が黄金のように貴重なのである。

補給したために戦闘に負けましたでは、お話にならない。

このエルシオールには、シヴァ皇子が乗っているのだ。今彼を失えばトランスバール皇国はおしまいだ。

エオニアが完全に支配することになってしまおうであろう。それだけは避けなければいけない。

(クソッ……………せめてあと一手あれば……………このままじゃジリ貧だ！！)

表面上は真剣な顔をしていても、内面では彼の心境かなり揺れていた。このままじゃどうしても手詰まりなのだ。
燃料は減っていくが、希望はある。

敵の旗艦は馬鹿なのかこっちに突っ込んできているのだ。
この周辺の敵戦艦を2、3沈めればその勢いで相手を撃てる。

しかしそれまでエネルギーが持つかといわれれば本当にぎりぎりです持つかどうかなのだ。

「タクト！エルシオールのシールドも低下しているぞー！」

彼の副官のレスター・クールダスがタクトに報告する。
いつも冷静沈着な彼らしくなく顔にはやや焦りの表情が見える。

あたりまえだ、優秀な彼にはわかるのだ。この状況がいかに不利であるかが。

そんな時だった、レーダー担当のココ・ナッツミルクが一機の戦闘機が戦域に接近しているのに気がついたのは。

正統トランスバール皇国軍 レゾム少佐の最大の不幸は、彼の率いていた戦艦が無人機で、それを率いるためのシステムが 正史よりも発展していた ことであろう。

『高速遠隔同時指揮システム』ならびに 『高性能AI』 エオニアの配下の科学者が作った無人艦隊用の指揮システムだ。

通常のそれより、状況の伝達速度や、指揮の精度を上げるシステムと無人艦自体のAIの向上によりより高いレベルでの自動戦闘が可能となった。

そのため、一つの艦隊に指揮官1名のオペレーターだけで回ることがになったのだ。

(もともと、彼らの生活レベルはかなり低いのだが)つまりは、戦闘になると、オペレーターが読み上げる戦況と自分で判断する状況を元に指揮をするので精一杯になってしまうのだ。

これは、人員の絶対的不足は解決しているものの、戦艦の戦闘力が人員の質に左右されてしまうという問題が出てきたのである。 d
i v <

故に、レゾムは自身の左後方から超高速で接近する機体になかなか気付かなかったのである。 もともと

「少佐！左後方距離8000から、戦闘機らしきものが高速で接近

してきます。」

「フン！戦闘機一機に何が出来る、多勢に無勢だ。一応手の空いている艦隊を回しておけ。」

早期に気付いたことで対応できたかどうかは甚だ疑問であるが。

「戦闘機、なおも本艦に接近……！！！！距離4000……！！距離3000！！このままだとまもなく衝突します！！！！」

「なーに！？ えーい！何をやっている迎撃だ！！」

「それが敵戦闘機が速過ぎて、敵の回避動作に、追いつけません！！！！」

「よつと！！ 実弾とか思ってたよりたいしたことないな！ まあ、当たっても幾分かは耐えられるからそこまで怖くないからだろーけど！」

ラクレットは、彼の『エタニティソード』を移動形態にしてレゾム艦に高速接近していた。

彼がこの宙域に来たときすでに戦闘が始まっていたのである。

彼は護衛を置いて飛び出しているレゾム艦を見つけて一直線で突っこんでいるのだ。

「よし！！ 攻撃形態に移行！！そのままぶった切ってやるぜ！！」

ある程度接近すると、彼は機体の形態を攻撃用に変えた。

そのままするように旗艦に接触する。

彼の狙いは砲門だ、相手の火力をそぐのは戦術の基本である。

旗艦の左後方下部に接近し、そのまま追い越しざまに右の剣を突き立てる。溶けかけのバナーにナイフを入れるようにあっさり剣は艦隊を切る。

そのまま敵艦の前方で高速旋回し今度は正面上部に接近し、剣を下に向けて砲門を潰した。

いくつかの砲門を破壊し、テンションが上がってきた彼は、レゾムを挑発しようと思い通信のチャンネルのサウンドのみを入れた。

「どーだ、戦闘機一機だからと侮って貰っちゃ困るぜ!!」

「誰だ、貴様!!」

「へん!!お前みたいな小物に名乗る名はない!!通りすがりの一般市民だ!!」

「一般市民が戦闘機に乗って戦闘に介入するわけがあるか!!」

レゾムからのもつともな指摘を受けるが、中二全開モードの彼は、直前に言った台詞に酔っていてほとんどアタマに入らない。

さらにテンションの上がってきた彼は、そのまま特殊兵装を使うためにさらに、自分に酔う言葉を吐く。この数年間でわかったことだが、彼は素の自分にいるよりも、何かのキャラクターの科白を吐いたほうがテンションがあがるのだ。

「いくぜ!!」 『マナよ、我が求めに応じよ。オーラとなりて、刃の力となれ。インスパイイイイツァッ!!!』 (結構必死に声を作って成りきっています。)

彼がそう叫ぶと、『クロノストリングエンジン』から『H・A・L・O・システム』によってエネルギーが引き出される。手に持つ剣が強烈に青白く輝く。両手を合わせ一つと成る。

ラクレットは機体を敵の旗艦の前方に接近させる。

そして、彼は再び叫ぶ

「今だ!!コネクティドゥ……ウィル!!」 (やっぱり聖賢者な発音で)

その言葉がスイッチとなったのか、『エタニティソード』は加速し、一つになった大剣を振る。

その動きには洗練された美はないが、ただ長い歴史を感じる鋭い動きである。

その剣が敵の旗艦の前方の何割を削り取った。

彼の機体はそのまま敵を通り過ぎ、ある程度進むと旋回し停止する。

「き…旗艦大破！！戦闘続行不能！少佐！！直ちに撤退を！！」

「うぬぬぬ……ここは引いてやる！！小僧！！それにエルシオール、覚えていろよ！！」

「っへ、見かけ通り小物の台詞だな！！いや、やられ役か、（アレで沈まないのかよ……ご都合主義な話だなおい。それとも『コレが歴史の修正力か！？』って驚くべきなのか？）」

レゾム艦はそのまま撤退する。

ラクレット的にはそのまま追いかけて行っても良かったのだが、ここで沈ませると歴史が変わりすぎてしまうし。

何より、エルシオールがまだにピンチである。（数隻の無人艦は戦闘を中止して逃げた場合に受ける被害が大きいであろうことを計算して、戦闘を続行していた。）

彼はエルシオールの応援に向かうために機体を移動形態に変更した。そしてラクレットはエルシオールに通信をつなぐ。

特に意識したわけではないが先ほどから設定を変えていないので、サウンドオンリーである。

「こちら、個人所有紋章機とそのパイロットです。航行中に攻撃を仕掛けられたために、自衛権の行使で敵旗艦を撃退しました。」

時は少し遡ってエルシオール。

ラクレットの機体『エタニティーソード』が接近してきているのは、エルシオールの優秀なレーダーがキャッチしていた。

最初に見たときは、どこかの方面軍の生き残りか？などと思った一同であったが。圧倒的な速度で接近するその機体には、民間機であるという識別番号しか出てこなかった。

アルモは民間機に戦場へ入ってくるのを止めるように通信を試みた。しかし突然民間機が紋章機のような形に変形したのである。

「あれは！紋章機！！」

「いや、それにしては少し小さいぞ！」

「内部にクロノストリング反応！紋章機で間違いありません！そもそもあの速度が出せるのは紋章機だけです！」

「そんな……エンジェル隊以外の紋章機だなんて……………」

タクト達が驚いている間に、その機体は敵の攻撃をかわし接近する。そのまま接触するくらいの近さまで来るとそのまますれ違った。すると、レゾムの乗っている戦艦の砲門が爆発した。

「馬鹿な！！すれ違いざまに、剣で切ったと！！どんな操縦技術だ！」

「速い……カンフーファイター並の速さが出ています。」

その機体が二度ほどレゾム艦とすれ違ったあと、両手の剣を一つに合わせて今までより一段上の速さで接近する。そのまま振り下ろし巨大になった剣でレゾム艦の先端部を削り取った。その規格外の動きにブリッジは沈黙した。

「うーむ、あの機体はもしか……………」

今まで黙って眺めていたルフトの言葉に振り向く一同。しかし、ルフトの表情はやや気難しめであった。

なぜならば彼は、もしあの機体を操縦している人物が、シャトヤーンの言っていた『彼』であるのなら、その年齢は14、5歳なのである。

しかしながら今の動きはいくら高性能な紋章機といえども、そう簡単に再現できるものではなかった。

きちんとした教育を受けたパイロットが何年も自身を磨いてようやくできるような、いわば超一流の動きであった。

「知っているのですか？先「あの機体より通信が入りました！どうします？マイヤーズ司令？」」

タクトが問いかけようとすると、その機体から通信が入ったのである。

「モニターに出してくれ。」

「いえ、それが、サウンドオンリーです。」

その言葉に、クルーメンバーの顔が曇る。

一般的にこの時代ではどのような通信も動画付きである。

サウンドオンリーなんてそれこそ本当に一部の数世代前の船か、宇宙海賊のみである。

あの戦闘機はどう見てもそんな数世代遅れのものではない。むしろ数世代先のものであろう。ということならば………などという考えであろうか。

「わかった、つないでくれ。」

タクトは、アルモにそう言うと、まだ宙域では戦闘は続行されていたが、エルシオールから離れていたし、何よりもあらかたが撤退していたので、大した事ではなくタクトは高速式リンクシステムによる指揮を一端切り止めて通信に集中した。

「こちら、個人所有紋章機とそのパイロットです。航行中に攻撃を仕掛けられたために、自衛権の行使で敵旗艦を撃退しました。」

その声は、少々タクトの想定していたものより子供の声であった。

「こちら、エルシオール。艦長のタクト・マイヤーズだ。とりあえず君には悪いけれど確認が取れるまで、本艦の距離3000以内に近づかないでくれるかなあ？もちろん火器によるロックオンもね。俺たちは、君が誰だか分からないからね。」

とりあえず害意はなさそうなので、アンノーンに対するマニュアル的な対応をするタクト。

その間にも、ココとアルモは戦闘機の持っている発信機の登録番号を皇国の膨大なデータベースから検索していた。

「了解しました。一応許可証のデータを送りますね。」

その言葉とともに送られてきた、データには、ラクレット・ヴァルター という名前とともにこの機体の所有を許可するとの旨が書かれており、最後に月の聖母シャトヤーンのサインもあった。

そのことに、ココ・ナッツミルクは驚きつつも、紋章機であるから当然かもしれないと思い直し、そのサインが本物であるか鑑定を行った。

その間にエンジェル隊の紋章機が残存艦の砲門を沈黙させたと、アルモから報告が入ったために、タクトは一回全機を帰還させ後は味方艦隊に任せることにした。

「ラクレット・ヴァルターか……それで君はどうしてここに？」

「はい、そちらに自分の紋章機の発信機の反応を確認したので……」

「

「うむ、コレのことじゃな。シャトヤーン様より預かっているぞ。」

今まで横で通信を聞いていたルフトは、その言葉に自分の胸ポケットしまつてあった、シャトヤーンから渡されたカード大の大きさの物を見せた。

タクトはルフトのその行動にやや驚いたものの、ラクレットに確認をとる。

「なるほど、じゃあ少なくとも敵ではないのだね？」

「はい、クーデターと聞いて、この機体の整備を行っていた所に、シャトヤーン様にお渡ししたその発信機の反応が動いたのを発見しましたので、契約の元に参上しました。」

「そうか……じゃあ、エルシオールに来てもらえるかな？直接話を聞くよ。」

「解りました。一応シャトルの収容スペースがあれば搭載できるので、お願いします。」

「わかったよ。」

そう言つてタクトは通信を切ると、格納庫に向かうのであった。

そのあまりに自然な流れに、レスターはツツコミを入れることが出来なかった。

数秒して気付いたレスターは何事もなかったようにタクトの後を継ぎ、味方艦隊に指示を出すのであった。

エンジェルに成りたいのですが……男ですけど。

エンジェルに成りたいのですが……男ですけど。

ついに……ついに来た！！

この時を待ち続けて苦節14年！！

雨の日は家の中で読書をして、風の日にはちよつと厚着で出かけて、ダイゴの爺ちゃんの駄菓子屋に駄菓子を買に行つた。

あの楽しかった日々ともおさらばだ！

そういえば、爺ちゃん元気かな？僕が子供の頃から外見全く変わってないから、いまだに元気かな？

そして、ESP能力者に頼んで表層心理を読んでもらおうとしたけど、失敗に終わった。思考の展開が独特でで良くわからないらしい。

フッフ、なんと言つて都合主義！！これで、懸念されていたミントへの対策もばっちりだ！！

さあ、始めようか！ギャラクシーエンジェルを。

ラクレットはようやく自分が原作ヒロインたちと合間見えることに感動で打ちひしがれていた。

彼にとって、ラクレットに成ってからの人生は、とにかく自分の好きなことをするということだけを追求してきたのである。

彼は元々自身を投影した物語を妄想することを趣味としていた。いわゆる一種の中二病患者である。

転生（厳密には死んでいないのだが）してからは、完全に自重を辞めて痛い台詞や、格好をしている事からみても自覚はあるようだ。包帯やら眼帯やら俺に近づくなやら沈まれやらは普通にやっていた。

ともかく、自分に酔っている典型的な主人公願望を持つ少年だったのである。

そのために彼が、オリ主にふさわしい能力を持ちさらに原作に介入できるというのは、自分の夢をそのまま形にしたようなものであり、しかもその対象が自分が二次元ひいては美少女ゲームにはまった原因である作品のギャラクシーエンジェルだというのも、彼の願望の深い部分を再現していたのである。

とまあ、いろいろな言葉で言ってみたが結局は

（僕は、登場人物たちと仲良くなる！！）

こういうことであつた。

しかしながらラクレット・ヴァルター 前世を含めれば、NEUE
世界出身でもないのに立派な魔法使いである。

前世で5歳の時から、彼女はおろか、異性と手をつないだことなど
ない。経験ゼロのチキンハートの持ち主であつた。

そもそも、格好もキングオブヘタレリスペクトであるし。

時は少し遡る。
ラクレットが、エルシオールのシャトル置き場に着艦準備を行なっている時。

エンジェル隊のメンバーは、一度エルシオールに戻った後、ブリッジに報告に行こうとしたら新しく配属された司令官タクト・マイヤーズがこちらに向かっているとの報告を受けてその場で待機していた。

全員の顔には、一応作戦が成功したという形で終わったものの、自分たちの力ではない手段で片がついたという事実があり、少々暗い。彼女たちは、ここまで一日の大半を警戒態勢で過ごすか実際に戦闘をしていたのだ。
正直あまりテンションが高かったわけではなく、全力の力が出せたというわけでもない。
しかしながら現実として、敗北という未来が一時的とはいえ見えてしまったのである。

エンジェル隊の隊長フォルテ・シュトーレンは、自分の部下四人の複雑そうな顔を見て、どうにか変えようと話を振る事にした。こついう所で、最年長でもある彼女は気を回す。

それが彼女たちの円滑なコミュニケーションを助けるので結果的に戦力の上昇に繋がるのである。

「それにしても、この数時間でいろいろ起き過ぎだね。新司令官を迎えにいくわ、その司令官が就任して、その直後に戦闘。さらには別の紋章機が戦闘に介入してくると来た。今までも大概密度は高かったけど、今日はすごいね。」

フォルテのその言葉に、一同の注目が集まる。その中で、心を読むことの出来るのが原因で隊員の中では下から二番目に若いが、精神的にはかなり大人のミント・ブラマンシュがフォルテの心境を読んだのかそれに賛同するように続く。

「本当ですね。特に先ほどの紋章機を操縦してたのは誰なんでしょうね？ランファさんは何かご存知で？」

ミントのその間に、メンバーの中でもっとも優れた運動神経と近接戦闘能力を持つチャイナドレスの美少女、ランファ蘭花・フランボワーズが答える。

「私は全然知らないわよ。そもそも通信だつてエルシオールとしかしてないんでしょう？それに私よりヴァニラのほうが戦闘を良く見たはずでしょ？何か知ってる？」

「いえ……私もセンサーで捕らえただけで、実際に映像を見てません。大きめの小惑星で死角になっていましたので。」

メンバー中最年少で、ナノマシンによる治療や、修理が得意であるヴァニラ・Hはランファの問いに対して、あまり表情を変えずしかながら親しい彼女達から見たらやや申し訳なさそうな顔をして答えた。

そんなヴァニラに大輪のような笑顔を浮かべて、ミルフィュー・桜葉が話しかける。

「私も補給に戻ってたけど、何も見てないよランファ。」

彼女たち5人が白き月の聖母シャトヤーンの近衛隊　ムーンエンジンエル隊である。

彼女たちは軍人ではあるので階級は持っているものの、態度や完全

に改造している制服などからとても軍人には思えないような少女（二十歳越えをそう呼べるのなら）たちである。

そんな彼女たちの会話の渦中にいるのは、先ほど戦場に介入してきた一機の中型戦闘機、しかも紋章機と同じで『クロノストリングエンジン』を搭載している方だ。

彼女たちの繰る紋章機の性能が、他の兵器より優れているが、性能がパイロットのテンションによって変動するのは『クロノストリングエンジン』と『H・A・L・Oシステム』を搭載しているからだ。

もともと『クロノストリングエンジン』は戦闘機に詰めるようなものではない、なぜなら全く持つて出力が安定せず、さっきまでは全開だったが次の瞬間から供給エネルギーが0に成るなどざらにあるのだ。

故に戦艦などに大量の『クロノストリングエンジン』を搭載することで擬似的に安定した出力を出しているのだ。そのために『H・A・L・Oシステム』が紋章機に搭載されているのだ。

『H・A・L・Oシステム』は『クロノストリングエンジン』の放出確立に干渉できるのだ。

つまりは戦艦クラスのエネルギーを使える戦闘機という化け物じみたものになるのである。

閑話休題、つまりは戦場に介入してきた戦闘機のパイロットは『H・

A・L・Oシステム』を動かすことが出来る適正のある数少ない人物の一人になるのだ。

「それにしてもパイロットはどんな人なんでしょうね？フォルテさんはどう思います？」

「そうだね、通信の声すら聞いてないからわからないけど、他の方面軍の軍人か誰かだと思う。敵の旗艦を沈めたんだ、それなりに腕利きなんだろうね。そういうミルフィーはどう思うのさ？」

「私ですか？うーん……。」

ミルフィーユは、フォルテに話を振った後に自分で考え込んでしまった。

その様子を横目に見つつ、フォルテはランファに自分の意見を言うように態度で示す。

それに気付いたランファは一瞬考える素振りをすると言自分の意見を答える。

「やっぱり、女の人じゃないんですか？私たちの紋章機だって、男の人は全体的に『H・A・L・Oシステム』の適正值も低かったんですし。」

「確立で言えばそうでしょうけど、決め付けるのは早計ですわよランファさん。ちなみに私はむしろ男性だと思います。」

ミントは30cm以上背の高いランファを見上げながらそう呟く。

もつともランファが以上に高いのではなく、ミントが120cm台という小柄な身長を持ち主であるのが原因なのであるが。

ミントが続いたことにより3人の視線はヴァニラへと向く。ちなみにミルフィーユは未だに考え中である。

「私は……若い人だと思います。根拠はありませんが。」

「あ！私もそう思います。もしかしたら私よりも年下かも。」

ヴァニラが答えたタイミングでミルフィーユは自分の考えが纏まったのか、彼女に続いた。

「まあ、手がかりもないんだがら、実際に会うまでは解らないけどね。」

フォルテはそう締めくくると、全員の顔をみる。彼女たちは先程までの微妙な表情から一転して何時も通りの表情に戻っていた。

「あ、それにしてもさっきのタクトさんの指揮すごかったねーランファ。」

「そーね、悪くはなかったんじゃない？」

いつもどおりのテンションに戻ったミルフィーは、士官学校時代から同期で隊の中でも最も付き合いの長いランファに話を振る。

話題は先ほどの戦闘を指揮していたタクトのことで、内容としては彼の指揮にやや感心しているといったところか。

「ええ、私たちへの指示のタイミングも内容的確で、特に不自然な機動をしなくても戦闘を円滑に実行できました。」

「まあ、最初はこんなもんかね。」

「はい。私の修理の要請する間隔も過不足なく行われてました。」

先ほどの戦闘が正史よりも激しいものになったからなのかは知らないが、エンジェル隊のタクトに対する評価は少し高かった。

正史だと正直頼りないといわれていたような時期ではあったが、今現在の評価は悪くはないといったところか。

「やあ、皆お疲れさま。さっきの戦闘機のパイロットがこの船に来るから会いに行こうと思って、君たちも来るかい？」

彼女たちがのように雑談をしていると格納庫に、タクトが現れた。

彼は一言で彼女たちをねぎらうと、そのままシャトル置き場へ向かう。エンジェル隊のメンバーはそんなタクトの後に続くのであった。

「クレータ班長、どう、その戦闘機の様子は？」

「あ、司令！！」

タクトはエルシオールを整備班長である、クレータ・ビスキュイの姿を認めて話しかけた。

彼女はちょうど着艦作業が終わって入ってきた、『エタニティソード』の様子を確認していたのだが、タクトの声に気づき彼に歩み寄る。

その様子は新しいおもちゃを与えられた子供のように目が輝いていた。

彼女は自身の紋章機の整備に対して誇りを持っているのだ。そんな彼女の前に自分の知らない新たな紋章機が現れたのならばメカニックとしては興味が出ない訳が無いのであろうが。

「司令！この機体は何なんですか！？さっきの戦闘では映像を見ている余裕は無かったんです！！音声は聞いてましたけど。」

「ああ、落ち着いて、俺も詳しくは解らない。それを含めてパイロットに今から聞こうと思ってる。幸い敵意は無いみたいだしね。っ

と出てくるよ。」

タクトがそう言って皆を促すと、コックピットに当たる部分が開き、黒いロープがたれてきた。

そのロープを伝って、一人の少年が降りてきた。

ちなみに、『エタニティソード』の全高は12mほど、これは、紋章機の5分の3程度しかない。

これは、一般的な中型戦闘機と同程度の大きさである『エタニティソード』と、大型戦闘機に分類される紋章機の差である。

「はじめまして、僕の名前はラクレット・ヴァルターです。先ほどは失礼しました。」

「エルシオール艦長のタクト・マイヤーズだ。さっきは助かったよ。」

「いえ、アレはあくまで自己防衛ですよ？」

「そういうことになるね。それじゃあ、早速で悪いけど君の事を聞かせてもらおうか。艦長オフィスまで来てもらうよ。」

「わかりました。あ、壊さなければ別に見ていただいて結構ですから。」

降りてきたラクレットの外見は、黒っぽい青のツンツンはねた髪、学生服の上から白い羽織を羽織っている様相と、170cmというトランスバール皇国の14歳の少年の平均より少々高い身長で、彼を見たエンジェル隊やタクト、整備班は彼をやや実際の年齢よりも少し年上に思った。

それでも、戦場に介入してきて旗艦を落とすなどということをする技量を持っているパイロット、という観点で見れば十分に若いのだが。

ただ、彼にとって残念ながら、彼に見ほれた者はいなかった。

タクトと簡単に挨拶程度の言葉を交わし、そのまま艦長オフィスに

移動することになったラクレットは、そわそわしているクレータに向かって、自分の紋章機を調べることを許可した。

少しカマンベールに見てもらっているが、別に特別な改造をしているわけではないのだ。彼自身の目的はここに留まる事なので、いくら見られても問題はないのである。

「あ、はい、それじゃあお言葉に甘えて。」

その言葉を聞いたクレータは、急ぎ足で『エタニティソード』に向かう。

整備班の面々も、自身の担当する機体がすでに終わっているものなどがそれに続いた。

「エンジェル隊の皆、お疲れさま。とりあえずは解散にするから、しばらく休んでくれ。」

「了解。」

エンジェル隊は、ラクレットの姿を確認できただけでとりあえずいいのかその言葉を聞くと、そのまま格納庫をあとにした。

「それじゃあ、付いて来てくれるかな？」

「わかりました。…………えと…………了解です!!」

タクトのその言葉にラクレットは若干テンションがハイになりつつも、返事をし後に続くのであった。
そんな彼の心の中は希望と喜びで溢れていたのであった。

（フフハハハ、エンジェル隊はゲームどおり皆美人ぞろいだっただぜ……………ククク、ああ、楽しみだ。）

それと、自己陶醉と欲望に。

「なるほど、君がどのような経緯でアレを入手して、ココに来たのかはよくわかった。じゃがどうしてわざわざ通信をいれずに、戦闘に介入したのか？」

ラクレットは現在エルシオール艦長オフィスで、ルフト、レスター、タクトというエルシオール首脳陣に囲まれている。

彼が、タクトに付いて行くとそこにレスターとルフトがいたのだ。彼は心の中でレスターの左目の眼帯って何のためだったっけ？と考えている間に、二人の簡単な自己紹介が終わったので、そのまま自分も名乗り、ココに来た経緯と、自分がどうして紋章機を所持しているかを説明した。

その間にトラブルもなく、彼が先ほど出していた、シャトヤーンの許可証もあつて比較的スムーズに行われた。

そして、現在ルフトがこのような質問を投げかけてきたのである。

「はい、えと、とりあえず敵を見かけたんで……それと、言い訳がましいですが、通信を入れるという事をすっかり忘れていたというか。何分今まで一人でしか、動かしてなかったので通信機能を使つたのも先ほどが初めてで……。」

若干しどろもどろになりながらもラクレットは当たり前障りなさそうな理由を答えた。

彼の本当の理由は、その方が、格好のよい登場になるであろうから。
なのだが。

「なるほど。それじゃあ、コレが本題なのじゃが、正直この艦エルシオール現状はあまりよくない。最高の性能を誇る紋章機が5機もあるが、敵の数も膨大での。」

「ルフト准将、まさか!!」

「そうじゃ、レスター、ラクレット君、君は皇国のために戦ってくれないかのう?」

ルフトは、現状が如何に厳しいかをよく理解していた。

先ほどの戦闘も目の前にいる少年がいなければ正直危なかったのだ。しかも、その少年はこちらに協力的で、将来的には、エンジェル隊とまでは行かなくとも白き月の近衛軍に入ること考えている。身元もしっかりとしているみたいだし、シャトヤーン様のお墨付きでもある。

そのため彼を一時的に戦闘機乗り扱いでエルシオールに欲しいと感じたのである。

対して、レスターはその意見に反対であった。

なぜなら彼は民間人で、自分は軍人だ。

軍人は、力を持つ代わりに、戦う職業であり、市民階級出身である彼は、その辺をきちんと理解している。

一般市民を戦わせることに抵抗があるのだ。

「レスター、ここは本人の意思次第だと思うよ。俺的には賛成だ。だってこいつは悪い奴じゃなさそうだって俺の勘が言ってるんだ。」

「おい、タクト、だが彼は民間人であってだなー!」

「いいですよ、僕は。臨時階級を貰って一時的に軍属にしてくれるなら。」

タクトはこの時点で、目の前の少年に対して、特に何か思うことはなかった。

14歳だというのに、アレだけすごい技術を持ってるのならば、味方になれば心強いなあ程度にしか。

彼のよく当たるといふ定評のある直感も、害意がある風には思えなかったからだ。

そして、この展開にラクレットは思った。

（なんとというオリ主補正！！最高だぜ神様！！）と

「落ち着けレスター、この艦の司令はタクトで、司令と本人が了承しているのじゃ。」

「っ！！そうですね。失礼しました。」

「うむ、タクト、わしの権限で臨時少尉にするから、エルシオール戦闘機部隊を新設し、その所属にでもするがよい。」

「了解。それじゃあ、俺はエンジェル隊の皆に会ってくるから、レスター後よろしく。」

ルフトのとりなしによりレスターは納得はしてないものの表面上は、受け入れた。

その様子に満足したのか、タクトはルフトから言われたことをそのままに、エンジェル隊に会いに向かうのであった。

すでに彼女たちと親睦を深めることで精神的な支えとなり、テンションをあげるといふ事を知らされていて、大義名分のある彼は、喜び勇んで部屋から出て行ったのだ。

そんなタクトの事を、いつものことだと諦めながら、レスターはラクレットに手続きを促すのであった。それをルフトは少々にやけながら見つめていた。

そしてラクレットは

（エンジェル隊じゃないのかよ！！！！）

と心の中で叫ぶのであった。

ミルフィーって、ローラーコースター乗る時も髪飾り外さなかったよね……

ミルフィーって、ローラーコースター乗る時も髪飾り外さなかったよね……

まさか、新設の戦闘機部隊に配属されるとは思わなかったぜ……。

まあ確かにエンジェル隊は国の象徴の近衛隊だから、臨時階級で入

れるわけないか……。

うん、だからココまでは納得するよ。

だけど、何でこんなに書かなきゃいけない書類が多いんだ!!

1つ書き上げると、横にいるレスターに頼まれた人（事務担当の人らしい）が、次の書類を送ってくる。

そんな感じのくりかえしです。

あ、一応、なんか個人用の携帯端末でやってます。支給されたので。

「軍に入ったら書類はお友達。お友達を待たせては失礼だろう?」

とか、いわれて、ルフト准将の囲イベントも見れなかったし、まだエンジェル隊にも合えてない!!

やばい、急がないとヤバイ。僕が今いるのはブリッジの隣にあるミ
ーティングルーム。

すでにクロノドライブに入ってしまったつ。

つまり、タクトがティーラウンジに行ってから30分後にクルーの
ほぼ全員でピクニックなのだ。それにはぜひ参加したい。

エンジェル隊全員との親睦を深めるためにも。

くそ、急げ僕!!今急がずに何時急ぐ!!

タクトはミルフィーによって一通りエルシオールの中を案内された。その間にエンジェル隊の面々が思い思いに方法で各々の時間を過ごしているのが解った。

一通り終わったので一度ブリッジに戻ったがお前が居てもすることが無いと副官であるレスターに言われ、ティーラウンジに向かっていたのである。

「あ、あそこにいるのは、ミルフィー達だ。お「それにしても、フォルテさん、新しい司令官のことどう思います?」「」

そんな彼がちょうどティールウンジに続く廊下を歩いていた時に、エンジェル隊の彼女たちが談笑している場面に遭遇した。

彼は声をかけようと、口を開きかけたが、彼女らの話し声が聞こえてきたので、思いとどまった。

「そうだねー、さっきの指揮も悪くはないみたいだし、まだ意見を
出せるほどじゃないね。」

「まー、そうですけど。私的には外見と違って、指揮はなよよし
てなかったから悪くないとは思ったので。」

「あら、ランファさんもなかなか高評価じゃありませんこと。」

「そうだね。ランファが初対面の男をルックス以外で褒めるなんて
珍しいじゃないか。」

「そんな事ないですよ。ただ悪くはないだけで。別に褒めてるわけじ
ゃあ。」

「まあこれから先の戦い命を預けてもとりのあえずは安心できそうデ
すわ。」

「へー、そういうミントだって、高評価じゃないか。」

「あら、私は最初に申し上げましたわ。『ランファさんも』と。」

「そうですよ、フォルテさん、タクトさんはいい人ですよ。」

「ミルフィーにかかれば、どんな人もいい人ですよ。」

「ランファー、それどう言う意味よー。」

「そのままよ。」

「ヴァニラさんは、どうですか?」

「……別に、ただ悪くは無いと。」

（よかったー。とりあえず嫌われてるかそういつのはなさそうだ）

タクトは、彼女たちの思わぬ自分の高評価に驚きや喜びよりも先にまず安堵を感じていた。

彼としては、先ほどの戦闘で全力を出したつもりだったので、ここで頼りないと言われた場合、いろいろと自分的にショックなので

ある。

特に彼は、戦闘時に働くタイプの軍人なので、実戦は彼の貴重な点数稼ぎの場なのである。

最も彼自身は、日々の地道なコミュニケーションを大事にしたいと思っていたが。

コレは彼女たちのような美少女とお近づきになりたいという、マイヤーズ家男子の血が出てくる欲望でもあったが。

タクトは彼女たちの評価を聞いて安堵したために若干周囲への警戒がおろそかになっていた。

レスターに見られた場合、軽く小言を言われるようなミスである。

そのためにミルフィーが接近してきたことに気付けなかったのである。

「あれ？タクトさん？どうしたんですか？こんなところで。」

「え！……あ！ミルフィー。えーと、いや、そのね……。」

「……あのーもしかして聞いてました？」

「えーと、……そのごめん。わざとじゃなかったんだ。」

タクトは、目の前にいるミルフィーユに素直に頭を下げた。
彼は、貴族のお坊ちゃまという立場だが、きちんと相手に対して謝り頭を下げる事が出来る。
特に女性に対しては。

ミルフィーユは、頭を下げたタクトをしばらく見つめると、ふと笑顔を浮かべてタクトに話しかけた。

「いいですよ。私タクトさんのこと信じます。」

「ミルフィー……。」

「だって、タクトさんは盗み聞きするような人じゃないもの。」

「……ありがとう。ミルフィー……。」

ミルフィーのその言葉にタクトは、これだけ信じてくれる彼女を決して裏切らないようにしないと思ったのである。

後にタクトは、この時から、オレとミルフィーの運命は始まっていたとのろけるのだが、それは置いておこう。

つまり、タクトは彼女のその人の良さに、心底感謝したのであった。

「いえ、そんな。……あ！そうだあの、これからピクニックしませんか！？私お弁当作りますから。」

「え？ピクニック？」

「はい。ほら、タクトさんとエンジェル隊の皆。後出来れば、さっきのパイロットさんで。」

「うーん、いいんじゃないかな？ちょうど顔合わせにもなるし。」

「それじゃあ、私はお料理作りますので、タクトさんは皆に知らせてきてください。」

「うん、わかった。」

ミルフィーが、タクトにピクニックを提案し。

そのやや突飛な発想にタクトは少し面食らったものの、提案自体は悪くないのでそれを了承した。

そのまま二人は分かれてそれぞれの行動を始めるのであった。

「ラクレット、ちょっといいかい？」

「なんですか、マイヤーズ司令？」

「そんなに硬くなくてもいいよ、タクトでいいさ。」

「それでは、タクトさん。僕に何か御用ですか？」

ラクレットが四苦八苦しながら何とか書類に必要事項を書き込んでいる時に、艦内を歩き回って、エンジン隊に連絡しているであろうタクトがやって来た。

ラクレットは恐らくタクトの用件はピクニックの話だと思い、にやける顔をどうにか抑えつつタクトに返答した。

「うん、実はね、この船の主力であるエンジェル隊の皆がピクニックをするから、君との顔合わせにもちょうどいいから、来て欲しくてね。」

「僕が行ってもご迷惑になりませんか？エンジェル隊の方々とはお会いしたいとは思っていませんけど。」

「もちろんさ。それじゃあ30分後に、展望公園に来てくれよ。」

「はい、わかりました。」

タクトの30分後という科白に自分が一番最初に誘われたのか？などと考えつつ、ラクレットは了解した。

「それでなんだけど、ちょっといいかい？」

タクトは、ラクレットが書いている書類（さすがに全部電子化されてはいない）を一瞥し、軽くラクレットにピクニックの時の指示をして部屋から出て行った。

「あー。ジン中尉、30分で終わりますかね？」

「君次第であろつ、臨時少尉。」

「ですよー。」

この後彼は自身の実力を出し切つて28分17秒というタイムで書き終えるのであつた。

もっとも、彼が費やした時間の合計は、数時間単位なのだが。

「はいみんな注目ー。」

エンジェル隊の5人とタクトは、銀河展望公園でピクニックをしていた。
彼らはミルフィューの作った弁当を食べながらレジャーシートに座り談笑している。

まだ、他のクルーが”偶然”来る前で、周囲にはのどかな雰囲気が漂っている。

空調システムによって再現されている人工の風が、周囲の植物と土の香りを運んでくる。

タクトはあたかも本当に地上の公園に居る様な錯覚を感じたのであった。

「いきなりなんですか？タクトさん。」

「うん、実は、皆も気になってると思うのだけど、さっきの戦闘機のパイロットが、正式にエルシオール所属になってね。ミルフィーにはもう伝えたけど。ここに呼んでるんだ。」

「あら、何時の間に呼びましたの？」

「えへへ、実はタクトさんに頼んで皆を呼んでもらうときにはもう頼んでたんだ。」

「へー、あんたにしては積極的じゃないの。」

「うん、さっきのお礼も言いたかったし。」

「はいはい、一回こっち見てね。それじゃあ、とりあえず本人に来てもらうか。ラクレット入ってきて。」

途切れる事無く会話を繋げる彼女たちの間にやや強引に入ったタクトは、手元の端末からラクレットに通信を入れる。

すると公園の入り口のほうから、ラクレットが歩いてきた。

「それじゃあ、自己紹介をどうぞー。」

「はい、このエルシオールの新設戦闘機部隊に配属しました。ラクレット・ヴァルター臨時少尉です。エンジェル隊の皆さんには、前から憧れていたのでお会いできて光栄です。」

ラクレットはこの転校生状態に疑問を持ちつつも、別に悪印象与えないからいいかなと考え、純度50パーセントの作り笑いで自己紹介を終えた。

「よしそれじゃあ、エンジェル隊の皆も自己紹介をお願いするよー。」

「アンタは何処の先生よ。」

「まあ、いいじゃありませんこと。こういう所でもユーモアを忘れてはいけませんわ。」

ランファが、タクトの謎のテンションに突っこみを入れるものの、それを制したのは、意外にもミントであった。

もともと彼女は彼の心がうまく読めないということで興味を持ったからであつたのだが。

それを全く表に出さないあたり、彼女の性格が窺える。

「はい！私はミルフィーユ・桜葉、ラッキスターのパイロットです。さつきはありがとうございました。」

「蘭花・フランボワーズ。カンフーファイターのパイロットよ。」

「トリックスターのパイロット、ミント・ブラマンシュですわ。」

「フォルテ・シュトーレンだ。エンジェル隊のリーダーをやってる。ミルフィーも言ってたが、さつきは助かったよ。」

「……ヴァニラ・Hです。ハーベスターのパイロットです。」

「はいども、オレはさつき自己紹介したからいいか。よしそれじゃあ今度は、質問タイムだ！」

異様にテンションの高いタクトにラクレットは微妙に引いたが、とりあえず今自己紹介をしてくれたエンジェル隊のメンバーを見る。

先ほども思ったが、画面の外から見てるのよりずっと綺麗だと改めてそう感じた。

ミルフィーの笑顔は本当にタクトの言ってたとおり大輪の花のようだし、蘭花はさらさらと流れるような金髪に、バランスの取れたプ

ロケーションを持つてる。

ミントは小さいけど（すごく失礼である）本物のお嬢様のような雰囲気伝わってくるし、フォルテの胸には視線が行かないようにするのに一苦労だ。

そしてヴァニラは完成された彫刻のような相貌で佇んでいて、それがまた絵みたいだと思った。

「質問タイムですか…？」

「そうそう、俺とラクレットがエンジェル隊に、エンジェル隊の皆が俺とラクレットに質問をするんだ。」

「はあ……。」

「よし、それじゃあまず俺から、君たちのス」
「あのあの、タクトさん僕から先に質問させてもらいますね！！ えーと、皆さん！
年はお幾つですか！！」

ラクレットはタクトがいきなり聞こうとした事を、知識からすばやく判断してそれを遮った。

彼の記憶では、なぜかこのタイミングでスリーサイズの質問があったことを覚えていたのである。

原作では、クルーのメンバーに遮られて最後まで聞けなかったが、今浜で周りにそのような気配はない。

とっさにさえぎるには最悪の質問だなと思いつつも彼はタクトの質問をさせなかった。

このまま質問をさせてしまった場合、確実にとは言えないものの結構な確立でタクトの信頼度が好感度が落ちてしまう。そうラクレットは考えたのである。

タクトがヒロインの誰かとくっついて貰わないと高確率で、この世界は滅びる。

エオニアはちとセルートならからうじて何とか成るかもしれないが、その後に控えている敵は、正直強大でそう簡単に勝てる相手ではないのだ。

こんな些細なことでもどうにかなると思わないが、なったので死にました では笑えない。

もつとも、チキンな彼は選んでないから知らないが、原作でスリーサイズの質問は、冗談だと思われるだけなのであったが…。

またもうひとつの理由はカップリングの嗜好の問題であった。

ラクレットは、タクト×ミルフィーと、レスター×ちとせが好きなのであった。

アルモに謝るべきである。

「いきなり、ずいぶんな質問だね。」

ピロン フォルテの好感度が下がった。

「女性に年齢を聞くのはデリカシーに欠けてよ。」

ピロン ミントの好感度が下がった。

ラクレットの頭の中にはそのような効果音が聞こえてきてしまった。
実際にはそのようなことはないのだが。

「えー！あー！いえ、そのえーと、いや、僕はただその、皆さんが
皇国でも最強の戦闘気乗りの部隊なのにずいぶん若いなと思ってで
すねー！」

かなり苦しいフォローであつたが、彼にしてみてもコレが精一杯であつた。

なぜなら彼はヤラハタの上位ジョブ魔法使いであるのだ。

前世というアドバンテージで得たことの一つがこの高位ジョブである。

ちなみに彼女もいない。

学校でも3歳下の少年でしかも時々変なことを呟いたり、奇妙な行動をとるのだ。あまり近寄られないのである。

格好も一般的な目で見れば、なかなか（ユニークな）格好良いも

のであるし。

「そう言うアンタはいくつなのよ。」

「あ、そうそう私も気になってました！」

「え？僕ですか？えーと……先月14になりました。」

ラクレットは、先月誕生日を迎えていた。

もつとも、本人も忘れていて、両親も収穫祭の仕事で忙しくてすっかり忘れてしまったのだが。

ちなみに誕生日プレゼントは宇宙イルカの絵画のジグゾーパズルであつた。

5000ピースのそれは、本人が始める前に渡した両親の手によって完成された。

糊付けもきちんとしていて、現在彼の部屋に飾られている。

「へえ」

「あら」

「ええ！！何！あんた、そんな外見してヴァニラと一つしか変わら

ないじゃないの！てつきり私か、ミルフィーと同じくらいだと思っ
てたのに！！」

「すごい、ラクレット君って、私より年下なのに紋章機に乗れる
んだ！！」

「……ミルフィーさん。私も紋章機に乗れます。」

フォルテとミントは単純に驚き、蘭花は、外見から予想していた年
齢との差に大声をあげた。

ラクレットの身長は現時点でタクトより少しだけ大きいのだ。（ほ
とんど解らないが）ミルフィーユはまた微妙にずれた発言をして、
ヴァニラは微妙に拗ねた様な目でミルフィーユを見上げていた。

つい咄嗟でしてしまった、初対面の女性に対するではいけない質
問のベスト3入りするであろうものを繰り出してから、この程度で
済んだのはなかなか幸運であろう。

これもミルフィーに会ったからなのかとくだらないことを考えつ
つ、安堵するラクレットである。

「うん、俺も最初に聞いた時は驚いたよ。よしそれじゃあ今度は
エンジェル隊からの質問だね！さあ、どーんとこい！」

「では私が、さきほどの戦闘、かなりの腕をお持ちみたいですが、紋章機はどうやって入手されたんですの？」

「あ、それはうちが元々管理していたものに僕が適正があっただけです。五歳になったら、とりあえず動かせるかどうかのテストをするので。上にいる兄二人も父も駄目だったみたいだったのですが、なぜか僕は動かせたので……その後はまあ、結構な頻度で乗っていたので、搭乗時間は500時間は越えています。」

「ラクレットは、白き月の聖母様の許可証を貰っているから、法的には何も問題ないみたいだよ、ミント。」

ラクレットは、その質問には慣れているのか、すらすらと答えた。最も最後に少しだけ軽く自慢を入れてみたのだが。

それをタクトは先ほど自分が確認した事で補足した。

ミントは二人を（主にラクレットを）少しだけ見つめた後に、「そうでしたか。ありがとうございました。」と言って一歩下がった。

「よし今度こそオレの番だ！みんなの「あれ？マイヤーズ司令もピクニックですか？」」

タクトが質問をしようとしたらまたしても、邪魔が入った。タクトは話しかけられた方向を見るとそこに立っていたのは、整備主任のクレータだった。

彼女の右手にはれじゃシートを抱えており、後ろには他の整備班の面々もいる。

台詞からも考えるに、展望公園へ来た目的はピクニックであろう。

「あ、もしかして、クレータさんたちもピクニックですか？」

「ええ、そうよ、ミルフィーさん。あ、君は！」

「今日からエルシオールの新設戦闘機部隊に配属しました。ラクレット・ヴァルター臨時少尉です。」

ミルフィーユの問いかけに笑顔で返した、クレータは、その会話に加わっている、ラクレットを見つけて少々驚いた。

まだ彼がいるのは知っていたが、まさか公園にいるとは思わなかったのである。

「あら、そうだったの。私は整備主任のクレータ・ビスキュイよ。これからあなたの機体を見ることになるから、よろしくね。」

「こちらこそよろしくお願いします。」

「ああそうそう、あなたの機体の事で少し聞きたいことがあるのだけれど、いいかしら？」

「ええ、もちろん。スイマセンが少しはずしますね、タクトさん、僕の機体ちよつと特別なもので。」

「ああ。わかったよ。」

ラクレットは、クレータ率いる整備班の面々に付いて行つたが、タクトはエンジェル隊の面々とのピクニックを続けるのであつた。

「あ、そーだフォルテ、ラクレットは一応君の部下って事になるから、エンジェル隊の下につく形で配属だからね。」

「了解したよ司令官殿。」

フォルテはタクトの言葉にうなずいた。

他の隊員もそれを見ていたため唯一ミントだけが、ラクレットの背中を見つめていたのには誰も気付くことが出来なかつた。

ラッキースターの性能はミッションによる差が激しすぎる

ラッキースターの性能はミッションによる差が激しすぎる

どうもどうも、なんだかんだで原作イベントに介入しているラクレットです。

現在ボクの紋章機『エタニティーソード』についてがんがん聞かれています。

まあ、エンジェル隊の物以外の紋章機なんて、技術屋にしてみれば物凄い興味の対象なんだろうね。

ふふふ、アレでリミッターかけてるって知ったらどう思っのかね。後、年齢のことを言ったらやっぱり驚かれた。うーん、そんなに老けてるかな？

さて、もうすぐ雨か。

「もし、少々よろしいでしょうか？」

僕がクレータ班長との会話を終え、一通り回った後、人が増え盛り上がってきた展望公園から出ようと歩いてたら、いきなりミントが話しかけてきた。

そうそう、エンジェル隊の所へは少し顔を出してミルフィーの弁当を食べさせてもらった。

その後、挨拶回りをするからと抜けてきて、とりあえず片っ端から話しかけていたのである。

すでに、名前が出ていたエルシオールスタッフは、梅さん以外あっているということになってるのだ。

「はい、何でしょうか？ブラマンシュ少尉？」

「あら、もう覚えてくださったんですの？」

「はい、上官ですから。」

とりあえず僕は、対外的には敬語で、苗字＋階級で行こうと思う。確かちとせが最初そうやって読んでいて直されたから、僕も向こうが許可するまで苗字で呼ぶつもりである。

そうすればなんかこう、呼び名変更イベントが起きるじゃないか！
！僕は好きなんだよ呼び名交換イベント！！
ん？ H少尉って……アッシュ少尉にしよう。

「それで、僕に何か御用ですか？」

「ええ……少々お聞きしたいことがあります。ラクレットさんはなにかESP能力をお持ちですか？」

「え？ESPですか？……確か、極々弱いレベルのプレコグニッシヨンがあるって、検査では出ましたけど？」

そう、なんか僕自身が、予知能力持ちという結果がでたのだ。と言っても強度は物凄く集中している時に1、2秒先が見える……

といいな。

というくらいで、『H・A・L・Oシステム』の補助があつて何とか1割くらいで発動するようなもの。

物凄く弱い能力で実質無いのと同じである。

実は皇国の人工の1割ほどがESP能力者ではあるが、ほとんどは僕みたいなものらしい。

マツチ大の火を2、3時間集中して出せるとか、スプーンを毎日念じ続けて1ヶ月で視認できるくらい曲げれるみたいなレベル。

というか、検査を受けない場合一生気付かない人だっているのだ。

ブラマンシュ家の人みたいに心が読めるって言うのは最強クラスの中でも上位の能力になるのだ。

あと、たまにフラッシュバックみたいに何かが見えるかもって言われた。こっちのほうは原作知識の言い訳に使えそうだから保険としてうれしい能力だ。

「ESPジャミングはお持ちで？」

「いえ…そう言った物は携帯してませんが。」

ESPジャミングはさっきも言った、微弱な能力程度しか持たないヒトが、自分の意思と関係なく能力を発動しないように安全のために持つものだ。

どんなに強力なものでも、ミントというより、そこまで強力なテレパスを妨害できるほどじゃないのだが。

なるほど、どうやらミントは僕の思考が読めないことに興味を持っていたいだね。それで怪しい奴とか思ってるのかね？これってもしかした、魔法先生のテンプレ展開で剣術使いの少女が切りかかってくるみたいなイベントみたいなものかな。

「はあ、そうでしたか。実は私テレパシストでして。アナタの思考が読めなくて少々驚いてしまいました。」

「ああ、そういうことですか。前にテレパシストの人が同じ事を言っていましたよ。」

あっさりとテレパシストであることは明かしてくれた。ふむ、コレ

は思ったより好感度が高いのかな？いや、そんなわけないな。疑われてるとかより疑問に思った感じだったのだろう。ミントは結構計算高い策略家みたいなタイプだからね！。

その後ミントはいくつか僕に質問したら、「それでは私はこれで。」と言ってどこかへ行ってしまった。

質問の内容は、きちんとクルーの名前を覚えているのか？見たいなもので。

モブキャラ以外はわかる僕は、医務室やクジラルーム、格納庫やブリジスタッフなどの主要な人物の名前は覚えてます。

と答えて、実際に名前も言ってみたが、それがどうしたと言っのだろうか？

うーむ、結局警戒されてるのか？

とりあえず考えてもわからないので、僕はスプリンクラーが作動する前に展望公園から出て、機体の調整に向かうことにした。

「あ、タクトさん。僕の機体の特徴について説明しましょうか？」

現在、クロノドライブアウト先で敵と遭遇し、一本道のために迎撃に出ようとしているところだ。

まあ、この戦闘ではミルフィーはシステムトラブルで参加できない代わりに敵の後続を足止め（と言う名の殲滅）するんだよね。

あの強さには最初驚いたなー、で次の戦闘でもそうだと思うって一人別方向に突っ込ませて沈んだんだよね。懐かしいな。

「うーん、そうだな…。よろしく頼むよ。」

選択肢があつたみたいな間だけど、頼まれたからにはやらないと。

「僕の機体『エタニティソード』の特徴はなんと言っても変形機構でしょう。」

「変形機構？」

「はい、高速移動に優れた移動形態と、戦闘用の攻撃形態の二つへ状況により機体の形態を変形させることができます。」

「へー、まあその辺の細かい判断は、何かない限り君に任せるよ。」

うむ、やっぱりそうなるよね。まあ僕も普通に使い分けてるから問題ないか。

「了解です。次に機体の性能を説明しますね。大まかに言うと、速度 加速 旋回 燃費 射程 攻撃 装甲 回避 のうち速度、加速、旋回はかなり自信がありますね。（S・）」

「ふむふむ。」

「それに加えて、燃費、装甲、回避もそれなりに高いので、長時間の戦闘が望める機体です。（A前後）」

「へー、なんだ、万能じゃないか。」

やっぱりそう聞こえるよね。僕も最初は驚いたからね。

「いえ、それですね、攻撃はそこそこってとこですね。（B・）」

「そうなのか……武装は何かい？」

「搭載武装は、エネルギー伝導式の双剣一組 以上です。 よって
射程は物凄く短いです。（E・C）」

「え？」

そういう反応になるよねやっぱ。

この時代の人からして、剣は飾りだもんね。

あ、短いって言っても、先っぽにエネルギーで出来たビームサーベル的なものが出てくるからそこまでじゃない。マップ単位で1無いけどね！

「燃費がいいのも実は武装がないからというだけですな。」

「えーとそれはつまり…… 攻撃は出来ないということかい？」

「いえ、先の戦闘でも僕がやっていたように、接近して斬りつけます。その習得のために五歳の頃から乗ってきましたから。」

「へー、となると機体運用は、囿や切り込み用ってところかな？」

おう、さすが主人公良くわかってるじゃないか。

「はい、それに加えて時間稼ぎなどは得意ですが、対戦闘機戦は効率が悪いかと思われます。またレーダーの能力はそこまで高くないので、斥候としてはトリックマスターには劣るかと。」

「わかった、大体は把握したから戦闘では指示ど通りに頼むよ。」

「了解です。」

まあ、この辺の戦闘じゃ苦戦すらないだろうけどね。

「いくぜ！！コネクティッドウ……ウィル！」

僕は今、エルシオールから遠めに配置されていた敵の巡洋艦を切りつけた。

やっぱりこの辺はまだ敵が弱いと思う。

まあ、無印はそこまで難しくなかったし、MLではちょっとこっちの戦力が強くなりすぎてる感があった。

だからELの発戦闘で敵の船の硬さにマジで驚いた。

全員で殴つても半分までしか減らないとか……。

まあとにかく何がしたいのかというと、

「弱えーな、弱すぎるぜ！まとめてかかってきやがれ！」

この宙域内において僕が警戒すべきことは何もない、敵の相性、補給、エルシオールに回す護衛戦力、すべてが考える必要ない程度のものだ。

タクトからの指示は、

先行してに切り込んで、小惑星のせいで狭くなっている場所に誘導してそこで時間を稼いでおいてくれ。

との事で僕にはうってつけの任務だ。

だって特に意識しなくてもかわせる程度の攻撃しかしてこないのだ。砲門もすでにほとんどつぶしてあるから、適当にテンションをあげてきりつけてれば沈む程度の敵だ。

「タクトさん　時間を稼ぐのはいいが――別に、アレを倒してしまっても構わないのでしょうか？」

「あ、ああもちろん。無茶はするなよ。」

「了解、いくぞボロ船　武器の貯蔵は十分か？」

そういった後に僕は、期待を一回転させて敵に突っこんだ。

敵から散発的な砲撃が来るものの、レーザー兵器でもない限り絣もしないし、シールドがある限りダメージも受けない。

敵の機関部に回り込んでそこに左の剣から延びる光を突き刺す。

そのまま勢いを殺さずに離脱して次の船に向かう。

「『エタニティソード』、敵機撃墜！次の目標に向かいます！」

その作業を繰り返してるうちに、他のメンバーがエルシオール近くの敵を一掃したのか、加勢に入り、あっという間に戦闘は終わるのであった。

もつともこの後に起こるであろう、レゾムの奇襲を知っている僕は、その場で待機だけだね…。

「よし、みんなご苦労様。 あっという間だったね。」

「当然よ、こんな敵に私たちが苦戦するわけないじゃない。」

「なめてもらっては困るよ司令官殿。」

「じゃあ、今からそっちに向か「司令！！エルシオールの背後にドライブアウトした船五隻！同様に前方にも敵艦が！！」「うーん、どうやら挟み撃ちみたいだな。」

つと、どうやら敵さんが来たらしい。

うーむ、記憶があやふやだから断言は出来ないけどおそらく、数は増えてない。

さっきが多かっただけっぽいな。

にしてもいつもおもったのだが、どうしてこの作戦で拓路はエルシオールを前に進めとかなかったんだろう？

戦闘行動中いくら前に行っても、なんか初期位置に戻ってるし。そこは微妙に謎だ。もう10回以上やってるから特にそう思う。

「あ、1番機ラッキスター出れまーす。」

「なにー！ぬぬぬ、一機残していただと！生意気なー！！」

いやーすごいねーミルフィー。3秒で一隻沈めてるよ。
あれ作るのにかかった時間の何分の一だろうね……あ、ハイパーキヤノンでレゾム沈めた。

何で生きてるのか本当に疑問だよね。

「よし、後ろは何とかなるから、皆は前の敵を一掃してくれ！」

タクトさんから指示が来たので、とりあえず僕は突っこむ。いいよねー切り込み隊長って。殿も好きだけど、一番前で戦うのはとても憧れるよ。

「了解だよ、司令官殿！」

「ヴァニラさん、一応修理をお願いしてもよろしいですか？」

「了解しました。」

「任せときなさい！あつという間に沈めちゃうから。」

「二つも三つも攻撃手段を持つ必要は無い　ただ一つを、鍛え上げてこそ必殺となる！！　これが、かわせるか！！！」

何時ものように、砲門をつぶしてから、機関部に一刺し。
このパターンでコレから行くか。

ぶるゑの声で一番印象に残ってるのはとっつあんだけど、タキオス
と聖賢も声とキャラの相性が半端無かったよな。

まあ、一番記憶に残っているのはギンガマンだけどさ。

おっと。僕が一隻落とす間に、他のは全部落とされたらしい。うー
む、微妙に原作より強いな。経験値の差かな？

「敵旗艦、後退して行きます！」

「よし、皆ご苦労様。帰還してくれ。」

よしコレで僕の初陣は終わるか。

この前のは正当防衛だからね、戦闘じゃないんだよ。

エンジェル隊の面々と一緒に戦ったはじめての戦闘だったわけだけ
ど…なんか思ったより感慨がわかなかったな。

なんでだろう？

I n t e r l u d e

時刻は深夜、艦内の通路も一部を除き非常灯のみが薄く照らしている時間帯。

先ほどの戦闘が終わって1時間ほどたった時間帯である。

タクトがミルフィーの運をコインの裏表みたいだと評して、彼女の好感度を上げた後、ラクレットは地味に疲れたので早めに寝てしまった。

彼の場合はクリスマスなどの行事で無駄にテンションが上がってしまい疲れて寝る子供のようなものだが、結果として寝てしまったために、彼はまたしてもエンジェル隊とかかわる機会が減ってしまったのだ。

彼女たちとタクトは、寝る前のひと時をティーラウンジで過ごしていたのだ。

もつとも、タクトとは違って（本人曰く若干）ヘタレなラクレットは女性5人でお茶を飲んでいるところに参加できたかは甚だ疑問であるが。

「みんな、改めてお疲れ様。皆ががんばってくれたおかげで突破できたよ、特にミルフィーは大活躍だったね。」

「そんな、タクトさんの指揮がよかったから私は動けたんですよ。」

タクトはそう言ってミルフィーユを見たあとに、自分のティーカップに口をつけた。

ミルフィーのほうは、照れくさそうにしているが、褒められて悪い気はしていないようだ。

彼女はエンジェル隊の中では謙虚なほうなのでこういうときには良く否定をするのだ。

「あら、ミルフィーさんがいなければエルシオールは、5隻もの敵艦に追われていたのですから、謙遜なさらなくても。」

「そうよ、あんたにしては頑張ったんだから、お礼くらい素直に受け取っておきなさいよ。」

「ちょっと位ずづずしいほうが得するものだよ。」

そんな彼女に対して、このように言つのもエンジェル隊ではいつものことであつて、それはタクトがこの場においても変わらないことなのだ。

「敵艦は……。」

「え？」

「いえ、敵艦はどうしてあそこまでの数を配備できたのでしょうか？ 私たちは一応ルフト准将に囷になっていたうえで逃走しているわけです。」

「確かにそうですね。あの男は単純に追いかけてみただけみたいですが、かなりの数で警戒線を引かれているのは間違いないですね。」

ヴァニラが、ポツリと言葉を漏らした後に、彼女にしては珍しくそ

れなりに長く彼女の意見を述べた。後半部分はミントが補足したが。

「うん、正直今回の戦いも、アレだけの数を捌けたのはみんなの頑張りのおかげだと思うんだ。実際戦艦2隻ぶんの戦力以上だったじゃないか。」

「やけに褒めるね、司令官殿。」

タクトが、エンジェル隊に対してここまで褒めるのは決しておかしくないが、何か含むものを感じ取ったフォルテは、タクトに問いかける。

タクトの表情は、いつものへらへら表情とは違い、コレを言っているのかどうか若干悩んでいるような顔だった。

「いや、その………みんなは、ラクレットのことをどう思う？」

「どうってなによ。」

「いや、確かに彼の紋章機はみんなの機体と比べても、同等かそれ以上の性能が出せるみたいなんだ。」

タクトは先ほどの戦闘の後に、格納庫でもう一度詳しくラクレットを交えてクレータ班長に機体スペックを聞いていた。

その際に、機動という点においてはかなりの性能を持つことを確認していたのである。

「でも、彼の動きは異常だ。正直あんなの、パイロット育成学校の主席が10年訓練しても出来るとは思わない。移動している戦艦のすれすれを飛びながら、火器をつぶす。言葉にしてみれば簡単だけど。パイロットじゃないオレでもあの難易度が解る。」

「それに、戦闘でのあの人の変わりようも異常だと思う。第一印象とぜんぜん別人だよあれだと。」

ここで、タクトは一回言葉を切ると、エンジェル隊の面々の顔を見渡した。

「コレを踏まえて、彼をどう思う?。」

タクトのその言葉にエンジェル隊の一同は沈黙するしかなかった。彼女たちも少し思うことがあったのだ。

確かに紋章機は、圧倒的性能ではあるが、『H・A・L・Oシステム』による補助もあるので、そこまでの訓練が必要ない、基本的に適正がものを言うのだ。

しかしながら、それでも彼のあの機動は異常であった。

まるで手足のように紋章機を扱っていたのである。

そして、そのような彼が加わったタイミングはまさに、自分たちがピンチに陥った時。

お話の主人公かというタイミングで入ったのだ。

「……司令官殿、こういう時はたとえどんなにタイミングが良くても、上官のアンタがそれを怪しいだなんていつてはだめさ。言いたいことは、そういうことだろ？」

「……うん。」

「でも、あんたが決めたんだからきちんと責任は持たなくちゃ、むしろアレだけ出来たのを見て「オレの目は正しかった。」くらい言わないと。」

「……そうかもしれないな。悪いね、みんな、変な空気にしちゃった、今日はもうオレ寝るよ。」

そっぴい言い残すと、タクトは席を立ちティーラウンジを後にした。その姿を、少々呆然としていたフォルテ以外のメンバーが見送る。

フォルテは普通に、自分のティーカップに口をつけていた。

「さて、今言った私が言うのなんだけど、正直ミントはどう思う？」

「彼には、ESPが効きませんでした。それがどういう理由なのかはわかりませんが。また、なぜかすでに重要なポジションについているクルーの名前を知っていました。特にタクトさんにいたっては、個人的な特徴でさえも把握していた可能性すらありえるかもしれませんが。単純に記憶力が言いただけでしたらいいのですが。」

「まあ、あやしいのは否定できないよね。さっきはタクトに言ったけど。私の直感が、何か隠しているって言うてる。無条件で信用というのは出来ないね。」

フォルテとしては、上官であるタクトのために気の利いたことを言ったが、彼女の歴戦の直感が何かあやしいと告げていたのである。個人的には疑わしいといったところか。

対してミントは、言葉は丸いが、彼女なりに彼は怪しいといっているようなものである。

「まあ、私は何か言えるほどじゃないけど、ただ、アイツの近接機動は、完全に才能がないとできないわ。私もやれといわれなきややりたくないわよ。」

カンフーファイターが壊れちゃいそうだし、とランファは呟いた。

「でも、悪い人じゃないと思います！」

「はい、私も何か確証がない限りは問題がない人だと思っています。」

ミルフィーとヴァニラは元々誰かに対して疑念の感情を向けるが少ない、というか皆無に近いために今のところは問題がないという意見であった。

エンジェル隊全員としてみれば、隊長と参謀が疑ってそのほかが保留といったところか。

「まあなんにせよ、私たちに害がない限りは、静観しますか。」

「そうですね。それが妥当かと。」

ラクレットの知らないところで彼の扱いは決まっていく、彼が予想しない方向へ。

入れたはいいけど、思ったより強くて戸惑っているタクトでした。

因果応報で毎日がアドベンチャー

因果応報で毎日がアドベンチャー

そろそろ登場のネタに困ってきたラクレットです。こんにちは。

現在エルシオールはレゾムを倒した後のクロノドライブだ。
多分そろそろ終わると思う。

あれから二日経っているので今日はタクト登場から4日目？なんか微妙に僕がいることでこの辺のスケジュールが変わってきている。

あ、今クロノドライブが終わったので、30分ほど通常空間を航行したら、あいつらが来るかな。

それと、この章は結構楽しみなイベントがあったからね、それもぜひ体験してみたい。

さて、とりあえず、ティーラウンジにでも行きますかね。

「えー、そんなー!!」

「みなさん、何を読んでいらっしゃるのですか?」

「あ、ラクレット。」

タクトがこちらに気づいたみたいだ。

僕が、ティーラウンジに入った時、エンジェル隊の面々とタクトは蘭花がもってる雑誌に掲載されている、マダムキャプレーの占いコーナーで盛り上がっていた。

おそらく、ミルフィーにあのナルシストに付け回されるであろうとの結果が出たところだろう。

「こんにちは、それは占いですか？」

「ええ、この雑誌の占いをしているマダムキャプレーは、なんとか中率99パーセントなのよ！……その分嫌な結果が出たミルフィーが可哀想だけどね。」

「なんでも、好きでもない男に付き纏われる。って結果が出たみたいだね。」

「そうなんですか。」

視線を向けると、机に突っ伏している、ミルフィーの姿があった。

おおーこれが良くアニメとかで見る光景か。
背後がほんとに青くなってる。

「それじゃあ、持ち主のランファの結果はどうなんだ？」

「えーと……なによこれ……！！」

蘭花はしばらく視線を雑誌に向けて小声で趣味などを照らし合わせた後、急に立ち上がり叫びだした。

どうやら気に入らない結果が出たみたいだね。

確か、思いもよらない身近な異性と急接近だったわけ？

タクトを連想してしまいみんなにからかわれて、そのまま逃げるように立ち去る。

見たいな流れだったね。

と、そんなことを考えながら、なかなか来ない店員のために（エンジェル隊が騒がしいので近寄るに近寄れない）僕はカウンターに注文をしに行った。

コーヒーとチョコレートケーキを頼んで戻ってくると、予想通り蘭花がかけていくところだった。

そういえば、身近な異性って僕も入るんじゃないのかなーと、どうでもいいことを考えつつエンジェル隊が座っている隣のテーブルに僕は座り、注文を待つのであつた。

もうすぐクロノドライブに移行できるポイントという所で、ミサイルが突然エルシオールに打ち込まれた。

ちょうど日課の戦闘機の整備を行っていた僕は、その衝撃で頭をぶつけてしまった。

畜生、わかつていたことなのにどうしてこうなった。

ともかく、小惑星がたくさん存在する、アステロイド帯の中をたった2機の戦闘機で接近してミサイルを撃ち込んだのは、十中八九ヘルハンス隊の二人であろう。

となると今の衝撃で、出撃できる紋章機はミルフィーの『ラッキースター』に、蘭花の『カンフーフアイター』の二機のはずだ。

僕の紋章機は、シャトル搭載をする別のブロックに積んでいるために一応の出撃はできるが……って!!

今僕が頭ぶつけたから、照準システムの設定が変わってる!! 照準システムがないと敵との距離感がうまくつかめないんだよ……。

幸い2、30分で再調整はできるだろうけど……。

畜生、今回は僕出撃できないな。

「こちらブリッジ、エンジェル隊、発進できるか？」

「1番機行けまーす。」

「2番機も平気よ。」

「3番機、紋章機を支えるアームが稼動しません。」

「4番機もだよ。これじゃあ出撃は無理だ。」

「5番機も同じく出撃できません。」

「くそ！敵ながら見事な狙いだ。」

やはり原作どおりの展開になり、悪態をつくレスター。

まあ、主力の6割をつぶす攻撃つてのもすごいよね確かに。

「そうだね、ラクレット、そっちは？」

「それが、今の衝撃で少々システムにトラブルが出てしまいまして、復旧にしばらくかかると思います。」

「……そうか。」

そういつて、少し考え込むタクト。

ここは、どっちにしてもとりあえず2機は出さないといけないと思うんだけどね。

まあ、もう敵としては目的を果たしてるから、無理に攻めてくるわけじゃない。

いくらでも考える時間はある。もっともそれを知ってるのはこの船では僕だけだね。

「よし！ミルフィーと、蘭花の二人で出撃してくれ。敵は、戦闘機二機だ。性能ではおそらく紋章機のほうが上だと思うけど、油断するなよ。」

「わかってるわよ。」

以下ダイジェストで

「ああ、マイハニー君を思うだけでボクの胸は燃えるように熱く高鳴ってるよ。わかるかいこのベリーホットな気持ち」

「ボクのことを知りたいだろう、マイハニー？そうだろう、そうだろうなあ。」

「つれない事を言わないでくれよマイハニー、ボクは君の事なら

何でも知ってるんだ」

「だから君にも僕のことを知る権利と義務があるんだ、さあ聞いておくれマイハニー。」

「僕の名前は カミュ・O・ラフロイグ。どうだい、この美しい名前。まるで宇宙を駆けるさわやかな風のようなようだ。」

以上、ナルシスト（石田彰voice）の台詞です。
いやー、通信音声だけ回してもらったけど、正直聞いているだけで変になりそうな台詞だね。

まあ、僕も出てないし原作と全く差が無いまま、会話が続き、地味に重要だと思われる、ミルフィーの将来の夢の作文を、カミュが読んでいた。

コレはつまり、エオニアが、皇国の情報データベースを完全に掌握したということになる。

どうでもいいけど

「宇宙船になって、いろんな星に行きたいです。」

は、子供でもそこまで純粹に書ける人がいるかどうか解らないと思う。

「うおおおおおっ！！！！蘭花・フランボワーズ！！！！オレと勝負しろ！！！」

「何よアンタ！！いきなりそんな事！！それに暑苦しいのよ！！！」

そして次は、勇者王の声で叫ぶ馬鹿。

いつも思ってたんだけど、ヘル・ハウنز隊って声こだわってるよね？

後の3人は、ライダーに、ウザクに、えーと・・・頬こけ男？

まあ、カミュはナルでギネスは馬鹿だけど二人とも強いのは事実な訳だ。

ミルフィー達を負けるとは思わないけど。気をつけてもらわないと。

っと、通信が終わって戦闘に入るみたいだ。僕も調整しておかないと。

さて、何とか二人を撃退したわけだけど。

この後さっきのミサイルが実は偵察用光学迷彩型プローブだったという話で。

タクトに変装したそれがいろいろ騒ぎを起こすって話だったはず。まあ、僕にはあんまり関係ない。

あれは、大佐以上の階級に反応するものだから、仮に出会っても僕のまねはされないのだし。

そして今、僕はとても見たいイベントがあるので、その準備のためにロッカールームから少し離れた位置にいる。

この章、というか、地味にGAシリーズの中でもインパクトがあったシーンなので記憶に詳しく残っている。

初プレイは前世で12歳のときだから、もう20年以上前なのに。

最も何度もやり直しているから、そのままの時間というわけではな

いのだけど。お、角の向こうから、タクトが歩いてきた、つまりはもうすぐだね。

「あ、タクトさん。どうしたんですか？」

「いや、たいしたことじゃないんだけど、どうも変な感じがしてね。」

「そうなんですか。」

「うん、そういうラクレットはどうして「ッキヤアア~~~~!!」
!~~~~!!」

軽く話していると、ロッカールームのほうから、悲鳴が聞こえた。
一応怪しまれないように僕も驚いたような顔を作る。

「今のは!？」

「ロッカールームのほうからです!!」

そう言っ僕はロッカールームに向かって走り出す。
後ろから少し送れてタクトがついてくる。

15秒ほどでロッカールの前についた。僕は急いで中に入る。つて！！！！

「キヤーー！！」

僕がドアを開けた瞬間にシャンプーのボトルが飛んできた。

僕は咄嗟のことですれを避けることができずに、そのまま頭にヒットした。

薄れ行く視界の中僕が最後に見たのは、蘭花のバスタオル一枚で辛うじて隠されている見事な体だった。

「ラクレット！！、って、ランファア！？」

ああ、畜生なぜこんなところで原作と差が出たんだ。

「……ここはど……知らない天井だ。」

地味にこのネタもよっぽど意識していないと言えないと思う。

寝起きでいきなりそこまで考えられる人は少ないのだから。

僕はそのまま体を起こす。周りは薄暗く、艦内はすでに夜みたいだ。

周りを見回すと、カーテンで仕切られていたが、消毒液の匂いからここが医務室であることに気づいた。

……ほんのわずかにコーヒの匂いもするしね。

消毒液の匂いを臭いにしない理由は、僕は消毒液などの病院の匂いが結構好きだからである。本当にどうでもいいことだけだね。

自分の格好は、さっきのままだ。

どうやら、不可抗力の覗きの後にここに運ばれたみたいだ。

ベットの右側に靴が置いてあったので、それを履いてベットから降りる。カーテンをめくって外の様子を確認してみたいからだ。

時計を見るとすでに消灯時間は過ぎているみたいだ。

ケール先生も自室に戻っているみたいで、ホワイトボードに『起きて大丈夫そうなら自分の部屋に戻りなさい』と書いてある。

まあ、単純に新品で重いシャンプーの容器がぶつかってきたただけだからね。脳震盪起こして倒れたのかな？少しふらふらするけれども、歩いて問題なさそうだ。

「じゃあ、戻るか。……一応ブリッジに顔を出してからにするか。」

そう決めたので、まずはブリッジに向かうことにした。

ブリッジにはレスターがいた。

「起きて大丈夫なのか？」と言われたので、大丈夫だと答え、あれからどうなったかを聞いてみる。

おおむね原作と差はないみたいだ。

光学迷彩型プローブがタクトに化けてて、いろいろ問題を起こした後に、ランファが破壊。

その後戦闘で敵を退けて今に至るか。

エンジェル隊の隊員たちは、すでに就寝前のお茶会を終わらせて自室で休んでいるみたいだ。

まあ、原作どおりなら問題ないか。

僕はそう思い、礼を言った後にブリッジを後にした。

実はこの時僕が起こした行動のせいで、地味に小さくない差が出てしまったのだが、まあそれは別の話だ。

i n t e r l u d e

エオニア旗艦ゼル。

そのブリッジに大柄ながら線は細く彫刻のような美丈夫がいた。その名は、エオニア・トランスバール。今回のクーデターの首謀者である。

「ふむ、シェリーよ。かの船にシヴァが居るかどうかの証拠はつかめなかったか。」

「申し訳ありません。エオニア様。」

そんな彼の横に、これまた背が高く、いわゆるできる女のような雰
囲気を醸し出している女性が答えた。

名は、シェリー・プリストル。彼女はエオニア派一の忠臣で、実質
的にエオニア軍、ひいては正統トランスバール皇国のNo.2であ
った。

「よい、余が欲しかったのは証拠。すでに状況的に9割9分であの
船にいることはわかっていたのだ。」

エオニアはそう答えると、通信のウィンドウの先にいるシェリーに
対して薄く笑いかける。

「しかしながらいくつか報告があります。ヴァルターの弟があ
の船にいます。プローブから送られたデータにありました。」

プローブは、ランファによって破壊されていたが、じつは、自動で

プローブからの情報を、保存しておくための超小型のレシーバーがもう片方のミサイルに積んでいたのだ。

バッテリーの関係で、12時間も持たないが、それでも破壊される直前までの情報は送られていたのである。

「ほう、それで奴はなんと言っていた？」

「いえ、相も変わらず黒き月のどこかにいるそうで、連絡はつきませんでした。ですが、おそらくあまり気にしないでしょ。」

「それもそうだな。」

ラクレットの兄であるカマンベールは、黒き月を初めて見た時からずっとそれに執心していた。

エオニアたちが入れないような区画にもなぜか彼は入れたのである。その禁止区画のことをカマンベールはあまり報告しなかったが。

それでも兵器工場である区画は使えたので特に気にしなかった。それに加えて、

「ねえ、お兄様、どうしてそんなに嬉しそうなの？」

「やあ、ノアか。なに私が嬉しいのはエルシオールが、私の張った網に少しずつかかっていくからだよ。」

「ふーん、そうなの。」

この少女ノアがいるからだ。

彼女は辺境を放浪していたエオニアを導き、黒き月という無人兵器工場を与えた。

外見は10歳ほどではあるが、なんとこの黒き月の管理者であるそうだ。

彼女がいれば、自分のやりたいことはほぼできるので、カマンベールとは時たま挙げてくる報告書位などでしか関係がないのだ。

もつともその報告書（間にどうでもいい話が含まれていることもあるが）がかなりの有用性のある発明なので、特に問題があるわけでもないのだが。

「そうだよ。ノア。……シェリー、すまないが引き続きエルシオールを追ってくれ。危険だと判断したら迷わず撤退してくれて構わない。」

「了解しました、それでは。」

その言葉で、シェリーの映っていたウィンドウは消えた。エオニアは、そのまま、ブリッジを後にした。

「私の野望は残すところ白き月のみ……か。」

閑話 ラクレットの一日

閑話 ラクレットの一日

ラクレットの一日の始まりは早い。

「朝……眠い。」

エルシオールの時間で午前5時には起床するのだ。
その後15分で着替えと洗顔などを済まして、展望公園に走りこみに行く。

朝の走りこみは彼が小さいころから続けている習慣だ。

クリオム星形にいたころから家の周りから、近所の駄菓子など、町中を縦横無尽で走り回っていたのだ。

2、3kmほど軽く流した後に、愛剣である求め（の形をしたレプリカ、刃はつぶしてあるが、重い（使用者の体重の10パーセントになる仕組み）ので全力で殴れば鈍器になる。）の素振りを始める。

特に決まった型はなく、というより、彼に剣の知識などはないので、本当に振っているだけである。

彼はこのように剣の素振りをするのを単純に筋トレ程度にしか考えていないのだ。

もはや、人間が軽々と片手で振り回せるような重さではないのだが……彼は気付いていない。

「む、ラクレットか、今日も無茶苦茶に振り回しているのか。」

「おはようございます、副指令。」

早朝の公園では稀に夜勤明けのレスターと遭遇することがある。

レスターは、夜勤明けにクロノドライブ時はフェンシングの型の稽古や、ランニングなどを行っている。

彼は仕官であり、体を鍛える必要はそこまで無いのだが、軍人であり生真面目なレスターは日々欠かさずトレーニングを重ねている。

余談だが、彼がいくら誘っても参加しない彼の上司は、この時間睡眠をとっている。

「身体能力は高いみたいだが、使い方がなっていないければ意味が無い。一度本格的に鍛えてみたらどうだ？」

「そうですね。力があるうと、その使い方を間違えれば傷つけてしまう。」

「?」
「ともかく、もしオレが時間があつたら、少しくらい格闘術の

手ほどきは教えることができるぞ。」

「ええ、きっと僕が覚えるのは名も無き戦闘法、敵を倒すのにたいそうな技などいらないのですから。」

微妙に食い合っていないのだが、徹夜明けのレスターはどうでも良いような細かいことには反応せずにラクレットを誘った。

タクトの分の面倒な仕事も変わりにやっていて、多忙を極める彼だが、最近是一部をラクレットが手伝っているので少しだけ緩和されたのである。

そのため時間が無いこともなかったのである。

その後自室に戻り、シャワーを浴びた後に、部屋の前で朝の点呼があるのをそれを済まし（彼の部屋は、エンジェルたちと同じ階層にあるが、少し離れている。）朝食に向かう。

朝食はまだ空いている内に食べるのが彼の日課で、点呼が終わり次第すぐに向かう。注文した日替わりの定食を食べると、歯を磨きに部屋に戻る、彼は、起きた直後と、朝食を食べてからと二回歯を磨くのだ。

「正直、世の中に虫歯ほど恐ろしい生活病は無いと思う。」

エンジェル隊や、彼の所属する戦闘機部隊は基本的に、通常の業務は無い。常に万全のコンディションでいるのが仕事のようなものだ。そのためエンジェル対の面々は思い思いの方法で暇をつぶす。彼はまず自身の戦闘機の整備に向かう。

基本的に整備班の者たちが行っているが、彼自身が、整備の後に一度システムの調整をするのだ。

それが終わると今度はシミュレータールームに向かう。

そこで彼は自身の戦闘機の設定で、いろいろな状況に対応できるように訓練を行う。

基本的にこれは現在クロノドライブ中で、敵襲の心配がないからできることで、通常空間を航行中のときはオミットされる。

一通りシミュレーターを動かした彼は、一度自室に戻りシャワーを浴びる。

昼食までに時間がある場合は、彼の持ち込んだ私物ではなく、ここで購入したギターの練習をする。彼は、オリ主たるものギターは基本という考えの下に8歳から練習を始めたのである。

しかしながら、壊滅的なまでに才能は無かった。

最近ようやく指をつらないで弦を押さえられるようになったくらいだ。

一度音楽の教師に見てもらったところ、1世紀に一人の天才だといわれたくらいである。負の方向でだが。

昼食を食べた後は、レスターからもらった書類仕事である。

彼は、基本的に暇であることが嫌いな人物だったので、何かすることはないかと聞いてみたところ、備品などの整理や、艦内のクルーの苦情などをまとめるなど、事務的な仕事を頼まれたのである。

早く終わると、その日は彼の趣味である料理や、ジグソーパズル（最近無地の500ピースをタイムトライアルでやっている。）をするのだ。

料理のほうは、家庭科でAを取れるくらいであるが、ミルフィーユがいる以上、彼の料理を誰かに振舞うことは無いであろう。

おそらく食べても評価は「普通、可もなく不可もなく」といった評価であろうから。この料理も転生してから始めた趣味であり、オリスはヒロインを餌付けできなければだめだという思考の元に始まったのである。

今のところ食べさせたい相手はいない彼であるが。まれに時間が合えば、ミルフィーユに料理を教わりに行ったりするが、彼女の腕には遠く及ばないラクレットである。

「ラクレット君は、お母さんの手伝いしてたのかな？」

「ええ、ですが母が大層な家事好きでしてあまり手伝うと泣いてしまいました。」

「そうなんだー。私はお母さんと一緒にお菓子作りとかしてたの。それを妹がおいしいって言うてくれて。それがうれしくて何度も作

つてたら何時の間にかお料理とかが好きになって。」

「妹さんですか？」

「うん、私と違ってしっかり者のいい子なの。7つも下なだけだね。」

「そうですか。きっと、かわいらしい娘なんでしょうね？」

その後は、宇宙クジラに会いに行く。

彼が順番に仲の良いクルーの名前を挙げよといわれたら、間違いなく最初にクロミエと答えるであろう。（次に梅さん、レスターと続く。）

だいぶ肉体に精神を引っ張られている彼は（おそらく後数年したら、またやってしまった〜！と後悔することになるであろうが、主に中二的な意味で）年齢がひとつしか変わらない上に、同姓？（両性具有である可能性もあり確証は持てない）であるクロミエとは仲がいい。

体を鍛えるのは好きだが、基本趣味がインドア派のラクレットと、誰がどう見ても草食系かつ、おとなしいクロミエは地味に話が合うのだ。

彼らは宇宙クジラの世話をしたり、動物達の世話をしながら、軽く雑談をするのだ。その後、一通り終えたら、動物達を眺めるヴァニラを二人で眺めながらまた雑談を続ける。

話題は主にクロミエが動物について話せば、ラクレットが古代の動物（地球にいたもの）を図鑑を読んで知ったということで話す。稀にヴァニラが二人の話をそばで聞いていることもある。かなり平和なひと時であり。ヴァニラちゃん親衛隊の人々（構成員の半数近い）はそれを遠くから見つめてただ和むのだ。

「そういえば、クロミエ。」

「なんですか？」

「宇宙クジラって、オスなのか？メスなのか？というか、そもそも生殖機能を持っているのか？」

「さあ……わかりません、聞いてみますか？」

「いや、別にいいぞ。お前が知らないなら僕が知るべきじゃないだろう。昔のクジラは、普通に子供生んで育ててたからな。」

「そうなんですか。まあ宇宙クジラは特別ですから。」

「クジラとイルカの差って、タカとワシみたいに大きさでしかないらしいよ。」

「なぜそんなにアバウトなんでしょうね？」

「さあ？」

(……大きく育ったイルカはどうなるんでしょうか？)

「……………悩んでるヴァニラちゃん……可愛すぎる」……………

夕食を食べた後はその日の気分ですることが変わる。

艦内を散歩したり、トレーニングルームで筋トレをしたり、ジグソーパズルをしたり、おおむね普通である。

家にいたころは、ゲーム(RPGなどを、とことんやりこむ)などをしていたが、ここに持ち込んだのは、求めと、最低限の生活用品加えてジグソーパズルだけなのだ。

ゲームを持ち込んでおけばよかったと心の底から公開している彼である。

最近はまっている『トランスバールの森の中』という学園育成ゲームの続きがやりたくてたまらないのである。

その後またシャワーを浴び(これで3回目)就寝する。遅くても1時には寝るのが彼である。

全く持つて、エンジェル隊のメンバーと仲良くなると豪語していた人物の行動では無い事に、全く疑問を持たないのである。
彼は、原作イベント以外にはほとんど関与しないのであった。

体が勝手に……

体が勝手に……

前回覗きに失敗したラクレットです。

あの後蘭花は僕に謝りに来ました。「いきなり物を投げて悪かった。でも、だからといって女子更衣室にいきなり飛び込むのはありえない。」だそうです。

罰として僕は、ボランティアで艦内の掃除です。

エンジェル隊の隊員たちの部屋の前を重点的に掃除だそうです。

ここは、何かおそれとかのほうと一緒に食事とかできたり、デートイベントフラグになってよかったのですが、まあ僕は狙ってやったので、これくらいは甘んじて受けなければいけないと思います。

タクトはなにもお咎めなしみたいです。

これが、主人公とその他の差なのだと僕は思いました。

クロノドライブに入っているので、シミュレーターで訓練をしてシヤワーを浴びた僕は、現在食堂にいる。最近クルーの人たちから物資が不足気味だとの不満が来てる。

実際結構危ないものもあるので、早めに補給して欲しいところだ。

「梅さん、定食ありますか？」

「ごめんね。今日はもう売り切れちゃってね。食べ物で残ってるのはこのゼリーしかないのよ。」

「ああ、やっぱりそうですか。」

「さっき、司令さんたちもここに来ててね。ちよつときすぎした雰囲気になってたみたいだけど、司令さん自ら物資の確認に行くそうだよ。」

「そうなんですか。」

あゝ、確かにそんなイベントがあった気がする。

タクトが、ミントにゼリーを手ずからに食べさせられて、（ゼリーの）甘さにもだえたり、ミルフィーがランチの最後の一皿を食べてしまつて蘭花と喧嘩になる。

みたいな感じのイベントだ。

その後、コンビ二行ったりして、食べ物探すけど無くて、最終的にミントの駄菓子を食べるみたいな感じだった。

「じゃあ、ゼリーお願いします。」

「はいよ。ラクレット君は甘いのが大丈夫だっけ？」

「ありがとうございます。ええ、それなりに。」

ゼリーを受け取つて席に着く。

今頃タクトは、女の子4人と一緒に駄菓子を食べてる頃だ。

その後艦内を練り歩いて各部署で必要なものの確認をするはずだ。一応僕のところでできているのも送っておくか。

小型端末を取り出して、タクトにファイルを添付して送る。

……よし、これで送信完了。この深刻さに気づいたタクトと、ミン

トでブラマンシュ商会に連絡を取るはずだ。

一仕事終えた僕は、ゼリーを口に運ぶ。

……うん甘い、だけど食べれないことも無い。

リリカルな世界にトリップしてもいいように、リンディ茶対策を
といった結果だ。

おいしくは無いけどね。

「ドライブアウトしました。」

「よし、直ちに周辺をスキャンしろ。」

結局、正史の通りにミントの実家であるブラマンシュ商会に連絡をして、現在ランデブーポイントについたところだ。

エンジェル隊と僕は、自分の機体に乗って待機している。

今僕が懸念しているのは、正史よりも分厚い警戒網のせいで、ブラマンシュ商会の商船団が壊滅している可能性だ。

結構な頻度でちまちま戦闘をしているし、原作にあった戦闘よりも敵の船の数は多かったのだ。

ここところは、完全に運任せだ。

僕のせいじゃないから、反省の仕様も無いしね。

「……船団を確認しましたが、無人艦隊との戦闘中のもよう。救援要請が出てます……！」

「エンジェル隊および戦闘機部隊出撃しろ！直ちに商船団の援護に入れ……！」

「……了解……！」

「了解……！」

どうやら、大丈夫みたいだね。

まだ一隻も沈んではない。でも急がないと。

そう思い僕は自分のスイッチを切り替える。頭の中が戦闘用の思考になる。戦闘用のBGMがかかるみたいないな感じだ。

「ラクレットと蘭花は先行して敵の前衛を攪乱してくれ。ミルフィはそれに追隨して、中距離から砲撃。ミント、フォルテはこちらに向かってきた敵の殲滅を。ヴァニラは敵が少なくなるまで、ミント達の近くにいてくれ。」

「司令！敵艦隊前方の一部が、このままのペースで攻撃したのならば、商船団が沈むほうがわずかに速いと計算でした！」

ふう、アルモ、それは今のままのペースでだろうに、そんなことを聞けばエンジェル隊の面々が今のままのペースというわけ無いであろうに。

「ふざけんじゃないわよ！！私の化粧品！！」

おお、速い速い、負けてられないね。

「足りない！！足りないぞ！！無人戦艦ども、お前らに足りない物、それは！情熱、思想、理念、頭脳、気品、優雅さ、勤勉さ！そして何よりもー！速さが足りない！！」

「に、二機が速度が急速に上がりました！！」

「さすが、紋章機。」

「もう何も言わん……。」

よし、ついた。僕は前方の船に狙いを定める。そしていつもどおり特攻する。

ふふ、おそいおそい。

僕が張り付いても全く反応できてない。火気管制システムが自動照準で僕をロックする前に、左右に動く。

それだけで雑魚になるし。火気管制にCPUを割いてるのか、動きは散漫だ、もっとも、紋章機に比べればもっとも遅いがな。

「おいおい、しっかり操縦しろよ CPU。堕ちちまうぞ、それじゃあ。」

鼻で笑いながら僕はそう言った。っと、これが機関室かなっと!?

「ぐああああ!!」

閃光、そして衝撃と轟音。

どうやら僕が切りつけようとした瞬間、敵の船が爆発したのだ。

「つく!! 機械風情があ!!」

幸い、若干シールドが削れただけで、問題は無いみたいだ。

どうやら、機関室を切る前に切った場所が、出火してそれが引火したらしい。

確立としては……0.2パーセントで起こり得るか。とりあえずこ

のデータはエルシオールに送信して。

「ラクレット、大丈夫か!？」

「大丈夫です。シールドが削れましたがまだいけます!! 限界だと……? まだ……まだいけるだろう! エタニティソード!」

そう、限界なんかあるはずが無い!! この後の温泉イベントのためにも

「負けられない!! 負けられないんだよ!!」

エンジェル隊全員の水着姿を見る!! 絶対に!!

「意地があるんだよ!! 男の子には!!」

その後、僕は敵の船2隻を沈め、戦闘は終了した。

それなりの戦果だったが、相手の数をこちらの数で割ると3.5で
撃墜数最下位だ。

物が絡むと、女は怖いね。

「補給船団から、通信が入った。みんなご苦労様、帰還してくれ。」

「「「「了解!!」」」」

「了解!!」」

「すごい、混み具合だ。まるで、夏と年末の……いやなんでもない。」

補給部隊の代表がエルシオールヴァイセンタとゴウシに来てしばらくした後、艦内はかなりのお祭り状態だった。
ティールラウンジではカラオケ大会が開催され（蘭花とミルフィーの歌は聴いてきた。）エレベーターホールでは品物の直売会が行われている。

そのためこのホールはものすごい人数に押しかけられているのだ。

「おい、お前。」

「はい、何か御用ですか？」

商品の棚を適当に見て回っていると、後ろから子供の声で偉そうな文句で話しかけられた。

しかしここでの僕は猫かぶり中。

クロミエ以外には敬語で話す僕は純度百パーセントの笑顔で振り向く。

するとそこに居たのは、金のかかってそうな衣装に包まれた10歳程度のお子様だった。

しかも後ろにはフォルテと、タクトが居る。おお……ということはこのガキは。

「お前はチェスができるのか？」

「まあ、嗜む程度には。」

シヴァ・トランスバールか。この艦の最重要人物で皇族のエオニアを除く唯一の生き残り。

「そうか、ならマイヤーズの都合が合わない時にやるのならばお前が相手になれ。」

「皇子、失礼ながら、司令官殿が忙しいときなど、戦闘中しかあり

ませんよ。」

「ははは、皇子の為にきちんと時間をとる模範的な司令ですから。」

ああ、シヴァ皇子が護衛であるフォルテを伴って買い物に来たところに、タクトがチェスを勧めたのか。

にしても初めて見るが、小さいな皇子。10歳児だもんな。

まあ厳密には皇子じゃなくて皇女か。顔つきも女の子っぽいし。

「マイヤーズよ、あまりクールダラスに迷惑をかけてやるな。」

「皇子、そろそろ。」

「うむ、ではまた今度。」

それだけ言つと皇子は去つていった。

あ、僕名乗ってないじゃん。まあいいか。

タクトもすでにここを後にしている。さて、商品を見る作業に戻るか。

「この辺は、音楽関連か……ん？」

僕はCDの棚（この時代DLが基本なのに、CDも売れてる。というより、まずCDで出して、それがある程度売れたらDLできるようになるというのがスタンダードなのだ。）に並んでいる商品を見ていたら少し気になる商品を見つけた。

レコード会社はここ10年ほどで急激に勢力を増したグループの傘下のものだ、特に感じるものもない。だが曲のタイトルがどこかで見たことがあるようなものばかりなのだ。

「いや、なんで……これ全部もとの世界の曲だぞ……歌ってる人は全部違うけど、メロディと歌詞が全く同じだ。」

作詞・作曲者の部分にはそれぞれ別の名前が書かれているが、これはどう見ても元の世界の関係者しか作れないだろう。特にエタールラブとか、そのへんまであるのだ。

「僕ら兄弟以外に誰かいたのか？」

僕は小型端末を取り出して全皇国星間ネットにつなぐ……ことはできなかった。

そういえば戦時だったっけ。とりあえず、ブラマンシュ社経由で一部のページには繋げたので、そこからレコード会社について調べてみた。

「えーと、……え？」

このレコード会社はチーズグループの参加の企業だったので、チーズグループについて調べてみた。

するとそのグループは、いくつかの出版社と、レコード会社、果てはアニメやゲーム会社などを傘下においていた。そこから出されているものの多くは、どこかで見たことがあるようなものだった。

前世のものを使って商売するのは、数々の二次創作では良くあることだが、あらゆる方向に手を出すというのはどうかと思った。せめてジャンルを絞れよ。

「すごい規模だな……。えーと、グループの会長は……知らないオッサンだな。」

公表されている人員を見ると、会長はどこにでも居る様なオッサンだった。経歴も普通で、ある日突然このグループを作ったらしい。読み勧めても特に変なところは見つからない。とりあえず一つページを戻す。すると、一人見覚えのある名前があるのを見つけた。

「……ああ、なるほど。」

そこにあった名前は、エメンタール・ヴァルター。うちの兄の名前だった。

どうやら心配は杞憂に終わったらしい。これはおそらく兄貴が自分で全部やると大変だから、他人に任せて自分は適当にアイデアだけ出しているであろう。

おおー、このグループ、ブラマンシュ商会などの超一流企業とため張ってるよ。

総収益額が皇国3位とか……。

「まあ、深く考えないでおこう。アニメは今売ってないみたいだし。お、このゲームはもしかいして……」

僕はそう呟くと、CDを1ダースとゲームを一本ほど、既に半分くらいいろいろ入っている自分のかごに入れて、レジに向かった。

「あ、ラクレット君。」

「桜葉少尉、お鍋ですか？その手にあるのは。」

「うん、安かったから買おうと思って。」

「そうですか、あ、レジがあいたの行きますね。」

レジに並んでいると僕のすぐ後ろにミルフィーが並んだ。どうやら料理に使う鍋を買うつもりらしい。

「おめでとつございます！！」

「「へ？」」

「その君は、ただいま500人目のお客様となりました。」

僕がレジに近づき商品を置くと突然、店員が叫びだした。後ろに居たミルフィーも驚いたみたいだ。僕も結構驚いた。

「お客様には景品として、このブラパンシュ君人形を差し上げます。」

「「「「「おめでとつございまーす」「」「」」

すると今度は、1・5mほどあるぬいぐるみらしきものが僕に渡された。
ついそれを受け取ってしまうと、周りの店員もこちらに向かって拍手し始めた。
正直こんなものじゃない。でも返せるような雰囲気ではない。

「……えーと、いりますか？桜葉少尉？」

「……うーん、いらなかな。」

「そうは言わずに、ほら、妹さんにでも。」

「リコは、ぬいぐるみより私に抱きついてくるから。」

「……そうですか。」

今思い出したけど、確かこのイベントはミルフィーがこれを手に入
れてタクトに促されて、欲しそうに見ていたミントにあげる。

見たいな感じだった。……………もしかして僕が並んだから順番がず
れたのか？

周りを見るとタクトの姿は発見できない。このイベントを放棄した
らしい、今頃別の所にも居るのであろう。

もしかしたら、蘭花と事故でキスしているイベントなのかもしれない。
い。ついでにミントは居た。ホールの入り口あたりで、何か絶望し
たような目でこちらを見ている。

……あ、ふらふらとした足取りで立ち去った。

「そうですか。じゃあ僕はこれをおいてきますので、また。」

「うん、今度また一緒にお料理作ろうね。」

そっいつて僕はミントの立ち去ったほうに向かうのであった。

途中、顔を真っ赤にした蘭花が走っていった。

蘭花がタクトとキスしたのは、ミルフィーが入ってきて、いきなり重力制御をきつたからなのに、すでに起っているとかは、気にしないことにする。

ミルフィーの移動速度とかをね。

「ブラマンシュ少尉。」

「…ああ、なんであるような胡乱な人にブラパンシュ君が……。」

おおっ、これは重症のようだ。とりあえずもう一回呼びかけてみる。

「ブラマンシュ少尉！」

「はい！？……ああ、何か御用ですか？」

僕が話しかけたのによやく気づいたのか、ミントはこっちに振り向き微笑んだ。僕たちの身長差は50cm前後というところだ。

そのため、2m離れているのにミントは正直こちらを見上げる形になっている。

上目使いは正直反則だと思う。

もし彼女がメガネをかけていて、そのメガネの隙間から覗くそれだつたらこちらは遭遇15秒で沈んでいただろう。

「あの、これなんですけど。」

「あら、それは……・随分大きいぬいぐるみですね。」

「はい、正直男の自分がこれを持っていたてもあまり意味ありませんよね？」

僕はとりあえず小脇に抱えた巨大なぬいぐるみをミントに見せた。正直ミントより大きい。まあ着ぐるみになるのだからそれくらい普通なのである。ミントはどうやらしらばっくれる様だ。

フッフ、そちらの趣味思考はすでに把握しているのですよ。

「まあ、確かにそうですわね。」

「ええ。ですからどうかこれ、引き取ってもらえませんか？」

僕のその言葉に一瞬だけミントの表情に動揺がはしった。本当に一瞬だったけど。顔と耳がピクツてなったのだ。

「……はあ、別にかまいませんが。」

「そうですか。ありがとうございます。」

良かった、これでミントの夜徘徊イベントが起こる。

これはミントのテンションが大きく上がるからね。まあ、あまりあがりすぎると、ミルフィーが攻略されなくなってしまうから気をつけないといけないけどね。

「ところで、何で私に？」

「ああ、いえなんか、似合いそうでしたから。」

僕がその問いに本当のことを言うわけに行かないので適当に答えると、また一瞬表情がピクツとなった。

「……それはどうしてですか？」

「いえ、アッシュ少尉は実際の動物のほうが好きそうでしたから。これは子供っぽいものですしね。」

あ、またビクツとなった。しかも今度は耳がずっとぴくぴくしてる。うーん、なんか痙攣しているみたいだね。

「それでは、僕はこれで。」

「……ええ、御機嫌よう。」

僕はそう言い残してこの場を後にした。

いい事した後には気分がいい。

さて、この後は温泉イベントだ。

僕は今公園に居る。とりあえずさっき買ったCDを外で聴きながらのんびりしている……という設定だ。前回の蘭花を覗いたのは功を焦って失敗してしまった。

なので今回は慎重に行きたいと思う。まず作戦はこうだ。タクトが公園に入ると、温泉のほうへ歩き出すから、それを偶然見かけたので付いて行くことにした。

という設定で行く。そうすれば、タクトの思考パターンを読んだミントと呼ばれるあたりで接触すれば、違和感なく混ざれるのだ。エンジェル隊の入浴に。これで完璧だね。

「あれ？ラクレット？何やってるのさここで。」

「いきなり崩れた！！！」

マジか！！いきなりタクトに会うとかどれだけ運無いのだ僕は。

ってあれ、タクトが温泉があるであろう場所に向かってふらふら歩いていく。

「あれ、体が勝手に……。」

おいおいおい、なんだよそれ。どこの隊長さんだよ。あれか？N I U EとE D E Nを股にかけ12股したり、エンジェル隊を私物化してマイヤーズエンジェル隊という名前に変えたり、ミルフィーが勝利のポーズきめとか言ったり、新作では実は甥の和也君が主人公に

なったりするのか？　なんだよそれ、まあ、付いて行くからいいけど。

「タクトさん、どうしたんですか？」（棒読み）

「いや、何故か体がこっちに吸い寄せられるというか「フォルテさんはどうしてそんなに胸が大きいんですか？あ、ランファも大きいよね――！」」

きた――！まだ音だけで、視界は湯気でよく見えないけれど、温泉では良くあるセリフが聞こえてきたじゃないか――！

「大きいと言っても、射撃には邪魔になるんだよ？」

「ちょっと、じろじろ見ないでよ。親父じゃないんだから」

「あの一……タクトさん。」

「しっ――！静かにしろ。」

この人、真剣なのだけ……。まあいいか、なんかみなぎってきてるのは事実だし。

大きいのは正義です。小さいのは希望です。ちょうどいいのは理想です。

「えー、でもこんな格好してるとやっぱり気になるし……。」

（こんな格好って、どんな格好だ！？）

と思ってるであろうタクトを尻目に、僕はこの瞬間もじりじりと前に進む。

「ミルフィーさん、いいですか、大きければ良いという訳ではありませんよ？大事なのはバランスです。」

おお、ミントがいい事を言った。胸に貴賤なし。つまりはそういうことだ。

「例えばフォルテさんの胸がヴァニラさんに付いていたら、不自然でしょう?。」

「……むしろ体格的にありえないと思いますが。」

いや、ロリ巨乳はありだろ常識的に考えて。あのアンバランスさにそそられない男は居ないはずだ。幼子のようなあどけない表情や仕

草が生む保護欲、しかしながらその体は暴れん坊で、わがままで言う事を聞かない大胆ボデイ。無自覚に抱きついてきたときに感じるその圧倒的存在感はギャップという太古の昔から我等が同胞を沈めて来た最終兵器を生むのである。

そう思いタクトの方を見ると、向こうもこちらを見てうなずいている。

「……あら？この思考パターンはタクトさん？それにこの不気味な違和感は……。」

「あれ、タクトさんが居るんですか？」

「え、いや、決して俺は覗きに來たわけじゃ「タクトさんも來ませんか」？「何、いいの！？」」

「はい、いいですよ。」

「別にかまわないわ。」

「そんな所に居ないでこっちに來なよ、司令官殿。」

「別に問題ありません。」

「皆さんがこうおっしゃってますし、どうぞこちらに。」

「じゃあお言葉に甘えて。」

エンジェル隊のメンバーが、許可を出したのでタクトは近づいていく。
迷う時間が全く無かった。なぜだか知らないけど、原作タクトよりスケベなようだ。

「あ、タクトさん!？」

僕はあわててタクトの後を追いかけた、今を逃すとタイミングがなくなってしまう。

「あれ、ラクレット君？」

「なによ、あんたも居たの？」

「やはりあなたでしたか。」

「おや、こんなところに何のようだい？」

「……こんにちは。」

おおー！！タクトは全裸を予想したが水着だったためにその落差で打ちひしがれている。

ふ、馬鹿な人だな。むしろ水着の方が貴重であろうに。僕は、最初から水着だとわかっていたので、落差は全く無い。しかも今回は水着目当てでここまで来たのだ。ミッションをコンプリートしたのでむしろ満足気味だ。

うお、ミルフィーは思ったより着やせするんだね。ピンク色の水着が白い肌とよくマッチしている。彼女のパーソナルカラーでもあり、髪の色でもあるのだ。ヴァニラはミントよりあるだと……。いいじゃないかそれ。フォルテと、蘭花は正直反則だ。レッドカード2枚くらいで永久追放しなければならぬくらいだ。蘭花は何よりも体つきが全体的やばい。すらっとして最低限の肉しか付いてない足、きゅっ引き絞られた腰に、聳え立つ様な存在感を与える胸。全パラメータが最低Aランクみたいなチートだ。フォルテは、胸の時点でやばい。あれは、女の武器どころの話ではない。殺戮兵器だ。圧倒的戦力差があるのにさらにダメ押しで投入されるであろう敵にとつての恐怖の象徴足りえるそれだ。そして、ミント、彼女もまたすごい。あの二十歳になっても身長が六歳児並というもはやチートを越えたそれになるであろう現在の10代の体は、手足につく肉すべ

てが無地のシルクのように、素晴らしいであろう触り心地を想像してやまない。ともかく、全員チートだ。

「いえ、タクトさんがこちらにいらしたので。何かと思って付いてきただけです。」

「そうなんだー。あ、タクトさん。どうしたんですかそんな遠い目をして？」

「いや、ミルフィー何でも無いんだ。そう、なんでも。」

そついうとタクトはふふふと笑いながら立ち去っていった。何しに来たんだろっね？

仕方が無いので僕も立ち去ることにした。次の水着イベントは半年後かね……。ちとせって何着てたんだっけ？

「やあ、マイハニー久しぶりだねえ、元気にしてたかい？」

「いやあああ~~~~、また出た~~~~!!」

「うおおお!!また会ったな!!友よ!!」

「嫌あああ~~~~!!暑苦しいのが居る!!」

現在、ヘルハウন্ズの五人と交戦中。

といっても、こいつらクラスの戦闘機乗りだと、正直倒すのはきつい。ひたすら逃げて逃げて、攻撃が鈍ったらなぶり殺しとか？相手が、撤退も考えているなら、1対1で無い限り、絶対に倒すのはムリだろう。

薔薇を加えた、ロン毛のナルシストのカミュ・O・ラフロイグに、
脳筋の熱血野郎ギネス・スタウト

この二人はそれぞれ、ミルフィーとランファに付きまといてる。

「ふふ、成り上がりの君とは、初めて会っね、ミント・ブラマンシユ。僕の名前はリセルヴァ・キアンティ。」

「私を成り上がりと呼ぶのは、伝統しかない古い貴族か、その伝統

すら失ってしまった、没落貴族だけですわよ。貴方はどちらですかね？」

「……………レッド・アイ。」

「おやおや、ずいぶん無口じゃないか？」

「へへ…………ヴァニラ・H、このベルモット・マティンが補給も修理も出来ない内に叩き潰してやるぜ」

「……………うるさい。」

中性的で、高いプライドと野心を持つ自称名門貴族のリゼルヴァ・キアンステイはミントに

無口で語らない合理主義者のレッド・アイはフォルテに

チビでぐるぐる眼鏡のメカニックベルモット・マティンはヴァニラに

それぞれ付きまとう。基本的にこの戦闘は、チームワークで勝るエンジェル隊が、各個撃破していくのが、有効で、事実彼女たちならそう思うと思う。

「エンジェル隊の皆、ここは一機ずつ落としていけばいい。ラクレット、君はエルシオールの護衛を頼む。」

「了解！！！！！！」

「了解！」

まあ、僕はまだチームワークをくんで動くことが出来ないからコレは仕方ないかな。

戦闘はわずか8分ほどで終わり、ヘル・ハウズ隊は撤退して行った。

エンジェル隊が勝利を分かち合うのを僕は、黙って通信越しに見ていた。

戦闘宙域から少し離れた宙域に、一隻の戦艦があつた。その艦

バレル級戦艦バージン・オーク　は、エオニア軍……正統トランスバール皇国軍のものであり、ブリッジには一人の美しい女性が搭乗していた。

彼女の頬には傷があるが、その傷でさえも彼女の美しさに入るように見える。そんな彼女の名はシェリー。シェリー・プリストル。エオニアが最も信頼している人物であり。名実ともにエオニアの一番の部下である。

彼女は現在、エオニアと通信をしていた。

「エオニア様、ヘルハンズ隊が撃破され帰還してきました。」

「ふむ、そうか。所詮は傭兵集団、エンジェル隊と戦闘行動が出来るところは評価すべきだが、それだけだ。気にしなくとも良い。それよりも手筈通りに動けるか？」

シェリーは、自分の一応は部下である、ヘルハウズ隊の失敗を報告したが、エオニアは特に気にした様子がない。なぜなら彼には、この後にある作戦を計画しており、それこそが本命であるからだ。最もその本命すらも、計画の一部であるのだが。

「はい、こちらの準備は抜きなく整えております。ヘルハウズ隊の出撃は出来ませんが、それでも十分以上の戦力を所持しています。」

「そうか。」

「はい。」

ここで二人の会話は途切れた。しかしながら、エオニアは少し観察するようにシェリーを見つめていた。シェリーは自分の主である、彼の行動に少しの疑問を感じつつも、何かあるのかもしれないと思い、エオニアの顔を通信越しに見る。その二人の様子を、エオニアの艦に乗っている、通信士はこう語った。

「あの二人、無言で30秒も見詰め合われると、ブリッジの空気が微妙になるのを理解して欲しいですね。」と。

「シェリー……。」

「はい。なんでしょうか?」

「……きちんと睡眠をとっているのか？少々顔色が悪いぞ？」

「……エ、エオニア様？突然いかなされましたが？」

エオニアがしばらくシェリーを見詰めた後に口にした言葉は、少なくともシェリーの冷静な表情を崩すには十分な内容であった。まさか、主君が自分の顔を見て隊長の心配をしていたなどとは、彼女には全く予想もつかないものであったのだ。

そして、先ほどまでの真剣な表情で自分を見つめていたのは、自分を観察するためだったのだとわかると、急になぜだか解らないが、恥ずかしさがこみ上げてきたのである。

「いや、ヴァルターがお前は無理する時にはとことんするからたまに気を使ってやらぬと、倒れそうだといっていたのでな。」

「……そうでしたか。」

「ああ、それに余としてもお前に倒れられると困るのでな。…それではシェリー、健闘を祈るぞ。」

それだけ言ってエオニアは通信を切った。ブリッジに一人佇むシェ

リーは言い逃げはするいと心中で思いつつ、カマンベールに対して、感謝すべきなのか、怒るきなのかを考えるのであった。

彼女の胸の中にあるもやもやについては特に考えようとせず。

これが僕らの全力全開 前半

これが僕らの全力全開 前半

……さて来ましたよ。最難関の戦闘といわれているミッションがある章に。

僕ラクレットは現在精神統一中です。

今回の戦闘ばかりは本当にかなりきつくなと思う。
初回プレイの時には4回以上やり直したから。

ただ今回は、一回のミスも許されないんだ。やるしかない。

その日、エルシオールは久しぶりの吉報に沸いていた。味方からの連絡が入ったのだ。

合流ポイントが明記されていたそれは、エルシオールスタッフの顔を綻ばせるに値するものであった。

しかし、艦長であり司令でもあるタクトは、自分の直感が何かあると告げていたため手放しに喜べないでいた。

同じく彼の副官のレスターも相棒の直感が良く当たるのを今までの経験で知っていたので、同じく警戒をしていた。

現在はクロノドライブで、指定された合流ポイントに向かっているところだ。

もうすぐクロノドライブが終了するということであり、30分ほど前に警戒態勢をしいてエンジェル隊の面々とラクレットに待機命令を出したところである。

「で、だ。タクト実際のところ襲撃はあると思うのか？」

「ああ、俺の勘だと十中八九あるって言ってる。」

「そうか……。アルモ、ドライブアウトまで後どれくらいだ？」

「…150秒です。」

レスターはタクトに最終確認をした後に、いつもよりも険しい顔付きでアルモに尋ねた。

アルモはその問いに対して一瞬だけウィンドウに視線を送った後に飽く迄事務的に答えた。

「…レスター。」

「……なんだ？」

「……なんでもない。」

「…そうか。」

「ドライブアウトまであと10秒」

アルモのカウントダウンを聞いて二人は、さらに体を身構える。

カウントが読み上げられていく中、二人は前方のスクリーンに意識を集中した。

「1、0。ドライブアウト。周辺の宙域をスキャンします。」

「……スキャン完了！周辺にガスを確認しました！戦闘が行われていた形跡があります！」

「なっ！！……いや、ココは良く皇国軍の訓練に使われる場所だ。まだ決まったわけではない。」

「……アルモ、正面前方のポイントをサーチしてくれないか？」

「了解しました。」

タクトと、レスターはひとまず、出た瞬間に狙われることがないと安堵し、溜息をついた。

しかしいまだに警戒を緩めてよい状況ではないことは二人とも重々承知していた。

古来より、味方と合流するなどによって気が緩んでいる時が一番危険であるからだ。

しかしながら、彼らの緊張は一本の通信によって、壊されることになる。

それも、味方からのものによって。

ラクレットですが、通信内の空気が最悪です。

要約すると、エンジェル隊が、襲撃来ないなら早く解散にして欲しい、それぞれに用事があるから。

と、文句をつけたからだ。

にしても、眠いとか、パンが発酵しちゃうなどの理由で、上官に戦闘態勢を解除しろというのはどうなんだろう？

ココだけ疑問なんだよね。特にミルフィーなんて、士官学校的主席なのに。

「しつかりしてくれよ、みんな」

ああ、タクトそんな言い方したら……皆が反発するよ。

一応この後すぐに襲撃があつてやっぱり彼が正しかった、みたいになるからいいけど。

さすがに好感度が下がるようなイベントをそのままにしとくのはとも思う。

だから……

「そうですよ、みなさんは職業軍人ですから、きちんと即応体制をとるべきでしょう。それにヴァニラさんを除いては僕より年上なので、模範となるような行動をしていただきたいものです。十中八九敵の襲撃はありとみて間違いないのですから。」

タクトに加勢しておこう。

「えー、私はちゃんとやってるもん。」

「そうよ、私だって、この通り待機しているじゃない!」

「模範となる行動と仰りましたが、それは私達の普段の行動が模範ではないと?」

「なんだいなんだい、二人ともこちら真面目にやってるのに、その言い方はないだろう」

「……。」

あれ？なんか余計怒った？うーん、まあ、いいが、アルモのサーチももう終わるみたいだし。

「司令！！前方より敵艦隊が！」

「つく！エンジェル隊！！出動してくれ！！」

ほら、予想通り、確か乗ってるのはシェリーだっけ？ここでの戦闘は飽く迄ブラフみたいなもので、ココからいける、クロノドライブ先に敵の本陣が待ち構えているとかそういう話だったはずだ。

「……」
「了解！！」
「……」

「了解！！」
「」

「司令、敵艦からの通信です。」

「スクリーンに出してくれ。」

タクトがそう言うと、スクリーンに出てきたのは、シェリーであった。

5年前にエオニアと兄さんと一緒に写っていた時の顔とほとんど変わりが無い。

そういえばこの人って、シャトヤーンと同じで年齢がわからない数少ない女性キャラの一人だった気がする。

「こちら、正統トランスバール皇国、シェリー・プリストル。エルシオールクルーの皆さん、御機嫌よう。」

「艦長、タクト・マイヤーズだ。いやいや、エオニア軍にも貴方の様な美しい女性がいたとは。」

「あら、ありがとう。それで、こちらの用件はわかってるわね？ シ
ヴァ皇子を渡しなさい。」

「だつてさ、レスター」

「俺に、振るな！！そして断れ！！」

「だそうです。残念ながら、いくら美人のお願いとはいえ、聞けま
せん。」

おお、ナチュラルに漫才をやつてるよ。

タクトはこういう通信で、相手を挑発する心理戦に強いんだよね。
にしても、この一連のやり取りの間ずっと表情を変えないシェリー
スゲー、立絵がないとか、そういう理由じゃないわけだから、本当
にタクトに対して全く興味がないのかな？

「それじゃあ、力ずくでお願いするしかないわね。」

「オレとしては、宇宙空間での戦闘^{デート}よりもむしろ、豪華なディナー
を綺麗な夜景を見ながら食べるほうがいいんだけどね」

「そんな余裕も、ここで終わりよ。それじゃあ、次の通信は降伏宣

言かしらね？」

その言葉を最後に、通信が切られた。うーん、こっちには全く興味はなさそうだね。

なんというか、エオニア一筋？

「通信切れました。」

「よし、コレより作戦を説明する。タクトいいな。」

「ああ、皆！頼んだぞ！」

「「「「了解。「「「「」

「了解。」

さて、頑張りますか。

「何とかしのぎきったか……。アルモ損害報告を頼む。」

「了解しました。」

何とか、シェリーの率いる敵戦艦を退けつつ、クロノドライブのポ

イントまでついたのはいいけど。

この後、ドライブアウトした時に挟み撃ちで、今迄で最多の戦艦を相手にしなければいけない。

タクトはそれが十中八九来るといって考えで行動をしているはずだ。

僕もさっきの戦闘で疲れているから、なるべく休む感じで行動しよう。

そう思って、ティーラウンジに行ってホットチョコレートを飲んでいたんだが。

エンジェル隊が……来ない。

うーん、なんか、前々から思ってただけで、僕エンジェル隊との接点薄い気がする。

戦闘の時と、ミルフィーに料理を教わる時。主にその二つでしか会わない。

なんか食事は時間が違うみたいだし。たまにティーラウンジに、行くと居るけど。近づいても挨拶して終わりだし。

まあ、気にしてもしょうがないか。

とか、考えてると、ランファが来た。なにやらキョロキョロしている。

そして、こっちに気付くと、近寄ってきた。

「ねえ、タクト知らない？」

「いえ、見てませんが……。タクトさんに何か用ですか？ フランボワーズ少尉」

「あ、いや、知らないならいいのよ。それじゃあ。」

そして、去っていった。

あまりの自然な身のこなしに、全く反応できなかった。

僕は、少し冷めてしまった、ホットチョコレートを一気に飲んで、そろそろあると思う、イベントを見にクジラルームに向かうのであった。

しかし、クジラルームが閉まっ
ていて、ショックを受けたのは余談
だ。

そつえば、誰もいないから平気だ
って、言っていたね。

Interlude

「わかったよ、フォルテ。ありがとう。」

タクトは、フォルテにそう言って、クジラルームを後にした。

彼の心の中は、まだ完全に不安が消えたわけでは無い、しかしながら、先ほどまでフォルテと背中合わせに座って、語り合っていたタクトは、クジラルームに入る前のような、思いつめた顔はしていなかった。

「敵の策略とか、奇襲とか色々あるけれど、司令官のオレがきちんとなしないと。皆も支えてくれてるんだから。」

彼は、基本的には、かなり前向きな人間だ。

しかしながら、想定している以上の困難な状況に陥るといきなりネガティブになってしまう傾向がある。

あと数年すればそのようなことも無くなり、海千山千と呼ぶに相応しい司令官になるのだが。閑話休題。

そして、その、やや後ろ向きになってしまった彼は、毎回仲間に支えられて再び前を向いて進みだしてきたのだ。

そして、きっと今回ののは、その始まりなのであろう。

「あ……………タクト。」

「あれ？ランファ？」

そんな、フォルテによって、幾分が気分が軽くなったタクトが早速後のことを皆に伝える為にブリッジに向かう途中、ランファに出会った。

彼女の様子は、どこか、何かにたしてためらってる感じであり、何時もの彼女らしさというものがみえない。

「あのね…………タクト。」

「なんだい？」

「……………うつん、なんでもない。」

ランファは何かを言いかけたかが、タクトの顔を見て、言葉を濁した。

二人の間に微妙な沈黙が流れる。周囲に人もいないし、時計も無い

ので、ほぼ無音だ。

そんな中、タクトは、ふとなにかに気付いたような表情をする。

「もしかして、励ましに来てくれたのかい？」

「っな!!」

「ハハ、まさかね、でもありがとうランファ、オレはもう大丈夫だから。」

タクトは、ランファの顔を見ながら何時ものように笑ってそう言った。

「これから、通信で言うつもりだったけど先に言つと、これから皆に待機してもらう。何がきても大丈夫な用にね。」

「つまり、敵がいると、タクトは考えているのね？」

「うん、だけど、ランファ達を信じてるから。」

「な……当たり前じゃないの！私に任せておけば大丈夫よ！」

「はは、本当に頼りにしてるよ。それじゃあ。」

それだけ言うと、タクトは右手を肩越しに上げて去っていった。

その場に残されたランファは、タクトの後姿をやや呆然と見送っていたのであった。

「……………ウチの司令官も困った女たらしだね。」

そう、呟きながらフォルテは、ランファを通路の影から見つめていたのであった。

これが僕らの全力全開 後編

「余の名はエオニア・トランスバール」

「おや、総大将さんのお出ましかな？」

ドライブアウトした後、いきなりエオニアからの通信が入った。

ブリッジの人達は騒然としている、まあ当然かな、いきなり敵のトップが出てきたんだ。

僕は適当にそれを『エタニティーソード』から眺めていた。

にしても、兄貴どうしてるかな？喧嘩ばっかしてた様な気もするけど、なんだかんだで僕の『エタニティーソード』弄ってくれてたしな。

そんなくだらない思考を続けているうちに通信はどんどんヒートア

ツプしていた。

さらに、後ろから追ってきた艦隊も到着したみたいだ。なんか、シヴァを渡せとか、断るとか。そんな感じの。

いきなり、こっちの警護対象を渡せとか言われても断るのは当たり前だよな。

まあ、向こうも断られて当然見たいな感じな反応だけど。余裕たっぷり。みたいな？

「まあ、今断ろうと結局のところ変わるのは死ぬ人数だけだ。それもこの逆賊を打つ戦争では誤差でしかないがな。」

「たいした自信をお持ちですね、皇子。」

「貴様もな。……ふむ、その少年か？…確かに面影があるな。」

あれ、なんかいきなり僕のほうに視線を向けてきたぞこの人は。いきなりそんなこと言わないで欲しいのだが。

「ではな、タクト・マイヤーズ。次に会うときにも同じ口が利けると良いがな。」

「通信切れしました。旗艦、撤退していきます。」

アルモが通信が切れたことを報告している。レスターはとりあえずこの宙域の情報処理をさせるために忙しそうに指示を出していたが、タクトはこっちを見ている。疑っているのかな？ここは一応言っておくか。

「エオニア……あれが僕達の敵ですか。」

「……そうだね。」

「まあ、敵がわかってと僕にできることなんてせいぜい敵の船を沈めることぐらいですね。」

「そうか。」

「それじゃあ、作戦を説明するよ。」

そう言つて、タクトはウィンドウを投影する。

そこにはこの辺の宙域の、詳細な地図が書かれていて、1秒後に敵艦の配置が表示される。すごい数だ、紋章機を戦艦2隻分の戦力としても戦力比が……これはひどい。

「とりあえず、今回の戦闘で、敵の全滅をさせるのは、難しい。そこで、最速でクロノドライブ可能なポイントまで移動する。アルモ、航路のデータを出してくれ。」

「了解。……あれ？」

「どうした？」

「いえ、変な重力反応があるみたいなんですが……。」

「規模は？」

「すごく微弱なものです。」

重力反応？そんなのあったっけ？

僕が、原作知識を思い出そうとしている間に、レスターが急かしたみたいで、話が先に進んでいた。

にしても、原作知識ノートとか作っておくべきだったかな？なぜか、作る気がしなかったから作らなかったけど。

細かい話は案外忘れてるかもしれない。

「このポイントに行く事を作戦目標とする。」

「上下からはさまれているが、エルシオール後方の艦隊の方が若干弱いために、そちらから回り込む。」

現在のエルシオールは、タクトの言うとおり、前後を敵艦隊に、左右を小惑星帯に挟まれている。

目標の地点は、エルシオールの右前方だけど、右の小惑星体に沿って目指すみたいだ。

「紋章機の部隊は二つに分けて、片方が、進行ルートを作るために後方に、もう片方が、時間稼ぎのために前方のやや狭くなっている部分で戦ってもらう。」

「前方の部隊は、フォルテと、ラクレットに、後方の殲滅は、ミルフィー、ランファ、ミント、ヴァニラに頼む。」

「敵を倒すことを優先するな！エルシオールの被害を最小限にするように心がけてくれ。」

「『了解。』」

「了解。」

僕の『エタニティーソード』はこういう時の時間稼ぎにはちょうどいい。

それにフォルテの『ハッピートリガー』は攻撃力防御力ともに高い。少数で攻めるならば、この二機の編成は最適だと思う。

そして、ミントの『トリックマスター』、ミルフィーの『ラッキースター』、ランファの『カンフーファイター』、ヴァニラの『ハーベスター』はそれぞれ

遠距離、中距離、近距離、回復と、バランスが取れていて、進行方向の敵を倒すのには向いているであろう。

きっと、ドライブアウト先の地図を見ながら、いろいろなケースを想定した上で、レスターとタクトが二人で考えたのであろう。隙がなく、この状況ではベストな作戦だと思う。

そして、僕は頭を戦闘用に切り替える。

さあ、ショータイムの始まりだ。

「作戦通りに行くよ、私達は時間稼ぎだ。後から追いかけるから、先に行つてぶつた切つてやりな！」

「了解！！移動形態に変更……『エタニティーソード』行きます！！」

僕のその言葉に、いきなり最高速度まで加速する。Gキャンセラーがあるからこそ、出来ることだ。

敵の、高速突撃艦の中でも、戦闘にいる奴に狙いを定める。この戦闘では、敵戦闘機がいないために、僕も全力で戦える。

敵との距離が、ぐんぐんと縮まっていく。

まだ、移動形態のままだ。今戦闘形態にしたら、敵のレーザーに捕捉されてしまうからだ。

直線に飛んでる今はそうするしかないのだ。

「今だ！！戦闘形態に移行！！」

僕がそう言つと、両翼が左右にスライドして、腕の形になる。その過程で速度が落ちるが、気にせずにレバーを握り敵の右下に回り込む。

そのまま勢いを殺さずに、真後ろに回りこんで急旋回。

敵の後方から、敵上部を切りつけつつ、もう一度前方に向かう。

攻撃が当たったことを確認しつつ、再び急旋回、今度は右にいるミサイル艦だ。比較的小さくて狙いがつけにくいが、それでも……

「太刀浴びせる分には、問題ないんだよ！！」

エタニティソードに、敵のシールドが今の攻撃で30パーセントほど削れたことが表示されるが、それよりも重要なのは、敵の狙いの優先度を僕に向ける事だ。

一撃浴びせて、次の敵へを繰り返さなければ。

「それが……僕の……役割だからあ！！！！」

そのまま、敵巡洋艦の密集しているやや後方に、向かう、途中後ろから、ミサイルによる攻撃を受けるが、今は気にしたいられない。まだ、シールドは8割以上ある。敵しか攻撃できない距離が長いから、一々気を使つてたら、ずっと補給に行き続けなければ行けなくなる。

敵の駆逐艦5隻が綺麗に陣形を組んだままこちらに向かってくる。

僕はいきなり『エタニティソード』を急上昇させると、ミサイルと、レーザーが機体下方を通過する。

ミサイルがそのまま進まず、後ろで反転するのをレーダーで捕らえた。

敵との距離が1500を切ったので、急降下して、上から強襲を仕掛ける。

左右の剣に供給するエネルギーを最大にして、そのまま、敵に叩き付けるようにぶつける。

「こちら、『ハッピートリガー』。コレより攻撃に移る。行くよ！」

フォルテが、交戦可能域に到達したみたいだ。

ちょうど僕のほうを向いてるミサイル艦と、突撃艦を後方より攻撃する。大量の重火器による攻撃で、ミサイル艦は、沈んだが、突撃艦はかるうじて耐え切ったみたいだ。

内部のエアーに引火して爆発する、ということが無人艦故に無いか

らか？

「シュートーレン中尉！！敵の巡洋艦が近寄ってきましたので、そこに向かいます。」

「わかった、タクト！！」

「ああ！！フォルテは、そのちょうど狭くなっている宙域で足止めを続けてくれ、それ以外は基本的にそちらに任せるよ。」

「ずいぶん、信頼してるじゃないか？」

「当たり前だろ？エンジェル隊のリーダーは、銀河最強の部隊のリーダーなんだぜ？」

「解ってるじゃないか！！」

巡洋艦の攻撃を、出来るだけ回避しながら近寄っていると、『H・A・L・Oシステム』とのシンクロ率が、MAXに成った。僕の飛んだ軌跡に羽が流れる。

そのまま、並んでいる巡洋艦にめがけて僕は突撃する。

両手の剣を一つに合わせる。そんな音はしないけど、カチリという音がしたのを感じた。そして、エネルギー部分の大きさが、先ほどとは比較にならないほど大きくなる。

片手だけの状態で、10メートルほどの実剣の先に40メートルほどのエネルギー剣があったけど、あわせると、100メートル近くまで伸びる。

実は、この特殊兵装は、何回も発動してるわけじゃない、でもごく……

「馴染むんだよ!!……行くぞ……コレが僕の全力全壊!!コネクトドゥ……ウィル!!」

僕の剣がそのまま、敵を一刀両断にし、そのまま、次の艦に突撃して、真横に切りつける。

すると、剣に供給されるエネルギー減少して元の大きさに戻った。僕はすかさず剣を二つに戻して、回避行動を取りつつその場から移動する。

「くそ!空が狭い!」

「焦るんじゃないよ!!私達はただ、敵をここに引き付ければ良いだけさ。足の速い艦を優先的につぶしな!」

「了解!!」

フォルテからの指示を受けて、今度は、ミサイル艦の残りを破壊しに行く。

「もっと速く!! 僕より速いものは存在しないんだから!!」

飛来するミサイルなど、完全に無視してそのまま僕は飛び続ける。

レーザーは常に僕の後ろ通過している。
あっという間に、攻撃可能範囲に到達。

「機械風情には、もったいない墓場だろ!!」

そのまま、再びすれ違いざまに一閃する。
今度は、一撃で沈めることに成功したみたいだ。

だけど、『エタニテイスード』のシールドが残り38%に、エネルギーが47%になってしまった。
タクトからの指示はまだ無い、

「ここは、踏ん張り所だな……いいだろう、我が漆黒の剣 エタニテイスードの力を見るがいい、そして、恐れ戦くのだ!!」

「……………敵に眼は無いよ。ラクレット。」

その後僕は、戦闘宙域を飛び回り、エルシオールが後方の敵をある程度振り切るまで、時間稼ぎを続けたのであった。

『ハッピートリガー』の方が、足が遅いために先に離脱していたので、結構な集中砲火を受けてしまい、シールドギリギリになって、ようやくたどり着いたのであった。

「補給お願いします。あと、修理も!!」

現在、戦闘は激化し、エンジェル隊の紋章機と『エタニティーソード』は『エルシオール』を護衛しつつ、移動中……逃走中だ。

この状況だと、射程に優れる『トリックマスター』を中心に、ひたすら、補給と回復をしつつ、進んでいる。

ゲームみたいに一瞬で、補給が出来る訳ではないのだが、さすがに6人で固まっていれば、それなりにもつ……。

と思っていたけど。

「クソ！敵が減らない……どうするタクト、このままじゃまずいぞ。」

状況はそんなによくない。戦闘中の応急処置では直せないような、ダメージが増えてきているのだ。

現に、『トリックマスター』のフライヤーは、微妙に連動して動くタイミングがずれてきている。

『ハーベスター』のナノマシンも今ある分を使い切ってしまうえば、次の補給までの時間まで、回復無しでもたせなければいけなくなる。

でも

「信じるんだ、レスター。」

タクトはまだ諦めていない。

僕みたいに、この後味方の艦隊が増援に来る可能性が高いということを知っている訳でもないのに、笑いながら指揮を続けている。

「どうしてそんなことが言えるんだ!？」

「だって、この艦はシヴァ皇子を乗せているんだぜ？ 味方の艦隊がいるのならば、きっと俺達を探している。さっきから、アルモに指示して救難信号を出力全開にさせたのはレスターだろ？」

「それはそうだ、現状エルシオールは完全に敵に補足されてしまっている、この状況では隠密行動を優先するよりも味方の増援にかけた方が良い。」

「そう、士官学校主席のレスターがそう考えている。オレはその味方が合流するまで指揮をすればいい。そして、俺が指揮しているのはエンジェル隊だ。」

そついう会話をしながらも、タクトは指揮をしているみたいだ。僕は指示されたポイントの敵に特殊兵装を使うために進路を変更する。

目標は敵の母艦。シエリーが乗っているのとは別の見ただけだ。

「これで、無理なら皇国は滅んでしまうかもしれない。でも俺は皆を信じている。エンジェル隊にブリッジクルーはもちろん。このエルシオールに乗るすべての人を。」

よし、正面に補足、特殊兵装を発動、両手の剣を一つに……つてくそ！！加速しやがった。

「だから、きつと大丈夫さ。そつだろミルフィー？」

「はい！タクトさんがいうなら、きつと。」

「ちょっとタクト！！アタシは信じてないわけ！？」

「そつですわ。私達だって、必死に動いてますわ」

「そうそう、敵を落とした数なら、アタシのほづが多いはずさ。」

「私もナノマシンで治療してます。」

「捕らえた！！くたばれっ！！コネクティドゥウィル！！」

「「「「「「.....。」「」「」「」」

ふう、沈んだ。いやーなかなか強敵だったぜ。
ってあれ？

「あのー.....皆さんどうかしましたか？」

なんか、皆が微妙な目でこっちを見てる。

「いや、なんでもないよ.....。ともかく、皆もう一頑張りだ。頼んだぞー！！」

「「「「「了解！！」「」「」「」

「了解！！」

僕が、そう返事して、再び敵に意識を集中させようとしたら、突然敵の一部が爆発した。

「司令！！敵艦隊の一部に致命的なダメージ、今の攻撃で敵の2割が戦闘不能に！！」

「決意を新たにしているところ悪いが……援軍の到着じゃ。どうやら間に合ったようじゃな。」

「ルフト先生（将軍）！！」

どうやら、味方の援軍が間に合ってくれたらしい。よかった。一安心だぜ。

「エンジェル隊の皆、お疲れ様、帰艦してくれ。」

「ラクレットももう戻ってかまわないぞ。今日は書類の整理はいいから、ゆっくり休んでくれ。」

「……了解！！」

「了解……ありがとうございます。レスターさん。」

ああ、今日は、ぐっすり寝よう。疲れたよ。

タクトは戦闘が終了し、後の細かい作業や、合流艦隊との調整をレスターに任せて、エンジェル隊とラクレットをねぎらった後、自室である司令官室にいた。

レスターには、仮眠をとると言ってきたが、彼は今珍しく自分のデスクについていた。

「うーん、いままで疑ってきたけど、今日の通信を含めると……。」

彼の目の前に表示されているウィンドウには、この前ブラマンシュ商会が補給に来たときに、調べた情報でラクレットについてのことが書いてあった。

「個人の情報はさすがになかったけど、モツツアレラ・ヴァルター……彼の話どおりクリオム星系の第11惑星の総督の名前だ。」

と言っても、どちらかと言えばそれは表面的なものばかりであった。クリオム星系の本星データベースか、皇国本星のデータベースに繋げるのならそれなりにそろったであろうが。

「彼が、仮にエオニアのスパイならば、絶対にあの場面で話しかけられるということは無かったはず。」

「加えて、彼の言動は正直工作員のそれじゃない。今日の戦闘だって、集中しすぎて会話を聞いてなかったくらいだ。」

「でも、オレの勘は彼が何かを隠している、って言ってる。しかもすごく重要なことのような気がする……。」

一人でぶつぶつ呟きながら、タクトは思考を深める。顔は何時もやりやや真面目な相貌であり、普段のにやけた面影は見受けられない。しばらくそれを続けた後、彼の中で結論が出たのか立ち上がり、一枚のドアで隔てられた、私室に向けて歩を進めた。

「いいさ、オレが見極めればいいだけだ。エンジェル隊を信じるって決めたんだ、彼だって、信じて見せるさ、何にも無いのなら。」

彼の表情は、先ほどフォルテと会話した時のそれよりもさらに清々しいものであった。

決意を固めた彼は、レスターに任せて限界まで何時間寝れるかを計算しつつ仮眠を取るのであった。

Dr・ケーラに聞いてみて 前編

Dr・ケーラに聞いてみて 前編

花見……なんて素晴らしいイベントであろう。
皆で仲良く騒ぎながら、おいしい食事を食べる。

そして、酒を飲む。

まだ酒を飲んだことのない僕にはわからないけれど。

まあ、大人は集まって酒が飲めれば何でも楽しいような気がするけども。

だけどもあ、花粉症は嫌だな。

「敵艦隊に先制攻撃ですか？」

「うん、どうにもこの第3方面軍のお偉いさんが、敵がナドラ星系にいるから、戦力が集まっている今の内に潰しちゃおう。だって。」

タクトがそう話すのをエンジェル隊と一緒にティールラウンジで聞く。

現在は午後3時、お茶の時間だ。

ついさっきまで、ミルフィーに料理というかお菓子作りを習っていた僕はなし崩し的にこのお茶会に参加することになった。

ミルフィーが作ったお菓子と、僕の作ったお菓子を食べ比べと言えば聞こえは良いが、要は僕が晒されている訳だ。

もともと、ミルフィーがお菓子を持ってきて、注文した紅茶が来たところでタクトが来たから、まだ食べ始めていないけどね。

ちなみに作ったのはシュークリームだ。一応、失敗はしなかったけどね。自分で食べる分には文句無い出来だ。

話がそれた。タクトがここに来たのは、恐らくつい先ほど決まったであろう次の戦闘についてだ。

ジグルト・ジードマイヤ　僕がギャラクシーエンジェルで唯一嫌いなキャラであり、なんというか、ステレオタイプの無能な軍人という雰囲気を持つキャラだった。

今回の戦闘を決めたキャラでもある。

今回の先制攻撃の作戦が成功したから、調子に乗って勝った気でその後の対応をおざなりにしたのだ。

そのせいで、いやそれが直接の原因ではないけれど、衛星都市ファ―ゴをエオニアに攻撃されて、数億人の人間が死んでしまったのだ。

「まあ、何時もどおりやってくれば良さを。君達は今まで頑張ってきてくれた。お偉いさんもきつとそれを理解しているだろうしね。」

「そうですね。私達はせいぜい何時ものように戦うだけですわ。」

「そういうとき。任せなタクト。」

そういえば、いつの間にかフォルテが、タクトの事を司令官殿ではなくタクトと呼ぶようになっていた。

戦闘の後の通信でそんな会話をしたはずらしいけど。満身創痍だった僕は聞く余裕が持てなかった。

一応それなりに体力をつけるように訓練をしているつもりなんだけどね。

「よし、それじゃあ難しい話は終了だ。皆でミルフィーの作ったお菓子でも食べながらお茶でもしようじゃないか。」

「あ……タクトさんそれは私じゃなくて……。」

ミルフィーが何かを言う前に、タクトは僕が作ったシュークリームを口にしてしまった。

いや、別に何か危険性があるわけでもないから良いのだけどね。

「……………あれ？なんというか……………うーん。」

そして、黙り込むとか……結構失礼だねタクトは。
他の面々も、タクトが手を伸ばしたタイミングで、僕が作ったのを
先に食べようとする。

ふむふむ、つまりはミルフィーので口直しをするつもりだね。

「……まずは無いけど。どうしたの、これ？」

「いつものミルフィーさんらしくありませんよ？」

「うん、どうしたんだいミルフィー、調子が悪いのかい？」

「体調が優れないようでしたら、ケーラ先生の所へ行っただ方が良い
と思います。」

もう、なんだろうコレは、きっとミルフィーのお菓子の腕を知って

いる皆が純粹に心配しただけなんだろう。

ミルフィーのお菓子はおいしいのか、作る途中で大失敗するかのどちらかだからね。

うん、わかるんだ、理屈では。まずいつて言った人はいないんだし、むしろ喜ぶべきであろう何だ。
普段からミルフィーも言ってくれてるじゃないか、下ごしらえとかの手際のよさはすごいって。

「あはは……あのねみんな、それは私が作ったやつじゃないの、その右にあるのが私が作ったやつで、皆が食べたのはラクレット君が作ったやつだよ。」

「……………」

「すみません皆さん。お口に合わないようなものを作ってしまったて、本当に申し訳ございませんでした。それでは、僕はこれから、紋章機の調整がありますのでどうぞごゆっくりと、お口直しに、大変美

味しい桜葉少尉のシュークリームでも食べて御寛ぎください。」

だからね、泣いてなんかない、だって、男の子だもの。
僕はそのまま、振り返らずに、駆け足でティールウンジを後にした。

「全くもう、みんなひどいよ。ラクレット君頑張って作ってたのに。」

「いや、うん、ごめんよ、ミルフィー。悪気は無かったんだ。ただ何時もの比べたらあんまり美味しくなかったなと思って。」

「私じゃなくて、ラクレット君に謝ってください。あ！ランファ私の作ったの勝手に食べちゃだめだよ。」

「えー、だって、あいつだって言ってたじゃない、お口直しをしてくださいって。」

「ま、まああいつのも悪くは無かったけど、やっぱり私達にはミルフィーのがあってるんだよ。」

「ええ、ミルフィーさんの作ったお菓子は、一流のパティシエに匹敵……いえ凌駕しますもの。」

「本当！？　ありがとう、ミント」

（皆さん、結局スルーしてます。…………でもミルフィーさんのシークリームの方が、美味しい。）

そのまま、駆け足で格納に到着。
とりあえず、軽く他の人の紋章機を眺めつつ、奥のほうのシャトル
乗り場のほうに向かう。

直接繋がっているわけではないので、少し距離がある。

自分の愛機のもとへたどり着いて、ハッチを開いて乗り込む。

僕の機体は、シャトル置き場に止めてあるのだ。

シャトルとかよりずっと小さいけどね。

というか、紋章機よりも小さいし。

「この後は、ミルフィーがカフカフの木が咲いていることを見つけて、お花見をするだったな。」

このお花見で、タクトとミルフィー以外のクルー全員が花粉症にかかってしまい。

ナノマシンに治療を受けるために、医務室は長蛇の列で、ヴァニラは休み無しで働き、倒れてしまう。

なぜなら、ヴァニラが一生懸命エルシオールの修理をした後に、ケイラ先生の手伝いに行ったりして忙しそうにしてたのはつい先日のことだ。

つまり今のヴァニラは、疲労がたまっている状態である。

そんな中で上のような無理をしたからだ。

ここまですが大まかな流れだった気がする。

そのあと、ヴァニラに何か気の休まることをさせようと、宇宙ウサギであるウギウギを飼わせることにして、敵を倒して終了。

多分一番平和な章と思う。

「まあ、僕ができることは特にないな。」

そう呟き、紋章機の調整用のウィンドウをだす。

最近わかったことだけど、この紋章機は元々別の武装を持つことも出来たみたいだ。

僕の家埋まった時は、予備の剣が何組かあっただけだったけれど。

両腕で、さまざまな武器を持つことが出来たそうだ。

もしかしたら、どこかにこの紋章機用の武器があるのかもしれない。

「この前の戦闘でも感じたけど、僕の剣はまだまだ強くなる。」

乗り始めた頃は、通常で30m強で、特殊兵装使用時で80mほどだった。

それに、剣のエネルギーももっと弱くて、ある程度硬いものを切ると、一瞬エネルギーが消えてしまった。

だけど、今はそれより大きくて丈夫な剣を構成できるようになった。

「紋章機の全力、というか、僕に合わせたチューニングだっけ？それさえできればいいんだけどね。」

実は、僕は一度光の翼を出すことには成功している。といっても出したのは兄さんで、色々いじってたら、なんか出たという感じだ。

兄さんは乗れないけど、解析することなら出来るのだ。まだ僕が何度も乗っていたわけじゃないから、僕の癖とかは反映されなかったけど。

リミッターをかけて、僕の許可が出ればそれを解除できるようにしてもらった。

あと、偽造工作もね。ばれないようにしないと。

「よし、調整終わり。シミュレーターに反映させてこないとね。」

僕は、タラップを使い、紋章機から降りた。

家においてあった頃は、小屋を建ててもらって、ロープを使ってたけどね。

近くの空港においておくという案もあったけど、家におけるのだから、家においておいたのだ。

そして再び駆け足で、シミュレータールームを目指した。

「お花見しましょうよ。タクトさん。」

「お花見？」

「はい、私の故郷の星でよくやるんですけど、お花の下で皆でおいしいご飯を食べたり、大人の人はお酒を飲んだりするんです。」

「へえ、そいつは楽しそうじゃないか。」

「そうですね、ミルフィーさんのお弁当が食べられるだけでも価値がありますわ。」

「ミント、まだミルフィーが作るとは言っていないでしょ。」

「せっかく100年ぶりに咲いたのですから、お花見しましょう。」

「よし、それじゃあ、皆で準備を始めようか。」

「「「「了解!」「「「「」

「いや、訓練の後に浴びるシャワーと、上がって飲むフルーツ牛乳はおいしいね。」

シミュレーターにデータを反映した後、つい訓練をしてしまった。データを反映しただけで、僕が止められるわけが無かったのだ。

だって、シミュレーターだぞ？前の世界じゃ、次世代ゲームでも、ここまで精密なのはなかっただろうし。

タクトがエルシオールに来て20日、原作知識と多少のずれはあるけど、おおむねその通りに動いてるはずだ。

次の戦闘までおそらく4日、ヘロヘロになるまで訓練してしまったが、問題ないだろう。

さて、さっき最低限のクルーを除いて、展望公園でお花見しよう。ということが、艦内放送で言われてたことだし。

「時間までコンビニで暇を潰しますかね。」

とりあえずは、料理関連の本の立ち読みでもしますか。
最近だんだん自分で料理するのが楽しくなってきたのだ。

まあ、食べさせる相手もないから、何か得るものでもないのだけ
どね。
というより、今日のでわかったけど、人を幸せにしない料理もある
みたいだし……フフフ。

趣味が、訓練とパズルとゲーム以外に出来そうだ。

僕は店員に挨拶して、雑誌コーナーに向かった。

「えー、それじゃあ、皆さんついに我らエルシオールは、味方と無

事合流することができました。コレも皆さんの頑張りのおかげだと思います。」

「司令らしくないこと言っでないで、早く始めましょうよ。」

「そうですよ、司令。どうせ皆司令がそんなの似合わないって知っているんですから。」

「きみ達ねえ……。まあいいか。とにかく、乾杯！」

さすがに、読むふけって忘れるなどと言うことはせずに問題なく、展望公園についた。少々遅れてしまったけどね、もうタクトが乾杯の音頭をとっているし。

僕の髪の毛に桜色の花びらが舞い落ちた。

上を見上げて見ると、カフカフの木が桃色の花を咲かせていた。

外見はほとんどサクラと同じだと思う。

前世ではよく花見に行ったなと思いつつ、ただ黙って見上げ続ける。空調管理システムで人工的に作られた風が展望公園の中を吹き抜ける。それにあわせ、カフカフの木の花びらが散る。

花びらの軌跡を眼で追っているとどんどん眼が痒くなってきた。

どうやら、僕の体は前世と同じでかなり花粉に弱いらしい。まだ10分も立っていないのに。もしかしたら、精神的に花粉症の原因となる木の近くにいるのがダメなのかもしれない。逆プラーシーボ効果的な？

残念だけど、ココは一回帰ろう。

戦闘要員だから、優先してナノマシンで治療させてもらえるから、

数時間の辛抱だ。

花粉症についての資料は、もうまとめてあるから、今から戻って調べたら気になる言葉が出てきた、とかでいいかな言い訳は。僕はその足で医務室に向かった。

s i d e o u t

鼻を刺激する、消毒液の匂いと、この主であるケーラが好む、コーヒーの香りがまじり独特の、されど不快ではない空気が漂う。中では、リクライゼーション効果を期待してか、小さくではあるが、クラシックが流されている。部屋は白を基調とし、明るい照明によ

り清潔感を醸し出しており、この場所に相応しい印象を与える

ここはエルシオールの医務室、通常時はあまり人が寄り付かないところだ。

「タクトさん、何か用事ですか？」

そんな中でも、ナノマシンの使い手という稀有な存在でもあるヴァニラは、その役割からかよく自主的に手伝いをしているのだ。

加えてここ数日ワクチンにより撲滅されたと思われていた、花粉症がカフカフの実により、艦内の大多数が感染してしまったのだ。故にここ数日彼女は大変多忙な生活を余儀なくされていたのだ。

エルシオールで花粉症を治療する為には現状彼女の力を借りるしかないのだから。

タクトはそんなヴァニラの様子を見に来たのであったのだ。

「やあ、ヴァニラ、調子はどうだい？」

「現在、クルーの9割の治療が終了しています。」

責任感の強い彼女は、お花見に参加したほぼすべての人にたいして治療を施したうえで、経過観察のために何度か治療後も検診をして

いる。

「ねえ、ヴァニラ」

「なんででしょうか？」

そんなヴァニラの事を気にかけるタクトはやはり司令官に相応しいのであろう。

「そんなに色々仕事して、大変じゃないかい？」

「いえ、私はただ私にできる事をお手伝いしているだけですから。」

すでに何人にも、聞かれたのか、すらすらと答えるヴァニラ。そんな彼女の態度に何か思うところがあるのか、タクトはなおもヴァニラを見つめ続けた。

「でも、やっぱりなにか息抜きでもしたほうが良いと思う。」

「息抜きですか？」

「そう、自分の好きなこととかさ。ヴァニラは何が好きなんだい？」

タクトの問いかけに首を傾げる。これと言ってなにかが好きというものがすぐに思い付かなかったのだ。

「好きなこと……ですか。」

「うん、いつも仕事ばかりしてるのは、やっぱり大変だからね。」

果たしてそれは必要なものであろうか？とヴァニラは悩む。

今まで敬虔な教徒であった彼女は、自分のことを第一に考えるというつまりはプライベートを持つという行為自体にあまり縁があるわけではないのである。

彼女は、その小さな右手を顎の下で軽く握り、首をかしげる。

タクトはそんな彼女の様子を見て、苦笑しつつ続けた。

「まあ、ゆっくり考えてみてよ。それじゃあ、オレはこれで戻るから。」

「はい、ではまた。」

ヴァニラが軽く会釈するのを、背中で感じつつ、タクトは医務室を後にするのであった。

「ヴァニラさんの好きなことですか？」

「うん、今クルーのみんなに聞いて回ってるんだけど、クロミエは何か知らないかな？」

タクトが今いるのは、『クジラルーム』

巨大な宇宙クジラという、長寿で人の心を読むことができるクジラの住処だ。

クロミエはその部屋の管理人であるため、現在タクトに対応している。

タクトはここに来るまでにいくつもの場所を訪れた。

格納庫では、いかにヴァニラが整備や修理などの面で活躍しているかを説かれ、

コンビニでは、ヴァニラが普段一人で買い物に来ることはほとんどないといわれ、

廊下では、ヴァニラちゃん親衛隊が、偶然通り掛ったヴァニラに、公式親衛隊になったりと。

たった三行で語るにはあまりにも多くの濃いイベントを消化してきたのである。長くなるのでカットさせてもらうが。

閑話休題、ともかく、このクジラルームで、タクトの目的が達せられなかった場合、八方塞になるのだが。

「タクトさんは、どうしてそのようなことを？」

クロミエが、そう思うのは当然であろう。確かに彼はヴァニラが興味を持っていそうなことを知ってはいるし、それをタクトになら教えてもいいとも思える。

別に隠すようなものでもないのだから。しかし、それでも、今このタイミングで、なぜタクトが来たのかわからなかったのである。

「いや、ヴァニラがそろそろ何か息抜きを見つけないと、何かまいつてしまいそうな気がして。」

すると、タクトはその問いに、やはにかみながらもそう続けた。

「よく見ていらっしゃるんですね。」

クロミエは、やはりこの人はエンジェル隊の司令官、いや、エルシオールの艦長に相応しいと再認識した。
ここまで注意深く彼女達を見ているのだから。

「それで、そうだい？」

「そうですね……彼女はよく、動物達を見えますよ。」

「動物？」

「ええ、特に宇宙ウサギがお気に入りみたいでよく遠くから眺めますよ。」

「見るだけなのかい？」

タクトは、クロミエのその言葉に対して問い返す。

「ええ、いつも遠くから眺めてるばかりですよ。」

「そうなのか。」

タクトは何か納得したかのように、一人頷く。
その様子をクロミエは眺めつつひとつのことを考え付いた。

「宇宙ウサギといえは最近数が増えすぎてしまって、世話が大変なんですよね。誰か、大事にしてくれる人が育ててくれるなら大歓迎なんですけど。」

誰言つでもなくそう言うクロミエ、しかしその言葉を聴いて、タクトは表情を変えた。

「ねえ、クロミエ、ちょっとここで待っていてくれないかな、世話してくれそうな人に心当たりがあるからつれてこようと思うんだ。」

「いいですよ。」

その10分後にタクトは、ヴァニラをつれてきたが、クロミエに驚いた様子は全くなかったのであった。

「431、432、434、435……。」「

ラクレットは自室で日課の片手腕立てをしていた。
背中に愛剣である『求め』をのせて、それを落とさないようになるべく早くやるというものだ。

もし背中から落としたら、20回追加というルールことで始めて、最初の目標数250はとうに過ぎている。

何か補正でもあるのか、彼の身体能力に関する才能は規格外であった。

彼は転生する前の知識があったおかげで、高卒程度の学力はあったが、新しい体になって、子供の学習力というものをあまり感じたことがなかったのである。

それはひとえに自分の脳があまりいい出来ではないからであった。また、ほかにも芸術や音楽などのセンスも全くなかったのだ。

しかしながら、彼はこと運動に関しては無駄に才能があった。

本人もそれなりに努力を重ねてきたために、今の彼があるのだ。

「468、469、470……ふう、終わった。」

両手分をようやく終えた彼は自室に備え付けられたシャワーを浴びる。

その描写はやはり割合させてもらうが、彼は、こと肉体に関しては軍人と比べても謙遜はなかった。

ペラリとページを捲る音が、部屋に響く。

シャワーから上がった彼は、先ほどコンビニで購入した料理関連の

雑誌を読みふけていた。

彼は一人で過ごす時間はそれなりに嫌いではないが、誰かがかまってくれないと寂しくなるといふ、いちいちうざい人物だ。

彼にその自覚はないのが問題であるが。

ともかく、一人で好きに時間をつぶしていると、珍しく、本当に珍しく来客を知らせるチャイムが鳴った。

使用されるのが3回目の聞きなれないチャイムの音に反応して、本を閉じて部屋のドアを特に確認もせずを開いた。

普通はインターホンを見るものなのだが、彼はそこまで慣れていないのだ。

「どちらですか？」

そついいながらドアの開閉ボタンをおす。
すると彼の目の前には誰もいなかった。

「れ、おかしいな？誰かいたと思ったんだけど。」

「います。」

右下から声が聞こえたのでそちらを向く。
するとそこには、ラクレットにはわからないが、やや不満そうな顔をした、ヴァニラがいた。

「ああ、すいません、小さくて見えませんでした。」

「……いえ。」

不満げな表情がやや怒気を孕む表情になったが、
ヴァニラは大人になりそれを耐えた。

彼女はきつと将来いい女性になるであろう。
それはもう可憐で清楚で献身的で思いやりのあるすばらしい女性に。

「それで、僕に何か御用ですか？」

ラクレットはいつものプライベートではない時用の口調でヴァニラに話しかける。
ヴァニラは、エルシオールの中で素の彼を知っている、数少ない人物の一人であったが、特に気にせず自分の用件を述べた。

「クロミエさんに、宇宙ウサギの世話を任せました。」

「そうですか、世話の仕方はクロミエに聞いたからわかりますよね？」

ラクレットは、今まさにヴァニラの聞こうとしたことをつぶしてしまった。

彼女は、なぜか異常に古代の動物について詳しい彼に、ウサギという種族の基本的な育て方を聞こうと思ったのである。

もちろんクロミエから色々と教わってはいるが、そのクロミエ自身が説明の最後に

「ラクレットさんも詳しいですよ。」

と言った為に、とりあえず聞いてみようと思ったのであった。

クロミエは、戦闘要員の中では微妙に孤立している節のあるラクレットに対して気を使ったつもりでもあるのだが。

「はい、クロミエさんが詳しく説明してくださいました。」

「そうかい、ウサギといえばだけど、昔の有名なウサギの父親はキヤベツを食べて眠くなってしまい食べられてしまったという話があるってね。」

ラクレットは、そのような、クロミエの心遣いや、ヴァニラの望みなどをあまり考えずに自分の知識をひけらかしていた。

しかも、微妙に口調が戻っているあたり、彼も油断しているのであらう。

彼が口調を使い分ける理由は長くなるので省くが、女性に対しては下手に出るのが常なのであるから

しかしながら、偶然にもそれは、ヴァニラにとっても興味深い話であり、ヴァニラはやや夢中になりラクレットの聞き手になったのであった。

どんどん脱線していく彼の話をいつもの表情ながらも楽しげに耳を傾けるヴァニラはやはり可憐であった。

Dr・ケーラに聞いてみて 後編

「あ、ヴァニラじゃない、何やってるのよ？」

ここはティールラウンジ、エンジェル隊が集まって、よくお茶を飲みつつケーキをつまんでいる場所だ。

今日も今日とで例に漏れず、エンジェル隊のヴァニラを除く4人は、3時のティーブレイクを楽しんでいたのだ。

ちなみに4人とは先日のお花見の後に発生した大量の花粉症患者の治療を行ったのが呼び水となり、疲労で倒れてしまったヴァニラを除く全員である。

そんな所に通じかかったのがどこかうれしそうな表情のヴァニラであつた。

しかし、その当のヴァニラが珍しく少々浮かれた様子で歩いていたのだ。

気になったランファは、彼女を呼び止めたのである。

「皆さん、こんにちは」

「ああ、こんにちは。体はもう平気かい？」

「はい、もう大丈夫です。」

フォルテは、しっかりしているが、まだまだ幼い面も多々あるヴァニラの事を気遣っての言葉で聞いたのだが、ヴァニラの力強い返事に安心したかのように安堵の笑みを浮かべた。

「それで、どうしてそんなに嬉しそうなのですか？」

「実は……。」

ヴァニラはミントの、ストレートな問いに、やや動揺したものの、それを表情には出さずに、いつものように今までの経緯をなるべく客観的に話した。

とりあえず彼女が、タクトが趣味を紹介してくれて、クロミエの代わりに一匹のウサギを飼うことにして、その名前はウギウギでありとてもかわいいということを話した。

そこで彼女は、自分の話がいつもより多く自分の感情を含んでいる

ことに気づかなかったのだが、ほかのエンジェル対は彼女の様子に頬を緩めた。

ヴァニラは全エンジェル隊からも妹のように可愛いがられているのである。

そして、ヴァニラが実はいろいろと昔の動物の生態に詳しいラクレットに、ウサギにまつわる童話の話を聞いたり、豆知識的なものを教わったりしたことまで話し終えたところでようやく彼女は一息つき、自分の紅茶のカップに手を伸ばした。

「へー、ラクレット君動物にも詳しいんだ。結構物知りなんだね。」

「はい、よくクロミエさんとお話なさっているのを見かけます。その時にクロミエさんが質問することもあるくらいで。」

ミルフィーはヴァニラの話聞いて素直に関心していた。
まあ、彼女の性格から考えて、すごいと思うことは素直にすごいと言えるからであろうが。

しかし、ほかの三人は微妙にヴァニラの心配をしていた。

ランファは純粹にヴァニラに仲の良い男ができたことに、フォルテとミントはそれがラクレットであることに。

「ねえ、ヴァニラちょっと聞きたいんだけど。」

「なんででしょうか？」

「あいつとはそうやって、よく話すの？」

ランファは特にためらいもなくヴァニラにたずねた。

ヴァニラはランファの問いの意味を少しばかり考えた後に、ランファの瞳をその紅い瞳で見つめながら答えた。

「ラクレットさんは、クロミエさんとても仲良しです。私はクロミエさんとはよくお話しますが、長くお話したのは先ほどが初めてです。」

「なんだ、そうだったの。」

「でも、もっとお話したいと思いました。数万年前に特定の特殊な空間の中に生息したでんきねずみを代表とする生物達のお話や、あらゆる道具を使いこなし、複雑な計算をとくことさえ可能で、それらすべてを駆使して追いかけてくしている鼠と猫の話は、とても面白かったです。」

ランファはヴァニラの興味がラクレットと言うか、彼の話にむいていることに気づいたのだが、特に問題もなかるうとも思い放置することにした。

彼女のにはラクレットは興味の対象ではなかった、ヴァニラも恋心やら乙女チックなものを少なくとも現時点では持っているわけではないようだし。

それに現在ランファの心はある人物にその比重の多くを傾けているのだから。

一方でミントは、微妙に複雑に考えていた。

最初から疑わしく、ひそかに監視をしていたりなどもしていたのだが、わかったことは。

彼が頭のよさそうな馬鹿であり、一歩間違えれば脳筋であることぐ

らいだ。

行動には無駄なところはないが、筋トレか回りの手伝い程度しかしていない。

どこからかのスパイであるのならば、私達にもっと積極的にコミュニケーションをとろうとするはずだと彼女は考えたからだ。

最初はレスター、クロミエに近づいたことも警戒したのだが。

単純に年頃の男の子が異性を避ける程度の行動でしかないと彼女は判断したのだ。

なぜなら、一般クルーの女性に話しかけられたときの彼の狼狽具合がひどいものだったからであるのがそれはおいておこう。

321

ともかく、第一印象はかなり疑わしい正体不明の男だったのが現在では 胡散臭い馬鹿な男の子である。

しかし、疑うのをやめたわけではなく、どういった意図でヴァニラに近づいたのかを考え始めていたのだ。

彼女にとって、考えすぎる自分は玉に瑕では会ったが、基本的には好ましく思っていた。

なぜならば、自分はエンジェル隊の参謀であるという自負を持って

いるからで、自分が頭脳労働担当である自認しているのだ。

自分にブラパンシユ君をくれたことには感謝するが、総合的に見て、まったく意図が見えないのだ。
せめて

「自分が来たのは、シヴァ皇子を守ったならば、周りに自慢できそうだからだ。」

や

「就職に有利そうだから」

のような、どうみても、後先考えていないような理由でも明かしてくれたのならば、彼の普段の言動を顧みるに、納得したであろうと彼女は自分の思考をいったん締めくくった。

「どう思いました？ フォルテさん。」

「いや、単純にクロミエと仲がいいのならば変な所は無いんじゃない

いのかい？」

そもそもフォルテがラクレットを疑っているのは、自身の直観に基づくものでしかなく、

ミントと同じで、彼の奇行というほどのものではないが、紋章機操縦の腕から考えられた人物像とはあまりにも違う行動を見てきて微妙に考えを新ためていた。

彼は、刃物を持った馬鹿だと。

これだけだと、とても危ないやつにも聞こえるのが、彼女は彼がいかにもこの言葉が似合うでないと考えているのだ。

彼はどこからどう見ても、最近の若者の例に漏れず、ただ平和ボケした若者であろう。

しかし、自身が戦闘することが可能な能力を持っていたために、それを磨いてきた。

結果今の平和ボケした軍人（仮）と言う状況が生まれるのではないかと推測している。

こんな予測を立てるとは、まるで自分が若者では無いみたいだとも考えたが、まあ、自分は平和ボケしているわけでもなく、むしろその対極だと結論付けた。

まだ何か隠しているようであるが、たいしたことでないような気がするのである。

「まあ、特に意図があつたわけじゃないだろうさ。」

「そうですね。」

「そもそも普段のあいつを見て、何か陰謀ができるようなやつに見えるかい？」

「そのような器があるヒトには思えませんわね。」

「だろう?。」

おそらく本人が聞いてたら相当なダメージを受けるであろう会話を二人は続けていた。

ラクレットは、自分を万能系オリ主だと思っているのだ。
まあ、実態は 逆勘違い系で さらにオリ主（笑）であろう。

「仮に、あれすべてが演技なら、正直私達が手におえるような奴じゃないだろう。そのときはもうお手上げさ。」

「ですわね。あれを演技でできるものがエオニアの下、または別の勢力にいたのならば、もう手遅れですわ」

二人は地味に最悪な場合の話をしているが、その顔の笑っており、いかにありえないかを理解しているのであろう。

何だかんだ言ってって、彼が、妙な方向性ではあるものの微妙な信頼をえているのだ。

緊迫した空気の漂う部屋、天井は一般的なそれよりもやや高めだが、内装自体に別段特別なものは無い。

せいぜい様々な道具が置かれているスペースがあるくらいか。人影は二つ、彼らは部屋の中のやや開けた空間で5メートルほどの間合いを持って対峙していた。

「どこからでもかかって来い。」

「はい！！」

ラクレットは少しだけやわらかいマットを右足で思いっきり踏み込んだ。姿勢を低くし、右腕を放てるようにためをつくりながら突進する。

彼の下半身の筋肉は、瞬発力よりもむしろ持久力に優れているが、中々の速度ではあった。5メートルの距離など1秒足らずでつめられるほどには。

対する男 レスターは自然体というわけでもないが、あまり気負った風も無く構えていたその腕を動かしつつ重心を右足に移す。

ラクレットは最後の一步を大きく踏み込み右腕を撓らせながら、まさにぶん殴るという描写が相応しいようにフックを下から上に向かって放つ。狙いはレスターの顔だ。

低い姿勢なのだから、いきなり体の最上部を狙われるとは思っていないであろうという、彼的には考えた上での選択なのだが、走り出す時点で右腕で殴ることが見え見えのテレフォンパンチではレスターには通用しなかった。

流れるような動作で軽くラクレットの右を左手でいなした後は、そのまま右足を軸に膝をラクレットの腹に入れた。

軸足が入った見事な左ひざでの強襲にラクレットの奇策（笑）は一撃で敗れたのだ。

「まず、動きが直線的過ぎる。猪突猛進な動きなど人間がすべきものではない。そのような動きは、獣のほうに向いているからだ。」

「はい」

先ほどの交差から、5分ほどでラクレットは痛みから復活した。現在レスターのアドバイスを受けているところだ。

そもそも、彼らがトレーニングルームで戦っているのにはたいしたことが無い理由がある。

なんてことは無い、レスターに時間ができたからだ。

現在明後日に迫った、エオニア軍の駐留地域への襲撃に備えなければならないのだが、今回のエルシオールは戦闘の中核を担うわけではない上に、タクトより上の別の方面軍所属の軍人が多くいるのだ。

指揮を取るのも彼らであり、割り当てられた戦闘宙域のデータ収集程度しか仕事が無い、日常業務など優秀すぎるレスターにかかれば片手間に終わってしまうのである。

「次に、予備動作が大きすぎる事だ、相手も素人ならばいいが、単純に場数をふんでいる奴や、軍人相手では当ててくださいといったようなものだ。」

「はい」

その後も、いきなり間合いをつめすぎるなやら、敵の目の前で硬直するような技を打つな。など
どんどん訂正されていくラクレット。

体はオリ主ゆえに鍛えたものの、前世含めて喧嘩の経験など無い。そもそも彼は人に暴力を向けるという行為を数える程度しかしていないのだが。

彼の肉体は、全体的に持久力が重視された鍛え方だ、トレーニングメニューなどは自分の知識を元に星間ネットで調べて鍛え上げたのである。

だが、それを使ったことなどあまり無い、小学校のころは体育の授業では人気者であったが、それだけで飛び級で入った高校では格闘技系の授業は免除されていたりする。

もっとも、最近では彼の体格的にそれはどうなんだという話が出てきてはいるのだが。

つまりは、格ゲーで最強キャラを使っても、プレイヤーが初心者なら、普通に負けるのである。

「とりあえず、まずは間合いの取り方からだ、いくぞ。」

「はい！！」

出撃二日前、エルシオールの数少ない要職につく男性二人はトレーニングルームで汗を流すのであった。

その様子を楽しげに扉から見つめる（覗きとも言つ）めがねの女性
が、

「まさか、浮気！？ 親友の司令だけじゃなく年下の優秀な少年に、
三角関係！？」

などと騒いだので、はたまた、違った意図で見つめていた（覗きだ
と思う）女性に連れ行かれることになったのは、完全な余談である。

「皆、今回の作戦は、第三方面軍が中心だ。オレ達に割り当てられた区域は、決して広くは無い。しかし、旗艦もいるので、要注意だ。」

「今回の作戦目標は、敵の旗艦を破壊した上で、戦闘中域内の敵艦を可能な限り減らすことだ。細かい作戦はタクトから説明を受ける。」

「そういうこと。それじゃあ、皆頼んだよ。エンジェル隊、独立戦闘機部隊、出撃!!」

「『了解!!』」

「了解！！」

「ラクレットとランファは先行してくれ、敵旗艦に近づくのが目標だけど、攻撃を集めるだけで十分だ。」

「他の四人は、ラッキースターを先頭に、ハーベスターを守るようにしつつ、前進してくれ。くれぐれも無茶はするなよ。」

エルシオールと同じ戦闘宙域に割り当てられた船の数は、他の宙域の半分ほどでしかなかった。

これは、エルシオール並びに、それに付随する戦力を考慮したからである。

割り当てられた戦艦のクルーの意見は主に二つ、

この配備は妥当であり、エンジェル隊やエルシオール戦力への期待感を持っているものと

彼らを過信しすぎて、戦力を省きすぎではないかの懐疑論

だった。

戦艦チヒロの艦長チヨ・エロスン（32歳独身）はどちらかといえば懐疑論に近いものであった。

だが、彼のもともとの配備は、第一方面軍。

何度か、エンジェル隊が、遺跡などの探索のために出撃しているのを見かけたことがあるのだ。

その時の速度を見るだけでも、十分驚くべきものであったし、公開されているスペックだと、単体でクロノドライブすら可能であるというのだ。

しかし、それが本当に戦闘で役に立つのか、ここまで単体で抜けてきたとはいえ、実際に戦闘をこの目で見るまでは過信はしない、それがエロスン（趣味は読書）の考え方だった。

「エルシオールから、紋章機の発進を確認しました。続いて中型戦闘機一機の発進も確認しました。」

彼が軽く思考をまとめていると、オペレーターからの報告が入った。エロスン（特技は家事全般）はひとまず、クルーに対して指示を出すことにした。

「よし、戦艦チヒロは、他の戦艦を引き連れつつ前進、エルシオールが孤立しないように適度な距離をとれ。」

「了解。」

操舵手の返事を聞きつつ、彼は視線を宙域の戦略マップに落としたのであった。

「さすが、紋章機圧倒的速度ですね。」

「ああ、そうだな、われわれが戦闘可能な距離になるまで時間がある、この2機の映像、モニターに出せるか？」

副官の言葉に同意しつつ、まだ余裕があるので指示を出した。先行している2機はすでに、戦闘可能な距離だ、現にモニターを見ると片方はすでに射撃を開始しているようだ。

しかし敵旗艦の攻撃が激しいのか、一端射線上から外れるべく大きく回りこみ始めた。

「やはり、敵旗艦の攻撃力は侮れないな。」

自分の頭の仲で、所詮は無人戦艦だと侮っていた、上層部の馬鹿共顔を思い出してしまい、若干表情が強張りるが、そろそろ戦闘可能宙域かと思いマップに視線を戻した。

しかし、彼の視線は副官の声で再びモニターに戻ることになる。

「そうですね、おや……艦長！！」

「どうした？」

「先行していた一機が、そのまま敵旗艦に突っ込みました！！」

「馬鹿な！！」

モニターを見ると、敵旗艦の砲門が爆発している。
マップの敵旗艦周辺に視線を戻すと、旗艦の位置と戦闘機的位置が完全に重なっている。

何事だと思ったエロスン（座右の銘は平常心）は、モニターを拡大させる。

するとそこに写っていたのは、敵の旗艦の懐に入り込み、右の剣で砲門を切り付けているところだった。

「ありえない……。」

副官の声が右耳から入ってくる。その言葉にエロスン（階級は大佐）は激しく同意するものの、ひとつの考えが頭によぎった。

「いや、むしろ理にかなっているのかもしれん、旗艦の攻撃力は強

大だが、懷にさえ入り込んでしまえば攻撃はされにくい、さらにあの剣は狙いを定める必要なく、触れてやるだけで砲門は潰すことができる。」

「まさか！！ そんなこと……。」

エロスン（初恋の相手は月の聖母）は副官の驚きように、微妙に満足しつつ、言葉を続ける。

「そして、他の紋章機より、小さい機体、回避に優れていて、なおかつ、懷に入り込みやすい。まさに旗艦を倒すのに適した機体だったのだよ。」

「そうだったのか……。」

「あのー艦長、戦闘開始の指示を出していただきたいのですが……。」

その後、エンジェル隊と、ラクレットは順調に敵を倒し戦闘を終了させた。

ダンシングクレイジーズ 1

ダンシングクレイジーズ 1

ナドラ星系での作戦を終えたエルシオール一行はローム星系の衛星都市ファールゴに向かった。

そこで、今後のエオニアの反乱軍対策会議が行われるという名目だ。

当然のことながら、対エオニア部隊の様相を得て来たエルシオールは、その中心的存在になるであろう。

クルー達も今までの功績から来る褒賞や、優遇を期待している節があるくらいだ。

しかし、皇国軍の残存勢力部隊の多くが招かれているために、エルシオールは丸一日待たされることになった。

「ちょっとー、タクトまだなのー？」

「後ちよつとだよ。」

ランファは口を尖らせて、タクトを責めるような目で見る。

別にタクトに責任があるわけではないのだが、その辺は、偉いから責められているだけなのであろう。

「えー、また、あとちよつとですかー？」

「そうそう、後ちよつと、後ちよつとつてもう何回言っただい？」

ミルフィー、フォルテもランファに便乗する。

あれだけ活躍したのにこの扱いには不満が生まれても仕方が無いであらう。

尤も、捨てる神あれば拾う神ありだ。

「まあまあ皆さん落ち着いてくださいませ。ファーゴの港の許容量を超えているのですから、時間がかかっても仕方ないですよ。」

「おそらく後、数十分ほどでしょう。」

「ヴァニラ言う通り、向こうの管制が指示した時間から考えるに後20分程度だろう。」

まあ、彼らは単純に事実を言っているだけなのだが。
こう考えると、タクトの周り感性重視と、理論重視が丁度良い塩梅で分かれているのである。

ちなみにラクレットは転寝をしていた。
訓練のしすぎで疲れていたのである。

「それじゃあ、オレは行つて来る。後は頼んだぞレスター。」

「ああ、まかせろ。……おまえも、会議中に寝るなよ。」

「わかっているって。」

衛星都市ファーゴに到着したエルシオール一行。
さつそくタクトはエオニア軍対策会議に出席するために、都市の中心部へ向かった。

「これからの皇国を左右するような会議だ。気合を入れていかないと。」

「タクト・マイヤーズ、ただ今到着しました。」

「おお、マイヤーズ君か、入りたまえ。」

「失礼します。」

タクトが荘厳な雰囲気のアトリウムを開け入室した会議室は、特にこれと違っておかしな造りのもではなかった。

飾り付けは適度に豪華で、特に派手すぎるということも無い。

ファーゴは皇国の直轄領なので、この建物を建てた、当時の皇王の

センスが良かったのか。

そんなことを考えながら、卓についている者を確認する。

向かって一番奥にこの前の作戦の責任者で、この宙域の中では階級トップのジクルト・ジードマイヤ大将。

その左右は側近で固められており、向かって右側の手前のほうにルフト准将が座っていて、その隣の空席がおそらく自分のものなのだろう。

自分の知っている物はそのくらいで、後はおそらく将官なのだろうが、傲慢な雰囲気を感じるような輩であった。

タクトはそのような雰囲気を持つ者があまり好きではない。滅多に出席しなかったが、貴族同士のパーティーにあのような目をした貴族がよくいるのだ。

それでも、会議だから仕方が無いと割り切り、一礼して、自分の席に着く。

「さて、全員揃ったところで、早速始めるとするか。」

ジードマイヤのその言葉に、会議室の空気が変わる。今まで自分に集まっていた視線が元に戻るのをタクトは感じた。

「まずは、先日の作戦ではご苦労だった。シヴァ皇子もきつと評価してくださるであろう。」

「いえいえ、閣下私共は皇国軍人として、当然の職務を行っただけです。」

ジードマイヤの賛辞の言葉に、周りの軍人の一人が代表して答える。タクトはその雰囲気、やはり、周りの者は貴族だということを感じ取った。

トランスバール皇国では貴族縁の者のほうが圧倒的な速度で出世できるのだ。現に自分はどう考えても優秀なレスターよりも出世が早いのであるのだから。

「ハハハ、そうか……………さて、今回はあのエオニアの包囲網を果敢にも一隻で抜けてきたエルシオールの艦長 タクト・マイヤーズに来てもらっている。」

「タクト・マイヤーズ大佐です。」

「マイヤーズ君、今回は本当に大儀であった。おそらく、戦後に褒賞があるであろうから期待すると良い。」

「……………ありがとうございます。」

まるで予定調和の見世物だ。
タクトは内心でそう思った。
そもそも、この会議だって……

「それにしても、エオニア軍もたった一隻に突破されるような包囲網程度しか張れないなど、たいしたこと無い。」

「然り、先日の作戦でもたいした被害を被る事は無かった。こういつては何だが、第一方面軍は腰抜けばかりだったのだな。」

「おや、皇国軍の英霊を愚弄する発言は控えたほうがよろしいのでは？」

「これは、失敬。」

自分達は後方にいたので、全くエオニア軍の真の実力を知らないような貴族軍人のその言葉にさすがのタクト黙っていらなかった。

「皆さん！！エオニア軍の力を侮ってはいけません！！私は実際に戦闘してきて、今までの宇宙海賊程度との経験が、ほぼ役に立たないほどの力の差でした。」

そう、正直ここまで来れたこと自体が奇跡だ。
今の記憶を持っていたても、時を巻き戻してもう一度やれと言われれば、きつと実行するのは難しい。

「おや？エオニア軍の一番の仇敵であろう貴殿が勝てないと申しますか？」

「これは、だめですね。皇国軍人としてそのような臆病者にシヴァ皇子を任せて置けませんな。」

「こちら、お前達。マイヤーズ君は現場の指揮官として意見を言っているだけだ、我々はそれを重く受け止めて作戦を作るべきである。」

「さすが、閣下すばらしいご意見であります。」

「さあ、三日後に控えた舞踏会で英気を養い、その後エオニアを倒し本星へと凱旋しようではないか。」

「そうですね。」「ええ、そうですね。」「いやいや、これで戦後の褒賞は決まりましたな。」

「それでは解散。」

タクトはここに来てもう何も言えなかった。この部屋に居る者は全員現実をきちんと認識していない。

無人艦隊など恐れるに足らずということなのであろう。

それが、この前の勝利で促進された。

それがおそらく全て、エオニアの策略なのだ。

なんという恐ろしい敵なのであろう。

「タクト……。」

「いえ、ルフト准将、仕方が無いことなのでしょうね。」

誰もいなくなった というのは語弊があるが、ルフトとタクト以外が退出した会議室で二人は会話していた。

「彼らは、完全にエオニアの策に嵌っている。俺達が包囲網を突破

できた？ 少なくとも皇国軍として配備された戦力だけでは無理だったじゃないか！」

タクトの中でのラクレットの評価は決して低いものではない。というか、彼がいなかったら、今自分はここにいないというレベルだ。

もちろんエンジェル隊のメンバーどころか、エルシオールスタッフ全員にこのような評価でもあるのだが。

「それらすべてエオニアの策……そう考えるか。」

「はい。」

ルフトはタクトの言葉を聞き、口であごの部分に触れた。そしてしばらく考え込むような仕草をした。

「ワシの方でも、なるべく注意を払うようにしておく。もっとも、ジーダマイヤがあの子だ、どれだけ効果があるかわからんがの。」

「お願いします。」

そこでルフトは話を一端切った。そしてしばらく考え込むような仕草をした後に、何かを決意したよ

うな表情でタクトに向き直った。

「それではタクト・マイヤーズ。次の指令を言い渡す。」

「はっ！」

タクトはルフトにフルネームを呼ばれ、居住まいを正す。

ルフトの真剣な表情に、感じ取るものがあつたのだ。

そう、彼の鋭すぎることに定評のある直感が、いやな予感を告げていたのだ。

「三日後の舞踏会にエンジェル隊のメンバーと共に参加せよ。」

「はっ！……………はあ？」

あまりの予想外な命令に間抜けな声が出る。

まあ、それは仕方が無い事であろう。

しかし、次のルフトの言葉に、今度は完全に思考停止をせざるを得なかった。

「そしてそれがお前の、エルシオール指令として最後の任務となる。」

「タクト（さん）がやめる（のですか）！？」

エルシオールに戻ったタクトは、ブリッジにエンジェル隊メンバーを集め（レスター、ココ、アルモ、ラクレットはすでにいた。）

「うん、三日後の舞踏会を最後に、別の艦隊の指揮をすることになってるんだ。」

「そんな……もうどうにもならないのですか？」

タクトの衝撃発言にエンジェル隊の面々は、まあタクトの予想通りの反応をした。

そんな彼女達のリアクションを見て苦笑しつつ、ミルフィーの質問に答える。

「うん、すでに決まったことだからね。」

「そんな……寂しくなりますね。」

「ああ、せっかく、いい感じだったのに。」

別れる事が決まったからか、心中を吐露する彼女らを見て、自分が今までやってきたことが無駄でないと改めて認識しつつ、どこか寂しい気持ちになりながらもタクトは答える。
いつもどおりの笑顔を浮かべて。

「ありがとう。」

感謝の言葉を。

「さて皆、三日後の舞踏会では存分に楽しんでくれよ。経費は全て軍から下りるみたいだから。」

場の空気を換えるように、大袈裟な動作と共にそう言った。
エンジェル隊もそのタクトの雰囲気を感じ取ったのかそれに合わせるように、喜んだ。

「本当！？じゃあ、早速ドレスから靴まで新調しなきゃ！」

「新調って、ランファ、持って来てたの？ドレス。」

「当然じゃない？」

「ヴァニラさんのドレスは私が選んで差し上げますわ。」

「ありがとうございます。」

「まあ、タダというのは、ありがたいね。」

いつものような和やか雰囲気に戻ったブリッジ、しかし先ほどから沈黙を守っている男がいた。

ラクレットである。

彼は、タクトの持ってきた招待状の文面を食い入るように見ていたのである。

その必死さは、微妙に一步引いて見ていた、ココとアルモが若干引

くぐらいいであった。

「あの、タクトさん」

「……なんだい、ラクレット。」

タクトもラクレットの言いたいことを、なんとなく察しているのか、微妙な表情で返す。

「招待されているのは、エルシオール司令、並びにエンジェル隊……だけですか？」

「……………そうだね。」

「……………僕は？」

「……………。」

そう、招待されているのは
タクト、ミルフィー、ランファ、ミント、フォルテ、ヴァニラだけ

なのである。

舞踏会はオリ主的イベントの筆頭だよね。

とか考えていたラクレットは、すでに脳内で、エンジェル隊どころか、エルシオールの全ての女性クルー（原作に登場する）と行く場合のシミュレーションは済ませていた。

ラクレットの段々悲壮感溢れていくその表情を見て何を思ったのか、レスターが一步ラクレットに歩み寄る。

「おそらく、向こう側がエルシオールとその搭載している紋章機並びに『エタニティーソード』のパイロットを評価して招待したのだらう。」

「それならなぜ!？」

ただでさえ、近かった距離を詰め寄るラクレット、興奮している彼は周りが見えなくなっているらしい。

お互いの吐息がかかりそうな距離に反応した女性がいたのはスルーしておこう。

ラクレットの当然な疑問にレスターはいとも簡単に答えた。

「向こう側の勘違いであらう。そもそもあのレベルができる戦闘機のパイロットが、エンジェル隊外にいること自体想定してないのであらう。」

「そんな……。」

愕然とするラクレット、そんな彼に追い討ちをかけるレスター。

「その証拠に、買い物用のクレジットカードが7枚届いている。」

「畜生!!ぐれてやる!!」

あまにもあんまりな言葉に、普段作っているキャラが崩れるラクレット。

その言葉に地味にミントが反応した。

「ぐれるとどうなりますの？」

「ゴミの分別をしません!!」

瞬間的にそういきった。彼のぐれるイメージはそんなものである。

「ごみの分別は、宇宙空間においては重要です。」

「そつだよ。ちゃんとしなきゃだめだよ！」

「……うわああああん！！！」

ヴァニラと、ミルフィーの止めに固まったラクレットは、そのままブリッジを走り去った。
半分泣きながら。

その姿につい、同情してしまった者がいたそうなの。

ダンシングクレイジーズ 2

ラクレットは激怒した

必ずかの邪智暴虐の大將を八つ裂きにすると決意した（脳内で）

まあともかく、みんなが外に舞踏会の準備に行っていて暇なのだ。タクトは、微妙に一悶着あった後、ミルフィーをパートナーに選んだみたいだし、安心だ。

などと考えながら、エルシオールの方格納庫でランニングしていた。名目は緊急時に、迅速に出撃するための訓練ということだ。

整備など、ファーゴに入るまでにとくに終わっている方格納庫はラクレットを除いて無人だ。

往復ハーフマイルくらいはあるであろう、格納庫を20往復したくらいで、ラクレットはラッキースターの近くに人がいるのを発見した。

気になって近寄ってみると、そこにいたのはエルシオールのクルーではなく、10歳程度の外見の金髪少女であった。

その少女はラクレットにとっては、画面越しに何度も見た外見と瓜二つで、彼にとっては久々に興奮する材料だったのだ。

ラクレットは紳士的に話しかける。

「やあ、お嬢さんどうしたのですか？」

「別に、これを見ていただけよ。」

「テムオリン様VOICE来た!!!!!!!!!!!!!!」

「はあ？」

興奮したラクレットは、声に出して叫んだ。

まあ、彼の模している格好のゲームの中では好きなキャラBEST 5に入っていたので仕方ないのかもしれない。

ちなみに、一番は緑で、次にヘタレ、青、年増、コアラの順である。

それはともかく、金髪の少女　　ノアはドン引きだった。

なにこの、キモい生き物。
といった具合である。

「いや失敬、それで、なんで紋章機なんて見てるのかな？」

「うーん、お兄様が気にしていたからかしら？」

「そうか。でも危ないから近寄っちゃだめだよ。落ちたら大怪我だしね。」

「平気よ。私飛べるもの。」

ノアはまったく気にしない様子でそんなことをつぶやきながら、手摺に飛び乗る。

そのときの動作は、若干人間にはできないようなものが混ざっていたのだが。

ラクレットはまったく気にしなかった。

なぜなら、彼女の正体を知っているからだが。

ちなみに彼女が手すりに飛び移るときに、スカートが大きく翻ったが、ストライクゾーンが16より上な彼は全く反応しなかったことをここに記しておこう。

しばらく、ラクレットのほうを見ていたノアだが、興味をなくしたのか、紋章機のほうへ向き直る。
ラクレットはノアの後姿をただ眺めていた。

「ねえ、あんたって偉いの？」

「そうですね、平均よりは？」

階級的には確かにそのくらいだが、臨時であるので、同階級のものよりは下だ。

それに加え、ここに来るまでに彼が残した功績は大きく、その辺も加味すると地味に複雑ではある。

「じゃあ、この紋章機私に頂戴。無理なら偉い人呼んできなさいよ。」

「それは無理です。紋章機をあげるなんて無理ですよ。玩具じゃないのですし。」

ラクレットはなるべく原作どおりの反応を返そうと必死にこのシーンについて思い出していた。

確か、これで自分で作るからいらなくなる流れだったっけ？
と考えつつ、ノアにそう言った。

「そう……ならいいわ。」

ノアはそうつぶやくと、手すりからいきなり飛び降りた。
なんとなく予想できてはいたが、いきなりのアクションに驚いたラ
クレットは、手摺に駆け寄り下を覗き込む。

「やっぱりか……。」

しかし、彼の予想通り、下には誰もいなかったのである。

「ふむ、やはり所詮はジードマイヤか。わずか一回の勝利で浮かれきっておる」

エオニアは現在黒き月を引き連れて、ファールゴからある程度離れた位置にいた。

「この後に余が姿を現した時こそが貴様の命日であるというのに。」

エンジェル隊に散々苦しめられてはいるものの、まだまだ余裕であるのか、ラスボス的雰囲気醸し出していた。

「エオニア様、黒き月からです。」

そんな中一本の通信が入る。
それは大変珍しい相手からだった。

「繋げ。」

「了解。」

オペレーターはその言葉に反応して、モニターに繋いだ。

どうでもいいがエオニアは部下の前で先ほどの言葉を発していたの
だろうか？

だとしたら 中々に周りが見えないか、周りのスルースキルが高い
かである。

閑話休題、とにかくエオニアは、前方スクリーンに意識を集中した。

「エオニアさま、ご報告があります。」

「久しいな、カマンベール。」

スクリーンの先にいたのは、白衣を着た青年だった。

髪の色は薄いブルーでそれなりに長く、後頭部で束ねており、軽く首を動かすのにあわせてさらさらと流れた。

フレームの太い眼鏡をかけた、中々に相貌の整ったいわゆる美男子であったのだが、彼の身長は低く、少年のような印象を受ける。

低いといっても、160と少しといったところであるが。もっと言うと、ミルフィー以上ランファ以下である。

ともかく、現在21歳の、ラクレットの兄である
カマン
ベール・ヴァルターであった。

「ご無沙汰しております。今回の報告ですが、少々複雑な仕組みを見つけました。」

「ほう？」

カマンベールは黒き月に住んでいる。

というより、泊り込みで研究しているのだ。

エオニア達が入れなかった区画にも、一人ではいることができたの

だ。

エオニア達が入ろうとすると、管理者権限が無いと警告が出て、扉が閉じてしまったのだ。

ちなみに、黒き月を発見してから、その区画から出た回数はまだ3回目ではないのだが……。

彼は定期報告は文書で済ませて、奥から出てこないのである。

エオニアから見れば、有用な研究をする部下であり、その能力は買っている。

何を考えているかはわからないが、研究さえ出来れば良いと言っているので、黒き月を持っている限り裏切られることは無いと考えているのだ。

なので、そのようなスタイルでも特に咎められてはいないのである。

「今までも、中々に手のかかるものばかりですが、今回ばかりは数年単位のスパンで研究をさせて頂くつもりです。」

「そうか……………」

「つきましては、私はこれからしばらく音信不通となります。」

が、さすがに、今回ののはどうかとエオニアも思った。
黒き月の中で数年も音信不通とは、さすがにどうかと思ったのである。

「さて、お前はなぜそこまでする。」

「そうですね、今回発見しましたものは、どうやら不老不死にすら通じそうなものです。外に出すことはまず不可能ですが、私が数年かけて研究すれば何とかなるかもしれないと、科学者としての血が告げているのです。」

「不老不死だと!!」

エオニアは驚く。黒き月は兵器工場のようなものだ、そんなものの中になぜ不老不死に通ずるものがあるのか？

「はい、おそらく、人間という不確定なものを、永遠にすることで安定した結果を出せるようにするためと現在推測しています。もしくは、黒き月というもののそのものを行使する根本的な目的を左右する……」

「わかったから、もうよい。お前は熱が入ると数時間は話し続けるとりあえず研究は許可するが、兵器を製造する権限全てはこっちに預ける。それが出来るのはシェリーからの報告から聞いている。」

一回目に、例の区画から出てきたときに7時間かけて報告したことである。

聞いたのはほぼ全てシェリーである。

本人はフラフラになりながらも、何とか要点を理解してその足でエオニアの元に報告へ向かったのだが、逆にエオニアに心配されてしまった。

というエピソードが残っている。

「ええ、了解しました。それではまた数年後に。」

「くれぐれも、余に剣を向けるなど考えるではないぞ？」

「わかっていますよ。」

そう言って、カマンベールは通信を切った。

エオニアはそのまま、しばらく通信ウィンドウのあった虚空を眺めていた。

場所は戻ってエルシオール ブリッジ

現在ダンスパーティーの真っ最中。

ラクレットはレスターと雑談していた。

「そういえば、レスターさんはタクトさんの下に再配属なんですか？」

「ああ、そういうことになる。」

現在、エルシオールにはダンスパーティーに参加しているメンバー以外すべてのクルーがいる。
しかし、新たな司令が配属されるまでは、特にすることは無く、穏やかな雰囲気の流れていた。
要するに暇だったのだ。

現にブリッジでも、職務に真面目で堅物で有名なレスターが、欠伸をしていたくらいだったのだから。

「僕はこのまま待機みたいです。クリオム星系は警戒網の真ん中ですが、星系間の物資の輸送には一切制限がかかっていないみたいです。」

「そうか、確かクリオム星系は、軍事力をほとんど持たない代わりに、半独立的な存在になっていたな。エオニアの軍隊には補給も必要ないから、放置というわけか。」

「ええ、おそらく軍事的な力が弱いので、星系の周りを囲んでいるだけなのでしょう。」

「皮肉な話だな、軍事力を持たないからこそ、平和が維持されているのか。」

「数百年前に、発展に尽力した指導者の思想がそのまま受けづかれているそつですよ。」

まあ、彼らの雑談は、雑談にはお堅い話であったが。

「副指令、雑談なんですから、もっと楽しい話をしましょうよ。」

「そうですよ。」

そんな二人の話が一区切りついたところで、アルモが話に割り込んできた。

それに同意するココ。

ブリッジにいるのは今この4人であった。

「むう、そうか？」

「ええ、副指令の学生時代の話とか聞きたいです。」

「ちょ、ちょっとココ!!」

ここぞとばかりに、レスターに話を振るココは、アルモの為という友達思いではあるのだが、本人の目もららんと輝いていた。
一応アルモも突然の話題変更にココを制してはいるが、彼女自身も興味津々であった。

ようは、一切のストッパーがこの場にいなかったのである。

ラクレット？あいつは、誰かのブレーキ役なんてできません。

「俺の学生の話なんぞ、タクトが馬鹿をやつて、それを俺がフオロ
ーしてただけで大して面白いような話ではないぞ。」

どこか遠い目をしてレスターはそういつた。

その科白にはどこか、一仕事終えた男のような疲れた雰囲気醸し
出しており、誰も詳しく追求することができなかった。

「それより、むしろお前らのほうはどうなんだ？」

「え？」

「私達ですか？」

急に態度を変えてこちらに質問を投げかけてくるレスターに動揺し
てしまった。

というより、レスターが他人に積極的にプライベートな話題を振っ
てくるという状況に、固まってしまったという所か。

「私達は、普通に研究をしていただけなので。」

「ハイスクール上がってすぐに、白き月に入つたとか。」

「あ、僕も飛び級しているので、友達もいないですし、そういうわけ何かストーリーがあるわけでもないです。」

なんというか、このブリッジに集まっているメンバーは普通の学生生活を送っているのか、特殊なのか、わからない様な者ばかりだった。

しばらくの間流れる微妙に気まずい沈黙。

そんな中、あるものが突然取り繕うように、口を開いた。

「に、にしてもあれですね、マイヤーズ司令は本当になんというか、女性にもてますよね。」

「そ、そうよね、今回のダンスパーティーもミルフィーさんを誘いに行く途中にランファさんに誘われたんでしたっけ？」

話題展開にはどうかと思うような内容ではなかったが、男共二人の反応は芳しくなかった。

一人は興味なく、もう一人は地味に懸念要因だがもうどうにもできないからだ。

「まあ、あいつは仕事の延長上でああなっているからな……。」

「僕としては、ミルフィーさんがお似合いだと思うのですが……。」

特に食いつくというわけではなく、再び沈黙が訪れる。

そして、その沈黙を遮るようにアラートが鳴り響き

惨劇が始まった。

トランスバール史にも長く残り、そして数々の人の心を痛めつけた
惨劇が

ダンシングクレイジーズ 3

「つく、どういうことだ！！総員に告ぐ！！第一次戦闘態勢だ！！」

「

突然鳴り響いたアラート、そんな中レスターは悪態をつきながらも冷静だった。

瞬時に脳内であらゆる可能性をシミュレートする。

「アルモ！！周辺の船と連絡を取りつつ、高精度レーダーを起動して周辺のサーチだ！！ココは司令部につないでくれ！！」

「「りよ、了解！！」」

エルシオルのレーダーは、現状の最新鋭の船の先を行っている。紋章機と共に、白き月から発掘されたかれた、このレーダーはエルシオルがココまでこれた大きな要因のひとつだ。

「各乗組員は、出航の準備……いや、それは終わっているのか。ひ

とまず各自持ち場に着け。」

話しているうちに落ち着いてきたのか、だんだん口調が落ち着いてきたレスターは、自分の右側で冷静にレーダーの解析画面を見つめているラクレットに向き直る。

「ラクレット、お前はエタニティソードに乗り込み待機だ。レーダーの解析結果次第では、先行して出撃の可能性もある。お前のエタニティソードならば、シャトル用の出入り口でいいからな。」

「了解しました。」

ラクレットは即座にブリッジから退出して全速力で格納庫へ向かった。

「ココ、繋がったか？アルモ状況は？」

「司令部は混乱しているようで、状況を把握していません！！」

「周辺の船も同じく、混乱しているだけです。アラートの原因は長距離からの砲撃だそうです。」

そうか……。とつばやくレスターはどこまでも冷静だった。彼は集中

するとだんだん冷静になっていくのだ。
急な事態にやや弱いという弱点はあるが、マニュアル的には常に満
点の答えを出せるのが彼の強みである。

「解析結果出ました！敵艦がファールゴから離れたところに待機して
いるみたいです。」

「一部の戦闘機などが先行し、奇襲したみたいですね。」

「こちらの戦力は？」

「それが、まだ全く対応できないみたいで。」

レスターの質問にココは顔を曇らせて答えた。
しかし、そこに通信が入る。

「副指令、僕が出ましようか？無人戦闘機相手に時間稼ぐのなら十
分に可能です。」

「アルモ、敵の数は？」

「4機です。」

「あいつらではなさそうだな。……よし頼んだ。そういうことならラクレットがでた直後に出港だ。」

「りよ、了解！！」

「ラクレット・ヴァルター、行きます！！」

ラクレットはそのまま出撃し、宇宙港の船の間を器用にすり抜けて最短距離で外に出て行った。

その直後にエルシオールが出港した。

「俺は一度タクトと合流しにパーティー会場に行く、この状況ではシヴァ皇子の安全が第一で、ファーゴでもっとも戦力の配備されているこの船に避難されるべきだ。シャトルを借りるぞ。」

「そ、そんな！！」

「出港しておいてあれだが、この船はエンジェル隊がいらないと意味が無い。だが、この船が出ればそれに続く船も出てくるだろう。」

そう言ってレスターはニヒルに笑った。

無断出港は軍機違反なのだ。
だが、エルシオールという、影響のある旗艦が出港すれば後を追ってくるものはいるだろう。

「だから、俺はいったん戻りあいつらをつれて合流する、なるべく安全な宙域で待機している。戦闘の指揮はアルモがとれ。」

「そ、そんな、無理ですよ副指令!!」

突然の指示にかなり狼狽するアルモ。

確かに、ココかアルモのどちらかがやらないとならないが、いきなり言われても困るのだ。

しかし、レスターは
そんなアルモの目を見つめてこう言った。

「大丈夫だ、お前ならできる、俺は信じてる。」

「……え？」

「いままでずっと、俺はお前（の仕事）を見てきたが、お前ほど最高の（仕事のできる）奴はいなかった。」

「……………」

「だから、俺はアルモ、お前に頼みたいんだ。」

このやり取りを見ていたココは後にこう語った。

「もしかして、副指令は全部わかっていないのでしょうか？」

「

しかし効果は抜群だった。

アルモは狼狽しながらも了承していた。

本人も気づかないうちに。

「まあ、ラクレットなら4機の無人戦闘機にやられる訳が無い、増援が来たら教えればいい。本人にも時間稼ぎで言っているからな。」

そういつてレスターは全力疾走でブリッジを後にした。

ラクレットが最後の一機を右腕の剣で切り伏せる。

敵戦闘機は爆散し、宇宙の塵となった、それを確認したラクレットは、通信で報告する。

「敵機撃墜！！周囲に敵影なし！！」

「お疲れ様、ひとまず待機してください。」

ラクレットはその声に一息つき、背もたれに身を預けた。

最近彼が気づいたのだが、『エタニティソード』は操縦に他の紋章機より体力を使う。

一々的に接近しなければならぬのと、性能がピーキーであることもあるが、何より大きいのは機体特性だ。

カマンベール曰く『エタニティソード』は、適正者がいるとは思えない仕様に成っているという。

紋章機を操縦できるのが第一条件なのは当たり前なのだが、それに加えて機体を手足のように扱えなければならないのである。

他の紋章機には自動ロックオンシステムなどもついていて、操縦はかなり簡略化されている。

もちろん狙いを定める必要はあるし、『ナノマシン』や『フライヤ

」』のように操作に特殊なスキルが必要な場合もあるが。しかし、エタニティーソードは機体制御をしながら攻撃をしつつ、剣へのエネルギー分配の調整もしなければならぬ。

ラクレットはそれがなぜかできるのだが、通常ならかなり長い期間の訓練が必要だ。

彼はそれらの操作を無意識で思考操作しているのだ。

しかし、それはかなりの集中力を必要とする作業であり、長時間の戦闘はパイロットに負荷がかかってしまうのである。

例えるのなら、適正は低いものの短時間なら最高の性能で動ける機体とパイロットといったところか。

次の課題はそれだなと頭の中でつぶやき、ラクレットはココに状況を尋ねた。

「現在、こちらはどうなってますか？」

「港にいた戦力の6割は宇宙港から出て、ファークゴを守るように陣を引いているわ。残りはようやく出たらしい指示に従って、今宇宙港から出ようとしている所ってとこね。」

冷静に状況を説明するココは、すでにこの仕事においてはプロのレベルであった。

ラクレットはそのまま質問を続ける。

「副指令からの連絡は？」

「いまシャトルが宇宙港から出てこちらに向かっているわ。どうやらシヴァ皇子も一緒にみたいだね。」

「そうですか……エンジェル隊の皆さんの出撃まで十数分のところですか。」

ラクレットは気を引き締める。

おそらくもうしばらく戦闘は無いと思うが、彼女達が来るまでは自分一人で持たさなければいけないのだから。

ふとコックピットの右側に見える衛星都市ファーンゴが目に入る。しばらくそれを眺めた後、再びラクレットは前を向いて戦闘に備えた。

「ラクレット、お疲れ様。アルモも後の指揮はオレが取るから。」

無事エンジェル隊の面々と合流することに成功したラクレットはひとまず胸をなでおろした。
ブリッジにもタクトとレスターが戻り、万全の体制となったのである。

「よし、エンジェル隊出撃！！目標は、現在こちらに接近中の敵艦隊だ！！」

「『『『『了解！！』』』』」

エルシオールから、5機の紋章機が出撃する。

実は外からこれを見るのが初めてのラクレットは、内心感動していた。

別に原作云々ではなく、純粹にかっこよいと感じたからである。
なんせ、500メートル近い巨大な戦艦から、全長数十メートルの紋章機が5つも出てくるのだ。

「おつかれさん、あとは私達に任せときな。」

「遅れてごめんね、ラクレット君。」

「私達が来たからには百人力よ！！」

「お手柄ですわね。」

「治療します。」

出撃の光景に呆けていたラクレットは、全員から通信が入って初めて、自分の周りをエンジェル隊の面々が固めているのに気づいた。周りを緑色の光が包み込み、機体のステータスが瞬く間にグリーンになってゆく。

「皆さんありがとうございます、僕はまだ行けます。」

一度自身の頬両手でたたき、気合を入れなおす。

まだ戦闘は始まってもないのだ、こんなことで疲れていたらだめだ。と自分に言い聞かせてタクトからの指示を待つ。

「よし、ラクレットはまだ行けるみたいだから、ランファと二人で

それぞれ左右から回り込んでくれ。ミルフィー達は敵前面部の火力が左右にそれたタイミングで撃破していくつもりで。」

「おい、タクトそんなアバウトな作戦で良いのか？」

怪訝な目でタクトを見るレスター、作戦がすごくアバウトなのはいつものことだが、この大事な局面でそれはどうかと思ったのだ。しかしそれに対してタクトはいつもの調子で答える。

「だって、司令部からは、『シヴァ皇子を守りつつ、可能な限り敵を破壊せよ。』としかないし、友軍は勝手に戦ってるみたいだから、オレも臨機応変な感じでさ。」

問題ないよね、ミルフィー？
と通信で話すタクト。その様子にレスターは苛立つを抑えつつタクトを急かすのであった。

「ああー！！ハイハイわかったから、とつとと指揮を取れ！！」

「了解。」

そのいつものやり取りを見て、とても頼り強く感じるココとアルモだった。

「なかなか頑張るではないか、エルシオール。」

「エオニア様、そろそろ。」

「ああ、わかっている。奴らに見せてやろうではないか、余が手に入れた力を。」

それは、タクト達が周辺の敵艦をあらかじめ片付け、別の宙域の応援に行こうかというタイミングだった。

突然周囲の敵艦が進路を変え後退して行ったのである。

不審に思うレスターと、いつもの嫌な予感がするというタクト。

二人が何か言うより前に、ココが悲鳴のような声で叫んだ。

黒き月に超高エネルギー反応！！

「ノア、頼んだ。」

「わかったわ、お兄様。」

緊急回避だ！！

そうタクトとレスターが叫んだ。

その声に反射するように舵を取る。
エンジェル隊の面々とラクレットも斜線と予想されるところから退避する。

その刹那

黒き月から数百メートルはあろうかというビームが照射された。

そのビームはエルシオールをぎりぎり逸れたが、そのまま真っ直ぐファールゴを貫通し、ローム本星に直撃した。

数億の命の炎が消えたのだ

光の天使達と永遠の剣士 前編（前書き）

なんか最近アクセス数が増えてるみたいで、作者としても大変嬉しいです。
では、どうぞ

光の天使達と永遠の剣士 前編

光の天使達と永遠の剣士 前編

「ひどい……」

「そんな……ファীগが!!」

「外は宇宙空間なのよ!!あんな大きな穴が開いて!!爆発があったらどうなっちゃうのよ!!」

「……人が……！……助けないと……！」

「無理だよ、この距離とか時間とか、そういうのじゃなくて、そもそももう……」

黒き月から照射されたビームはファীগに大きな穴をあけ爆発させ、そのままロームの地表に当たりさらに大きな爆発を起こした。ロームのほうの被害範囲は不明だが、目の前のファীগからは、豆粒のような大きさに見えるモノ　人が宇宙空間に投げ出されている。

当然彼らが助かるすべなど無い。

人は大気も無く壮絶な温度差のある宇宙空間に生身で生存することなどできないのだから。

「……………タクト」

悲痛な面持ちでそういうレスター。

自分の名前を呼ぶその一言にこめられた感情を感じ取りながらタクトは口を開いた。

「……………オレはいままでどこか甘く考えてのかもしれない」
顔は下を向いていて、表情は前髪に隠れて見えないが、声色で彼の表情を予想することは、ブリッジメンバーおよび通信を聞いている者には容易かった。

「エオニアだって、もともとは皇国の人間で、すでに復讐の対象である王族はその手にかけているんだ、そんな酷い事はしないんじゃないかってさ……………でも、その結果が

これさ」

タクトを責める者は誰もいない、誰もこんな事になるだなんて予想していなかったからでもあり、彼の声に込められている感情を読み取ったからだ。

「…………タクト、司令部との連絡が途絶えた。緊急時の取り決めどおり全艦隊の指揮権を得たが……………すでにこちらの損耗率は3割を超えているそうだ」

今の砲撃も含めてな　と最後に付け足すレスター。

「黒き月から、未確認の物体が現れました。形状から予想するに攻撃衛星の類かと思われます!!」

敵の増援、しかもこのタイミングで新型の情報を報告するアルモ。

次々とする絶望的な情報。

皆の表情にだんだんと絶望的なそれが現れる。

しかし、この状況でも一人いつもと変わらない者がいた。

「タクトさん、指示を。僕は何をすればいいのですか？特攻してあれを落としてくれれば良いですか？」

ラクレットである。彼はひたすら無表情で淡々とそう言ったのである。

「それともエオニアの母艦ですか？黒き月ですか？あなたの指示が遅れるほど秒単位で人が死ぬんです。早くしてくれませんか？」

いつもの彼と違う言い様とその雰囲気、若干飲まれる面々、しかしタクトはその言葉で我に返ったのか、指示を飛ばす。

瞳にはまだ少々弱い、いつもの不屈にして不敵な炎があった。

「全艦隊に通達。残存勢力はファールゴ周辺にて敵を迎え撃て、生き

残ることが最優先だ。戦闘行動が不可能な船は、ロームの反対側に
一先ず回避しろ」

「エルシオール各員に告ぐ、これよりエルシオールは敵新型攻撃衛星を落とすにいく。この位置からだとな型までの戦闘は起きないと思うが、大変危険な任務であることには

変わらない、総員覚悟を決めて、俺に命を預けてくれ」

「そういうことですので、よろしいでしょうか？シヴァ皇子？」

「う、うむ。この位置から撤退するのは無理だからな。それしかないであろう」

ここまで言っただクトは一息つきエンジェル隊に向きなおる。
その間にレスターは、アルモに指示を出し、攻撃衛星の解析と最善のルートの探索をさせていた。

ココも先程のタクトの指示を打点している。エルシオールブリッジメンバーはあの絶望から抜けたのだ。

「みんな、俺たちがあれを倒せば、味方も希望を持てるし、状況も良くなる。毎度のごとくハードな任務だけど。エンジェル隊ならできるよね？」

そう言ったタクトの表情は、いつもの笑顔であり。エンジェル隊のメンバーも我に返った。

そう、自分達のリーダーはまだやる気だと、認識したのだ。

「それじゃあ、命令だ、敵攻撃衛星を破壊せよ!!」

「「「「「了解!!」」」」」

「了解」

エルシオール 希望はまだ消えてなかった。

「ミルファイアは、ハイパーキャノンで敵攻撃衛星Bの方向に後2400移動したら撃つてくれ！！ランファ、ラクレットの二人はそのまま攪乱を続けていてくれ」

「了解です！！ハイパーキャノン！！」

「ちょっと！？ミルファイヤー撃つの早いわよ！！まだ1400しか移動してないじゃない！！」

「大丈夫、ミルファイヤーが早く打つのも考慮して指示を出したからね。この場合は……フォルテ目の前の敵を止めを刺したら右の敵攻撃衛星Fにストライクバーストを頼む。ミ

ントは敵攻撃え……長いから敵Cを相手してくれ。ヴァニラはそのまま攻撃を受けないように注意しつつ敵Hを」

「了解だよ。にしてもタクト、えらく頑張るねえ。この後反動で1週間くらいまとものに仕事しないんじゃないかい？」

「了解ですわ。あら、タクトさんがまとものに通常の職務をこなしていた時期なんてありましたっけ？」

「了解です。……副指令頑張ってください」

「ありがとうヴァニラ。だが、それは俺が働くこと前提になっているのだが」

戦闘は苛烈を極めた。しかし、包囲網を抜ける時の圧倒的な数に囲まれたときよりは幾分もましだった。

その証拠に、通信にいつもの軽口……むしろいつも以上の軽口が飛び交っていた。

「コネクティッドウィル撃てます」

「じゃあ、敵Iに頼む。そのまま破壊するまで攻撃をしてくれ」

「了解……『コネクティッド……ウィル!!』」

しかし、ラクレットだけはいつも通りどころが、普段より言葉が少なかった。

全くといっていいほど軽口を言わない彼にタクトは別に気にせず指示を出す。

現状彼は絶好調である上に、先ほどの黒き月の砲撃からこのような感じで、彼なりに思うところがあるのだとタクトは考えているのだ。

しかし、特殊兵装の発音だけはいつも通りだったが。

「あたしも行けるわよー」

「よし、ランファは敵Hの止めを刺したらヴァニラに補修してもら

っ
てくれ
」

「「了解
」」

その後エルシオールおよびエンジェル隊は獅子奮迅の勢いで敵を殲滅し、味方艦隊に希望を取り戻した。

「くっ！？シヴァめまだ邪魔をするか」

当然それを面白いと感じないのが、エオニアである。

別にあれが戦力の大きな部分を担っていたわけではないが、それでも損害は損害だ。

洒落ではなく、無尽蔵に無人艦隊を作れるのだが、時間と材料は必要なのだ。

あの人工衛星は、他の船の指揮を取れるようになっており、地味に他の有象無象の船よりコストが高いのだ。

「お兄様、あの艦と紋章機が邪魔なの？」

「ああ、そうだよノア」

妹にでも接するように優しい声色でそう声をかけるエオニア。

それを見て、若干不機嫌になってしまふ女性がいるのだが、本人を含め誰も気づかない。
自覚がないって怖い。

「ノアに任せて」

するとノアはそんなの簡単よ、とでも言いそうな顔でそう答えた。

その瞬間光のようなものが黒き月から発生した。

それに触れたあらゆるものは機能を停止した。

クロノストリングエンジンの機能が停止したのである。

エルシオールと6機の紋章機は黒き月の前で立ち往生してしまったのだ。

「どうした！！状況を説明しろ！！」

「ク、クロノストリングエンジン……機能……停止しました」

エルシオールの中は混乱していた。メインサブ両方のクロノストリングエンジンが停止しているのだ。

「味方はどうなっている！！」

「それが、味方が戦闘中の敵艦隊も停止しています。ですが、正面の黒き月およびその付近の敵艦は停止していません」

味方は敵の稼働中の戦艦の射程にはひとまず無いことに安堵しつつ。この現象の理由を考えるレスター！。

敵艦隊の一部が停止しているのは、この『ネガティブクロノフィールド』のキャンセラーを積んでいないからだ。

『ネガティブクロノフィールド』の使用する可能性を考えていなかったのも、製造段階で搭載していなかったのである。

エオニアの周囲の高性能の艦には搭載してあったのだが。

もつともそんなことなど知るはずも無いレスターは、絶体絶命なこの状況の打開策を頭を高速で回転させ模索する。

「敵艦から砲撃！！直撃来ます！！」

追い討ちをかけるように始まる敵の攻撃。

シールドもいつもよりかなり出力が落ちているのだ。

被害は想像したくも無いのだが、現実に関起こっているのだ。

「総員対ショック姿勢！！」

その声と同時に、エルシオールに大きな揺れが走る。

「きゃあああ！！！！」

もちろん紋章機のほうもそうだ。

動くこともできず、シールドも半減どころの話ではない。

「ラッキースター出力低下！！タクトさん！！」

「だめ！！カンフーファイターが持たない！！」

「損傷率40パーセントを超えました。非常に危険です」

「つく、動いてくれハッピートリガー！！」

「トリックマスターも応答しません」

次々に聞こえる、エンジェル隊の報告。

どれもこれも絶望的だ。

このままでは数分と持たない、そんな緊迫感が伝わってくる。

タクトは決断を迫られていた。

「このままじゃ……もう」

「おい！！タクト、どうするんだ！！」

普段は冷静なレスターが声を荒げる。彼もこの状況で相当にきているらしい。

皆から伝わる、諦めや絶望の雰囲気。

司令官であるタクトを見つめている。

「もうだめです。……タクトさん」

「タクト……」

「タクトさん……」

「タクト、もう限界だ」

「タクトさん……このままじゃ持ちません」

エンジェル隊も全員が羽をもがれてしまっている。

そう絶望的で、最悪な状況だ。

四面楚歌で絶体絶命。

助かる見込みなんて微塵とない。

聞こえる音は、被害報告と爆発音だけ。

視界は暗くうすばんやりとしか隣にいるレスターの表情すら見えな
い。

だが、タクトは

タクト・マイヤーズは諦めていなかった。

「……………皆諦めちゃだめだ!!」

タクトはそう叫んだ。

「ここで諦めてどうするんだ！！ 自分たちの力を信じる！！ 最後の最後まで！！」

皆がタクトの声に耳を澄ませている。

ラクレットだけは、コックピットのキーボードにひたすら何かを打ち込んでいるが。
そんな様子を横目で見ながらタクトは思いの丈を咆哮する。

「ここまで来たんだ、オレ達は！！ 絶望なんて、不可能なんて、そんなものが無いって証明し続けてきた君達が！！ 諦めてどうするんだ！！」

「君達は希望を運んできた天使だ！！ だから絶望なんてそんなモノ！！ 不可能だなんてそんな壁！！ 全部超えてしまえ！！」

その時何かが変わった。

天使たちの心に、青年の声が届いたのだ。

「そうだねえ、ここで諦めてたまるか」

いつもの調子で帽子を直しつつ、足を組み替えてそう言う紅髪の天使

「せっかく今日までがんばって、今諦めたらすべてが無意味ですわ」

強い眼差しで操縦桿を握り直して、同意する薄蒼の天使

「私たちが倒れたら、次はもっと多くの人たちが犠牲になる」

祈るように目をつぶりそう呟く緑輝の天使

「ちっぽけな命だけど、あんな得体の知れないものにくれてやるほど安くないんだから……」

挑むように睨み、思いを叫ぶ黄金の天使

「絶対に……絶対に負けません」

決意を新たにし、そう宣言する桜色の天使

5人の天使が一人の青年の言葉で思いを一つにした。
ならばその天使は奇跡を起こさない訳がない。

その願いは天使達に新たな翼をもたらしたのだ。

5機の紋章機は純白の翼を授かった。

宇宙という空を飛ぶための翼に、
少女^{てんし}達が願い生まれた翼に

行けない《飛べない》場所など

ありなどしない。

「！！エルシオール、全システム回復しました！！」

その翼は青年の乗る舟にも加護をもたらした。

「システムリミッター解除、『エタニティーソード』フルドライブ」

そして天使を守るべく、永遠の剣士は、漆黒の翼を開放した。

光の天使達と永遠の剣士 後編

光の天使達と永遠の剣士 後編

「すごい……」

「綺麗……」

5機の紋章機に囲まれているエルシオール、ブリッジの外部スク

リーンには、純白の羽が降り注ぎどこか幻想的な風景が映し出されていた。

「戻っただと！？ あーもう、わけわからん！？」

そう言いつつも顔が笑っているレスター。

自身でも不謹慎だとわかっているのに、直さなければいけないのが緩んだ頬が治らないのだ。

「すごい！！ラッキースターの出力戻りました！！」

「カンフーフাইターのパラメーターが書き換えられて………これなら！！」

「トリックマスターの性能が格段に上がっています」

「羽が生えて、強くなったみたいだ。理屈は知らないけど、有難いね！！」

「なぜだかわかりませんが、機体ステータスが回復しています。オールグリーンです」

翼が生えたことに感動し思い思いの感想を漏らすエンジェル隊。彼女達の中は今、万能感とでも言うか、何でも出来そうに感じるもので満たされているのだ。

「『エタニティーソード』の性能も上がっているのか？」

レスターは先ほどから最低限しか口を開かないラクレットに問う。
しかし、ラクレットの反応はまたしても事務的で必要事項しか言わなかった。

「はい。エンジン出力が格段に増大しました」

表情はひたすら無表情。いつもの彼とは本当にかけ離れているその姿に思うところはあがあるが、戦闘に支障はなさそうなので特に指摘しないレスター。

そして、タクト右手を前に伸ばし叫んだ。

「理由など知らんが、とにかくよし！ 反撃開始だ！！」

了解！！

「了解」

少し離れた位置にいるエタニティーソードからは他の紋章機とは違う色の翼が生えていた。

彼だけはクロノストリングエンジンが回復した瞬間に、かけていたリミッターを外しただけである。

その翼の色はほとんど黒といって差し支えないレベルの藍であり、彼の機体の色であった。

5つの白の中でその黒色は、異様に目立っていた。

「すごい、すごい、すごいー!!」

ミルフィューは自分の相棒であるラッキースターの動きに感動していた。

彼女はエンジェル隊の中では操縦技量という面から見れば最も下に
いる、しかし彼女自身の幸運や、機体の性能を含めればチームの主
力となる実力なのだ。

タクトやレスターは『不安定だが強力だ』と前に彼女のことを評し
た。

そして今の彼女は絶好調であって、トップギアで、全力全快なのだ。

要するに。

「タクトさん、もう一機沈めちゃいました」

それはそれは、強かった。

いわゆる無双状態だ、タクトが若干引いてしまいうくらいに。

「……う、うん。じゃあ敵Cのほうを頼もうかな」

戸惑いながらも、とりあえず指示を出したタクトだが、それは無駄になってしまった。

「撃破！！タクト敵Cを撃破したわ！？『アンカークロー』の射程がすごい延びてるみたいなの！！」

ランファは、自身の特殊兵装の威力を改めて実感した。

今までは敵一隻に大きな被害を与えるぐらいだったのだが、そのまま、別の敵を攻撃にいけるほど強化されていた。

するとどうだろう。

イメージとしては。高威力の単体技が、範囲攻撃に変わったのだ、威力を落とさず、コストはむしろ安くなった上で。

ミルフィーが無双ならこっちは鬼畜的な威力だった。

「……えーとじゃあ、二人ともエルシオール近くの取りこぼしを頼もうかな……」

現在エルシオールの上に、シールドがほとんど削られた敵艦が4隻ほどいる。

それらは十分エルシオールの砲火で対処できるので、今まで特に破壊させる指示を出さなかったのだ。

しかし、タクトに言いたい。

それは、フラグだと。

「『フライヤーダンス！』」

凜とした声が通信から聞こえてくる。

その瞬間、21のフライヤーから器用にエルシオールや他の紋章機を避けるように、しかし的確に敵艦の機関部を狙い撃ちした攻撃が照射された。

フライヤー達は、器用に一発撃てば、別の位置に移動し別角度から攻撃した。

その間わずか10秒程度であったが、その間に弱っていた4隻はもちろん、2隻ほど追加で破壊した。

「申し訳ありませんタクトさん。特殊兵装を独断で使ってしまいましたわ」

にっこりと可憐に笑うミントのその顔に反省は無かった。

「あー、ちょっとミント、それ私達の獲物だったのに」

「あまりにもトリックマスターの調子が良くてついやってしまいましたわ」

わいわいと、賑やかな声が響くその通信からは、誰が戦闘（しかも先ほどまで絶望的だった）を行っていると想像できようか。

「ま、まあ判断としては悪くなかったし、そもそも特殊兵装を自分で使う事自体は問題じゃないから気にしないでくれ」

タクトはミントのお茶目（？）を責める事はできなかった。
元々、自分が特に指示しない時は自己判断で使って構わないと決まっていたのだから。

それより、オレどうやって仕事しようと考え始めていた。

しかし、それを遮る様にアルモが報告する。

「司令！！新たに終わった解析によると、現在『エタニティーソード』が攪乱している宙域の近く母艦のシールド値が平均的なものの

3倍ほどあります!!」

タクトはアルモが報告した母艦を地図上で確認する。
渡りに船だとタクトは思い指示を飛ばす。

だからタクト、それもフラグだ。

「よし、みんなあの母艦を落としてくれ。ミルフィーとミントは敵のやや薄い左から迂回、ランファはそのまま最短距離で……」

「その必要はないよ!!（ありません）」

その声と同時にフォルテの『ハッピートリガー』から圧倒的な数のミサイルが発射される。

特殊兵装『ストライクバースト』だ。

そして、丁度フォルテから敵母艦を挟んで反対側にいるラクレットがいつものように『コネクティッドウィル』の構えを取っていた。

「『ストライクツ！バースト!!』」

「『コネクティッドウィル』」

紋章機最高攻撃力を持つ『ハッピートリガー』全力砲火と、1000Mの長さの剣で何度も斬り付けられた敵母艦の運命など記すにも値

しないであろう。

要するに 爆殺！！ である。

「……………」

タクトはとりあえず一端戻って損傷箇所の修復をしたほうがいいんじゃないかと考えたらずぐに、ヴァニラが『リペアウェーブ』の使用許可を取ってくるんだろうな。と半分諦めたような頭で考えた。

「タクトさん…… 敵撃破しました」

しかし予想と外れ、撃破報告だった。ヴァニラにはいくつかの敵を相手に回避に専念しながら時間を稼ぎつつ攻撃しうるように指示を出していた。

しかし、いつの間にか敵はシールドのほとんどを削り取られていて、『ハーバスター』は損傷をほとんど受けていなかった。

現在スクリーンの地図に映っている敵は当初の20%ほどしかすでにいなかった。

レスターは、楽な仕事だな、タクトとでも皮肉を言つてやろうかと
も考えたが、あまりにも可哀想なので止めておく事にした。

「なぜだ！！なぜ動ける！！」

対するエオニアの陣営には動揺が走った。

ノアの発生させていたナニか（ネガティブクロノフィールド）によってエルシオールどころか全ての敵は一切の身動きを取れなかったはずなのだ。

「エオニア様！！エルシオールおよび、紋章機6機がこちらに急接近しています。残りの攻撃衛星で防衛線を構築していますが、圧倒的な速度で破壊されています！！」

「エオニア様！御指示を！」

オペレーターたちの悲鳴が聞こえる。

「つく……………撤退する。この艦および近衛艦、それと黒き月はクロノドライブだ。残りの戦線を維持しつつ後退だ」

悔しげに顔を歪ませてそう命令するエオニア。

先ほどのまでの余裕はもう無くなっていた。

「エオニア様、ここで引くのは懸命な判断でございます。すでに観測用の艦がデータを採集しておりますゆえ」

シェリーはエオニアの判断を肯定した。

敵の戦力の最脅威存在がさらに強化されたのだから、今になって初めてのことだから、意図的にそうしたものではないのだろうが、それでも一端引いて態勢を立て直すのは決して間違っていないのだから。

加えてここでの戦略目標はほとんど果たしているといつて良い。

後はシヴァの身柄の確保が殺害くらいだ。

エルシオールや紋章機は確かに脅威であるが、所詮は一隻の艦とそれに搭載されている戦闘機だ。

時間さえあればどうとでも出来る。

そう自分の頭の中で結論を出し、聡明なエオニア様のことだからすぐに気づくであろうとも補足した。

そしてその瞬間、艦の周りが一面緑色となり、クロノドライブに入った。

「つく、逃がしたか!!」

「紋章機の翼も消えちゃいましたしね……」

エルシオール一行は、もうすぐ射程圏というところでエオニアを取り逃がしていた。

それと同じようなタイミングで5機の紋章機の翼が消えてしまったのである。

『エタニティソード』はそのタイミングでフルドライブモードを解除したのだが。

クロノドライブの方向から推測するに、アステロイド帯がある宙域の手前であろう。

それはたいした距離ではなさそうだが、翼を失い戦力が元に戻ったときに単身で追いかけるのはあまりにも危険である。

とのレスターの言葉に従う形で、味方と合流しつつロームの反対側まで退避することになった。

「みんなひとまずお疲れ様。でももうちょっと頑張ってもらおうよ」

「ひとまず、損耗の激しい機体から順に補給を受けてくれ」

エオニアの無人艦隊の何割かはまだ動いていたので、味方と合流してもある程度の戦闘はこなさなければならぬからだ。

最も、撤退の旨は伝えていたので、第一司令軍のチョ・エロスン大佐の指揮の下に順次撤退しているのでそこまで骨を折る作業でもない。

敵もAIによって、一定レベルの損害を受けた船を撤退させており、そのうちすべて撤退するであろうから。

用はお互いが引くために戦っているのだ。

もう一頑張りとは言ったが、実際は先ほどの戦闘に比べればはるかに簡単なものだった。

だが

「次は、『エタニティソード』だ。ラクレットエルシオールにも
どれ」

「……そんな……でも……だって……僕は……ここが
……」

『エタニティソード』のコックピット画面に映っていたものは

ファーゴから押し流された
ヒトだったモノ

現状分析と現実認識

現状分析と現実認識

「おお、タクトにレスター。シヴァ皇子の警護ご苦労だった」

「ルフト准将！！」

あの後、ひと悶着あったが無事撤退に成功したエルシオールを待ち構えていたのは

死亡した可能性すら考えられていた、ルフト准将だった。

恩師の無事に当然のごとく顔を綻ばせるタクトとレスター。

「無事だったんですね」

「ハハ、そう簡単にくたばれんよ」

「それで、現状は？」

レスターが、言った言葉で急に二人の顔が引き締まる。
ただ再会を喜んでいられるような状況ではないのだ。

「現在、このロームを挟んでエオニアと相對しているわけだが……。
正直打つ手が無い」

「そうですか……」

「エロスン大佐も良くやってくれたのだが、全体的にこちらの数も
少なく、指揮系統もぼろぼろ。現在急ピッチで修復しているのだが、
どうにもな……」

ルフトの沈痛な面持ちに、レスターとタクトは言葉を失ってしまう。
予想以上に現状が酷かったのだ。

しかし、そこに割って入る者がいた。

「ルフト！―これからどうするのだ？」

「おお、シヴァ皇子よくご無事で」

シヴァ皇子だ。

皇子は、エルシオールが無事撤退に成功したと聞いて、ブリッジまで出てきたのである。

「そうですね。正直待つしか無いという所ですな」

「そうか……」

ルフトのその言葉に少し悩む仕草を見せるシヴァ。
しかし、すぐに考えを纏めたのか、口を開く。

「それでは、紋章機の翼の事をマイヤーズより聞いているか？」

「翼……ですか？」

ルフトはやや怪訝そうな顔でシヴァを見た。
まあ、紋章機という機械と翼という生物の言葉との繋がりがいい
ち、ピンとこないのであらう。

「マイヤーズ……いや、クールダラス説明を頼む」

「了解しました」

「いや……うん、なんでもない」

説明なら、レスターのほうが適任だもんな。と呟きつつ一歩下がる
タクト。

そしてレスターは先ほどまでの戦闘経緯の説明を開始した。

「ふむ、紋章機に翼が生えて、動けるようになったか」

「はい、おそらく艦が動かなくなったという報告は聞いていると思いますが、エルシオールはエオニアが撤退する前にすでに動けるようになりました」

レスターの説明を聞いて、頷くルフト。

だがふと何かに気付いた様な仕草をとり、タクトたちの方に向き直る。

「というか、タクト。シヴァ皇子を乗せている状況で、単独で敵に突撃したのか？全く無事だったから良かったもの……」

まるで、学生時代のタクトを叱る様な口調に、タクトは苦笑いを浮かべつつ、必死に機嫌を取るのであった。

レスターはその様子を口元を緩めてみていたのだが、途中で矛先が自分にも向き必死に謝るのであった。

その様子をシヴァとココとアルモは興味深そうに眺めているのであった。

「それで、その翼は消えてしまった、しかし紋章機の発見された場所の管理人であり、なおかつロストテクノロジーの権威でもあるシヤトヤーン様に伺うと」

「ああ、そうすれば紋章機が格段に強くなる」

「ふむ、ですが皇子エオニア軍はすでに本星の方に向かっていているとの情報があり、こちらの再編にはまだ時間が……」

「エルシオール単艦ならば、数時間の補給で動けるとクールダラスが申し立てた。我々だけ先行すればよいだろう」

シヴァの提案はこうだった。

紋章機の力を飛躍的に上げた翼を出せれば、エオニアのあのクロノストリングエンジン停止の術も無効化できると。

故にすぐ動けるエルシオールが単独で向かい、白き月にエオニア軍よりも先回りをする。

「…………もう、決めてらっしゃるんですね。確かにそれしか策が無いのも事実です。このルフト・ヴァイツェン、シヴァ皇子殿下の御命令に従います」

今までも、色々言ってきたが、こうなつた皇子は後に引かない。

皇子の命という掛け金さえ無視すれば、これ以上の作戦は無いとも言えるし。

なにより、強力なシールドを張っている白き月と連絡が取れるのは皇子だけというのだ。

ルフトは臣下としてシヴァ皇子の命令を聞くだけだ。

「ルフト准将…………」

「タクト、シヴァ皇子を必ずお守りしろ。レスター、タクトを補佐してやってくれ」

そこまで言うと、ルフトは一呼吸おき、二人を見つめる。

画面越したが、目の前にいるようなプレッシャーを感じ、タクトとレスターは背筋を伸ばす。

「それがワシからの、准将として、お前らの元教官としての命令だ」

「了解！」「」

タクト達が、ルフトから命令を受けている頃、エンジェル隊の全員は同じ場所にいた。

それはいつものティーラウンジ………ではなく。

医務室の前の扉だった。

ラクレットは、先ほど突然叫びだした後、意識を失ってしまったのである。

エルシオールからの誘導で帰還させ、コックピットから重たい彼の体を整備班の男性スタッフ二人で引き摺り下ろし、そのまま担架で運んできたのである。

エンジェル隊はそのまま順番に補給を受け、警戒任務務めたが、ラクレットはその間ずっと意識不明だったのである。

医務室に搬送された彼の様態は、特に外傷や頭を打ったわけでもなく命の危険があるわけではなかったのだが。

それでも、ミルフィーユとヴァニラは心配し皆を説き伏せて、医務室まで来たのである。

もつとも、ランファ達三人も別に行かないつもりは無かったのだが。

「大丈夫かなあ、ラクレット君」

「ミルフィー、あんたそれ何回目よ」

5回目の心配の言葉を漏らすミルフィーに、それを指摘するランファ。

ランファのほうは比較的いつも通りだった。

「そんなに、ラクレットのことを心配してるんじゃ、タクトが妬くかもね」

「ええ、タクトさんはあれでも嫉妬深そうですからね」

なるべく、雰囲気暗くならないように軽口をたたくフォルテとミ

ント。

彼女達もあまり変わりはない。

ちなみにヴァニラは、先程の戦闘で出た数名の軽傷者の治療をしているので、医務室の中にいる。

「にしても……」

会話が途絶えたところで、ランファが呟く。

3人の注目がランファに集まったのだが、彼女は続けない。

「にしても、何ですか？」

ミントは自分の能力を使わなくてもなんとなくわかるのだが、先を促した。

ランファはそれに反応しようやく口を開く。

「どうして、あいつは倒れたのになって思っ

それは皆が考えていた事だ。

単純に体力の消耗？ 確かに『エタニティソード』はスタミナが必要だが、今までもっと長い戦闘をしたこともあったが、倒れるまでもなかった。

怪我か頭でも打ったが？

外傷は無いとききほど話しているのが

聞こえた。

それに

「あんな、大声で叫ぶあいっなんて見たこと無いわよ」

ラクレットは、何かを呟いた後にいきなり叫び出したのだ。
そんな理由聞いたことが無い。

「何かを悔いている様な文句だったと整備班の方々は仰っていましたわ」

「ああ、ずっと自分を責めていたようなことを呟いていたとも聞いたよ」。

フォルテとミントは、少ない情報から理由を考察しようとするも、
やはりそううまくはいかない。

しかしそのように彼女達が話していると、目の前の医務室のドアが
開きケーラが出てきた。

エンジェル隊の姿を見つけると、予想通りだという表情を浮かべて、
入りなさいと声をかけて、再び中に入っていた。

エンジェル隊はそんなケーラの後に続くのであった。

「彼が倒れた原因だけど、単純に心に負荷がかかった……ようは強いストレスを感じたってわけよ」

カーテンで仕切られて、ラクレットが眠っているベッドの前でケーラの話を合流したヴァニラと共に聞いているエンジェル隊。
ケーラは、全員の視線を受けつつ解説を続ける。

「ラクレット君のバイタルデータ、戦闘中はフラットだけでも、戦闘終了直後からだんだん乱れてきて、ある一点で振り切れていたの」

「ようは、戦闘中は無理やり押さえつけていたのが、戦闘終了と共に開放されたと言う所かしら」

そこまで続けて、ケーラは一端言葉を切る。

「ある一点ですか？」

ミルフィューは、そのタイミングで先程のケーラの言葉で気になったところを質問する。

ケーラはその質問を待っていたのかのように、話を再開した。

「ええ、そうよ。そのタイミングに彼が見ていた映像があるの。さつきクレータから渡されたわ」

ケーラはエンジェル隊の方へと向き直る。

その表情からは真剣な思いが伝わってくる、エンジェル隊の面々は軽く身構えてしまった。

「それが……これよ」

その言葉と共に、壁にはめ込まれたスクリーンに映像が流れ出す。

「これは……」

「……」

「ファークの……」

映像に写っていたのは、宇宙空間を漂うファークの人々だった。

「推測だけど、彼　　ラクレット君は人々が死んでしまったことに何かしら強いストレスを感じた。もしかしたらそれは彼の心理的

外傷後ストレス性障害に関わるのかもし

れないし、単純に圧倒的な数の死に対してもかもしれない。とにかく、私はそう考えているわ」

やや悲しそうな顔のままそこで話を終了させ、自分のカップのコーヒーに口をつけるケーラ。

エンジェル隊はそのままラクレットのいるベッドをカーテン越しに見つめているのであった。

「ここは、どこだ……………」

ラクレットが目を覚ますと、自分が何か柔らかいものを枕にして寝ていることに気づいた。

気になって上体を起こしてから振り向くと、そこには

「枕だ……………」

自分の使っている枕よりも柔らかい、低反発の枕があった。
彼の四畳半の和室には布団も枕も有ったのだが、間違ってもこんなに高そうな低反発のものではなかった。

寝起きからいきなりよくわからないことになっているなと思いつつ、自分がなぜいつもと違う枕で寝ているのかを考える。

ふと、周りを見るとカーテンで囲われていて、さながら病室のようだなと思う。

さらにかすかにコーヒーの匂いを感じる。

「あゝ？どこだ……？」

コーヒーの匂いのする病室ってどんなだよと思い、さらに混乱する。

とりあえず、素足のままベッドから降りてカーテンの向こう側に行くことにする。

「なんだあ……本当に病室……っ！か処置室みたいだな」

部屋には誰もいなかった。

初めて見るはずなのに、すぐく既視感を感じる光景に唯でさえボーとしていて、頭痛すら伴う頭が輪をかけて鈍る。

よくわからないけれど、ここには居たくないと感じたラクレットは、近くのドアから外に出るのであった。

「どこだよ……ここ……っ！か、なんだよこれ」

素足のまましばらく歩くと、自分の格好が学校の制服であることに気づいたラクレット。（陣羽織は医務室）

自分は既に高校を卒業したし、その高校のデザインとも違う制服に戸惑いつつも脱ぐことも出来ずそのまま探索を続ける。

廊下はどこか近未来的な雰囲気醸し出している。

天井の照明は落ちていて、足元の非常灯のみがボウと光るのも、要因の一つか。

「SFかよ……」

全く見覚えが無いはずなのに、なぜか足は迷わず進む。

どこかを目指しているみたいだが、自分でもわからない。

それでも、とりあえずそのまま足に任せて進むのであった。

「マ、マイヤーズ司令!!」

タクトは、つい先ほど明日の朝一で出発する為の準備を終わらせて、

眠ったばかりであった。

しかし、そんなタクトはアルモの通信で起こされた。

「なんだあ……アルモ」

「それが……ケーラ先生が少し席を外した間にラクレット君がいなくなっちゃったんです……！」

「……は？」

アルモの焦った声をどうにか理解しようとしたのだが、どうにもうまく行かないタクト。

そんな様子に焦れたのか、画面越しのアルモの左から、レスターの顔がぬつと出てきた。

「起きろ……タクト、ラクレットがいなくなった。艦内のカメラの映像を追おうにも、先ほどの戦闘で半分ほど動いてない。だから完全に行方不明だ」

数年来の親友の声に、意識を覚醒させるタクト。
眠い頭だが、次第に事態を理解する。

「起きて、自室に戻ったんじゃないのか？」

「ケーラ先生曰く、靴もトレードマークの陣羽織もそのままに
な

「消息不明になって15分経ちますが、ブリッジに報告も来ていません」

交互に喋るアルモとレスターに段々と頭が冴えて来る。

「わかった、とりあえずいったんブリッジに行く。少し待っていてくれ。その間にも監視カメラの映像のチェックと、夜勤スタッフへの連絡を」

「何で海があるんだよ……」

ラクレットが何かに導かれるままに入っただのは、彼の主観から言えば海だった。

潮の香りが漂う波打ち際、波の音が聞こえ暖かい空を感じる。此

処ははさながら南の島かと思っただくらいだ。

「うわ、クジラが潮吹いてるよ。どこだよ本当に」

そんな風に彼が一人佇んでいると後ろから、一人の少年が歩いてきた。

なぜそんなものを察知できるのかわからないが、ラクレットはとりあえず振り向いた。

「……来ましたか。宇宙クジラがあなたを呼んでいましたからね」

「……………クロミエ？」

「はい、クロミエですよ」

ラクレットは、なぜか自分でも知らないうちに目の前の少年の名前を当てていた。

自分で、先程からどこかおかしい自分に疑問を持ちつつも『クロミエ』を見る。

「それにしても、宇宙クジラも無茶をします。ここに呼ぶために一時的に記憶を封印するとは。まあ、ラクレットさん相手じゃないと出来ませんけど」

「何を言っているんだ？」

「……わかりました。宇宙クジラは今からあなたの記憶を戻すそうです。でも実感は持たせないそうですよ」

「だから、何を言っている！！」

目の前の『クロミエ』の意味不明な言葉に反発するラクレット。

しかし、そのまま何をするでもなく、頭の中に映像が入り込んできた。

それは、今までの自分の14年間の記憶。

「状況は!!」

タクトがブリッジに入って発した第一声はそれだった。

あたかも戦闘に望むようなその声に一同は即座に反応を示す。

「それが、相変わらず消息は不明で……」

「夜勤スタッフも目撃していないそうだ……」

芳しくない報告にも変わらずタクトは表情を変えずに指示を飛ばす。

「それじゃあ、エルシオールのこと1時間の夜勤パトロール順路を外した通路で15分以内にある個人の部屋ではない部屋は何箇所あるか調べてくれ」

「了解しました」

「レスターはここで待機してくれ、何かわかったらすぐオレに」

それだけ言うつとすぐに踵を返すタクト。

その姿に一瞬引き止めるべきかとも思ったが、これが適任かと思い
レスターは思い止まった。

「クロミエ、なんなんだよこれは」

たった数時間の間に記憶を直してまた戻すなど、よくわからないことになっているのだ。

目の前のクロミエを睨みつけるラクレット。

しかし、そんなラクレットの視線を受けてても全く表情を変えず、薄い笑みを浮かべているだけだった。

「貴方は、先程自分で耐え切れなくってしまったのですよ」

「だから、なんだよ！！確かに気絶したけどそれは！！」

心当たりのある言葉に強く反発するラクレット。

今はなぜか平気だが、先ほど自分は意識を失ったのだ。

理由は自分でもわかってはいるのだが。

「テレパシストでは読めなくとも、宇宙クジラが読めないなんて、誰が言いましたか？」

「っな！！」

その言葉に一瞬完全に思考を停止させてしまうラクレット。

今まで立っていた場所が崩れてしまったような錯覚すら感じる。

しかし、そんな彼を再び我に戻したのは、突き崩した本人だった。

「まあ、通常宇宙クジラが読めるのは、感情や心の動き程度ですけれど」

「……おい」

くすりと笑いながらそう言うクロミエにラクレットは完全にペースを乱されていた。
少しは反撃しようかと、口を開こうとしたところで、クロミエが再び衝撃的な（ラクレットにとっては）な話を始めたのでそれははばかられた。

「でもあなたのだけは特別で、読めるそうですよ？」

「……………」

彼がそう言った時、丁度壁や天井に映し出された夜空の月が雲の向こうから現れた。

クロミエの背後から月明かりが射し込み、表情はよく見えないが、どこか幻想的な雰囲気をかもし出して、ラクレットは一瞬声を出すことが出来なかった。

「それは置いておいて……………貴方はファールゴのことを知っていた。というより、今迄の起こる事全て知っていた。そうですね？」

「……………そうだが？」

話の流れを変えるように、立ち位置を変えながらラクレットに尋ねるクロミエ。

だが、追求の鋭さは変わらず、ラクレットは言葉を選んで返す。まるで詰問を受けているようだと感じつつも、もうこうなったらやけだと答えるラクレット。

「そして、今迄それをうまく使ってきたけど、ファールゴを知りつつも放置して、自分で後悔していると」

「……………そうだよ！！それで悪いのかよ！！人が死んじまっているんだよ！！」

クロミエの意地の悪い問い　少なくともラクレットはそう感じた　に逆切れするラクレット。
もはや、いつもつけている仮面なんて関係なく、怒鳴り散らしている。

クロミエはその様子を見ても全く表情を変えずに相変わらずの笑み

を浮かべて続けた。

「ええ、後悔しているならいいんじゃないんですか？それで」

「はあ？さっきから何なんだよ！！クロミエ！！」

もう訳がわからないとばかりに、クロミエを睨みつけるラクレット、彼からしてみれば全くもってはつきりしない態度で、何を考えているのかわからないのである。

クロミエは意地っ張りな子供に言い聞かせるようにラクレットに説いた。

「ですから、少なくとも今の貴方は、人の死を現実だと思っているから後悔しているんでしょう？」

「当たり前だろ！！ここはゲームじゃな！！」「ええ、貴方はゲームだからという理由で知っていることをそのまま適用したんですよ、現実なのに。どうしてゲームと一緒になるんですか？」

その言葉を待っていたのか、間髪いれずに反応するクロミエ。表情は相変わらずで、全く攻めるようなものが感じられないそれはラクレットを逆に不安にさせた。

ラクレットは自分で言うってから気づいたのだ、自分の言葉を

「それは……」

完全に否定できないことに。

今までの自分の行動はどうだ？

原作知識を使って、好きなようにやってきた。

ゲームに無かったイベントに立ち会ったことは？

毎日がお祭り騒ぎなエルシオールで自分は原作のイベントがあるとき以外はあまり出なかった。

皆がお茶をしている間、自分は一人で鍛えていたし、一般のクルーとも必要以上のつながりを持つことは無かった。

それは、何故なのだろう？

原作のイベント以外には価値が無いのか？

ゲームの登場人物だから、気に入った人以外はどうでもいいのか？
出てきていない人物など、気を掛けるに値しないのか？

「ゲームと同じだと思っていたのではなく、ゲームだと思っていた。
宇宙クジラも貴方がどこか物語を読むように、味わうように過ごしていたと言っていました」

「……………」

ああ、そうだ。

自分は楽しんでた。

この生活を自分の知識を利用して、エルシオールのカールとの原作イベントを。

自分が得た力で敵を蹴散らすのを。

それはきつと、この世界に生まれた僕が勝手に特権だと思っていたから。

君達を助けるのだから、自分は楽しむ権利があると。

「でも貴方は人が死ぬことを耐え切れなかった」

「当たり前だ！！死ぬか、死なないなら、死なないほうがいいじゃないか！！」

それが、ラクレットの本心だった。

自分はゲームの世界だとどこかで考えていた、だから止めなかった。ゲームの世界なら、人が死んでもいいけど、現実なら駄目なのに。現実なら、どんなに低い可能性でもタクトやレスターにルフト、それこそジードマイヤにでも掛け合って、先に避難させとけばよかった。

少なくとも、彼はそう出来る時間はあった。

だけどそれじゃあ、きつと無理で、自分のことを説明し無ければ不可能で。

加えてこの事件が起きなければ、エンジェル隊は成長しない。

だから止めなかった。

死なないほうがいいのに、死んでもらった。

死ぬことを知っていて、救う努力をしなければ、殺人だ。
ラクレットの中ではそう考えているのだ。

「ええ、その通りです」

クロミエは目を閉じて、腕を胸の前で組みそういった。

ラクレットは地面に膝をついてクロミエのことを見つめていた。

「貴方は弱い……いえ、優しい人です。だから苦しんだ。人が死んだことに。救えたかもしれないかったことに」

ラクレットは、人が死ぬことが嫌だった。

それは人としては当たり前前の感情であった。

たとえ、ゲームでも人には死んでほしくないのだ。

死ぬことは問題ないけど、誰にも死んでほしくない、そんな子どものような考えだった。

だから余計に苦しんだ、本当にわずかにでも救える可能性があったから、別に自分に責任があるわけではないのに。

「僕も宇宙クジラもそれを言っただけだった」

クロミエは、ラクレットに近寄り微笑んでそう囁いた。膝についているラクレットのほうが、クロミエより頭一つ分小さく、ラクレットは彼を見上げる形になった。

「貴方はこれからもきつと優しい貴方でいてほしいから、苦しむだろうけれど人を救うだろうと」

クロミエの本心だった。

ラクレットという人物の人柄を好いている少年の本音だった。

「クロミエ……ありがとう」

ラクレットは、この世界で出来た初めての親友に心からの感謝の言葉を述べるのだった。

クロミエはそんな彼の頭に手を置いて優しく撫でながら微笑むのだった。

「もちろん、貴方は結構欲塗れである事も知ってますけどね」

「……台無しにすんなよ」

そんな関係の二人であつた。

主人公が初めてヒロインに迫られる話（前書き）

今回から少しペース落とします。

主人公が初めてヒロインに迫られる話

「本当、ご迷惑をおかけしました」

クロミエが、クジラルームのロックを解除し、ブリッジに通信で伝えたため、ひとまず艦内のラクレット探しは終わった。

しかしながら、それによって夜勤スタッフの皆様や、その他大勢の人々に迷惑がかかったのは事実であり、ラクレットはとりあえず艦長であるタクトに謝罪をしたのだ。

「いや、無事だったならそれでいいんだよ」

「全くだ。今後あのような行動は慎むように」

ブリッジへクロミエを伴い出頭したラクレットは、レスターとタクトからそれぞれらしいコメントを頂戴したのだが。

「にしてもラクレット、なんか変わった？というか、体は平気なの？」

それはともかく、どこか今までとは違う雰囲気の子にタク

トは少し思うところがあるのか、軽くたずねる。

「はい、まあクロミエに諭されて心構えを少し変えたと言うか、そんな感じです。体のほうは、別に怪我をしていたわけでもなく、異常ありません」

胸を張って答えるラクレット。その表情は少し吹っ切れたようなもので、今までどこかにあった達観と言うか一歩引いたような何かはなくなっていた。

タクトはいい兆候だといいなと軽く結論をつけて、一応ケーラ先生に明日見てもらうようにと指示を出して、夜も遅いから二人とも早く寝なさいと告げて退出させたのであった。

そして、翌日

「今まですいませんでした」

そこには、朝食をとっている途中のミントに謝罪するラクレットの姿が。

「あのー……色々言いたいことはありますが、お体はもう大丈夫で
すの？」

困惑の表情を浮かべつつも、ミントは2つめのデザート『宇宙レイ
ンボーゼリー』をすくい上げようとしていた右手のスプーンを止め
てそう問いかける。

一応朝の放送でラクレットが無事退院したことは伝えられたのだが、
それでも昨日気絶した人間がこんなにも元気そうにしているのだ。

そんなミントに対してあくまで憑き物の取れたかのように爽やかな
笑顔でラクレットは答える。

もう一度言おう爽やかな笑顔だ。 これほど、彼に似合わないもの
は無いであろう。

どっちかと言えば、下卑た笑いとが、そこまで行かなくとも顔面神
経痛を引き起こしたような笑顔が似合う少年なのである。

顔はそこまで悪いわけでもないが中の下と中の中の間くらいの彼で
は、不信感しか与えないのだ。

「はい、体はもう全然。それよりも、今迄色々ご迷惑を掛けてし
まい申し訳ありませんでした」

「は、はあ」

あいまいな相槌を打つしか出来ないミント、誰かこの良くわからな
い人物から助けてくださいましと頭の中で電波を送ってみるが、悲
しいかなそれを読み取れるのはまさに彼女だけだった。

しかし、仲間の絆と言うのは時に理屈を超えるものなのか、そこに
救世主が現れる。

「あれ？ラクレット君だ。もう体は平気なの？」

「あら、ミルフィーさん助かり……いえ、おはようございます」

ミントに声をかけたのは、トレーにオレンジジュースとスクランブルエッグ、トーストを乗せたミルフィーユだった。

彼女はミントの向かいの席につき「おはようミント、ラクレット君」と返した。

その後「いただきます」と元気良く合掌しトーストに手を伸ばした。

それをミントとラクレットの二人はただ眺めていただけだったか、ラクレットが突然何かを閃いた様な顔をして、ミルフィーユに話しかけた。

「そうだ、桜葉少尉にも言わなければいけないことがありました」

「え？私に言いたいこと？」

ミルフィーユはオレンジジュースを飲み終えたタイミングでラクレットにそう返した。

「はい、ですがむしろエンジェル隊全員に言わなければならない事です……ですから、この後僕の部屋に来ていただけませんか？」

そこでラクレットは一端区切り、ミントの方を一瞬向いた。

ミントはとりあえず先程まで混乱していた頭から切り替える時間はあったので、今は冷静にラクレットの言動を考察していた。

『なんか怪しい。』瞬間的にそう結論が出た。

「エンジェル隊の皆さんは1時のクロノドライブまで特別予定は入ってなかったと思いますので、どうか11時ごろに皆さんでお越しただけでないでしょうか？」

その間にもラクレットは話を続けていた。

ミントは考える。なぜそこまで自分たちの予定を知っているかは別に不思議では無い。似たような所属だからだ。

だが今迄自分たちとあまり交流を持たなかった彼が、いきなり自室にエンジェル隊全員を招くなどと言い出せば、何かあるのではないかと疑ってしまう。

まあ、ラクレットが出来そうなことなどたかが知れているのでそこまで問題はないかもしれないとミントは結論付けミルフィューのほうを見る。

ミルフィューは、なにやら呟きながら考え事をしているようだ。

耳を傾けて見ると、「えーと、ランファは暇だと言ってたから良くて、フォルテさんはお茶会をするなら呼んでくれて言ってたからたぶん平気。ヴァニラはわからないけど……」とのことで、どうやら行くつもりの方である。

まあ、たまには良いでしょうかと結論付けミルフィューがこちらを見たタイミングでウインクをした。

「わかった。皆には私から言っておくね」

「はい、お願いします。それでは僕はこれで。お持て成しの準備をしなくてはいいけませんから」

ラクレットはミルフィューのその言葉を聞くと、すばやく席を立ちそ

の場を後にした。

ミントとミルフィーユはその背中を数秒見つめてから向かい合う。

「……なんか、変わったねラクレット君」

「そうですか？ 私には少々変だったとしか言えませんが……」

ミントはミルフィーユからの突然の言葉に少々驚きつつも自分の思ったことをそのまま伝える。

実際ランファさんやフォルテさんもきつとそういうでしょうねと思いつきながらであったが。

「うん、なんか前みたいに硬い感じじゃなくなっていたって言うのかな？」

「……そうでしたか？」

言われて見れば、何時もみたいに馬鹿丁寧ではなかったかもしれない。

何かあったのかと考えるも、一番有力なのが『昨日の怪我により頭を打った』だったのでミントはそこで考えるのを止め、食後の紅茶を飲みながらミルフィーユに付き合うのであった。

「お邪魔します」

「はい、どうぞ」

ラクレットはドアの開閉ボタンを押して部屋に招き入れた。

エルシオール内では通例、部屋の主がどうぞと言えば客が自ら進んで入るのだが、しばらく入ってこないの自分で開けたのである。

彼は現在キッチンに立っているため、様子を見れないが、話し声や足音から察するに5人全員来てくれたみたいだ。

思わず顔を綻ばせつつも、これから話すことを考え緩んだ頬を引き締める。

「あ、靴はココで脱げばいいの？」

「はい、それでお願いします」

ラクレットは玄関部に買ってきた水色のテープで境界線を引き、そこに自分の靴を並べている。

さながら前世での日本の住宅のつもりなのだ。

ちなみに、玄関で靴を脱ぐ風習は別にそこまで珍しいわけでもない。

「どうぞその辺のソファアーなりクッションなりに座ってください。いまお茶の準備をしていますので」

ラクレットの部屋は、エンジェル隊のソレよりは幾分か狭いが、それでも十分な広さを持っている。

現代日本で言うところの1LKにユニットバス付きといったところか。

カーテンで部屋を二つに区切り、奥側を自分の私室にしているが、今迄数度だけクロミエが来ただけのこの部屋は、正直あまり使われてなかった。

それでも絨毯がひいてあり、二人がけのソファ―とテーブルにがあるが、それだけだった。

彼の趣味であるジグソーパズルの完成品は、まだ自分のベッド周りに飾れるだけしかないのだ。

「意外と片付いてるじゃない……というか、妙に殺風景ね」

「男性の部屋ですから、こういうものではありませんの？というより、少年ですか」

「そついや、まだ14だったね。たまに忘れそうになるんだけどね」

「ラクレットさんの部屋初めて入りました」

「そついえばそうだねー」

「あら、ミルフィーさんもヴァニラさんも初めてなんですの？」

なにやら、早速何時もの空間を作り上げているエンジェル隊に若干苦笑しつつ、ラクレットはトレ―にお茶とお茶菓子（お手製）をのせてリビングに向かう。

「というより、クロミエ以外この部屋には来たことはありません」

ラクレットはとりあえずテーブルにトレ―を置くとソファ―に座るミントとフォルテの前に2つ、絨毯のクッションに座る3人の前にもそれぞれ3つのティーカップを置き自分の分は目の前に置き席に

着く。

ちなみに長方形のテーブルの短い辺のほうにラクレットが座り、そこから左側の辺にミルフィーユ、ランファ、対面にヴァニラで、右側のソファアーにミント、フォルテである。

「あ、これお口にあうか解りませんが、作ってみました。サーターアンダーギーって言って、甘くて食べ応えがあるんですよー」

ラクレットは、先程揚げてすこし覚ましておいたソレをテーブルの真ん中に置く。

彼は最近前世の記憶を頼りに色々作っているのだ。

理由はポピュラーなお菓子だとミルフィーユが既に作っているからだったりする。

もつとも、前世ではたいした料理も出来なかったので、このように簡単なものばかりだが。

それに一度作れば、ミルフィーユは自分以上の味でさらにアレンジも加えて作るのだからあまり意味は無いのだが。

それでも、珍しそうに自分の作ったサーターアンダーギーをみるエンジェル隊の顔を見て少し誇らしげな気持ちになるのであった。

「それで、話つてのは何なんだい？わざわざ部屋に呼ぶくらいだ、それなりに重要なものなんだろう？」

皿の上のサーターアンダーギーがなくなった頃フォルテがそう切り出した。

それまで、エンジェル隊の様子を眺めていたラクレットは一瞬だけ顔を強張らせるも、すぐに何時ものすまし顔に戻した。

「ええ、それでは、聞いていただきたいんですけど、その前に一つ」

そこまで言うところラクレットは一端うつむき何かを呟くと顔を上げ口を開いた。

「僕は、エンジェル隊は出動とか、出撃するものじゃなくて、降臨するものだと思ってるんですよ」

そう前置きして、彼は語り始める。

「初対面の時も言いましたけど、僕はエンジェル隊の皆さんに憧れていたのですよ、生まれて物心ついた時には既に」

「コレといった理由はありません。ただ、エンジェル隊に憧れてしまったんです」

「それですね、自分の中で彼女たちはこうであろう見たいな物が

出来ていたんです。うまく言語化できませんが」

「つまるところですね、貴方たちを理想扱いしていたんですよ、僕は。神聖視とも言っんでしょうか？」

「しかも、本人たちに会ってみてソレに拍車がかかってしまいました」

全く間に挟みこませずに捲くし立てるラクレットは、そこまで言うとは一端話すのを止めてエンジェル隊の反応を見る。

最初の前置きの時点で混乱し始めたのか、彼女たちは良く自分の話を飲み込めていないみたいだ、と思いなおしたのである。

案の定ミントとランファはポカンとしてるし、ミルフィーとヴァニラは良くわかっていないみたいだということを確認し、苦笑しながらフォルテを見た。

唯一フォルテはラクレットの事を探るような目で見ていた、ラクレットはしばらくフォルテの目線に答えるものの、フォルテがソレをそらすことで終わった。

「続けますね。まあそんなわけで、貴方方にお近づきに成りたかった僕はシャトヤーン様に預けてあった発信機 アレが動いたなら、きっと何かあったのだと思いここに来ました」

「ちょっといいかい？」

「はい、なんですか？」

続きを話し始めたタイミングで、フォルテが口を挟む。

ラクレットはそれすらも予想済みだったのか、すぐに反応し対応す

る。

「発信機のことば聞いてたけど、アンタの話じゃまるでいずれこんな馬鹿みたいな戦争が起こるって知ってたみたいじゃないか？というか、もし無かったらどうするつもりだったんだい？」

「ああ、いずれ何か起こるんじゃないかなーくらいとは思ってたよ。だって実際エオニアが一回反乱を起こしましたし、なのに国外追放ですよ。エオニアに賛成する派閥がいなくとも、国王への不満はありましたし一部貴族の不穏な動きもありました。そう考えるともうすぐ何か起こると思うのはおかしくないです。仮に何も起こらなかったとしても、自分には『エタニティソード』があり、将来的には白き月の警護部隊になるには、ちょうどいいような人材だとの自負はありましたから、特に何かをするとは思いませんよ」

「へえ……筋は通ってるって訳だ」

「ええ、まあ……でも今は、なんというか、自分のイメージを押し付けていたと言うか、そういう先入観みたいなものを持っていた自分が恥ずかしいくらいです」

フォルテをまっすぐに見つめる、彼はあまり人の目をまっすぐに見つめ返すということをしないのだが、この時は別だった。

「皆さんも一人の人間で、僕も別に特別な人間でもないんですよ。ようやく気付きました……本当に今更ですけどね」

「そうだね、まあ気付けただけよかったじゃないか」

いつの間にかフォルテと二人の会話になっており、残りの4人は固

唾を呑んで見守っていた。

彼が次に何を話すべきか考えている間、フォルテは余裕たっぷりの仕草で紅茶に口をつける。

約一分ほど続いた沈黙を破ったのは、ラクレットだった。

「でも……今は違います。本当に今更でおこがましいですけど、僕は一人の人間として貴方達の力になりたいんです」

「へえ……言うじゃないか、私たちの力になるなんて」

「ええ、僕は結局は何所まで行っても僕のまんまですけど、やはり皆さんは輝いています。僕は貴方たちを守り、助けたいんです。僕じゃ出来ないことも皆さんなら出来る気がするから、そのお手伝いをしたいんです」

「それが、アンタの答えって事かい」

「はい」

自分で言葉にして、ようやく自分がいかに大層な事を考えていたかを理解したが、本心なので肯定した。

そもそも自分は最初からぶつとんでいたのだから、この位いいのではないかと言う、開き直りの思考もあったのだが。

「それで、皆はどうなんだい？……特にミント」

しばらくラクレットのことを見つめていたフォルテは含み笑いを見せると、エンジェル隊のほうに向き直り尋ねた。

いきなり話を振られたミントはビクツと背筋を伸ばしてしまった。

他の面々もミントほどではなかったがいきなり話が回ってくるとは予想していなかったのか、微妙にあわてている。

「こいつは、尊大にも『輝いている私たちを守ってあげたいから、今までの行動を無かったことにして欲しい。』って言ってるんだ。答えは決まっているようなもんだと思うがね」

フォルテのその言葉に、ラクレットは引きつった顔を浮かべる、事実なので全く反論できないのだ。

ミントは一瞬意外そうな顔をしたものの、すぐ合点が行ったのが、面白い悪戯を思いついたような顔をしてフォルテのほうを見た。

「ええ、そうですね。それならば、相応の誠意と言うものを見せていただきたいものですね」

ミントのその言葉に、ミルフィーは困ったような顔を浮かべる、今まで難しすぎてよくわかんないなーとか思っていたので、反論しようにもできないのだ。

ランファとヴァニラは怪訝そうな顔でフォルテとミントの二人を見ている。

「ほうほう、いい提案だね。よし隊長命令だ。ミント、相応の誠意を見せるに相応しい案を一つあげてくれ」

ここに来てヴァニラとランファは我らが隊長と参謀の意図を理解した。

要するにコレは、フォルテなりの歓迎の印なのだ。ようやく本音を明かしてくれた仲間が『仲間』になったことの。

ミルフィーは相変わらずどうしてそんな意地悪するんだろー？と考えていたのだが。

「そうですね…………… それでは、私たちのそれぞれのよう所に惚れ込んだのか…………… それを教えてくださいませんか？」

「惚れっ！！…………… まあ、否定はしませんが」

悪魔のようなミントの提案に大きく反応してしまうラクレット。

というか、それって自分の初恋経験みたいなものなのだから、あまり人に明かしたくないのだがなどと思っているものの、唯一反対してくれそうだった、ミルフィーもそれなら別にいいかもーみたいな表情でこちらを見ている。

つまり彼に逃げ場は無かった。

「さ、まずは私のを言ってみるかい？ラクレット」

「いいえ、ここは私からでどうでしょうか？ラクレットさん」

「あら？私からでもいいわよ、ラクレット」

生まれて始めて女性に迫られると言う経験をしたラクレットは、フォルテ、ミント、ランファに始めて名前を呼ばれたと言う事実になく気付かなかった。

「…………… それじゃあ、ミントさんから」

同様に、自分が彼女たちの名前を自然に呼んでいる事にも気付かなかった。

彼の大好きな呼び名交換イベントは起きませんでした。
ここまで3人にラクレットって呼ばせないために結構苦労しました。

みんなの恋路事情

みんなの恋路事情

私がアイツのことを意識したのは何時からだったか、そんなことはあまりよく覚えていない。

しいて言うなら、あの偵察型プローブの事件があったときかしら？

あの時私は、この何よりも美しい乙女の柔肌を見せてしまったのだ
！！

悲鳴を聞きつけてやってきた二人に向かって色々物を投げてたら、
ラクレットのほうに当たって気絶しちゃうから、服も着てないのに
アイツと二人でさらに慌てちゃって。

今振り返って思ってみても、顔から火が出るほど恥ずかしい。だって私ったら服も着ないでアイツの目の前まで行って、顔を真っ赤にして眼をそらしながら指摘するまでそのままだったのだから。

あ！もちろんバスタオルは巻いてたわよ、申し訳程度には隠していたわ！！
大きな声で言うことじゃないけどね。

それから、ミルフィーのせいでその……キ……キス……しちゃった時……！

あの娘が私とアイツがいるのに気付かずに重力発生装置を解除しちゃったから……！

あーもう……この私のファーストキスだったのに……！

まあ、別にアイツだったら悪くない……って思っちゃう自分がいるのに気付いたのもこの時。

ああ、私は恋をしてるんだなあ……って納得しちゃったのよ。

思えばココまで本気で誰かを好きになったことはなかったかもしれない。そういう意味ではコレって初恋なのかしら？

でも結局アイツがダンスパーティーに選んだのはミルフィー。

結構勇気出してアピールしたんだけどな……。

でもまあ、私のほうが年上だし……ミルフィーが嬉しそうなのはやっぱり私も嬉しいし。

……でも……つらい物はつらいのよ。

私じゃなくてミルフィーを選んだんだから、絶対に幸せにならんきやだめなんだからね……！

そして、幸せになった二人が羨む位の幸せを私が掴むんだから……！

現在エルシオールは、惑星フリードの軌道ステーションでの補給を終えて白き月に向かっている。

クロノドライブ中であるため、クルーたちは最低限の人員を除き英気を養っていた。

後数度のクロノドライブを終えれば、エオニアと直接ぶつかりあうことは明白だからだ。

そんな中ラクレットは、クレータ、レスターと共に格納庫の一角に居た。

「それで、『エタニティ・ソード』について報告があるって言うんですけど何かしら？」

「あ、もう少し待ってください。いまリミッターを外しますから」

先の戦闘の後、紋章機の背に発生していた翼は消えてしまったが、それぞれの紋章機がパイロットの癖などに最適化した。

同じく『エタニティーソード』もその現象が起きており、より操作性が上がった。

『エタニティーソード』が展開していた翼も、エンジェル隊の紋章機と同じタイミングで消失し、クレータは今日まで原因を探っていたが、結局白き月に着くまで何も出来ないという結論に落ち着いたところだったのである。そんな中報告があるから来て欲しいとラクレットに言われたのだ。

一方、レスターがここにいる理由はいずれ先程タクトの代わりにブリッジに詰めていた彼の所にラクレットが来てこういったのだ。

「もしかしたら、『エタニティーソード』の翼を展開させることが出来るかもしれません」

それを聞いたレスターは、一先ず格納庫に駆け足で駆けつけたのである。

「よし、リミッター解除。『H・A・L・Oシステム』起動、出力を最大に設定、フェザー展開!!」

ラクレットがコンソールでの操作を終え、そう宣言した途端、『エタニティーソード』の背部からわずかに黒い翼が生えた。

あまりの事態に、言葉を失うクレータ。一応聞いてはいたものの、それなりに驚いているレスター。

「……………ッ!! エネルギーカット!! リミッターを掛け、セーフモードに」

数秒膠着が続いたものの、この事態を破ったのはラクレットだった。彼の額には汗が浮かんでおり、あたかも激しい運動をした後のようであった。

ラクレットが突然声を上げたため二人の視線は彼に注がれていた。それに答えるかのように口を開いた。

「やはり、僕のこの機体は、単純に膨大なエネルギーを与えれば良いだけのようです」

「他の紋章機では無理だったのに……というか、リミッターって言うてたわよね、ソレは何？」

「まだ僕が幼い頃に、機体の負荷が急速に増す、駆動部操作装置停止操作《Engine Control Unit Disabled Maneuver Drive》状態に成らないようにつけました」

最初に『エタニティーソード』について報告した時、リミッターがかかっているとしか言っていなかったのである。

戦闘機に出力リミッターをかけるのは一般的なので、あまり重要視されていなかったのだが。

「……そうだったの、にしても本当に規格外ねこの機体」

驚きつつも、普通に納得するあたり、彼女もずいぶんとなれてきたようだ。

その会話が途切れつと、次はレスターが口を開く。

「それで戦闘中は使えるのか？ずいぶんと体力を消耗するようだが」

「はい、前回出した時のように機体を動かしていれば何とか、やはり、戦闘中のテンションが必要なんでしょう。それでも短時間にせざるを得ませんが」

「……そうか」

「でもこれで、希望は見てきましたね。エンジェル隊の紋章機の翼、『エタニティーソード』のECUDMD、そして、詳細は不明ですがエルシオール追加兵装、この三つの戦力上昇があれば、あの黒き月にも」

「ああ、絶対ではないが、運用次第では大きな力になるだろう」

実を言うと、ラクレットはこの時半分程度しか本当のことを言っていない、

まずリミッターについてだが、コレは翼が生えるという事実を整備班から隠すためにカマンベールに頼んでつけてもらったものだ。

だが実際に性能は落ちており、パーツへの損耗が減っているのも事実だ。

そして翼を出すこと自体は簡単であるが、これは他の紋章機と同じものではない

エンジェル隊の紋章機は『A・R・K』というシステムを起動させると出るもので、これにより『ARCH』というエネルギーが使えるようになるのだ。

故に先の『ネガティブクロノフィールド』下において戦闘可能だったのだ。

だが『エタニティーソード』の場合は単純に出力を上げるためのモ

ノではない。

というより、単純な視覚効果しかないといっても良いのだが、これは侮れないもので、

「翼が生えるとなんか強くなる気がする」とパイロットが思う事により、実際に『H・A・L・Oシステム』から導き出されるエネルギーの量が増えるのだ。

ちなみに『エタニティソード』が先の戦闘で動けた理由は紋章機や、エルシオールの発生させた『ARCH』により、『クロノストリングエンジン』が活性化したからだ。

最もラクレットが理解しているのは、

紋章機とは微妙に別のシステム動いてる

自分のは元のエンジンを強化するためのもの

やっぱり、それなりに疲れる。

程度である。

ようは翼を出すこと自体には全く制限が無い、だが、翼を出してる間は全力以上のエネルギーが出る。

例えるのなら通常の状態を全力疾走として、

紋章機は強烈な突風が後ろから吹き付けている状況

『エタニティソード』は猛獣に追いかけれ命の危機が迫っている状況だ。

翼を少しだけ出して苦しむふりをする。

それは、今回ラクレットは自分が戦闘で短時間に限り先の戦闘と同等の力が出せることを伝えたかったが、そう乱発できるものではなく、あまりにも精通していると不自然に思われる。と考えた彼なり

の苦肉の策だ。今まで出していなかったのに、なぜエンジェル隊にあわせて出したのだ？と聞かれても困るからでもある。

実際は翼を出してもそこまで苦しくなるほどではなく、実際は疲労感が増す程度なのだが、彼は今遅効性の下剤を飲んでいる。

先程まで時間を掛けていたのは、効果が発動するまでの時間稼ぎだったのだ。

額に汗を書いている理由はソレだ。

ちなみにこの薬、元々は便秘解消薬である。

「それでは、これで僕は少し部屋で休んでいます」

「ああ、クロノドライブが空けるまで、英気を養っておけ」

その後ラクレットは二人の目が届かなくなった途端に早歩きで去っていったのは完全な余談である。

「私タクトさんと一緒にいられません……だってタクトさんが不幸になっちゃう」

「待ってくれ!!!ミルフィー!!!」

一方その頃タクトは修羅場ラッコメっていた。

時計の針を少し戻そう。

レスターにブリッジを任せたタクトは、ミルフィーと二人で銀河展望公園にいた。二人とも仲良くそれはもう仲良く散歩などしゃれ込んでいたのだが、空調システムの不調が原因で実際は閉鎖されていたのに偶然が重なり、入ってしまったのだ。

その二人が『偶然』入った結果、『偶然』壊れていた空調からエア―が漏れ始めてしまい、後一步で死ぬような目にあってしまったのである。

それを自分のせいだと感じたミルフィーは、先程体をぶつけてうまく動けないタクトを置き去りにして、走り去ってしまい、彼はその場に今一人で佇んでいる。

説明するならば数行で終わるが、タクトたち常人にとっては笑えないほどに深刻な話である。

「このままじゃだめだ、急いでミルフィーを追いかけなきゃ!!!」

我に返ったタクトは痛む体を引きずって走り出す。

ミルフィーの姿が見えなくなってからまだそんなに時間がたっていないから近くにいますはずだ。

と自分に言い聞かせることで、だんだん何時もの余裕が出てくればいいなと考えながら。

「まずは……ティーラウンジだ」

タクトは近くのエレベータに入りボタンを押すとそう呟いた。
閉じてゆく扉の隙間からのぞく彼の顔はなかなか格好よかったと、
そこを通りがかったスタッフは残している。

なんとか腹痛が治まったラクレットはクロミエと二人でティーラウンジの奥の方に居座っていた。
現在ティーラウンジには、彼ら以外の人は疎らだ。

入り口近くではランファが雑誌を読んでおり、そこから少し離れたところで、二人の女性クルーがケーキに舌鼓を打っている。

そのくらいしかない、がらんとしたティーラウンジの中で、あえて奥の方に座っている彼らだが、不思議と目立つような雰囲気は醸し出されていなかった。

彼ら二人の間にはコーヒークップが二つと芋羊羹の乗った皿一枚しかなく、二人は向き合って何かを話すような姿勢で座っていた。

コーヒーは普通に注文したのだが、芋羊羹は前回の補給の時に購入したものだ。

『Imo-chou』という和菓子屋で、なんでも芋羊羹を作らせたら皇国一の主人が作ってるものだそうで、ラクレットは迷わず購入してしまったのである。

「……コレ食ったら、大きくなれたりするのかな？」

「どうしましたか？」

「いや、なんでもない」

自分の独り言がクロミエに聞こえていて、どこと無く恥ずかしい気分になった彼はすぐに誤魔化した。

その様子にクロミエは一瞬怪訝な表情を浮かべたものの、気にしないことに決めたらしくコーヒーに手を伸ばした。

「……それで、うまく言えたんですか？」

急にそう切り出した、その眼は真剣でラクレットは思わず一瞬息を止めてしまった。

あの夜のことを思い出してしまうのだ、クロミエのその真剣な目は

「……ああ、お前のおかげでな」

「それはよかった」

一瞬の間をおいてそう答えたラクレットにクロミエは何時もの柔らかな笑顔で答えた。

「それで、これからはどうするんですか？」

「もちろん皆のために出来ることをやるよ。僕のできる限り」

「それじゃあ、あれはどうします？」

クロミエはそう言って入り口の方を指差した。

彼女の座っているテーブルに大きな振動が伝わり、何かと思い顔を上げるとそこにいたのはタクトだった。

個人的にここ数日、微妙に避けているというか、あまり進んで会いたくないといった感じだったのだが、彼のあまりの真剣な表情を見てそれらのことが一瞬で抜け落ちてしまった。

「タクト？どうしたのそんなに慌てて」

「ランファ！ミルフィー見てないか！？」

タクトの並々ならぬ気迫に押されつつも、とりあえず、質問の意図を考える。

今朝朝食と一緒に食べたきりで、それ以来見ていない。そう確認したランファは口を開く。

「見てないけど、それg「わかった、ありがとうランファ！-」どうしたのよ、って……もう居ないし」

ランファの言葉を途中でぶった切って走り去るタクト。

今の彼を止められるのは、それこそミルフィーのみであろう。

「はぁ、本当どうしよう」

その後姿を見つめながら、ランファは溜息をつく。

「やっぱりまだ、諦められないよ……タクト」

クロミエが指差した方向ではランファとタクトの一連のやり取りが行われている。

それを眺めていたラクレットは、微妙にランファのリアクションが違うことに気がついた。

別に彼は男女関係に極端に鈍かったりするわけでもないのだ、自分に関してはことさら鈍くなったりもしないのだ。

逆に微妙に鋭かったりするので、気になった女の子を好きになる前に諦めたりもしている。

空気は読めないが、なぜかわかってしまうのだから仕方がない。

「あなたは、前にタクトさんが誰かを選んだらあとの女性たちはあつさり身を引くと考えていましたよね。あれは、イレギュラーじゃ

ないんですか？」

「……むしろさ、そっちの方に疑問があったと今は思ってるわけよ。いやだつてさ、そんなあつさり身を引くか？むしろこのくらいのことが普通なんじゃないの？」

「以前の貴方ならまた大騒ぎしてややこしくしていたでしょうね」

「そーかもな」

ラクレットはいまさら、タクトの女性関連の事柄がどうなるかなど心配していなかった。

成るようになるだろう。そのくらいしか考えていない。

なぜならば、彼は最大の信頼を置いているからだ。今までの自分も少なくともエルシオールクルーがミスやヘマをするわけが無いという風に考えていたからだ。

今になって、実は自分は疑われていたという話を聞いても、それは仕方がないよねと納得が出来るのもそういう理由だ。

要するに、タクトならどーにかするでしょうというスタンス（笑）だ。

もちろん、途中で色々トラブルは起きるだろうが、最終的には成る様になる。

主人公とか、オリ主とか、そういうものに囚われなくなった彼の新境地である。

人それを、開き直って諦めると言う。

「とにかく、しばらく静観しよーぜ」

「そうですね」

そして、そのまま数日が経過する。

「本当に、どうにか成りませんか？」

ティーラウンジに入った途端に聞こえてきた声に思わずラクレットはその方向を見る。

そこにいたのはミント、フォルテ、ヴァニラの三人で、どうやら今の発言はミントのものようであった。

その大きな声にラクレットは思わず声をかける。

「どうしたんですか？ミントさん」

今までならそのような行動をしなかったはずだが、案外あっさり出来るものだなと思いつつ彼女たちのテーブルに近づく。

席の一つを指差して座って良いか許可を取ってからミントの向かい側に腰掛ける。

「それがですね、最近ミルフィーさんがタクトさんを避けているのはご存知で？」

「はい、この前実際に追いかけてっことをしているのを見ました、クロミエと二人で」

「それですね、二人がうまく行っていないのはもちろん、それに加えてランファさんまで不機嫌になるのですよ」

ここ数日のタクトとミルフィーの追いかけっこは、エルシオールクルーに頻繁に目撃されている。

それに伴ってランファの機嫌が悪くなって行くのだ。

傍から見ればどう見てもお似合いの両思いであるのに、ラブコメよろしく

「私の近くに来ると不幸になる！！」「待ってくれ、話を聞いてくれ！！」

とやっているのだ、その片方が親友で、もう片方が思い人であるランファからすれば果てしなく微妙な心境であろう。

「はあ、それで？」

「ええ、私たちにとっては、みんな大切な仲間と上官でありますから、どうにかできないかと、今話し合っているのですわ」

横に座っている二人を見ると、二人ともこちらを見て頷いた。

ああ、本当にこの人達は仲間思いなんだと改めて実感しつつ、ラクレットは尋ねる。

「それで、何か良いアイディアは出たんですか？」

「それが……」

「さっぱりでねえ……」

「どうにかしてタクトさんたちが話し合える場所を作れば良いとは思っているのですが、その方法が……」

結果、三人とも沈んでしまった。

苦笑しつつ、ラクレットはゲームだとなったかを思い出そうと

するが、そのタイミングで大声が彼の思考を遮った。

「なによー！ミルフィー、ミルフィーって！！人の気持ちも知らないで！！」

「そんな……ランファ、オレはそんなつもりじゃ……」

瞬間、四人は立ち上がりティーラウンジを後にする。

会計とかそういうのは後回しだ、この面子なら少々融通も利くからだ。

急いで廊下に出ると、ティーラウンジの入り口近くの廊下で、タクトとランファが口論していた。

「私が、どういう思いでアンタ達を見ていたかわかる！？そんな私に毎回毎回会う度にミルフィーの事を聞くなんて、しかもうまく行かないからどうにかしてくれですって！！」

「ちが、違う。オレはそんな事……」

「違うじゃない！！どうして……」

わかってくれないの？

ラクレットはランファが言葉にしていながそう訴えているように感じた。

そこまで言うと言ランファは泣き崩れてしまい、すぐにフォルテとミントが駆け寄り助け起こす。

そのままフォルテは、ランファを連れて立ち上がりせ前方の廊下へと歩き出す。最後に一瞬振り向いたがそのまま立ち去った。

ヴァニラは、少し送れて二人についていった。

ミントは二人とは逆にタクトに向かって歩を進める。

タクトはそれまで呆然としていたが、ミントが近づいてきたことに気付いて体を強張らせる。

しかしその刹那、彼の体は真横からの衝撃により吹き飛び廊下に打ち付けられた。

ラクレットが思わずタクトを一発ぶん殴っていたのである。

横から、頬を、全力で。レスター仕込みの腰の入った一発を。

「……上官を殴ったので、営倉に入ってます」

無表情にそう言って、そのまま廊下を歩いて立ち去ってゆく。彼に合わせて野次馬が二つに割れ道ができた。

そこを歩き立ち去ってゆく彼はどこか印象的だった。と野次馬の一人が残っている。

「はいはい、皆さん解散してくださいまし」

ミントがそういうと、野次馬は三々五々と散ってゆき、最終的にタクトとミントだけ残った。

ミントは優しく微笑み、ハンカチを取り出すとタクトが殴られた場所に当てる。

「それで、頭は冷えましたか？」

「……ああ、ばっちり。自分がいかに情けないことをしてきたかわかったよ」

あとで、ラクレットにもお礼を言って、営倉から出さないとな。と
呟きつつ、自嘲気味に笑うタクト。

「痛かったですか？」

「ああ、ランファのも、ラクレットのもね」

「……それはよかった。実は私も一発お見舞いしたかったのですが、
ラクレットさんがアレだけやった手前、気が晴れてしまいました」

「はは、やっぱり？」

「ええ。まあどうやらあの方は、純粹に私と同じ動機ではないみたい
ですけど」

急に和やかな雰囲気になる二人
ミントは、ようやくどうにか成りそうですわねと考え穏やかに微笑
む。

「こんな所にはだめでしょう？」

「そうだね。すぐにミルフィーの所に行きたい……でもそれじゃだ
めだ。俺が本気であることを見せなきゃ」

「それで、どうするのですか？」

「まずは、ここ数日レスターに押し付けてた仕事を片付けて、纏ま
った時間を作る。話はそれからだ」

「百点満点ですわ、ただ『逃げるから追いかける』のような男でしたら、駄目です。今は決定的な仲違いでは無いのですから、きちんと仕事をしてくださいまし」

「了解」

タクトは、そう言って何時もの不敵な笑みを取り戻し、その場を後にした。

今夜はよく眠れそうですわ、と彼女は思い同じくその場を後にした。

真、この日の会計は後にタクトに請求書が届いた。

おまけ

「皆さん忘れてるみたいですけど、まあ明日くらいにタクトさんに言っ出てしてもらえるようにしますね」

「クロミエ……ありがとう」

「ちょうどクロノドライブも一度終わるみたいですから、ちょうどいいと思いますし」

「そうだな」

「それで、どうして殴ったんですか？」

「いや、だって……」

「……」

「……妬ましくて」

「予想はしてましたが、白き月まで入ってます?」

「ごめんなさい」

白き月へ 前編

ラクレットが無事営倉から出られてから2時間ほどして、クロノドライブが終わり通常空間に出た。

そろそろエオニア軍からの妨害も激しくなるであろうということで、ブリッジでは剣呑とした雰囲気の流れていた。

適当に配備してある程度の防衛線用艦隊程度では、そこまで苦勞はしないものの、敵もこちらとの戦闘たびに、AIが成長するのか、動きがいやらしくなってきたのは事実だし、敵にはまだシェリーやエオニアといった優秀な指揮官がいるのだ。

ヘルハンズ隊もいるが、あいつらはあまり問題視されていなかった。

「よし、アルモこの宙域をスキャンだ!!」

「了解しました」

「タクト、早く戻って来い、追いかけてこはもう終わりだ」

「わかってる、いま戻ってる最中だ」

タクトはクロノドライブが終わるぎりぎりまでミルフィーを追いつけ回していたが、今はブリッジに戻ってきている途中だ。

仕事も終わらせていて、全力を出していたタクトは、後一步の所までミルフィーを追いつめたのだが（この書き方をすると何か別のようなものを感じるが）

惜しくも時間切れであった。

「副指令、どうやら宇宙嵐が出てるみたいで、いまいちレーダーの感度がよくありません」

「この宙域だと、ルイーア星系の恒星か……こんな時に」

どうやら、天候はあまり好くないみたいだなとレスターが思っている時に、同時にタクトが廊下を歩いて居るタイミングで、突然強い衝撃がエルシオールを襲った。

「っなんだ!!」

「敵のミサイルです!!出現時間を逆算されていたのか、ありえない速度で追突!!後続も来ます!!」

「くそ!!タクト早く戻って来い!!エンジェル隊とラクレットは格納庫に急げ!!出動だ!!」

「わかった」

タクトは壁にしていた手を放し、一気に駆け出した。
しかし、そのタイミングで曲がり角からミルフィーが出てくる。

一瞬だけ、硬直するものの、お互いプロだ。

「ミルフィー！！今は非常事態だ！！急いで出撃するぞ！！」

「は、はい！！」

そう声を掛けると、二人は並んで走り出した。

「ミサイル来ます！！クルーは何かにつかまって、衝撃に備えて！！」

アルモの悲鳴のような叫び声がこだまする。

その瞬間、二人のいる区画に偶然2発のミサイルが命中した。

その場所は偶然シールドの出力が弱かったのか、ミサイルが貫通してしまった。

「ミルフィー！！」

天地が判らなくなる様な揺れの中タクトは、並走していたミルフィーを庇うように抱きしめた。

耳を劈くような轟音と共に衝撃が二人を襲う。

「タクトさん！！」

そのまま二人は、土煙の中に飲み込まれた。

その頃ブリッジでは戦闘時独特の喧騒に包まれていた。
ミサイル迎撃のために先行している『トリックスター』に指示を飛ばしつつ、レスターは先の攻撃の被害を尋ねた。
襲撃の時、ちょうど格納庫にいたミントがすぐに借り出されたのだ。

「アルモ！被害状況を」

「Dブロックに被弾した模様！負傷者の数は不明です」

「救護班を急がせろ……クソッ！タクトはまだか！！」

幸いだったのが、数発のミサイルが来ただけでまだ敵艦の姿が見えないことだ。

こちらの動きは封じられているが、差し迫った危機は無い。

焦りを表情に出さないようにきわめて冷静にレスターは指示を飛ばす。

悪態を吐くのは何時ものことだが。

「ココ、次のポイントまでの進路に敵が待ち伏せできそうな場所はあるか？」

「検索してみます、2分下さい」

「まかせた」

とりあえず次回のクロノドライブ開始地点へ向かうための進路にある、敵が待ち構えていそうなポイントを同時に検索させる。

「格納庫、他のパイロットはそろったか？」

「それが、ミルフィーユさんがまだ来ていません。他の方は何時でもいけるのですが」

「わかった、とりあえず発進させてくれ」

その間の時間に、格納庫に状況を尋ね、自軍の戦力を確認する。とりあえずエンジェル隊4人とラクレットなら、現状問題はないであろうと一息ついた。

超高速で移動しているエルシオールに、ついてこれる艦など、あまり存在しないので、敵の艦隊はそう多いものではないだろうからだ。もともとそれが敵の戦略的な兵器——『黒き月』——などが出てくれば話は別だが。

「副指令！！ミルフィーユさんと司令以外の人員は、全員無事を確認しました」

「先程のミサイルで一部区画が封鎖されてしまっている、そこにいるのかもしれない。救護班に通達しておいてくれ」

アルモからの報告を冷静に対処し、まだ予断ならぬ状況だというより、もしかしたら最悪の状況かもしれないことを認識する。

ブリッジクルーの面々の表情も、どこか暗いものになってしまっている。

「そう心配するな、あの二人が一緒にいるんだ、タクトの馬鹿は死にそうにないし、ミルフィーの幸運もある。二人は必ず無事だ。信じろ」

「……そうですね」

こういうのは、俺の役柄ではないのにな。と考えつつも、もはや癖になってしまった、フォローを入れるという、日常タスクの延長を行う。

そして自分の手元の回線を手に取った。

「ラクレット……最悪の場合は頼むかもしれない。タクトと連絡が取れない」

「……判りました。タイミングはお任せします」

「まあ、アイツに限って何かあるとは思えんな」

そう告げたレスターは回線を切り、ココの方を見る
大体2分ほど経過したからだ。

「検索結果でした、二箇所ほど候補がありますが……」

「両方に注意を払っておけ」

それだけ言つと、通信を切り目の前のスクリーンを睨む。
アステロイド
この先に小惑星帯に挟まれた宙域がある。艦影は無いが……

（俺ならそこに伏せる、戦闘機部隊は小惑星の裏に隠すのもアリかもしれない）

そんなことを思いつつ、その近辺を重点的にサーチするように指示しつつ、タクトを待つのであった。

彼がここまで行動するのは、親友に最高の状況で指揮を執らせる為なのだ。

本人は認めたがら無いが。

「いててて……大丈夫かい？ミルフィー？」

「タクトさん……私たち、どうなったんですか？」

タクトとミルフィーの二人は、現状を確認する為周辺を見渡すが、周囲は薄暗い上に、いまだに砂埃が舞っており、視界はよくない。そんな中、かろうじて解ったのは、自分たちの左右にミサイルがそれぞれ一発ずつ横たわっており、ミサイルにはさまれる形になっているということだ。

「ミサイルはぶつかったけれど、爆発はしなかったみたいだね……
運がよかった」

「……………」

タクトは安堵しながら、そう呟いただけだったのだが、ミルフィー
は黙り込んでしまう。

俯いて、こちらを見ようとしないミルフィーを怪訝に思い声をかけ
るものの、無反応だった。

「ミルフィー、どうしたんだい？」

「……私のせいです」

そんなことはない。と思わず叫びそうになった。
だがミルフィーの真剣な顔を見てしまうと、その言葉は喉で融けて
しまう。

両の瞳から、はらはらと涙が零れ落ちているのだ、その涙を見ると
タクトは、胸が苦しくなり何も言えなくなってしまった。

「私が、こんな運を持ってるからです。こんな運があるから何時も
変なことがおきちゃう……こんな運欲しくなかった」

そこまで言うと、完全に俯いてしまい、くぐもった声で呟く形にな
る。

しかし、タクトには何を言っているのか、よく聞き取ることが出来
た。

——普通の女の子に生まれたかった。

この言葉が、彼女にとってどれほど重いものなのか。一瞬、その途方の無さに言葉を失ってしまう。

同時に彼の中に一つの確信が生まれる。

それは、今までもあったものだが、大きくなった……いや強固に成ったというべきか。

「そうだね、普通の運を持つてる、普通の女の子のほづが、良かったかもしれない」

「……」

「でもね、普通の運の女の子だったら、エンジェル隊の皆にも会えなかったんだよ？」

「それは……」

「それに、オレはミルフィーが、ミルフィーだからキミに会えた」

ミルフィーの顎に手を合わせ、少しだけ力を加えると、彼女は彼の方を向く。

話を聞いてくれていることに、少しだけ安堵しつつ、彼はそのまま続ける。

「それに、こんなにいろいろな事件を起こしちゃう女の子なんて、一生退屈しそうにないよ。毎日ドキドキで楽しい」

顔を寄せ、優しく囁くように、そう呟く。

自分の本心を確認しつつ、絶対に嘘は話さない様に。

「エルシオールに来てから、毎日がお祭りみたいに楽しかった。そりゃ、戦争中で大変だったけど。ミルフィーと一緒にいると、オレは楽しいんだ」

「タクトさん、でも……」

「どんなことが起こっても、オレとミルフィーなら平気さ。オレが絶対に何とかする。現に今も、ミサイルに挟まれてるけど、死んでないじゃないか」

「……」

「ミルフィーじゃないとオレはだめなんだ。すごい運を持ってるけど、笑顔が可愛くて、とっても家庭的な、可愛い女の子。そんなキミにオレは——恋をしたんだ」

いままでいろんなタイプの女性にちょっかいを出してきた彼だが、ある意味でミルフィーに対しては初恋だった。

ここまで夢中になったのも初めてだし、なんでもしてあげたいと思ったことは今まで無かったのだ。

「だから、オレの傍には居れないなんて悲しいこと言わないでくれ。自分の運が無かった方が良く何て言わないでくれ」

そう言っただくとタクトは右手でミルフィーの肩をそっと抱き寄せ、頭をなでた。

なすがままにそれを受け入れているミルフィーは、今言われたことを反芻している様子で、リアクションらしきリアクションは無い。

「これからも、オレの傍にいて欲しいから」

「……タクトさん……私……」

その時、二人の頭上で瓦礫の崩れる音と共に、光が差し込んだ。二人がつられてそちらを見ると、何とか人が一人通れそうな隙間が出来ていた。

「おい……誰がいるか!？」

「……さて、行こうか。返事は後で聞くから」

「はい!」

ミルフィーは満面の笑みで力強くそう答えた。

タクトたちが瓦礫の中に居る間、エルシオールに5機の戦闘機が接近していた。

いわずもがな、ヘルハウন্ズ隊である。

「くそ、あいつらか……何が狙いだ……まあいい、ラッキースターを除く全機で迎え撃つてくれ。ラクレット、お前は時間を稼ぐだけでいい」

レスターがそう指示すると同時に、戦闘機が此方を誘うように大きく旋回してからエルシオールに向かってきた。

エンジェル隊もそれに答えるように、各々の相手に攻撃を仕掛けた。通常なら各個撃破で行くのだが、ミルフィーがないので攻撃力に不安がある今は、時間を稼ぎつつ確実に削るのが最善だった。

そんな中、ラクレットの相手をさせられている、カミュから通信が入る。

「おや、ボクのミルフィーは何所に行っただい？」

「何時から彼女は、貴方のものになったんですか？　銀河をかける風の人」

「そういうキミは、何時もの特攻馬鹿じゃないか？　今日は艦の周りで皆に守って貰わなくて平気なのかい？」

ラクレットは切り返すと同時に、敵の懷に潜り込もうとするが、カミュには通じず、ひよいと華麗に躲かれてしまう。

カミュはそのままクルクルと、急降下をするように機体を動かすと、あっという間に距離をとり、『エタニティソード』をロックし、即座にレーザーを放つ。

ラクレットは慌てて機体のブースターを全開にし、機体を右に滑らして回避するものの、カミュの優雅なそれと違い、ギリギリなものだった。

その荒々しい動作のせいでぶつけてしまったのか、ラクレットは両の頬に少しばかり痛みを感じた。

「まったく話にならないね。マイハニーじゃないと僕を楽しませてくれない」

「アンタを楽しませるために戦っているわけじゃないんでね」

「……まったく、君達兄弟は、面白みというものに欠けるね」

「……戦闘はパーティーではないもんで」

ラクレットの機体の最大の強みは速度と攻撃力だ。

リーチは短いものの、一撃の威力は高く、それなりの装甲を持っているので、相手の懷に飛び込んで一太刀を浴びせるのが基本だ。

しかし弱点もある。動きが『相対的に』鈍重かつ的の大きい戦艦には強いものの、すばやく小さい戦闘機のような敵には壊滅的に相性が悪いのだ。

無人機ならば、時間をかければ比較的落とせる。しかし有人、しかも熟練パイロットが乗っているのならなおさらだ。

エネルギーソードのリーチは、ある程度なら伸ばすことが出来る。最近彼が長さが伸びてきたというのは、戦闘中に保てる長さが伸びたということだ。

その気になれば一瞬10KMを超える剣を作れるが、その瞬間エネルギーは枯渇し、エンジンは停止してしまう。

戦闘中の移動に割く分などにも分けると、今の50M前後が限界なのだ。

「にしても、ちょこまかと鬱陶しいものだねえ！」

「ディフェンスには定評があるものでね！」

自分から攻撃を仕掛けようとしなければ、機体の性能の差で簡単に回避することは出来る。

もちろんよほどヘマをしない限り、攻撃が当たらない敵と

普通に避ける分には、回避が出来る自分とでは、長い時間で見ればあまりに不利だが。

そんな感じで戦闘が硬直し10分ほど続く間に、ヘルハウন্ズ隊の中から一人、二人と撤退するものが出てくる。

コレはひとえに『ハーベスター』の特殊兵装である『リペアウェーブ』によるナノマシン散布により、一度エンジェル隊とラクレットの機体ダメージが修理されているからだ。

手の空いたものが、他の者を手伝いつつ、着実に数を減らしている上に、敵もある程度の損害を受けると撤退している。

3機目が撤退し、そろそろ勝敗がつくであろうとレスターが確信した時、それは起こった。

「副指令！！前方10時の方向と1時の方向に敵艦を発見しました！！此方に高速で接近中です。距離は7000！」

「何！？なぜそこまで接近を許した！」

ブリッジに驚愕が走る、そのポイントはまさにレスターが先程警戒するように指示を出した所だったのだから。
クルーの視線をいっせいに集めるココは愕然とした表情でリーダーを見つめる。

「わかりません、リーダーの注意は万全でした……」「副指令、通信が入っています」

「クツ！ 繋いでくれ」

レスターはそれだけ言うと目の前のウィンドウを睨む。

そこに移っていたのは左の頬に傷のある麗人。エオニアの腹心中の腹心のシェリー・ブリストルだった。

「久しいわねエルシオール。どうかしら？　ウチの科学者が作った、リーダージャミング装置は？」

「……バカな、付近にそんな高度なジャミング装置を積んだ艦は……まさか……」

「察しが良いわね、超小型化に成功したのよ。コレの換装の為に、前回の戦闘で彼らは参加できなかったのだけだね」

前回の黒き月による攻撃時、エンジェル隊の足止めとしては至高のカードを切ってこなかったことに対して、レスターとタクトは一度考えをめぐらせていたのだが

そのような事実があったのだと知ると、まさにあの戦闘を犠牲にし

てもつける価値のあるものだったと感じていた。
現にエルシオールは多数の敵艦に接近を許している。

最初のミサイルによる攪乱も、恐らく格納庫あたりを狙ったものだろう、そして、此方が時間を稼ぐような状況に誘い込み、これ見よがしにヘルハウズを先行させた。

何時ものことなので、特に疑問に思わなかったが全てが敵の接近するまでの時間稼ぎだったのだ。

「この宙域の宇宙嵐は……」

「それが、今回のジャミング装置よ。相手に宇宙嵐と誤認させる新しいタイプのね」

「……完全にしてやられた。これじゃあ、また士官学校からやり直しだな」

「あら？ 首席の貴方が、経験も豊富で元首席の私に敗れるのはおかしくないわよ？」

皮肉げに笑いつつそう答えるレスター。しかしそれは一種のポーズだった。

先程から背後から廊下を全速力で駆けてくる靴音が聞こえるのだ。

残念ながら自分は敵との知恵比べで敗れてしまったようだ。

だが、いやならば、親友に仇をとってもらえば良い。

親友が戦える環境をそろえることには失敗してしまったが、到着までの時間は何とか稼いだ。

「それじゃあ、オレよりも下の成績で卒業したやつに負けてくれな

いか？」

「ようレスター、苦戦してるみたいじゃないか？」

タクト・マイヤーズの到着である。

白き月へ 中篇

白き月へ 中篇

（タクトさんは私じゃないとダメだっと言ってくれた。）

ミルフィーは格納庫に向かって走っていた。

エルシオール戦闘中のピリピリとした空気が、とても爽やかなものに感じる。体はとても軽く、陳腐だが何所までも走って行けそうな気がする。

そんな最高のメンタルで彼女は格納庫に続く扉をくぐる。

（タクトさんは私に傍にいて欲しいって言うてくれた。）

整備班のクルーが、やや驚いて出迎えるのを横目に『ラッキースター』に向かって突っ走る。

そのまま飛び乗り、発射シークエンスに入る。

その異常なまでのスピードに、整備班は困惑しつつも、それに答えるようにハッチを開放させた。

（タクトさんに早く会いたい！！　早くもう一回会って、答えを伝えたい！！）

アームから離され、『ラッキースター』が銀河の海に乗り出す。

背後に天文学的なエネルギーが集まり、圧倒的な初速で滑りだした。

（そのためにも、この戦いを終わらせるんだ！！）

「ハイパーーーッ！！キャノン！！」

乗る前からテンションが最高だった彼女は、搭乗4秒後に特殊兵装

『ハイパーキャノン』を発動させた。

『ラッキースター』の前面の砲門からありえないほどに太いビームが放射される。

その光は、敵が先行させていた、自爆特攻目的の爆薬搭載済み無人艦隊を包み込み　跡形も無く消し去った。

「こちらに接近していた無人艦隊の第一陣消滅しました」

「みんな、遅れてすまない。これからは俺の指示で動いてくれ」

ブリッジに現れたタクトは服が全体的に煤で汚れて黒ずんでおり、髪も何時にも比べてボサボサに成っていたが。
醸し出す雰囲気、気迫は何時も以上であった。

「……タクト・マイヤーズ、どうやら生きていたようね？」

「ああ、おかげさまで絶好調さ、オレもミルフィーも」

先のミルフィーの一撃は、見事にシェリーが自爆目的で接近させていた艦を、全て沈めることに成功している。

彼女の仕掛けた策は最後の最後で阻まれてしまった。

「さて、最終通達だけど。オレたち急ぐから、大人しく引いてくれないかな？」

「あら、せつかくこんなにたくさんでお出迎えしたのに、出会い頭でその言い草かしら？」

「こつちにも事情があつてね、戦闘なんてしている場合じゃないんだ」

「そう……それならば直の事、ここを通す訳に行かないわね。覚悟しなさいエルシオール！！」

そういうとシェリーはつないでいた通信を切る。

無人戦艦の自爆によりエルシオールを沈めることには失敗したものの。いまだにそれなりの戦力を保持しているのだ
彼女が此处で易々引き下がる訳は無かるう。

「レスター、敵の構成は？」

「敵の旗艦と思われる高速戦艦が1隻に、高速突撃艦が8隻、ミサイル艦が4隻だ」

「うーん、それじゃあミルフィーがミサイル艦4機を沈める間に、ほかの皆で突撃艦の相手をしてくれ。ラクレットは余裕が有ったら旗艦まで近づいてみてくれ」

「……今さっき裏をかくれたばかりの俺が言うのもなんだが、そんなアバウトな作戦で良いのか？」

タクトの作戦というよりは、方針と思われるそれに疑問を挟むレスター。

今までの戦闘も大体このような感じで何とか成ってきたが、相手があのシェリーでも良いのかということだ。

実際、前回のシェリーとの戦闘はかなり苦戦したものになった。

「まあ、見ててよ。今の『ラッキースター』の性能は凄い事になってると思うから」

「……わかった」

そしてレスターは目にするようになる。

銀河最強戦力と呼ばれることになる、『ラッキースター』の曲がるビームというものを。

すれ違いざまに一撃を落とし、そのまま反転しタクトの指示したタイミングで放たれた『ハイパーキャノン』は敵残存勢力の5割を削ったのだ。

あまりの壮絶な戦火に、タクトとミルフィーの二人を除くこの場に居る面々は空いた口がふさがなかった。

「つく、あの紋章機の性能を見誤ったか……」

『ラッキースター』から放たれた2度の高出力長距離ビームにより、エオニアから預かった戦力の殆どが薙ぎ払われてしまったシェリーは、自責の念や怒りが混ざった複雑な表情で、モニターを見つめていた。

紋章機の性能を余裕を持って見ていたつもりが、殆ど何も出来ないうちに、こちらの戦力は頭数ですら劣る程度だ。

「せめてこの情報だけでも」

とシェリーは、戦闘データを付近の宙域の無人艦に送る。

現在、エオニア軍が持つ情報伝達手段は、無人艦を中継器代わりに

することで、安全かつ高速に情報を送ることが出来るのだ。
そして、数秒の後転送完了の文字が出る。

そのメッセージを消すと、自軍の残り戦力——といってもこの艦と高速突撃艦2隻だが——に指示を入力する。
損害部を切り離し、エルシオールへと突撃せよ。と

「エオニア様……貴方に御仕え出来て光栄でした。皇国を追放されたからの生活も悪くありませんでしたよ」

そういつてシェリーは穏やかに微笑む。

エオニアと、自分を含めて両の指に満たない部下だけで皇国外をさま迷ったこと。

道中たびたびカマンベールが変な発明をして、騒動を起こしたこと。そして黒き月を発見し、無人艦製造の為に資源惑星を探し回ったこと。

すべてが臥薪嘗胆の時期のはずが、充実はしていたこと。

そう、悪くなかったのだ。

ここでエルシオールを滅せれば、事実上黒き月に勝てる戦力など存在し得ない。

つまりはエオニアの完全勝利となる。

「ですから……最後にこの命と共にエルシオールを——」

シェリーは2隻の高速突撃艦を上手く盾代わりにして、エルシオー

ルに特攻を仕掛ける。

エンジェル隊の紋章機達は慌てて突撃艦を落とそうとするものの、『ラッキースター』はまだ遠くそれ以外の紋章機では破壊に時間がかかるようで、本命であるこの艦にさいている戦力はなかった。

エルシオールとの距離が1000ほどになったタイミングで、突撃艦は沈んでしまうが、この高速戦艦はまだ健在で、すでに幾許も無くエルシオールにぶつかる距離だ。

エルシオールも意図に気付いたのか、進路を急激に変更しようとしているが、既に遅い。

紋章機が攻撃を仕掛けているが、砲門の損耗や残弾度外視の全力火器で牽制しているからか、取り付けずにいる。

『ラッキースター』もさすがに3発目のビームは撃てないようで全力でこちらに向かっていているが間に合う距離ではない。

シェリーは最後に、自爆シークエンスを発動させる為に、ウィンドウを操作する。

3つほどあった警告を無視し発動の許可を出す。

このコマンドにより、『クロノストリングエンジン』を開放し周囲を巻き込む爆発を起こそうとした。

しかし、ここで予想だにしない事態が発生した。

最後の『クロノストリングエンジン開放』を選択し許可を出したが、自爆シークエンスに移行しないのだ。

「何が起きている……っく、時間はないのだぞ……」

彼女が狼狽していると、突然スクリーンの右下に突然ウィンドウが開き、何故かそこにカマンベールの顔が映った。

「コレを見ているっつーことは、お前自爆しようとしてるんだろ。全部自分の出来ることはやったのか？ 死ぬことで楽になるうとしてねーか？」

どうやら、強制的に再生される、自爆抑止装置のようだ。

余計なことを！！ と思いつつ、ウィンドウを閉じようとするものの、操作を受け付けない。

おまけに『クロノストリングエンジン』への指示も阻害されている。

「余計な真似を！！」

「まあ、待て。苛立ってるか、焦ってるかのどちらかだろうから言っておく、コレはカウントダウンというか、開放へのシークエンスに必要な時間を使つての再生だから気にするな。このメッセージが終わった後、開放つて出たのを押せば即ドカン！！キャンセルを押せば一時的にエンジンを停止する」

こちらの思考を読んだ様な言い草に、一瞬驚きを覚えつつ、それならば良いがと思い直す。

カマンベールがその言葉を言い終わったと共に、右上に90secという表示が出て、そのままカウントダウンを始めた。

そのくらいの時間なら持ちこたえられるなと一瞬で被害状況を計算し画面に目を戻す。

「また、既に脱出している可能性も踏まえて、30秒以内に選択しない場合もドカンってなるからな」

それと同時に90secの下に30secという表示が出た。

脱出だけなら、ブリッジ床のハッチから、直接脱出艇に乗るだけで10秒とかからない、脱出艇の発進シークエンスも、自爆を起動させた時点で即終わるようになっていたのだ。そう考えるとずいぶん余裕のある時間だ。

シェリーは最後だし付き合ってやろうという気持ちで、画面を見つめる。

「さて、オレからいえることは、最後まであがいてこそ軍人だぞー。ぐらいいかねーし。本題に入るぞ。実は前に、お前が簡単に自分を犠牲にしそうだって、報告したことがあってだな。その時に、死ぬ直前にしか流さないと行って、エオニア様にメッセージを残して貰ってるんだよ、お前宛に。っーわけで再生します。言っておくが俺は見えてないからな。それじゃあ」

それだけ言うとカマンベールの姿は消え、別の映像に切り替わる。

そこにいたのは神妙な顔つきでこちらを見ていた彼女の主――
エオニア・トランスバールだった。

まさかの事態に狼狽するシェリー。

しかし彼女を無視して画面の中のエオニアは彼女に話かける。

「……まずは言うておく、お前のことだから最善を尽くした上での選択であつたのだろう。万感の思いを込めてこの言葉を送ろう、お前がいなければ、余は此处までこれたかも判らない。誠に大儀であつた」

「身に余る言葉、ありがたき幸せ」

シェリーは画面に向かって頭をたれた。

最後に主君からの言葉を授かれるなんて、それが映像だとしても、自分は満たされていた。と改めて感じ入る。

そのまましばらく無言の時間が続く、右上のカウントが45secになったあたりで再びエオニアが口を開いた。

「……此処から先は、お前の決意に水をさすかもしれないが、それでも余の本心だから言っておこう……シェリー、死ぬな。なんとしても生き延びて、余の元へ帰って来い」

突然の言葉に完全に思考が停止してしまう。

もちろんこの言葉がかかることは予想していた、それを振り切るつもりでいた。

だが、エオニアのあまりの真剣な眼差しで見つめられそのようなことを言われた彼女は、反射的に頭の中が真っ白になってしまった。

「お前には、まだまだやってもらわねばならない仕事が多々ある。戦後の管理など、全く役に立ちそうが無いカマンベールだけでは不可能だからな」

「で、ですが……私がここでエルシオールを撃つことで、エオニアさまの勝利は磐石のものになるのです」

咄嗟に言葉を返してしまうシェリー。

彼女の中では完全にリアルタイムでエオニアと会話していた。

「それに……余も結局は人間、寿命でいずれ死ぬ。……この正統な皇家の血筋を絶やすことも出来ないのだ。余の血を引く後継者は必要だ、父の様にならぬよう早急にな」

今度こそついにシエリーは完全に放心してしまう。
カウントは刻々と刻まれついに20secを切る。

「……それでは、そろそろ時間も無いようだ……とにかく最善を尽くしてくれ、そして何れにしても余に顔を見せてくれ、それが数日後か、余の死後になろうともな」

映像はそこで終わりカウントが終了する。

同時に二つ目のカウントが始まり、画面中央に『開放』『キャンセル』の二つのウィンドウが現れ、選択を迫ってくる。

文字数のため当たり前なのだが、『キャンセル』のほうが大きく表示されているのが、ひどく彼女の目に映る。

手を伸ばすも、どうしてもウィンドウの手前で止まってしまう。先程までは、一切のずれが無かった自身の心の一貫性が、揺らいでいるのか動きを止めてしまったのだ。

彼女が躊躇してしまったその瞬間、艦に大きな振動が走る。

目を船外カメラを移しているスクリーンへと移すと、この艦を正面から黒い戦闘機が受け止めていた。

その背後には大きく力強く黒き翼が羽ばたいており、両の手が握っている巨大な剣を交差させこの艦の進攻を阻んでいる。

ONにしてある、広域通信チャンネルから　急いで止めをさしてください！！　と叫ぶ少年の声が聞こえた。

「まったく……本当にヴァルターは私の邪魔をする……」

カウントは15secを切り、アラーム音がブリッジ大きく響き渡る。

緊急用の赤いライトが点滅しまさに非常事態だということが判るのだが、彼女は動けずにいた。

伸ばした右手は幾許か右に動かすことも、左に動かすことも出来ない。

「エオニアさま……私は……」

10、9、8……と着々とカウントされる中彼女は最後にそう残し

紋章機の集中攻撃によるダメージで艦と共に宇宙へと消えた。

「タクトさん!!」

「ミルフィー!!」

戦闘終了後、格納庫ではちょっとしたラブロマンスが繰り広げられていた。

先の戦闘でフェザーを展開しつつ、エネルギー全開での駆動をしたラクレットは、どうにか疲れた体を引きずって格納庫の出口までたどり着いていたのだが、好奇心が先立ち手ごろな壁に寄りかかりそれを見物することにした。

「タクトさん……私、貴方に凄く伝えたいことがあるんです」

「なんだい、ミルフィー」

完全に二人の雰囲気を作り出している二人、そしてそれを眺める整備班のクルーたち。

彼らにも仕事はあるのだが、今は手を休めて野次馬の一員を構成している。

「さっき、二人で閉じ込められた時、タクトさんが言ってくれた言葉……凄く嬉しかったです。タクトさんのおかげで、私頑張れました」

「うん、キミのおかげでこの艦は助かったんだ」

僕が受け止めて時間稼いでなかったら、ミルフィーも間に合わなかったんじゃないの？

と、微妙に穿った感想を持ってしまいうクレット、それでも気分は明るい。

妬ましいけれどやはり、微笑ましいのだ。

「私、お返事したくて、だから絶対この後タクトさんに会わなきゃって、そう思ったら凄く力がわいてきて」

「オレもだよ、ミルフィー」

「だから今お返事します……私——タクトさんが好きです。私も一緒にいると楽しかった、これからも一緒にいたいと思ったんです」

「ミルフィー！！」

ミルフィーは微笑みながらタクトにそう答えた。
タクトは彼女に近づき力強く抱きしめた。

ギャラリーから歓声が上がる。

同時にミント、フォルテ、ヴァニラから拍手の輪が広まり始め、徐々に広くなってゆく。

格納庫は瞬く間に拍手と歓声にあふれる空間となった。

それを一歩引いてみていたラクレットの横を、誰かが早足に通り過ぎた。振り向くと、俯き顔でランファが格納庫を後にする所だった。

彼女に続いてラクレットは力を振り絞り、早歩きを敢行して追いかける。

格納庫を出た時点で、ランファは10メートルほど前方を離れていた。

ラクレットは彼女に声をかけようとするが、

何もできないで、そのまま立ち去られてしまうのであった。

IF ランファEND? (前書き)

警告

この話は当SSの本筋には一切関係ありません
一部キャラの都合のいい改造を含んだりします。
エンジェル隊及びタクトへの愛が崩れるという方はどうぞ飛ばして
やってください。

もう一度言います。本筋とは一切関係ありません。

それでも良いという方はどうぞ

IF ランファEND?

「…………できちゃった」

頬を赤く染めて彼女はそう呟いた。

金色の髪は柔らかくゆれていて、彼女——蘭花・フランボワーズの魅力を良く引き出している。

「……………え？」

「3ヶ月だって……………」お父さん『」

ラクレットは目の前の光景が信じられなかった。

I F E N D 1

あの時、
引き止めるを選んでいたのなら。

ラクレットの横を、誰かが早足に通り過ぎた。振り向くと、俯き顔でランファが格納庫を後にする所だった。彼女に続いてラクレットは力を振り絞り、早歩きを敢行して追いかける。

格納庫を出た時点で、ランファは10メートルほど前方を離れていた。

ラクレットは

「ランファさん!!」

彼女を呼び止めた。

「……なによ」

ラクレットの大きな叫び声にランファは足を止める。しかしながら、そのままこちらに背を向けたままだ。(恐らく)涙

をはらんだ表情を浮かべているであろう、彼女の表情を見ないですむので、ラクレットは少しばかり安堵した。

泣いている女の子なんぞ、対処に困るし。ましてや、その状況で上手く励ますなど、彼にとつては、地球外侵略者が蟻や蜘蛛を使って攻めてくる事態を、一人で解決する方が楽だと思ってしまうほどだ。

「その……………」

現に表情が見えない今ですら、言葉に詰まっている有様だ。

そのまま黙り込んでしまう彼に、追い討ちをかけるように事態は動く。

「あーもう！！　なによ！！　アンタ、急に黙ったりして。私をからかいに来たの！？　恋に破れた惨めな私を馬鹿にしに来たの！？

」

「そー！！　そんなわけじゃないですー！！　」

ランファが振り向いて、こちらに向かって叫んできたのだ。

話しかけたは良いものの、何もしないラクレットに業を煮やしたのだ。

その沈黙がまるで、哀れんでいるようにも取れたからでもある。

「じゃあ、なによ、励ましの言葉でもくれるの！？　もっといい男が居るよとか！？　」

「え、いや、あの、その……………」

「はつきりしなさい！！　アンタ男でしょー！！　」

「はいつ!!」

あつという間に場の雰囲気ふいんき（なぜか変換できる）が壊れる。
ラクレットのそれはもはや、天賦の才といえるであろう。
ある意味で彼の目的は達せられているのは、この際スルーしておこ
う。

「それじゃあ、私に話しかけた理由を完結に述べなさい」

「了解!! 自分はランファさんに、諦めたらそこで試合終了だ。
と伝えたくてここに来ました」

「……続けなさい」

「はっ! 確かにミルフィーさんとタクトさんは今想いが通じ合
いました。しかしそれだけで諦めるべきものなのでしょうか? 自分
は疑問に思いました。皇国では特に貴族はよく複数の女性と結ばれ
たりもしています。タクトさんは伯爵の三男であり、なおかつ本人
も懐の広い男性です。そして、ランファさん自身もミルフィーさん
との仲が良く、場合によっては大変羨ま……いえ、妬まし……失礼
三人仲良く結ばれるという、愛の結末もあるのではないかと愚考し
ました!!」

もう、なんかいろいろとひどいことを口走っているラクレットなの
だが、ランファは驚いていた。

その発想は無かったと。

幼少の頃は長女として弟妹たちの面倒を見てきて、本質的なところ
で 一歩引いてしまうという性質を持っている彼女には衝撃的な意
見だった。

皇国において多夫多妻制は推奨こそされていないものの普通に認められている。

貴族などは世継ぎの問題もあるし。惑星によっては、男女の比率が偏っていたりするのだ。

ランファやミルフィーが通っていた士官学校でも母親が3人居ると教えてくれた友達もいた。

加えて言うと、その子の母親間の関係はきわめて良好だそうだ。

「つまり、まだチャンスはあるかもしれないということ？」

「はっ！！　そのためにはまずミルフィーさんの合意が必要とされます！！　こういう場合は女性の方から外堀を埋めていかれるのがセオリーですので」

「……ちなみに、アンタはそういうのどう思うのよ？」

「個人的にハーレムは大嫌いです。だって、自分じゃ絶対実現できないから。ねーよっていう感情が先立つ。ハーレム作ってるやつは、よほど好感を持てるような存在じゃないと受け付けられない。流されてとか、個性薄いやつは絶対に無理。逆に言うなら、それだけの器や人間性があるなら行けるんだが……あ！　でも誰かがセッティングしてくれるなら喜んで！！　もちろん、修羅場もないようにして、ラブコメ時空的味付けも加えて、社会的に認められているようにしてくれよ！！　っーか男って皆そういうものだと思うよ、そうだろみんな！！」

「そう……まあ関係ないけどね、あんたの意見何て」

「その通りであります！！」

グダグダになったが、ここでようやくラクレットは自分の目的が果たされていることに気付く。

よかった、一息つき安堵するものの、自分が物凄いことを口走っていたことに気付く。

ああ、またしばらく夜寝る前に悶える生活が続くんだなと煤けた表情で内心呟きつつ。

「そうと決まればすぐに行動ね……ありがとう、アンタのおかげでやるべきことが見えたわ」

「……いえ、お力になれたのなら光栄です」

その間ぶつぶつと何かを呟いていたランファだったが、方針が決まったのかラクレットにそう告げると立ち去っていった。

部屋で計画でも練るのかな？ と思いつつ先程から格納庫の出入り口からこちら覗いているミントに、どう言い訳するかを考え始めた。

「いえ、今のは一般論ですよ？」

その後のことを記そう。

白き月に着いて、何やかんやでエオニアを倒しちゃったり黒き月を壊したよーな感じだ。

そして時間が出来た彼女は迅速な行動に移る。

まず、決戦前にミルフィーに話をつけておいた。
私もタクトが好きだと。

この時に『偶然』ミルフィーが、三角関係がこじれて親友同士で殺し合いをしてしまう恋愛小説を読んでいて、『偶然』物凄く深く感情移入してしまったのが原因か、同盟締結は速やかに行われた。

ミルフィーが軍をやめると言い出したときに、ランファも同時にや

め、タクトと3人で同居を始めた。

戦後のこの糞忙しい時にと、レスターがぼやいていたが、ミントの「ラクレットさんがその分働けば良いのでは？」という提案により何とか乗り切られた。

その半年後、烏丸ちとせがエンジェル隊に加わり、偶然デートに来ていた『タクト達』がエルシオールに合流。

なんだかんだで司令に復帰したりミルフィーの運が復活したり、ランファがちとせを警戒したりしたものの

『ヴァニラを絶対に加えないように阻止もする』という条件で同盟を結んだ『ヴァニラちゃん親衛隊』の協力もあって

急速に3人の中は接近した。

その片手間で、ネフユ………なんとかは倒されていた。

しかし、そんなある日ランファが気持ち悪いと訴え、嘔吐等の症状がみられケーラ先生の診断を受けた結果

見事！！　ランファの懐妊が発覚したのだ。

来るヴァル・ファスク戦をどう乗り切る！！
ラクレットの明日はどっちか！！
そんな彼はいまだに彼女がいらない！！

続くわけが無い。

IF ランファEND? (後書き)

誰がラクレットのランファENDと言った!!
タクトのハーレム ランファよりENDだよ!!

白き月 後編

シェリーとの激戦から数日が経過する。

エルシオールは順調に白き月への帰路を辿っていた。

ここしばらく、ギクシャクしていたランファとタクトもどうにか普通に話せるようになり、エンジェル隊やその他のやきもきしていた人々は、胸をなでおろした。

その原因が本星に近づくにつれ、増えてゆく警戒網による連戦が齎したものなのは、手放しに喜びがたいが。

ラクレットのプレイしたゲームの中ではこの辺の敵は、戦闘データの更新というより、共有が出来てなかったので雑魚だったのだが。どうやら、楽はさせてもらえないようで、きちんと情報を共有した艦との戦闘が続いていた。

もつとも、絶好調のミルフィーと、ラクレットのリミッター解除をうまく運用するタクトのおかげで無事に航行しているが。

今は最後のクロノドライブの真つ最中で、タクトはブリッジをレスターにまかせ、エンジェル隊の面々とティーラウンジでお茶を共にしていた。

今回は最近は頻度も高くなってきたが、やはりまだ場違い感が否めないラクレットも共に参加していた。

「いやー、みんなのおかげで無事白き月まで着きそうだ。そのお礼
といっちゃ何だけど、ここはオレのおごりで良いよ」

「本当ですか！？　じゃあ私はイチゴのショートケーキ追加で」

「私はこの新作のタルトに興味があるわね」

「あら、ランファさんですか？」

「いやー、懐が広いねタクト。私はエスプレッソをもらおうか」

「モンブランを一つお願いします」

ようやく、完全な安全圏に入ったので上機嫌なタクトは、エンジン
隊による怒涛の注文ラッシュにもこやかに答えた。

ただ一瞬だけ自分の懐にはいつているであろうカードの方向を見て
いたのを、ラクレットは見逃さなかった。
こういうところは鋭いやつである。

「ラクレットはどうするんだい？」

「女性に奢るのは男の甲斐性ですが、僕はそうではないわけですし、
僕に使うお金があったら、どうぞ自分のガールフレンドにでも使っ
てくださいよ」

一瞬だけタクトとランファの表情が固まるものの、すぐに元に戻り、

今度はミルフィーが顔を赤くする。

ラクレットはタクトの懷を気にした上で、違和感ない言い方を考えたつもりなのだが、微妙に話題選択が怪しい。

もしかしたら彼の心では未だに燻っているのかもしれない、嫉妬の炎が。

「そんな……ガールフレンドだなんて」

「おやゝ、事実なんだから照れる事無いだろ？」

「はい、事実です」

「ええ、事実ですわね」

「そうね」

フォルテたちはここ数日で、ランファの前では過度に気遣った態度を取るよりも、流れに任せた方が良いことを学んでいる。

そのおかげもあってか、今となってはランファもこの手の会話に絡んで来れる様になったくらいである。

照れるミルフィーを見て、ラクレットは何か思いつくことがあったのか唐突に口を開いた。

「自分で言うておいてあれですけど、タクトさん貴族ですよね？」

「え、うんそうだけど？」

「恋人とか自分で作っちゃって平気なんですか？　ほら、貴族とか、お金持ちの一流階級の人達って、婚約者とか許婚とか、そういうのあるじゃないですか？」

「……ああ、そういう質問かい？」

ラクレットの質問の意図を理解したタクト。ようはミルフィーという恋人はマイヤーズの的にセーフなのかアウトなのかという質問だ。タクトに全員の視線が集まる。心なしか不安げな顔でタクトを見ているミルフィー。

彼はすぐに微笑を浮かべて答えた。

「全然平気さ。オレがミルフィーを好きだといえば、それで解決。三男だしね、実家ではあんまり大事にされてないって言うのかな？　兄貴と姉貴たちが全部やってくれてる。」

ふう。と小さく息を吐く声が聞こえるが、だれもその方向を見なかった。

特定するまでもないからであろう。

一瞬だけ張り詰めた空気がすぐに元に戻り、また和やかな雰囲気に戻ってきた。

「それに、前例もあるからね」

「前例ですか？」

補足するようにタクトはそういった。

ラクレットは微妙に気になったのかそう聞き返す。

「うん、あんまりオレも詳しくないんだけど、オレの叔母さんなんだが、一回駆け落ちしたらいいんだよね」

「……駆け落ちですか？」

この時点で微妙にランファ、ミント、ミルフィーの3人が聞き耳を立てているのだが、二人は気付かない。

まあ、別に隠れて会話しているわけでもないので問題はないのだが。

「うん。一応相手は、それなりの生まれだったのだけれど、貴族ではなかったみたいなんだ。当時は結構反対されたりしたそうなんだけど。何とか認められたんだって」

「それは、なんともまあ」

「叔母さんには会ったことは無いけど……まあだから、平民と言っと聞こえは悪いけど、誰と結婚しようと問題ないと思うよ」

「むしろ、そのような事があつたら、余計反対されるという流れは？」
「」

ラクレットはそう繋げる。

せっかく、恋人同士になったのだから、そのまま結婚まで行って欲しい、なのでわかる限りの障害を取り除くつもりなのだ。

「いや、それはないよ。なんせ認められた理由が叔母さんの「マイヤーズ家は愛に生きる一族なんです！！」現に私にも4人血の繋が

らない母が居るではないですか！」「だもん。それで一族全員納得しちゃってさ」

「そうなんですか」

それは、貴族としてどうなのだろうとも思ったが、とりあえず頷くことにした。

タクトの話を聞いてラクレットは何かを思い出したのか、ふと思い出したかのように口を開いた。

「そういえば、僕の母も駆け落ちのごとく父と結ばれたと言っていました。母はとある貴族の次女だったそうですが、父と恋におちて一騒動あった末に、何とか認められたといっていました」

「へえ、結構あるもんなんだな、駆け落ち」

「ですねー、昔、流行ってんですかね？」

「いえ、お二方、その解釈はどうかと……ラクレットさんのお母様の爵位は何だったのですか？」

微妙にずれた受け答え、というか考えに思わず突っ込みを入れるミント。

「えーと、伯爵だった気がします。蝶よ花よと育てられて、昔は家事も出来なかったそうですが、父のために必死で覚えたそうです。今ではもはや趣味の一環になってますけどね」

「へー、オレの実家も伯爵だよ。家名とかはわかるかい？」

もしかしたら、知ってる家かもしれない、とタクトは付け足す。
ラクレットは、必死に記憶を掘り返してみるが、母が旧姓を言ったことは無かった。

当然母方の祖父母にも会ったことは無い。

「いえ、そういった話はあまりしなかったんで、ただ貴族としては珍しい、黒色の髪の毛に誇りを持ってるみたいですよ」

「伯爵家で黒い髪だって？」

「はい、タクトさんと同じような……」

生まれる沈黙、ここに至ってまさかの可能性にたどり着いた。
今迄自分の目の前にあるお菓子と飲み物に舌鼓を打っていた、フオルテとヴァニラも二人を見ていた。

「オレの叔母さんの名前は……」

「もしかして……クチーナですか？」

「うん」

「……」

思わず沈黙する二人

それをエンジェル隊の4人は複雑そうな目で見つめていた。

「あゝ、つまりどういう事ですか？」

「タクトさんと、ラクレットさんが、どうやら従兄弟だったということですね」

ただ一人ミルフィーは良くわかっていなかったみたいで、その沈黙を破るかのように右手を上げて質問した。
それに親切に答えるミント。彼女も微妙に顔が引きつっている。

「あ、そうだったんですか！！　　そういえば、二人とも髪の色似てますよね」

ミルフォーのその言葉にタクトは自分の前髪を右手でつまむ、ラクレットは一本髪の毛を引き抜き宙に透かした。

タクトのそれは灰色に近い黒で、ラクレットのそれは、光に透かすと蒼っぽく見えない事も無い黒だった。

「なんか、ふつうは、驚いたり喜んだりするべきとこだけど……」

「ええ、なんか、何も感じないというより、脱力してしまったというか……」

なぜか二人とも微妙に複雑な心境だった。

「帰ったら、兄さんに知ってるか確認しないと」

ラクレットはそう呟き、決意を新たにする。
まさか、タクトと従兄弟だったなんて、兄は知っていたのだろうか？
なんか、知ってそうだ、そしてあまり気にしそうにない。

「ねえ、ラクレット、きみのお兄さんてどんな人？」

その呟きでタクトは思い出したことがあったのか、ラクレットに問いかける。

ラクレットはどう答えたらいいか悩んだものの、無難に答えることに決め口を開く。

「兄は普通の人に見える変な人です。実家の跡継ぎではあるのですが、色々自由に生きてますし」

ラクレットが教えたのはとりあえず長男エメンタールの話だ。

ずっと普通の人だと思っていたら転生者で、なんか遠くから搦め手で原作介入なんぞ始めてるっぽい人だ。

彼はつい最近知ったことだが、前世知識を使った商売で、巨万の富を1代で作り出している。

「それだけかい？」

「はい」

「そうか」

なんとなく、タクトが何を聞きたいかラクレットは理解したが、わざわざ話すことでもないと感じた。

おそらくタクトは既に把握しているのだろう、自分の次兄は行方不明になっている事位。

ラクレットはいままで敵に自分の兄が居ることは伏せてきた。それで自分の立場が悪くなるのは嫌だったからだ。

勘の鋭い彼には、この前の通信でカミュがボソツとこぼしたことが、引つ掛かっているであろう。

それでもいままで伏せていたなら、直のこと表にすることは出来ない。

エオニアを撃つというのは、次兄であるカマンベールを殺すということと同じなのだが、そのこと自体には不思議と忌避感はない。沸かなかった。

昔なら「オリ主補正だ」の一言で片付けていたのだが、今のラクレットはそうではない。

カマンベールと過ごした時間こそ少ないが、恩は大きい。

機体の調整やら、解析なども彼のおかげだ。

ならばなぜと考えてみるも理由はわからなかった。

自分は一般人が大量に死ぬと、気が狂ってしまうほど、情弱な精神を持つてゐるのに、何故？

そう考えている間に、ブリッジから全艦に向けて、まもなく通常空間に出るとの旨が伝えられ、お茶会はお開きになった。

ラクレットの心に一つの波紋を残し。

ドライブアウトしたエルシオールを待ち受けていたのは傷一つ無く、無事に健在な白き月であった。

最悪破壊されていることも想定されていたのだが、それを見て一同は胸をなでおろした。

しかし、なぜというタクトの疑問には
シヴァ皇子の

「白き月は封印されている。それを解く方法は私のみが知っているのだ。それゆえに、エオニアは私に固執したのであるう」

との言葉で解決した。

さて、いよいよ白き月に赴くという場面で、誰が行くべきかという話が出たのである。

とりあえず、艦長のタクト、シヴァ皇子はいいとして、何時エオニア軍が向かってくるかわからない状況だ。

大まかな計算では、明日となっているが、「一度に戦闘要員の要のエンジェル隊を不在とするのはどうかと」とレスターが提案したのだ。

その結果、入港のシークエンスが行われている間

エンジェル隊の紋章機のことを聞くのだから、自分達が行くのが最

善だという主張に対し、

通信でもよい、機密の保持上それが不可能ならば、タクトやシヴァ皇子が聞く方が良いだろうと反論する者。

シャトヤーン様は通信だと綺麗な人だったから、ぜひ会いたいという者。

その言葉に嫉妬し、発言が刺々しくなる者。

ナチュラルに最初から数に入っていないことを嘆く者と

大変混沌した具合になったのだが、入港が終了した時点で封印が再度張られ、議論はエンジェル隊とどうせだからラクレットもという結論に落ち着いた。

誰が誰だかはご想像にお任せしよう。

白き月のおおよそ中心にある聖母シャトヤーンとの謁見の間

事実上権力を持たない彼女であるが、白き月の管理者という立場からか、その部屋は比較的豪華なつくりになっていた。

しかし、その豪華さは調度品を始めとした絢爛なものではなく、柱などの空間のつくりが豪華というそれだったのだが。

初めて入る者はタクトだけだったので、感心の声が漏れるのも彼だけからであった。

一同が部屋に入りしばらくたつと奥の私室へと繋がる扉が開き、青緑色の髪を腰まで伸ばし、白いドレスを身に纏った女性が現れた。

エンジェル隊一同は敬礼の姿勢をとり、タクトやラクレットもそれに習った。

「シャトヤーンさま!!」

「シヴァ皇子、良くご無事で」

シヴァはそう声をあげ、シャトヤーンに駆け寄る。

シャトヤーンは彼を慈しむように微笑みかけ無事を喜んだ。

まさに聖母に相応しきその様相にタクトは、この人が皇国の繁栄の象徴であるということを感じて理解した。

「エンジェル隊の皆さん、本当によくここまで帰ってこられました」

それぞれ、思い思いの反応で答えるエンジェル隊。

やはり普段とは少し違い、やや控えめなリアクションであるが。

「マイヤーズ司令、きっとコレも貴方のおかげなのでしょうね」

「いえ、エンジェル隊や他のクルーのみんなの力のおかげです」

タクトはそう言って頭を下げた。

これは、彼の本心で本当にそう思っていることだ。

「シャトヤーン様、私たちは再会を喜ぶために、白き月に戻った訳ではありません」

次は僕かなと、少々ラクレットが期待している所に、フォルテの声が耳に入る。

実際時間は惜しいのだから手短に行くのは正しいし、やってきたことはエンジェル隊と同じだけど、エンジェル隊ではない自分にはあまり言うことが無いのかもしれない。

そう自分に言い聞かせ、ラクレットは話に耳を傾けた。もう慣れっこであまり気にならなくなってきたのだ。

「ええ、紋章機の隠された力、それとエルシオールの追加武装の事でしょう」

「……やはり、ご存知でしたか」

タクトは、シャトヤーンが自分達が戻ってきた理由を把握していたことにはあまり驚くことは無かった。

白き月の管理をしている人物だ。このくらい把握しているであろうということだ。

「ええ、白き月はあの黒き月と対を成す存在、この白き月は元は兵器プラントだったのです」

シャトヤーンは語り始めた 600年の歴史を

遙か昔、旧暦と呼ばれる時代のことです。人々は、高い技術力を持ち、幸せに暮らしていました。

しかしそこで、クロノクエイク時空震と今ではと呼ばれる。災害が起こってしまいます。

それにより、人々は惑星間の交流が不可能になり、文明が衰退して

いつてしまいます。

そんな時です、いまのトランスバール本星近くに、白き月と呼ばれる人工の天体が現れたのです。

白き月には高度なテクノロジーがたくさん存在し、人々にそれをギフトとして分け与えました。

そんな中、当時の研究者は嚴重に封印された中心部の区画からある発見をします。

白き月の管理者と、広大な兵器製造工場です。

エルシオールや紋章機もここで見つかりました。

当時の研究者たちは、管理者を白き月の聖母として崇めるように扱いました。

エルシオールについていた、『クロノブレイクキャノン』は取り外され、紋章機の出力にはリミッターを掛けました。

兵器製造工場は閉鎖されました。

彼らは、コレを使うときが来ないよう 平和を思い封印したのです。

「それが白き月の真実。黒き月は白き月を求め今も彷徨っているのです」

「なぜ？そんなことが判るのですか？」

「それは、私が白き月の管理者であるからとしか言えません。私は黒き月が発している思念のようなものがわかるのです。狂おしいほどのなにかに、突き動かされている。と」

シャトヤーンは全てを語り終え、一同の顔を見渡す。

やはり、白き月が、黒き月と同じ兵器工場だということに、少なからず驚きを覚えているようだが、事実を受け入れているようだ。シャトヤーンはタクトの方に向き直り、再び口を開いた。

「マイヤーズ司令、エルシオールと紋章機は、現在白き月の最深部に移動させ整備を受けるようにしました。紋章機の調整は私が、エルシオールに装備させる追加武装『クロノ・ブレイクキャノン』は整備班に任せましょう」

「……ありがとうございます」

「クルーの皆さんには、どうか貴方から説明してくださいませんか？エルシオールでここまで来てくださった方々には知る権利があります」

「はい、了解しました」

「それでは、皆さんもお疲れのようですので、ご自由に過ごしていただいて結構です。ただ、ラクレットさんには少々お話がありますので残っていただけませんか？」

ここに来て、白き月に入って初めて人に名前呼ばれたラクレットは、動揺した。

というか、いきなり自分に非が無いかということを考え始めた。

入室時の態度、タクトやエンジェル隊よりも後に入った。

顔をあわせたときの態度、きちんと敬礼した。

服装、何時もどおり学生服に陣羽織だ。

などなど、色々考えてみるが問題が見つからない。

とりあえず、反応しないことは不敬に値するので「わかりました」とだけ告げるラクレット。

エンジェル隊の面々からは「くれぐれも粗相の無いように」と注意され

タクトからは「先に戻ってる」とだけ言われ

シヴァ皇子からは「明日の決戦時はよろしく頼む」と激励され

ラクレットは部屋にシャトヤーンと二人残された。

「すみません、久しぶりに人と話しましたので少々疲れてしまいました」

シャトヤーンはそう言って、部屋の中央にある椅子に腰掛ける。その途端に椅子のまわりが、宗教画のような神々しさを放つのだから、聖母も大概である。

「いえ、お気になさらず……それで、自分に何か御用ですか？」

「ええ、少々お話したいことがあります。ですが……」

「……」

「まずは、お礼を言いましょう。この度の戦争で貴方は、本当に私の助けになってくださった。月の聖母として、一人のこの国に住むものとしてお礼を申し上げます」

「身に余る言葉を頂き恐縮です」

ラクレットは先程から、シャトヤーンの一挙一動にびくびくしていた。

前回会った時は若気の至りのようなもので、ものすごい、不敬なことを言ったような気がしないでもないのだ。

それになんか、この事態を予期していたようなことを言ったような気もする。

（びくびくじゃなくて、ときどきしたかったよ！！）

まだ何とか冗談を言える余裕があるようで、表情には出ていないのが幸いであろう。

「……さて、時間も無いので本題に入りますね、私の話は二つあります」

「はあ……」

「一つは貴方の紋章機……いえ、戦闘機のこと。もう一つは貴方のお兄さんのことです」

心音が高鳴る、聞こえる音の半分ほどが、自分の心音であることにラクレットは気付いた。
渴く口を何とか開き言葉をつむぎだした。

「兄ですか……」

「ええ、カマンベール・ヴァルター、エオニアと共に皇国を出た彼の話です」

「……ご存知でしたか」

「はい、彼ほど優秀な研究者は、それこそ数百年に一人といたいでしょう。惜しむべきは発想が軍事方面に偏っていたことですね」

穏やかなシャトヤーンの口調にとりあえず、糾弾ではないことを悟ったラクレットは何とか落ち着きを取り戻す。

一応誰かが、兄のことを知っている可能性も考慮はしてきた、彼の知っていたエルシオール的人员は実際の1割程度だったし、自分の知らない人員が兄ことを知っていてもおかしくは無かったくらいだ。その時は仕方ないが、彼を撃つのが僕の使命だ。ヴァルターの三男としてのね。

という台詞を言おうと思っていたのだが、今となつては言う必要も無かったのですっかり忘れていた。

というか、ラクレットは既に、誰かに嘘をつきたくないのである。隠し事や一人で抱えるのはもう勘弁と言うべきか。

「彼には、首都の大学で勉学に励んでいる頃、私の元に『学生の中にロストテクノロジーの申し子がいる。』という噂が入ってきましたね。その時に知りました。それだけ優秀ならば、初の白き月の男性研究者という前例になれるかもしれない。とも思い彼を呼び寄せたのです」

どうやら、説明に入ったらしいのでラクレットはおとなしく耳を傾ける。

「ですが、彼にはテクノロジーの兵器運用に一切の抵抗がありませんでした。私は彼の危うさを感じ、白き月へと誘うことを思いとどめました。その結果、彼はエオニアと出会いこのような事態に発展してしまいました」

「……お言葉ですが、仮に兄がエオニアと共に行動しなくとも、エ

オニアが追放され、黒き月を手に入れたのなら、こういった戦争を起こしていたと思います」

「ええ、そうとも考えましたが……」

ラクレットは今まで、なぜこのような話をするのかが判らなかった。兄がエオニア側についているので、疑われているか、攻めているのかもしれない。

と最初は思っていないのだが、それも違うようだった。

しかし、シャトヤーンが申し訳なさそうな顔と共に言葉を濁したのを見てなんとなく理解することが出来た。

彼女は、兄を止めなかったことに責任を感じているのだ。

自分にも、皇国の民にも。

ラクレットはそう感じた。

「兄はなるべくして、エオニアについていきました。それは変えられない過去であり。今は気にすることではありません。自分にとつては、稀に帰るってくる程度の認証だったのもあるのか、今兄と戦わなければならない事には、正直あまり抵抗はありません」

ラクレットは力強く宣言する。

この人は人の感情の機微に鋭い人で、さらに責任感も強い人だ。自分の言葉で変えられるとは思っていないが、何かの足しにはして欲しいのだ。

「それに、逆に兄を白き月に入れていた場合、自分はシャトヤーン

様に疑念の心を抱いてしまいかもしれません。平和を愛する白き月に、合理的な彼は会わなかったでしょうから。そう意味では感謝すらしています。彼のやりたいようにやらせてくれたことに。おそらく両親もそういうでしょう。不謹慎かもしれませんが」

「それは……」

「この話は、コレで結構です。時間が無いのでしよう、次の話をお願いします」

ラクレットは、不敬であることを自覚しつつ強い口調でシャトヤーンを促した。

何か不毛な気がしてきたのだ。エオニアを破ってから出ないと、彼女の心は変わらないと感じたのだ。

「わかりました……貴方の戦闘機の話でしたね」

「はい」

シャトヤーンも話を切り替える。

さっきとは打って変わって、今度は真面目な顔だ。

「貴方の戦闘機は紋章機とは別のシステムで動いている。それは、なんとなく理解はしていますね？」

「ええ、一応は」

「先程までエルシオールから送られてきた、戦闘データなどを見ていたのですが……あの黒い翼の力は恐らく十全には発揮されていません」

「……それは、本当のことですか？ 自分ではリミッターもはずし、駆動部操作装置停止操作にしているあの状況が、『エタニティソード』の全力かと思うのですが」

ラクレットの戦闘は

ファーゴ以前ではリミッターをかけた状況で戦闘し

ファーゴ以降は状況により解除し、同時に翼を出現させる『ECU DMD』状態にする。

というものだった。

「いえ、クレータもうすうす気付いているとは思いますが。貴方の機体のリミッターは、貴方が解除したタイミングでは、殆ど解除されていないのでしょうか」

そういうと、シャトヤーンは目の前にスクリーンを出して、数字や数式の羅列されたものを表示した。

完全な門外漢であるラクレットはこういう専門的な数字を見せられても、いまいち理解することが出来ないのだが。

「まず……そうですね貴方の機体は『H・A・L・Oシステム』で『クロストリングエンジン』のエネルギーを生み出しているのですが、その際何らかの方法で、それらを最適化させています。それ

「よって多くのエネルギーを生み出しています」

「あの、良くわからないのですが」

「なにやら、詳しく大変判りやすく説明しているみたいだが、やはりさっぱりわからない。」

「大学では文系で、今のハイスクールでもどちらかというところちよりの単位をとっているのだ。」

「そうですね……まずリミッターをかけた時の出力が7とします。それに最適化されることで実質的に4のエネルギーを得ています……そうですね、整頓して整えることにより、効率化している見たいなイメージで結構です。これにより11程度のエネルギーを運用でき、エンジェル隊の紋章機と同等以上の力を得ています」

「はあ……」

「加えて、あなたがリミッターを解除したと思っているそれは、恐らく『ECUDMD』に成りエネルギー出力が増えているだけです。これにより3ほど出力が追加されて14になるといった所でしょうか」

「リミッターが解除できていない？」

「ええ、貴方の機体のリミッターをかける時に『出力リミッター』と、『駆動部操作装置停止操作を封じるためのリミッター』——
——正しくはECU(Engine Control Unit)ですが、その二つをかけていたでしょう。貴方が解除しているのはECUだけです。結果的に出力は増えているのですが」

「……そうだったんですか」

「おおよそですが、リミッターにより3ほど出力を抑えていますね」
そういえば、リミッターをはずす＝翼が出るだったなと、いまさらになって思い出すラクレット。

大雑把にシャトヤーンの話の説明すると

まずエネルギーの基本値をレジャーシートとしよう。エネルギーは場所取りの面積だ。

ラクレットのレジャーシートは、少し折りたたまれていて（リミッターが掛けられて）いた（これをラクレットは知らなかった）
そのため、紋章機と比べると小さかったが、迷惑にも他の人がきちんと整列して敷いている中で、一人傾けてしく（最適化する）ことにより、取れる面積を広くしていた。

しかし、紋章機のシートは後から来た人が別のシート（『A・R・C・H』によるエンジェルフェザー）を連結させより広いスペースを確保する

そのため、ラクレットはそれでは満足せずに、自分のレジャーシートが小さいと感じ、レジャーシートを激しく前後左右に動かし続ける（エンジンコントロールユニットを切る）ことで、より大きなスペースを確保していた。

そこにシャトヤーンが通りかかり、「そのシート、まだ完全に広げられていませんよ」と指摘したのだ。

ようはラクレットは迷惑な野郎……ということではなく、いままでリミッターと思っていたものはリミッターではなく、一時的ブーストだったのである。

「それで、本題なのですが、私ならそのリミッターを解除できるかもしれません。紋章機の翼開放と同時に行おうと思いますので、貴方の機体もこちらに預けていただだけませんか？」

「あ、そういうことでしたら、むしろこちらから頼みたいぐらいなので、どうぞお願いします」

つまり、『エタニティソード』はもう少し強くなるから、みせて？
といわれてるんだと、ラクレットは理解した。
しかし、先程の話を聞いていると疑問、というより気になる所が出てきた。

「あの、先程『エタニティソード』の実質的な出力が11と書いていましたが、その場合エンジェル隊の紋章機はどのくらいなんですか？」

「そうですね……貴方の出力は大変安定していて、誤差だとは言えない程度しか上下しないので数字を言いやすかったのですが、彼女たちは上下に触れ幅がありますからそれほど正確な数字は出ません。それでもいうなら、大体10を中心に行ったり来たりしている。といった所ですかね」

「なるほど、翼を出した場合は？」

「前例が1度しかないので断言できませんが、全員20くらいでしたね」

まあ、機体の大きさ違うし、しょうがないよね。と自分に言い聞かせるラクレット。

実際コレはあくまで瞬間的な出力エネルギーの話であって、燃費とかにはあまり関係ないし

さらに、『エタニティソード』は剣にしかエネルギーを使わないのだからエネルギー＝強さではない。

とりあえずラクレットは、明日の準備のためといって白き月を後にするのであった。

決戦——開戦まで

白き月とエルシオールの高性能リーダーなどの計器を組み合わせ、エオニア軍本隊の到着時刻がおおよそ明日正午ということがわかった。

決戦前夜、エルシオールクルーは思い思いの方法で過していたのであった。

ラクレットは日課のトレーニングをこなして、シャワーを浴びた後艦内を足の赴くままに散策していた。

シミュレーターで訓練してもよかったのだが、明日には自分の機体はさらに強化されて戻ってくる。

最後の調整をしても……といった感じだ。

普段ならティーラウンジにいるであろう面々も恐らくは自分の好きなことをしているのだろうと思い、当ても無く歩いている。

クロミエの所では先程顔を出してきたら、激励を受け早く休んだ方がいいといわれ追い出されてしまった。

その後食堂にも赴いたのだが、食堂のおばさんである梅さんは明日の祝勝会の準備で忙しそうにしており、飲料水だけ飲んですぐに後

にした。

今にして自分がいかに偏った生活をしていたのを痛感する。
これ以外にはホールと格納庫くらいしか利用していた場所が無いのだ。

先程喉を潤したばかりの彼は、わざわざ自販機の立ち並ぶホールに行く必要も無い。

格納庫にいたっては、現在突貫作業中で、部外者立ち入り禁止だ。

そう考えつつもひたすら目的も無く歩いていたら、映画などでよく聞いていた、短く鋭い音が聞こえる。

懐かしいなと思ひ音の方へ歩を進める。

今迄来たことが無いものの、場所は予想できているので迷うことも無く、彼は射撃訓練場についた。

音の正体は火薬製の銃の発砲音だった。

「……そんな所で見ていないで、入ってきたらどうだい？」

「やっぱり、ばれてました？」

こちらを一切振り向かず、弾を詰め替えつつフォルテはそう言い

放った。

ラクレットも予想はしていたので、別に悪びれもせずそう答える。

「珍しいじゃないか、アンタがここに来るなんて」

「そうですね。今日になってようやく、艦内を散策なんて言うことが出来るようになりました」

「そりゃ、皮肉なもんだね、今までのほうが時間があつたって言うの——につ——」

「……………すげー」

フォルテはすばやくリボルバー式の拳銃で、的の描かれた人型の標的を打ち抜いた。

全段撃ちつくす所までラクレットは眺めてみていようと思ったのだが、寸分違わずのど真ん中に吸い込まれるよう着弾させていくフォルテの腕に思わず簡単の言葉が口から漏れた。

「まあ、年季が違うからね。私はこれが無きや今まで生きて来れなかった。だから人より優れている。自慢じゃないけどね」

「ええ、理屈では判るのですがどうにも。やはりこの目で見るのは違いますね」

「そうだろ？ 実際にやってみるっていうのは、知識を聞きかじるとは全然違う」

「ですね。まったくもってその通りです」

ラクレットはフォルテの言い分に同意する。

恐らく意図して言っているのだろっが、まるで自分自身のことを言われたようになり、心がざわつく。

そんな様子すらお見通しなのか、ここでようやくフォルテは振り向きラクレットと向き合う。

その表情は、エンジェル隊の隊長として隊員たちに向けるものと同じであった。

「それで、アンタはどうなんだい？ 自分の足でこの艦を散策してみて」

「ようやく自分が戦っているんだという実感が出てきましたよ。ああ、明日が決戦なんだなって感じで」

「怖かったり、不安になったりはしてないみたいだね」

「ええ、自分でも本当なぜかわかりませんが、この事態をどこか客観的に見ている自分がいるみたいで、おかしい気分です」

最近のラクレットによくあることだった。

この前激情に任せてタクトを殴った時にすら、彼の中にどうして殴ったのかを本音と建前ですぐに理解できたのだ。

なんというか、自己分析が上手くなったというのだろうか？

それなのに、まだいくつも答えの出ない問題を抱えているのだが。

「高揚感ってやつとは違うみたいだね……まあ、その表情じゃあ問

題はないと思うがね？」

「そうですか、フォルテさんのお墨付きがもらえれば安泰ですかね」

「そのぐらい、自分でけりつけられる様にならなきゃ一人前とは言えないけどね」

「厳しいですね、まだ14ですよ僕」

「ヴァニラはお前より幼いけど、あれで自分のことを把握してるよ。まだ時々危なっかしい所もあるけれど」

なんか、だんだん責められる様な感じになってきて、たじたとするラクレット。

それをみて苦笑するフォルテ。

「なに、いずれできるようになるさ、それまでは誰かを頼っていい。それが仲間ってものだろう？」

「……ありがとうございます」

「それじゃあ、早く寝るんだね。明日が決戦なんだから」

「はい、それではおやすみなさい」

「ああ、おやすみ。ラクレット」

ラクレットは射撃訓練所を離れ、自室へと戻るのだった。

その頃、いまエルシオールで一番おアツイと評判の二人
タクトとミルフィーの二人は銀河展望公園に来ていた。

この場所は、二人がお互いを意識し始めるきっかけとなった、お花
見パーティーの会場であり、

他にもピクニックなどのさまざまな思い出がある。

出会って一月ちょっとしかたっていない二人だが、すでに心は通じ合
っているのか、どちらから声をかけたわけでもなく気がついたら隣
にいたのだ。

「タクトさん……」

「なんだい、ミルフィー？」

公園のベンチで寄り添って座る二人
お互いの表情見ないで、スクリーンに映された、トランスバール本
星から見える星座を見上げつつの会話だったが、気まずさは一切無

く、むしろ心地よい雰囲気が場に流れていた。

「私、最近わかったことがあるんです」

「教えてくれるかい？」

明日が決戦だというのに、穏やかな時間の流れが感じられる。二人の間はまさにそのような空気が流れていた。

「私、やっぱり自分のこと……自分の運が……嫌いです」

「そうか……」

「でも……」

自分の心を確認するかのようにぼつぼつと言葉をつむいで行く。タクトは合図地を打ちながら耳を傾けていた。

「でも……タクトさんといられるなら、この運も悪くないんじゃないかな
いかって、思えるようになったみたいです」

「ミルフィー……ありがとう」

「どうして、タクトさんがお礼を言っんですか？」

「どうしてもさ」

タクトは星空を見上げ続ける。

ミルフィーの言葉につい、礼を言ってしまったがそれが脊髓反射的行動で、自分でも理由がわからなかったからだ。

もやもやしたけれど、決して不快ではないなにかがタクトの心を埋め尽くした。

「……………」

ミルフィーは夜空を見上げるのを止めていた。

顔を横に向けタクトの横顔を、その瞳にうつる星をみていた。

もう幾度と無く見た星空が、タクトの瞳にうつると、とても綺麗に思えたのだ。

「ミルフィー、君は……………」

「……………何ですか？」

「君はオレの幸運の女神なんだ。君がいてくれれば、オレは何だつて出来る気がするんだ」

ミルフィーはいつの間にか、瞳にうつっているものが、星空から毎朝鏡で見るそれになっていることに気付く。

ならば、今自分の瞳にうつっているのは、きっと目の前の人の顔だ。そう考えると心が温かいもので満たされるのだ。

「……明日絶対勝とう……そしたら二人だけでピクニックに行こう」

「……なら私……お弁当作りますね」

そのまま二人はどちらからでもなく、お互いの指を絡め合い満面の笑顔を浮かべた。

お互いがお互いのことを必要としている
それを強く認識できたからである。

そのまま抱き合うでも、口付けを交わすわけでもなく
二人はずっと見つめ合っていた。

そして、日付は変わり、決戦になるであろう日

エルシオールには『クロノブレイクキャノン』が装備されていた。紋章機の背中には白の翼が生えており、『エタニティソード』の背中からも黒の翼が出ていた。

『エタニティソード』の剣の長さは心なしか何時もより少々長い。やはり、出力リミッターを解除したからであろうか？

シャトヤーン様に手を加えていただいたので、翼の展開時間が飛躍的伸び、性能も上がった。

そう報告してあるのだが、本当に飛躍的に上がるとは思わなかったラクレットであった。

「これが、『クロノブレイクキャノン』圧倒的な存在感だな」

「ああ、エルシオールの印象がずいぶん変わってしまう、これほどの大きさの砲台ならば、威力も……昔の研究者がはずしたのも頷ける」

ブリッジではタクトとレスターが現在のエルシオールについて、思う所を述べていた。

白き月から出港し、本星を守るように停止しているエルシオールの

下部には、200mほどの長さを持つ、超巨大砲門が取り付けられていた。

エルシオール的全長が846・0mなのだから、その長さは窺えるであろう。

「整備班、『クロノブレイクキャノン』の調子はどうだ？」

「それが、少々手間取ってしまして、上手く出力が上がりません」

「即急に対処してくれ、いざという時に撃てなければ、意味がないからな」

「了解です！！」

レスターは、整備班との通信を終えて、タクトの方を見る。

口調こそ強いものだったが、焦りの色は少なく、人事を尽くしたので天命を待っただけといった様子だ。

タクトもそれにならって、エルシオール全艦並びに白き月につなぐ。

「みんな、もうすぐエオニア軍の本隊がここに来る。残念ながら、ルフト准将たちの援軍はまだ間に合わないみたいだ。だけど、俺たちはやるしかない」

「……………」

「プレッシャーを与えるようで悪いが、オレたちが負けたら王国の希望は失われてしまう。しかし、オレはこの事態の簡単な解決法を

知っている」

そこまで言うとは、タクトは不適に笑う。

将来、英雄タクト・マイヤーズと呼ばれる彼の片鱗がそこにあった。

「答えはシンプルだ、勝てばいい。君たちが自分達の力を最大限出せば、後はオレが導いてみせる。簡単だろう？」

エンジェル隊とラクレットは、自分の機体のスクリーンに映る、彼の自信に満ち溢れ、こちらに全幅の信頼を置いている視線を正面から受け止める。

するとどうだろう、今迄最高のテンションだと思っていた3秒前よりも、格段に士気が高まるのが自覚できる。

「しかしこの方法には一つ大きな問題がある」

そこでタクトは、もったいぶっていかにも困ったようなジェスチャーで肩をすくめる。

「このエルシオールでは、乗員500人全員で祝勝会を開くスペースがない……そこでシヴァ皇子！ シャトヤーン様！ 白き月の食堂スペースを貸切にしてくださいだきたい！！ コレはエルシオール艦長としての正式な通達です！！！」

「おい！！ さすがにそれは不敬だろ！！」

思わず突っこんでしまうレスターだが口元がにやけている。
ブリッジクルーも口元に手を当て、クスクスと二人の漫才を見て笑っている。

「いや、よからう。私が全力を持ってそう取り計らおう、シャトヤーン様よろしいですか？」

「ええ。それでは今から準備をしないといけませんね」

そこに白き月からの通信が入る。

どうやら、タクトのジョークは好意的に受け止められたようで、二人もにこやかにこちらを見ている。

「だそうだ。みんな、それじゃあ……総員戦闘準備！！」

「「「「「了解！！」」」」」

エンジェル隊とラクレットから、完全にタイミングの一致した通信による応答が入る。

同じく、各クルーもその場でタクトの声にあわせて応答していた。

「初めてだな、6人の了解が揃うのは」

そうレスターはこぼしたのであった。

「シェリー……」

エオニアの心は憤怒で染まっていた。

自分の腹心どころか、もはや半身といっても差し支えないほど近い存在を失くしたのだ。

その心境は言わずもがなであろう。

「お兄様？ どうしたの？」

「シェリーが死んでしまったのだ……エルシオールの手によってな」

「そう、それじゃあ私が変わりにシェリーを作ってあげましょうか？ 姿かたちも、言動もそっくりの同じのが出来るわよ？」

「それじゃあ、だめなんだよ！ ノア！！」

「そう？ へんなの」

ノアの言いように一瞬激昂しかけるエオニアだが、なんとか理性を取り戻した。

もはや、自分にためらう理由などない。

シェリーを殺したエルシオールをこの手で……

「葬り去らねば……シェリー、それがお前への弔いになるであろう」

「前方の空間にドライブアウトする艦を多数確認、エオニア軍です。黒き月も確認しました！」

「来たか……エオニア！！」

前方スクリーンに瞬時に拡大映像が表示される。

エオニアの乗る『旗艦ゼル』を囲むように高速ミサイル艦、戦闘母艦、高速突撃艦を中心に構成された前衛と思わしき軍団が映し出されていた。

タクトが無意識に右手を握り締めていると、一つの戦闘母艦から大型戦闘機が発進してきた。

今まで見たことが無い型だったので、新型かと推測したが、そのタイミングでエオニアから広域通信で呼びかけが行われた。

「白き月、並びにエルシオールに告ぐ。我が名は正統トランスバール皇国第14代皇王、エオニア・トランスバールだ」

「幾度にも渡るこちらの寛大な呼びかけに対し、断固拒否の姿勢を示し続ける貴様らは、すでに皇国の反逆者である」

「最終通達だ、白き月を余に——正統な皇国の王であるエオニア・トランスバールに明け渡せ」

その、一方的な通達はこの宙域に響き渡った。

タクトとレスターは顔を見合わせる。

レスターは、タクトのやることを悟ったようで、好きにしろと表情で伝えている。

つまりは、諦めと傍観がないまぜとなったそれなのだが。

タクトは通信をエオニアに繋ぎ、大きく息を吸い込むとエオニアに返答した。

「白き月は皇国のものだ、よって皇太子……いや廃太子である、貴方のものじゃない」

「……ほう、マイヤーズ、ずいぶん面白いことを言うな」

「そうですか？オレはただの事実を述べただけなつもりなんですがね？」

高圧的な視線で、睨みつけるエオニアに大してタクトは何時もの飄々とした態度で切り替えしていた。

だが、エオオニアもタクトのその態度を見て逆に冷静さを取り戻したのか、一端目を閉じると、先程の激しく燃えるような激情を移す瞳は、静かに渦巻くそれとなり、何時もの表情に近いものとなった。

「マイヤーズよ、余はな、白き月のロストテクノロジーによる恩恵を使い、皇国を銀河全てを領土にもつ大国にすべきだと考えていた」

「はあ、それはご立派なことだ」

「以前までの私ならば、当然のように白き月の恩恵を受けている今のお前たちが、さぞかし憎く見えたであろう……だが、今はそ

うではない」

そこまで言うとはエオニアは右手を垂直に伸ばしマントを翻した、その動きにあわせて彼の名が髪が風に乗りしなやかにゆれた。

一同の注目が彼の手の方向に集まる。その先にあったのは、黒き巨大な人工天体。

「黒き月……」

「そうだ、白き月など黒き月があれば、もはや不要。本質的に同じ兵器工場であるのなら、2つもいらぬのだ。以前までならば両方とも欲したであろうがな」

「それは、成長なされたのでは？二羽の兎を追うものは、一羽の兎すら手に入れることが出来ない。と言われているのですから」

「ふ、まあよい……さて、貴様の時間稼ぎにこれ以上付き合ってやる義理はないのでな、終わらせてもらう……『ヘルハウズ隊』エンジェル隊の首を余の元に献上せよ」

「「「「「了解」「」「」」」」」

そうエオニアが指示した瞬間、5つのウィンドウが開く、ヘルハウズ隊の面々だ。

通信が繋がっている下を見ると先程の大型戦闘機に搭乗しているようだ。

「やあ、ミルフィーどうだい、この機体は、ついに完成した僕達の紋章機『ダークエンジェル』だよ」

「今までは性能の差で苦戦を強いられていたが、それも今日まで。成り上がりのブラマンシュは、自分の無力さに打ちひしがれると良いさ」

「うおお！！ このオレの新たな力を貴様に見せ付けてやるぜえ！！」

「この剣で……貴様を撃つ」

「へっへー、オイラとこいつのデビュー戦だ。ヴァニラ・H、とつととやられちまいな」

『ダークエンジェル』

それは、白き月の生み出した紋章機を模して作られた黒き月の最高傑作。

ノアが自ら設計しつくされた、誰が搭乗しようと最高の性能を発揮することが出来る最高の兵器。

ヘルハウズ隊の面々はそれに搭乗していたのである。

今迄エンジェル隊が彼らに優位を保ってこれた理由の一つに期待の性能差というものがある。

だが、それが極限まで小さくなってしまったのだ。

ヘルハウズ隊は珍しく、その一言だけで通信を切り、こちらに向かって急速に距離を詰め始めた。

それに続くかのようにミサイル艦、高速突撃艦、戦闘母艦、旗艦ゼ
ルと進軍してくる。

タクトはエンジェル隊並びにラクレットに向かって口を開く。

「さあ、みんな行くよ。これがオレ達の最後の戦いだ!!」

それに対して打てば響くような返事が返ってくる。

「はい!! 皇国の平和のためにも、絶対に許して置けません」

「ついに最終決戦よ。叩きのめしてやるんだから!!」

「ええ、私も尽力させていただきますわ」

「ああタクト、派手に行こうじゃないか!!」

「傷は私が癒します」

5人が言い終わり、ラクレットに自然と視線が集まる。

彼は大きく息を吸って叫んだ、心の内を精一杯に――

「自分のエゴで人を殺すの何ぞ、ゲームの中の悪役だけで十分なん
だよ!!」

伝説の旗艦殺し《フラグブレイカー》の名言である

決戦——因縁の決着

決戦——因縁の決着

「悪いけど、こちらにも負けるわけには行かないんでね!!」

「クッ……集中狙いか……」

現在この宙域はまさに混戦と言すべき状況であった。

エンジェル隊はヘルハウنز隊の駆る『ダークエンジェル』と入り乱れた戦いをしている。

エルシオールからは少々離れた距離であり、万一エルシオールに奇襲をかけようものなら、背後を見せた途端に沈められるであろう距離だ。

技量が高いものの個人プレイでの攻撃が主体であるヘルハウنز隊は、今までの戦いで急速に成長しているエンジェル隊のチームプレイにより、やや押され気味であった。

エルシオールには足の速いミサイル艦、高速突撃艦が襲い掛かろうとしているものの、的確にこちらの武装が届く限界の距離を維持しつつ移動し続けているエルシオールにたいした打撃は与えられていない。

その理由の大きな所は、タクトのエルシオールの動きは全てレスターに委ねるという英断の結果だ。

戦闘前に自分はエンジェル隊の指揮に専念したいから、エルシオールの行動の全ては任せると言い出したのだ。

当然レスターは動揺したものの、タクトの真剣な表情に押されて、その役目を負うことにしたのである。

レスターは敵の今日までの戦闘時の動きから、敵AIが起こすであろう行動をある程度把握しつつあった。

そして、今までの戦闘において最もエルシオールの火器の管制に口を出していたのはレスターであり、『被害を最小限に抑えてほしい』というタクトのオーダーに答える最高の存在でもあった。

もちろん軍人であるレスターをもって『貧弱』と呼ばれるエルシオールの火器だけで、敵を倒せるわけではない。ミサイル艦一つ落とすのにすら、手間取るのだ。それを補っているのが

「敵機撃墜。レスターさん、次の標的は」

「高速突撃艦だ、ミサイル艦Fはこちらで対処する。40秒以内

に頼む」

「了解しました!!」

エルシオール防衛の任についているラクレットだ。

今回のエオニアの旗艦や、戦闘母船という『エタニティソード』に相性のいい敵と、敵紋章機『ダークエンジェル』のような極端に悪い敵が居るこの戦場において、最前線での切り込み隊長的命令が下るかと思っただが、その考えは裏切られ、エルシオール防衛に回された。

ついでに優先排除目標である、『ダークエンジェル』が片付くまでは、レスターに指揮権を任せているのだ。

リーチの短い『エタニティソード』はスピードを活かして接近するのが常だが、相手が接近してくる上に、エルシオールよりも攻撃優先度が低く設定されているので、ターゲットにされにくく、見事に持ち味の高い攻撃力を活用していた。

開戦直後に数隻の艦を落としてからは、エオニアが指示したのか、そういうAIなのか、ある程度攻撃対象になっているようで、スコアは伸び悩んでいるものの、時間稼ぎつつ、エルシオールの被害は最小限にするという任務は見事達成されていた。

「つく、なぜだ！！ 同じ紋章機、性能に差は無いはず……それならば、技量に勝る僕が押されるはずが無い」

「慢心が過ぎましてよ。だいたい「技量で勝っている」という主張にしがみついているようですが、私たちに勝てたことが無いという事実が、それすら肯定されないと言うことに気付きませんか？」

リセルヴァは、目の敵にしているミントの機体からの攻撃を受け、右翼のスラスターが機能を停止したことに悪態をつく。

ミントは、それこそそよ風を受けたかのような、飄々とした冷やかな表情で口撃し追い討ちをかけている。すると怒りで赤く染まっていた彼の顔はさらに恥辱が加わったのか、真っ赤と形容するしかない顔色になる。

（まるで、湯沸かし器のようですね。）と結局の所、短気であるレセルヴァに対して心の中で呟き、ヴァニラのフォローに入る。タクトから指示が来たのだ。

「ヴァニラ・Hのクセに生意気だぞー、ちくしょう！！」

「うるさい」

凜としたその良く通る声にベルモットは一瞬ひるんでしまうものの、手の動きは止めず彼女の機体『ハーベスター』の隙を窺う。

毎回、彼は攻撃力の低いものの、味方を補修してしまうと言う厄介なそれを優先的に排除しようとするのだが、攻撃がメインではない彼女の機体は、回避に専念することが多く、なかなか削りきれずに手の余った別の紋章機に落とされると言うパターンで毎度沈んできた。

今回は『ダークエンジェル』という、強力な自機に搭乗しているため、果敢に攻めていたのだが、何時も以上に優れた回避能力と的確な誘導ミサイルによる中距離攻撃により、むしろこちらの損害が増してきているのだ。

彼は、そのまま『ハーベスター』の周囲を旋回しつつ散発的に攻撃を加えようと、ペダルを踏み込むのだが、警戒してなかった『トリックマスター』の『フライヤー』による攻撃でエンジン部分に攻撃を食らってしまい、機体出力を大幅に落としてしまうのだった。

ヴァニラは多少損耗していた『トリックマスター』の補修の為に機体をそちらに向ける、ランファとミルフィーの戦いを横目に見つつ。

「うおおお！！ さすがはオレの好敵手^{ライバル}いや、友^{ライバル}だな！！ だが、オレもそう簡単にやられはせん！！」

「煩いし、しつこいし、暑苦しいのよ！！ 宇宙空間に出て頭冷やしてきなさい！！」

「ミルフィー、君にはあんな男より僕のほうが相応しい、さあ僕のムネに飛び込んでおいで」

「遠慮します！！ 私にはタクトさん以外にいないんだから！」

こちらの4人はそれぞれ自分の機体の速度を活かした高速戦闘で鎬を削っていた。

他のヘルハウズ隊とは違い、かなり拮抗した戦いである。

その理由のひとつに、初っ端にレッド・アイを落としたことにより、敵のマークがついていないフォルテの『ハッピートリガー』が介入しようにも、入り乱れすぎて誤射をしそうだという事がある。そのため、現在フォルテは近づきつつある戦闘母艦の牽制をタクトにまかされている。

「ミルフィー、上から！！ バーンといくわよ！」

「……うん！ わかった！！」

ランファは『カンフーファイター』の操縦桿を手前に思い切り倒し、機体を急上昇させる。それに右後方から『ラッキースター』が追従するのを横目で確認した後、左に旋回する。急な方向転換だが、ミルフィーは瞬時にランファの意図する所を理解したのか、真上への上昇をやや右にそらす。

ヘルハウズの二人は自分のターゲットである機体を追う為、ランファの急上昇時点で追いかけ始めたのだが、先程まで、寄り添うように飛んでいた敵機が、二手に分かれたのことに一瞬のタイムラグが生まれてしまう。結局自分のターゲットをそれぞれ追いかけてようと、二手に分かれようとした。

ギネスは急旋回したランファを追うために右に機体を向ける、その

瞬間『カンフーフアイター』の右翼部のエンジンの出力がまるで暴発でも起こしたかのように急上昇した。

「なんだとおおお!!」

『カンフーフアイター』はその勢いによって、滑るようにそのまま180度向きを変えた。そのタイミングで背後のエンジンは限界まで絞られ、後ろ向きに進んでいる形になる。ギネスは、全ての砲門がこちらに向いている敵機に突っこむ形になったのだ。雨霰のようにミサイルと、粒子ビーム砲が降り注ぐ中、すぐさま直感で左下に避ける。

その判断は正しかったのか、一瞬のうちに弾幕からの脱出に成功するギネス、してやられた悔しさを感じるものの強敵の手強い行動により激しい興奮を覚えた。

「やるなああ!!　だが、オレを倒すには届かないぜええ!!」

「あら?　本当にそうかしら?」

そう捲くし立てる彼に、ランファは余裕の笑みを浮かべて問いかけた。

一瞬何のことだ?とを考えてしまうが、すぐさま、先程と同じ直感が働き機体を動かそうとする。

しかし、二度も幸運は続かなかったのか機体の前方に突如桃色の壁が現れた。

「ぐわあああああああああ!!」

「やったよ!!　ランファ!!」

そのピンクの壁の正体は、『ラッキースター』の特殊兵装ハイパーキャノンだった。ギネスはそのまま砲撃に飲まれてしまい、機体を大きく損傷させてしまったのだ。

ランファは先程、ミルフィーに特殊兵装を使うように遠回しに指示したのだが、それが順調に事を運んだようで、見事にギネスを落とした。

「それじゃあ、こっちも行くわよ！！アンカークロー！！」

あとは、こちらの仕事だといわんばかりにランファはエンジンを再び動かし、瞬時にトップスピードにすると、電磁式ワイヤーアンカーを伸ばし、ミルフィーの後ろに張り付いて、今まさに攻撃を仕掛けようとしているカミユの機体を殴りつける。

「つく！！ミルフィー以外の人間にやられるとはね……」

「あんたらは、個人に固執すぎなのよ！！ヘルハウন্ズじゃなくてヘルストーリーカーズの方があってたんじゃない？」

カミユの機体も戦闘続行は難しい損害を受けたようで、宙域から離脱しようとしている。完全に芯を捕らえたつもりでランファだったが、敵もとっさに回避行動をとったのだらう。

しかし、これでどうにかヘルハウন্ズ隊の撃退に成功した。

「よし、みんなエルシオールはこれから、『旗艦ゼル』を最優先排除対象にする。レスターは引き続きエルシオールを頼む。ラクレットは早速で悪いけど、フォルテが牽制している敵に止めを。ヴァニラは距離をとりつつ、ラクレットのカバーを。他の皆はいったん補

給に戻ってくれ、一気に決める」

「『『『『『了解！！』』』』』」

6つの声による返事を聞きながら、タクトは補給の後にどうやって仕掛けるかの4つ目の策を考え始めている。

とりあえず、ラクレットが母艦を落とせるかにかかっているなど、結論をつけたタイミングでレスターから声がかかる。

「そういつつもりなら……操舵主！！進路を2時方向に変更、足の遅い『ハッピートリガー』を迎えに行く……その方が都合が良さだろう？」

「ああ、頼む」

「フッ、どうせ俺がこうすることを含めて考えてるんだろ？」

「さあ？ どうだろうね？」

戦闘は早くも佳境に入ろうとしていた。

「ヴァニラさん！！ 右上から仕掛けますから誘導ミサイルをお願いします！」

「わかりました、お氣をつけて」

ラクレットは宣言と同時に機体を移動形態に変更し、黒翼を羽ばたかせる。ここには大気はないが、翼は『H・A・L・Oシステム』により、統制された『クロノストリングエンジン』からのエネルギーを糧にして驚異的な加速を得る。黒い羽を軌跡に残しつつ『エタニティソード』は今までに無いほどの速度で敵の母艦に迫る。

敵の圧倒的な大きさに、目視では距離感がおかしくなってしまう……そう考えたラクレットは表示される彼我の距離を元に到着までに時間を算出する。しかし、一瞬思考を割いた事により、眼前に迫るレールガンによる迎撃を回避し遅れた。

「っぐ！！……シールド出力の低下だって？ んなこと、判ってるっつーの！！」

当たり所が悪かったのか、急激にシールドが減衰してしまう。しかし、彼が勢いをとめることは無かった。

「癒しの波動を……リペアウェーブ」

「ありがとうございっ！ます！！」

『ハーベスター』の特殊兵装リペアウェーブだ。これによって散布されたナノマシンでラクレットの機体は応急処置的な補修を受けたのだ。

しかし、ヴァニラの機体は少々特殊兵装を発動するためにテンションが足りなかったのか、エネルギーで代用したようで、一度補給に戻らざるを得なくなった。

ヴァニラに向いていた攻撃や、ミサイルの援護を迎撃するための攻撃分がすべてこちらに向く。いくら回避に優れる『エタニティソード』でも戦闘母艦に単騎で突っこむのは大変困難であった。

だが、今のラクレットは違う、シャトヤーンの力により、機体の性能をより引き出すことに成功した彼は、機体を攻撃形態に変更しさらに距離を詰める。

ミサイルなら回避し、レーザーやビームならば剣で受け止め、レーザガンなら斜線からそれる。そう言葉にすると単純だが、技量的には神がかりなその行為を、彼は額を汗でいっぱいにしつつこなす。コレが出来るのはリミッターが外されたことにより『H・A・L・Oシステム』の予知能力が、ラクレット自身の予知能力とシナジーを起こし一瞬の後の光景を脳に焼き付けているからだ。土壇場になって、このようなことができるようになるあたり、彼にも戦闘機乗りとしての才能はあったのであろう。

攻撃を紙一重で捌き続け、なんとか懐に入る。敵艦の表面ギリギリにへばりつき、剣を敵方向に向けて縦横無尽に飛び回る。片っ端から砲門を無効にしているのだが、この母艦には、フレンドリーファイアーや、誤射防止のためのシステムが入っていないのか、自らにも損害を与えるにもかかわらず、兵器で『エタニティソード』目掛けて攻撃をかまして来ているせいで、シールドが目減りしてゆ

く。

機体が傷つく中、彼はそれでも敵の表面で暴れまわる。手の甲や頬が焼けるように熱い、しかし今はそんなことなど、もはや構いもしなかった。

だが、それすらもラクレットにとっては都合のいいものだった。『攻撃を、受ける、躲す、与える』それらの行動によりパイロットというものは自分が戦闘していることを実感する。戦闘の渦中においてテンションが限界まで上がるのだ。

「『エタニティーソード』力を貸してくれ……僕は、希望をつなぐ力になるんだっ！ うおおおおっっ！」

彼は純真な天使でもなければ、伝説の勇者でもない。祈って奇跡が起こるわけでもないし、神から祝福された幸運も無い。だが、それでも——誰かの力に成りたいという願望だけは本物だ。

『H・A・L・Oシステム』はその願望によってより高い出力をくみ出すことすら可能なのだ。

「コネクティドゥ……ウィル！」

両の手に持つ剣を一つにあわせ、一つの巨大な剣と成す。

右から左への一閃により母艦は一刀両断されるが、まだ彼の勢いは止まらない。そのまま自分が切り開いた母艦内部を突っ切り、その後ろに構えていたもう一つの母艦までもが彼の剣の間合いだった。

「消え去れえつつ!!」

機体の左肩の後ろでためを作り、その勢いで2つ目の母艦を断つ。それは彼の機体の成せる最高の攻撃であった。

後に残るのは、四散した敵母艦二つ分の残骸と呼ぶべきジャンクのみだった。

「……目標、沈黙……戦闘母艦はこれで全滅です……次の……指示を……」

「……いや、後は数隻の高速突撃艦と旗艦だけだ。エンジェル隊の調子は万全。一端補給に戻ってくれ」

「……了解……しました」

タクトはラクレットの予想以上の戦果に内心舌を巻いていた。損害を与えられれば良し。特殊兵装が決まれば、沈む寸前まで追い詰められるであろうと思っていたが。まさか沈める、しかも2隻いた両方とは思わなかったのだ。だが。それによりもはやエオニアは、一時的に撤退をすべきであろう所まで戦力を失ってしまったている。

（逃がしはしない……）

タクトは心の中でそう強く唱えた。

「お疲れ様です」

「露払いは十分。後はアタシたちにまかせなさい！！」

「少々見直しましたわ」

「私たちを守ると豪語するだけのことはあるね」

「すごかったです！！」

「……ありがとうございます。それでは後は頼みます」

エンジェル隊からも、今のラクレットを褒め称える言葉が絶えなかった。

ラクレットはそれらをかみ締めながら、『まだ始まったばかり』であるこの戦場の戦闘で、これだけの疲労感正直まずいかもしれないと内心焦るものの、朦朧する意識の中で、強迫観念のように戦闘をしなければという使命感が渦巻いていた。

決戦——クロノブレイクキャノン

「くっ……予想以上に損耗が激しい、ここは一端前線を下げるぞ。各旗艦に通達せよ、可能な限り相手に損傷を与えつつポイントAW h14まで後退せよ」

——copy that.

台詞からは、劣勢であることが察せられるが、正統トランスバール皇国軍のトップ エオニア——彼の表情は涼しいとまでは行かないものの、まだ余裕はあった。

なにせ、自分は打つ出の小槌の如き『黒き月』を従える正統なる皇族なのだ。事実『黒き月』の中には無人攻撃衛星を筆頭に伏せられたカードもある。もっと単純に自分の後ろにはおよそ”2”方面軍分の艦隊が控えている。

彼は自分の肉声を認識する管制システムで全艦に指示を飛ばした。通信役のオペレーターもいるが、その人員は現在自分のダメージを計算している所だったのである。

「今はいきがっていると良い、エルシオールよ……所詮は1隻と6機、そちらに勝ち目など　ッ！！」

しかし、そのエオニアの余裕の宣言を妨害するかのごとく、アラーム音が鳴り響く。すぐさま手元のコンソールを操り原因を探る。す

るとそこには驚愕の事実が書かれていた。

「馬鹿な……！ あの状態から……」

「援軍です！ 当艦の11時方向、敵戦艦群の左側面に多数のドレイブアウト反応を確認しました」

援軍の到着である

ドレイブアウトと同時に行われた集中砲火はエオニア軍に甚大な被害をもたらした。

「どうにか間に合ったようじゃの。タクト、シヴァ皇子は無事か？
」

「ルフト准将！
」

ドライブアウトし現れた戦艦を率いていたのはルフトだった。もう何度目か判らない彼の突然の出現に、タクトとレスターは驚く。

ルフトが率いてる艦隊は数にしておよそ180隻といった所か、そのいずれもが皇国の最新鋭ザープ級戦艦とパーメル級巡洋艦であり、エオニアのおおよそ300隻の戦艦の背後からレーザーとミサイルの嵐を浴びせたのだった。

数の上ではまだこちらが不利だが、無人艦隊と侮る人員がない今は、無人艦よりも確実に質で勝っているであろう。これでタクト達はエオニアの旗艦に集中することが出来る。

「エロスン大佐はいい仕事をした、これは戦後に褒章をやらんとな……
」
「……ともかく、有象無象はわし等に任せておけ」

「はい！
」

「了解です」

ルフト准将がここまでの戦力と共に来れたのは、エロスン大佐が必死で戦力の調整、人員の再配置等の諸々の雑事を、言葉どおりの不眠不休で身を粉にして処理してきたからである。そんな彼は

「旗艦殺し《フラグ・ブレイカー》によろしくと伝えてください」

と言って倒れ、ファーゴに残留した、戦闘には支障あるが動く艦で寝込んでいる。

タクトは通信を切るとエオニアの旗艦を追いかけるエンジェル隊の動きに意識を裂くのであった。

「くそっ！ 黒き月！！ 応答しろ！」

「なぜだああ！！ なんで返事が無い！」

「この僕が……こんな所で終わろうというのか！」

「……剣は、折れた」

「ちくしょお！ オイラ死にたくない！！」

ヘルハウズ隊はちょうど黒き月に向かっていた所で、ルフトの援軍と自分の艦隊の弾幕の中を航行している。ただでさえ損傷を受けているのにもかかわらず、このような環境では10分と持たずに宇宙の埃と成ってしまうであろう。『黒き月』はいくら呼びかけてもこちらの応答に答えようとはしない。彼らの心の中は暗雲に満たされていた。

「黒き月！！ 応答しろ！ ノア！」

もはや、死有るのみか。そのような言葉が頭の中で囁かれた時、急に彼らの通信スクリーンに、金髪の美少女が映し出される。それは、

彼らも良く知る人物、ノアだった。彼らは彼女からこの機体を渡されたのだ。普段彼女は『黒き月』かエオニアの旗艦のどちらかにいるのだが、今日は戦闘をする為『黒き月』にいるようエオニアから言いつけられていた。つまりは『黒き月』からの通信である。

「力が欲しいの？」

口をそろえてその言葉を肯定する。彼らは今を生き残るためならば、エオニアに謀反を起こしても良いとすら思っていた。もっとも彼らはそこまで忠誠心が高いわけではなく、エオニアからも忠臣との扱いは受けていなかったのだが。

彼女は彼らの返答が予期していたものと同じだったのか、薄く微笑みを浮かべる、まるで自分のお気に入りのおもちゃを自慢する、無垢なる少女の様な表情を浮かべ、口を開いた。

「どんなことをしても？」

——そうだ！だから早く助けてくれ！！

そう言っただけで、悪魔の契約書にサインをした。
ノアの口元が吊り上がりそれは始まった。

『ダークエンジェル』のパイロット座席の後ろから数本の触手の様な管が伸びる。その先端は針のように鋭くとがっており、大きく撓り彼らの首筋に狙いを定めた。

彼らが後ろを振り向こうとした時には全てが終わっていた。首筋にズブリと刺さった管は彼らをダークエンジェルと結合させる。彼らの神経という神経は『ダークエンジェル』と同化してしまったのだ。

変化は一瞬だった、彼らは自分が人間という種が手に出来るであろう、個としての力の領分を侵した。結果、圧倒的な全能感と共に彼らは自分というものを失ったのである。

ヘルハウンズ隊を取り込んだ『ダークエンジェル』は自身の形状を変化させる。人間であったから必要であったキャノピーは、分厚い金属の装甲に覆われ、Gに対するキャンセラー等も外され、エンジンの出力をダイレクトに外に伝える機構などにシステムが書き換えられた。完全に無人機としての仕様に切り替えられたのだ。

同時にパイロットであった彼ら、いや彼らの脳は戦闘機用のAIとして働くモノに成り下がった。彼らが培って来た技術は、単なる情報として置換され、記憶から記録に変換。つまりは生体コンピュータだ。

彼らは今ただ敵を倒すという目的でのみ戦闘を行う、殺戮マシンとなった。そこに死への恐怖や生への執着は微塵もなく、あるのは命令を遂行するという命題のみだった。

「ヘルハウズ隊の、紋章機が反転してこちらに向かってきてます！！ 速度は……先程よりも格段に速くなっています！！」

「なんだとっ！」

エルシオールはいち早く、彼らの接近を察知していた。何せエオニアとの進路に割り込むように接近する戦闘機が5機あったからだ。すぐに正体を予想することが出来た。しかし、予想外の速度にタク

トは解析を急がせた。

「司令！ あの機体中に人間を乗せる機構が全てオミットされています。形状はほぼ同じようですが」

「そんな……生体反応は、確かにあるのに……」

ココとアルモはいきなりの事態に戸惑っているようで、表情は不安げだ。タクトは冷静に、すでに繋いであった整備班のクレータのウインドウに顔を向けた。

彼女は苦虫を噛み潰したような顔をして、タクトに答えた。

「……おそらく、人間の体を取り込んで動いているのでしょうか。人間ののはそれだけで優秀なコンピューターですから……おそらく、彼らはもう……」

「くそっ！ エオニアめ……自分の部下すら駒のように使うのか！」

タクトは医務室に待機しているケーラに繋ぐ、事態を軽く説明し彼はこう問うた。

「この状態の彼らを、元に戻すことは可能ですか？」

「正直難しい……いえ、不可能でしょうね……すでに機械と同化し

てしまっているもの……」

ケーラは、憂いを帯びた表情で、タクトに気まずそうに話した。自分の医療に携わるものとしての限界を見せられたような気がしたのだ。彼女に責任は塵芥一つほども無いのに、気に病んでしまっているのだ。

「そうですね……皆、あんな奴等でも顔見知りだ。楽にしてやるぞ」

タクトは、ケーラとの通信を終えると、前を向き強く宣言する。自分達が、倒してやらなければ、彼らは救われないし、何よりこちらが危ないのだ。エンジェル隊の面々も理解しているのか、その言葉に強く頷く。

「エンジェル隊！ 戦闘開始！！」

「『了解！』」

10機の機体が宇宙で絡み合う、最後の戦闘が始まった。

「『エタニティソード』の収容を確認、右腕部の損傷の応急処置を急ぐわよ！！」

「了解！」「」

格納庫では整備のために戻った『エタニティソード』を取り囲むように整備班の面々が作業を開始していた。彼の機体は腕の部分の劣化が激しいのだ、先程の特殊兵装の連続での使用がひびいてるのか、即急に処置が必要であった。

「ラクレット君、右腕を持ち上げるように操作をお願いします」

「……………了解しました」

クレータはラクレットに指示を出すものの、戻ってきたのは熱病に
魔されたような上ずった声だった。しかしこちらの言っている内容
を理解している様子ではある。

「……………損傷がひどいわね……………急いで修理するわよ!」

「「「はい!」」」

しかし、今はともかく、急いで、修復を終え戦力としての『エタニ
ティースード』を万全にしなければならぬ。クレータを筆頭とす
る整備班クルーは、全力で作業に取り掛かった。

一方、ラクレットはまさに『疲労困憊』という表現が似合いそうな
様相だった。額は脂汗にまみれ、操縦桿を強く握り締めている腕は
小刻みに震えている。

しかし、コックピットの中で少し休むことで思考に余裕が出来たら
クレットは、今になってようやく自分の状況を理解した。先ほどタ
クトに『一端補給に戻れ』と言われたことは、かろうじて覚えてて
はいるが、意識は霞がかったかのようにぼんやりとしている。しか
し、相変わらず戦闘への強い義務感が、彼の心を掻き立てていた。

「(……………戦闘中満足に自己管理も出来ないなんて、なんて不甲斐無
い)あの……………整備はどのくらいかかりますか?」

「すぐに出来るわ、でも貴方は平気なの?」

「ええ、行けます」

ラクレットは、表情に出てこようとしている疲れを、必死に隠してそうクレータに返す。正直もう限界に近いのだが、それでも彼は戦うことをやめようとはしなかった。

「……よし、終わったわ、発進シークエンスに入って頂戴」

「了解、発射シークエンスに入ります。タクトさん指示を」

「エルシオール後方の敵に牽制を頼む」

「了解……『エタニティソード』発進します」

タクトのその淡々とした口調に、やや余裕がないんであるうことを、感じ取りつつ、ラクレットも事務的に返す。

腕は震え、攣りそうだが、それでも彼は操縦桿を離さない。

「この戦場を、僕は切り抜けるんだ!!」

そう自分を鼓舞して、一人、エルシオールの後方に向かっていった。

「なんだろう、勝ったのに全然嬉しくない」

「ああ、むしろ胸がムカムカして、どうにかなっちまいそうだ」

エンジェル隊がヘルハウズ隊の面々を文字通り沈めた時、ブリッジでしかめっ面を浮かべながらそう交わしていた。敵の人の命をモノのように見る行為もそうだが、タクトの場合は、彼らに自分の指示で止めをさしてやれと命令したこともある。

別にタクトもレスターも争うことが好きだから軍に入ったわけではない。これは当たり前のことだが、むしろ争いなどくなければいいと思っているのだ。ヘルハウズ隊だって、傭兵部隊でエオニアに従っている奴等だったが、それでも自意識を消され、兵器のコンピュータ代わりになるような最期を迎えるべきやつらではない。

タクトはもう一度、前方スクリーンの中心に聳え立つエオニアの旗艦を睨みつける、情状酌量の余地などもはや無かった。

「『クロノブレイクキャノン』の充填率は？」

「あと10秒ほどでチャージ完了です」

「……レスター……撃つぞ」

「ああ、やっちまえ……お前なら力に酔うなんてことは無いだろうからな」

『クロノブレイクキャノン』をシャトヤーンから授かった時、彼ら二人はこの強大な力に惑わされたのならば、エオニアと同じだということ強く認識していた。そのためここぞという時にしか使わないでおこうという方針で、今日の戦闘をこなしてきたのだ。事実、『クロノブレイクキャノン』の充填には多大な時間を費やすので、戦略的にもそう乱発することは出来なかった。

「チャージ完了しました、いつでも撃てます！！」

「わかった……目標、エオニア旗艦、『クロノブレイクキャノン』撃てええ！！」

タクトのその言葉と同時に、エルシオール下部に設置された、巨大な砲台——『クロノブレイクキャノン』から天文学的量のエネルギーが一直線に飛び出した。エオニアの数百メートルを軽く越す全長を誇る旗艦すら、余裕で優雅するそのエネルギー砲は、『黒き月』がファールゴで放ったそれとなんら謙遜のない威力であった。

エオニアの旗艦は瞬く間に莫大な光量の輝きに包まれ——消滅した。

「馬鹿な……ノア、私が……私こそが、真のロストテクノロジーの継承者だと言ったではないか、その私がなぜ……」

それが、トランスバール皇国史上、最も罪深き人間と後世で呼ばれる、エオニア・トランスバールの辞世の句であった。

「敵旗艦、消滅を確認……司令！！」

「ああ、やったんだ。オレ達の勝利だ」

「長かったな、今日まで……といってもエルシオールに来てまだ二月もたつてないが」

ブリッジの人員は、喜びの勝利よりも、一仕事終えた達成感で、安堵に包まれているといった感じだ。しかし、そんな空気を壊すように、エンジェル隊から通信が入る。ようやく争いが終わったという開放感からか、彼女たちはいつにもまして元気にあふれていた。早速祝勝会はどうしようかとの会話をしているくらいだ。切り替えが大変早いことである。

「タクト、ようやく終わったね、お疲れさん」

「私たちの活躍、最後の最後で掠め取られた気分ですが、無事勝利できたので、良しとしましょうか」

「……私たちの勝利です」

「ええ！ これで、ようやくお休みがもらえるわ！！」

「やりましたよ！！ タクトさん。これで戦いは終わったんですね？」

途端ににぎやかになるブリッジ、いつもなら、微妙に顔をしかめるレスターだが、今ばかりは、仕方ないかといったかんじで、微妙に投げやりだ。だが、その口元はそこはかとなくにつりあがつており、珍しい彼の笑顔がそこにあった。アルモはその表情に見とれて、そのためか、ラクレットの『エタニティソード』がこちらに戻ってきたことの報告を忘れてしまっていた。

「すいません、遅れました……」

「ああ、ラクレット、さつきはお手柄だったよ。あとは、残存戦力を叩くだけだから、あんまり気を張る必要は……」

タクトがそこまで言ったタイミングで、突如低い男性の声で広域通信が発せられた

—— ククク、人間とは実に愚かだな、幼子の外見をするだけで簡単に騙される。

「誰だ！！ 貴様は！！」

突然の事態に一気に沸き立つ『エルシオール』
レスターは思わずその声に対して詰問するように叫んだ。

——我こそは、『黒き月』ノアという少女インターフェイスを
借り、ここまで来たモノ。『白き月』よ我に答えよ。

その瞬間、黒き月は自身を分解するかのように広がり始めた。同時に戦闘宙域を漂っていた『白き月』は『黒き月』に引き寄せられるかの如く黒き月へと前進してゆく。

後にエオニアの乱と呼ばれる戦いの、正真正銘最後の戦いの火蓋が切っておろされた。

決戦——クロノブレイクキャノン（後書き）

ノーコメントで

幸運の女神

幸運の女神

「マイヤーズ、現在『白き月』は、あの『黒き月』に引き寄せられている……あのように人に害なすテクノロジーに『白き月』を渡すわけにはいかぬ。『黒き月』を撃て！！」

『白き月』から、シヴァ皇子の通信が入る、現在『黒き月』は『白き月』と融合しようとする展開し、まるで包み込むかのようになり、白き月を取り囲んでいるのだ。
シャトヤーン曰く

「『黒き月』が『白き月』を求めている」

とのことで、専門的な話はわからないタクトも、ともかく、シヴァ皇子の命令を遂行するのになんら不満など無い。

『白き月』をあんな、人間をパーツとしてしか見てないような、『黒き月』に渡してたまるものか。そういった使命感が胸の奥底から湧き上がってくるのだ。

「……みんな！ 正真正銘これで最後の戦いになるだろう」

タクトは、今日何度目かわからない通信を飛ばす。先程敵の首領を倒したのに、実はそれが黒幕ではなかった。という事態の前にも、彼は冷静であった。むしろ、心は穏やかで、今日までのエルシオールの日々が脳裏をよぎる。

「思えば長かった。いきなりクリオム星系で君たちに出会って、そのままオレが司令に就任して、今日まで一緒に戦ってきた」

思い出すようにそうゆっくり紡ぐタクト。思えば二ヶ月前の自分は、まだクリオム星系でのんびりと昼寝をしつつ、駆逐艦の艦長なんぞをやっていたのだが、それがずいぶんと懐かしく感じる。本当に密度の濃い日々だった。

「そして、ついさつき、オレ達は絶望的な戦力差の中で、あのエオニアに勝利した。そんなオレ達が絶対に倒さなければならぬモノ……それが、目の前にある『黒き月』だ」

「ミルフィー、ランファ、ミント、フォルテ、ヴァニラ、ラクレツト……皆、行くよ」

「……………了解！！……………」

「それじゃ、戦闘開始！！ 作戦目標はエルシオールが『クロノブレイクキャノン』を撃つための時間稼ぎ、並びに、撃つポイントまで移動する間の護衛だ」

タクトのその言葉と共に、エルシオールは防衛衛星と最新型の高速突撃艦を放出し続ける『黒き月』に向かい前進を始めた。最後の戦いの火蓋が切っておろされたのだ。

「よし、ラクレット、ランファ二人とも頼むよ」

「わかったわ、遅れるんじゃないわよ！！ ラクレット！」

「……了解です」

まずは何時もどおり、目の前の敵に、二機の陽動兼、近接攻撃を仕掛けるタクト。

もはやセオリーと化している、この戦術パターンだが、ランファの『カンフーフアイター』一機でも、ラクレットの『エタニティソード』だけでも成り立たない戦法だ。

『カンフーフアイター』だけなら、装甲の薄いそれに攻撃が集中してしまい耐えられないし、『エタニティソード』だと、リーチの短さから複数の目標に対応できない。

『エタニティソード』の代わりに『ラッキースター』を用いようにも、カンフーフアイターと、速度の差がありすぎるので、距離が開きすぎてしまい失敗するであろう。

「……つく、腕が重い……」

針に糸を通すような起動制御で、ラクレットは攻撃衛星に取り付くこちらを研究しているのか、数百メートルサイズの巨大防衛衛星なのに、近接専用の機銃が搭載されているのだ。

しかし、『黒き月』が所持しているであろうデータは、あくまでリミッターがかかったものに過ぎない、今のラクレットは補足されることなく、左右の双剣を疾駆させ、鉛球の雨霰という、盛大な歓迎を右に左に掻い潜る。しかしながら、やはり持久戦の為に、疲れが響いているのか、かなりつらそうだ。

彼が零距离で危うげに回避行動を続けている間、ランファは敵の大型砲門や、遠距離用のそれを引き付ける。百メートルを優に超える大きさの、巨大な防衛衛星だ。砲門の数も馬鹿みたいな数字だ。そもそも移動を前提としている艦と、防衛のための星では、武装にさけるスペースに雲泥の差があるのだから。

しかし、それをものともしないで、果敢と攻撃をいかくぐり、粒子ビーム砲と、ミサイルを浴びせる。ラクレットの『エタニティソード』が飛んでいるすぐそばにすら、性格に着弾させていくその腕には、もはや銀河中の誰もが文句を言うことが出来ないものだ。近接戦闘を至上とする彼女は、自分の機体制御と、一瞬での空間把握に円熟している、それこそ皇国でも五指に入るほどに。紋章機レベルの大型戦闘機に搭載されている照準システムならば、何所に打つかの判断さえ出来れば、性格に当たるのだ。もちろん、それほど距離が離れていないことが前提だが。

「ようやく気持ちに整理がついた所なんだから！！　こんな所で負けている暇なんてないのよ！！」

彼女はしばしば、戦闘中に大声で叫ぶ。これは結局の所、自己暗示的な側面が強い。人間の心に100%の判断など出来ない。かならず選ばなかった方に、幾許かの心が惹かれていたものだ。そういう意味で、人間の理性とは正反対な感情の問題……恋愛の問題など、このような非常時であろうと、短時間で吹っ切れるものではない。しかし、しかしだ。ランファは、自分の心に良くなじむ答えを見出したつもりでいる。

「私はねえ、皆が笑顔でいられるなら……あの娘が笑っているなら、きっと何時か私も幸せになれるって、信じているんだから！！」

きつと彼女のことを知っている人ならば、彼女らしいと評し、話を聞いただけの他人ならば、結局負けてそれらしい理由をつけているだけ、まだ吹っ切れていないと見るであろう。そんな事を彼女は大声で叫ぶ。何よりも自分に言い聞かせるために。

「フォルテさん、今！！」

「あいよ、了解！！」

その言葉に答えるのが、フォルテだ。彼女は今迄、多くの場合で傍観者として、一步引いた冷静な目線で『エルシオール』を見てきたと自負している。司令がくじけそうな時は、支えたし、仲間のメンタル面にも気を配ってきた。それを隊長の職務として、別に困難なことをやってのけたという自覚も無しにだ。

もちろん彼女自身も成長している。一応背中を預けられる上官も出来たことだし。世話の焼ける部下のフォローも上手くなった。ルフトが途中でいなくなったために、自分がエンジェル隊関係者で最年長だったからだ。

彼女の仕事は、仲間の信頼に答えることなのだ。

「ストライク バースト！！！！」

だから今は、もっとも火力の高いという、攻撃の要である『ハツピートリガー』で防衛衛星を撃滅させる。
それが彼女の仕事だ。仲間も頼りにしている、その攻撃力は伊達じゃないのだから。

「敵防衛衛星、撃破！！　まだたくさんあるが、道はできてきた、突っ込むぞー！！」

「了解！！……司令！！敵の増援です！！」

タクトがそう宣言するのと、ココが敵の増援が出現してきたのを報告するのは、ほぼ同時だった。

エルシオールは、先行させている紋章機との距離を詰めるべく、全速前進を開始したばかりで、急に方向を変えることはできない。ちょうど3時の方向に現れた敵に側面を突かれる形となってしまうのだ。しかし、タクトは一切あわてたそぶりを見せずに、一言だけ指示を口にする

「ミント、よろしく」

「了解ですわ」

エルシオール護衛用に待機させておいた、『トリックマスター』の背後に搭載された、フライヤーが待つてましたとばかりに、宙に出される。計21個のそれは彼女のテレパスによつて完全に統制され、手足として敵を狙う。ラクレットの予知能力フレイグニッションと違い、『トリックマスター』は感知系のテレパスによりその性能を支えられているのだ。つまりは、ある意味で機体の性能を引き出すという点においては、彼女はエンジェル隊でも随一なのである。

「来て早々で申し訳ございませんが、ご退場くださいませ　フライヤードانس！！」

彼女が歌うようにそう呟くと、すでにマルチロックを完了していたフライヤーから一斉に、レーザーが射出される。『エルシオール』からは水色の光の筋が幾重にも輝き、敵の群れを蹂躪しているように見えるであろう。それは幻想的で、優雅な光の舞を見ているようであった。

「すみませんタクトさん、一隻取りこぼしてしまいましたわ！！」

だがさすがに数が多すぎたのか、すべてを破壊しつくすには至らなかったようだ。といってももう隻の突撃艦の内4隻を沈めたのだ時点で紋章機の恐ろしさと、彼女の能力がわかるであろう。

突撃艦は『損傷レベル的に特攻するほうが戦略的效果が得られる』という設定されたAIに基づき、全武装を稼働しエルシオールに狙

いを定める。黒き月の最新テクノロジーによって作られたそれによる、砲火はそれなりのもので、『エルシオール』に爆音を伴う振動が襲う。

「つく！ 損害報告！！」

「Bブロック外壁に損傷…… 人的被害はなし！！」

しかし、別にミントの攻撃が封じられていたわけではない、すばやくいつもの3機で、突撃艦にとどめを刺す。ミントは『エルシオール』にダメージを与えてしまったことを一瞬悔やんだが、すぐに、ここで悔やむのが自身の仕事ではない、と思い直し、『エルシオール』を追いかけてくる敵戦艦への攻撃に移った。

彼女が、人的被害がないなら問題はないと分かったからでもある。

「修復します…… ナノマシン散布」

ヴァニラの機体『ハーベスター』ナノマシンを散布してほかの機体を修復できるという、特殊な機体だといっても特殊じゃない紋章器は存在しないのだが。

それはともかく、いままで戦闘中は、内蔵されている高速修復可能なナノマシンを使用していたが、それは戦闘機修復用に調整のそれだったが、白き月において補給した結果、戦闘時においても、紋章機や戦闘機以外……といっても『エルシオール』だけだが、修復できるようになったのだ。

「ミントさん、損害は私が癒します。極力抑えてくれるのであれば、フォローは任せてください」

「……ありがとうございますわ」

しようしよう申し訳なさそうに、ミントはそう答える。

妹分のようなヴァニラに自分の後始末をさせてしまったからだ。

「いえ、それが私の仕事ですから」

しかし、はにかみながらヴァニラはそう答えた。彼女は自分の気質的に敵を攻撃するよりも、味方を癒やす方が向いている事を解っているのだ。ゆえに自分のできることを重点的にするだけ、そういう考え方なのだ。

むしろヴァニラはラクレットを含む攻撃メインのほかのメンバーをそれぞれ尊敬している部分もあるくらいだ。

「皆さんが全力で戦えるように、サポートするのが、私と『ハーベスター』のできることです」

だから、彼女はみんなが敵を倒してくれると信じて、エルシオールの修復に全力を出すことができる。

皆もヴァニラがいるから、自分たちの仕事を遂行することに全力を出せるのだ。

「前方に敵防衛衛星が回り込んできています。数3！！」

エルシオールが、全身を続けていると、目標エリアの直前あたりに、防衛衛星が最終防衛ラインとも言いがごとく、列を成して待ち構えていた。

どうやら、ある程度の移動はできるようで、こちらの進路を先読みして攻撃の準備をしているようだ。

ランファ、フォルテ、ラクレットはエルシオール4時方向の敵の足止めをしていて手を外せない、ミントは敵の増援を近隣に展開している味方艦隊と協力して落としている最中だし、ヴァニラはつい先ほど、補給のために格納庫に入っただけだ。

だが、タクトたちにはまだ、エンジェル隊の最高戦力が残っている。彼女は先ほどからひたすら、エルシオール進路上の左側に展開している敵の周りを、適度に攻撃しながらひたすら飛行していた。本当にただそれだけをしていただけなのだが、敵からの彼女の戦略的な価値は非常に高いのか、かなり上位の優先排除目標になっているのだ。

つまるところ、彼女がこなしていたのは囷だった。ひたすら敵に一撃あてては距離を取りつつ別の敵に向かい、また一撃離脱。その繰り返しに結果、彼女がほぼ半数の敵を一人でひきつけていたのだ。特殊兵装を使用せず所持している武装を節約しつつだ。

つまり、彼女はやる気は上限を超えており、コンディションは最高で、テンションはMAXだ。

「ミルフィー、我慢してくれてありがとう。それじゃあ、頼むよ」

「はい！！ バーンとやっちゃいますよ！！」

その刹那、『ラッキースター』から壮絶な光量のエネルギーが放出される。天文学的な破壊力を持ったそれは、ある一定の太さまで広がる就一直線に拡散せず対象へと侵略する。

宇宙空間のため音は聞こえないが、おそらく轟音を響かせるであろうそれは、一瞬にして、防衛衛星を塵と化した。

これでエルシオールの進行を遮るものはすべてなくなった。

そう、順調に黒き月攻略は進んでいたのだ。

「よし、ポイントに到達した、クロノブレイクキャノンの状態は？」

「

「クロノブレイクキャノン、発射ポイントに到達！！ 重点完了まで、あと40秒です」

「敵がこちらを攻撃可能な距離に入るまで、およそ65秒、行けます！！」

「よし、エンジェル隊とラクレットはエルシオールで待機してくれ。」

「了解！！」

だが、さんざんイレギュラーが入ったこの世界においても運命をつかさどるレベルの彼女は、数億、数兆分の一の確率を残酷なまでに強い運によって、引き当ててしまった。

それは一瞬の出来事だった。

射程可能距離よりも離れたところで戦闘していた敵の戦艦の砲門がこちらに偶然向いていた。

それが発射されたとき、偶然対象に当たらず、そのまま宇宙空間に消えるはずだった。

しかしその先に偶然エルシオールがいた。射程可能な距離外で完全にノーマークだったエルシオールがだ。

その、何処へ飛んでいくかもわからない弾が、偶然直進した先に偶然いたエルシオールの、シールド出力の弱い『クロノブレイクキャノン』の砲身に偶然あたりそのあたった場所が、偶然エネルギーの重点をしている場所であったのだ。

「……エルシオールに被弾……『クロノブレイクキャノン』に直撃、エネルギー供給が停止しました。」

「馬鹿な……！どんな確率だそれは……！」

そう、皇国の希望——エルシオールの切り札クロノブレイクキャノンはあと数秒というところで、打つことができなくなってしまったのである。

「つく、格納庫……！急いで修理と復旧を。エンジェル隊は敵の迎撃だ。」

「ですが、突然出力がなくなったので、こちらとしては全く原因に心当たりなど……」

「今更そんな情報が何になるっていうんだ……！」

今まで順調だった分の反動か、一気に通信は不穏な雰囲気醸し出し始める。

まるで、快晴だった空の西の彼方から分厚い雲が歩み寄ってくるような空気だ。

そんな中最も悲壮感を表して、通信を聞いているのは、ミルフィーだった

彼女の顔色は青を通り越して、色をなくし白くなっており、両腕は小刻みに震え、操縦桿を強く握りしめていた。

「……私のせいだ……だって、普通そんなこと起こらないですよね……」

「ミルフィー、それは違う!!」

慌ててそれを否定するタクト。

彼女のテンションを元に戻すという仕事のことなど、頭の片隅にもなく、ただ単純に彼女がそのような状態に成っていることが、ただただ我慢ならなかったのだ。

しかし、ミルフィーは目に涙を浮かべ、てそのタクトの言葉を否定する。

「違うじゃないですか!! 無視できるようなすつごく小さい確率を引き当てるなんて!! 私の運が!!」

「そうじゃない、そうじゃ無いんだよミルフィー……」

「こんなんじゃない私、タクトさんの幸運の女神なんて成れない……」

宥めるように言い聞かせるタクト、だが、ミルフィーは完全に自分

の中で結論を出してしまっている。

悪いのは自分だ、私のせいで、こんなことになった。

どうにかそれをただそうとするのだが、事態はそれを許すほど甘いものではなかった。

「司令！！ 周囲全方向を、敵艦に囲まれています！ 指示を！！」

「

「くそっ…… エンジェル隊、散会して敵の注意を少しでも引き付けてくれ、1秒でもいいから時間を稼ぐんだ！！ クレータ班長はとにかく、何とかしてください！！」

「わ…… わかったわ」

そして、この戦いの中で最も厳しい時間が幕を開けた。

1隻の儀礼艦と6つの戦闘機に対するは、数百を超える敵の最精鋭艦隊の軍団だった。

ヴァニラとフォルテで一組、あとはそれぞれ一人で各々が、別の方

向に散って行く。

誰一人として、表情に余裕などなく、齒を食いしぼり、額に汗を作りながらの戦いだっただ。

先ほどまでと違い、それぞれが協力し合いこともほぼ不可能なこの状況。長所を最大限に生かすこともできず、事態は刻々と悪化していくばかりだ。何よりも問題なのは、エルシオール防衛が最優先任務であり、あまり離れて行動することができないことと、すでに完全に敵に包囲されていることだ。

いくらタクトといえども、最初から詰みの状況な戦況をひっくり返るなど不可能だ。それこそ神がかりどころか神の力が必要なことだろう。

「つく、『カンフーファイター』防衛ラインを下げるから、もう少し引いてくれ。ミント！ 無茶しすぎだ、下がるんだ！！」

敵のエルシオールを中心に描く円は、次第にその直径を狭めていく。誰が悪いというわけでもなく、単純な数の暴力が理由だろう。味方の増援は間に合わない。すでにこの包囲網を食い破り、エルシオールを救済すべく、1方向から味方の船団が切り崩し始めているが、敵は黒き月で作られたばかりの最新型だ。注意があまり向いていないとはいえ、そう簡単に倒せる相手でもないのだ。

「つきや！！……エルシオール、被弾！！ C、Fブロックにて火災発生！！」

「人員を急がせろ、急いで消火させるんだ。同時に隔壁を閉鎖しろ！！」

ついに、エンジェル隊たちの奮戦空しく、エルシオールを直接攻撃する艦が現れた。敵艦の攻撃力は相当なもので、浮沈艦エルシオールのシールドを容易く削ってくる。

エンジェル隊を呼ぼうにも、それぞれが、二桁近い数の敵艦をさばっているのだ、そう簡単に回せるわけでもない。

「格納庫！！　まだか！？　」

「もう少し時間をください！！　再充填可能にします！！　」

杯折る通信は絶望的、まだ心が折れている者はいないものの、船上では絶対に流れてほしくない空気がひしひしと感じられる。

そして、ついにぎりぎりで食い止められていた、バランスが、つり合っていた天秤が壊れた。

「きゃああああ！！」

「ミント！！　くっ！！」

敵艦は、現在最も敵の撃破効率の良い『トリックマスター』に狙いを定めたのか、集中的に砲火を浴びせていた。

ミント自身が一番よく知っていることだが、が図の暴力というのは、凄まじいもので、彼女も防御や回避に徹していたのだが、抗いきれず、ついにシールドを抜かれ、直撃をくらってしまった。

『トリックマスター』はそのまま機能を停止し、宇宙空間に浮かぶだけだった。幸いだったのは、敵のAIの行動理念は戦闘不能にすること、その状態の彼女の機体に攻撃が加えられなかったこと

であろう。

「そんなー!! ミント、ミント!! 応答してー!!」

「ミルフィーー!! 今はそんなことしている暇じゃないでしょー!!」

「だって、ミントがー!!」

完全にパニックになってしまった、ミルフィー。彼女の『ラッキースター』はエルシオールの上あたりで、停止して動くのをやめてしまふ。それを叱責する蘭花だったが、彼女は呼びかけをやめない。

「……! 『ハーベスター』 損傷が許容値を超えそうです。」

「こっちも、まずい雰囲気だよ…… タクト! どうする」

ヴァニラとフォルテも、そろそろ限界のようで、完全に防戦一方だ。ランファやラクレットに比べて、彼女たちの機体は機動力に劣るからであろう。もともとこのような戦いには向いていないのだ。

「とにかく、耐えるしかないんだ…… 二人はそこを離脱して、さっきまでミントが居た場所あたりで、頼む」

「……了解」

「……了解しました」

タクトは、半分死ねというにも等しい命令を、部下に出すしかないという無力感に打ちひしがれていた。

だが、それによって思考を止めていいわけではないのだ。タクトはミルフィーに通信をつなぐ。

「ミルフィー、お願いだ！ 力を貸してくれ！！」

「嫌です！！……だって」

そこで、ミルフィーは口を閉ざす。ややあつて、せき止めていたものが溢れたかのように、涙とともに吐き出した。

「私が戦ったら、もっとひどいことが起きるかもしれないじゃないですか！！」

「そんな……」

彼女のその言葉はタクトにとって何よりも重いものだった。

『そんなこと絶対はないと。』言うのは、彼が言つと慰めにしかないからだ。なぜなら彼は、彼女のその運を含めてミルフィーを愛しているのだから。

彼女の運を否定することは、昨晚の言葉が嘘になってしまう。彼女に対して嘘をつくことなど、タクトにはできるはずがないのだ。

だから、そんなタクトの心情を察したのか、突如通信ウィンドウが開き、フォルテとヴァニラの顔が映し出される。

「何を言ってるんだい！！ そんなだったら、私たちはとつくの昔にくたばってるだろ！！」

「そうです。ミルフィーさんがいたから、今の私たちがいるんです」

二人は、弾丸のスコールを浴びながら、そう叫んできた。通信ウィンドウに映し出される、二人の顔は、カメラを見ていないので目は合わなかったが、それでも強い感情が伝わってくる。通信する余裕なんてないだろうに、それでも二人は、皇国の未来と、親友を仲間を救うために繋いだのだ。

もう二機のシールド出力は、風前の灯だ。しかし彼女たちの心はまだ屈していなかった。

「だから、後は頼んだよ！！最後の花火だ！！」ストライクバースト！！！！」

フォルテの『ハッピートリガー』から、今まで数多の敵を葬り宇宙の塵と沈めてきた、弾丸とミサイルの嵐が巻き起こる。それは彼女に止めを刺そうと接近してきた一隻の敵戦艦に命中し巨大な爆発を起こす。さらに後発のミサイル軍がその周りにいた敵にも降り注ぐ。敵艦の爆発から、連鎖的に付近の敵も爆発を起こし、さらにミサイルが襲いかかり圧倒的な規模の爆発が起こる。しかしその爆発の向こうから敵艦の放ったレールガンの砲火により『ハッピートリガー』は沈黙した。

「治療します、『リペアウエーブ』」

ヴァニラは、その攻撃が一瞬彼女へと向かなくなった瞬間に、治療用ナノマシンを拡散させる。ミサイルや回避行動にとっていたエネルギーをすべてそちらに回してだ。すでにシールドが落ちている2機には修復がいかなくなったものの、『カンフーフアイター』『ラッキースター』『エタニティソード』『エルシオール』の損傷個所が急激に塞がつてゆく。かなりの距離があつたのか、完全とはいかないものの、それでも戦闘続行に支障を全くきたさないレベルまでの修復だ。『エルシオール』も外部損傷の7割以上が塞がつた。だがやはり彼女の機体も、『ハッピートリガー』を沈めた敵艦によって砲撃され、沈黙してしまうのであつた。

「フォルテさん、ヴァニラ!!」

「だから、泣いてる暇なんてないってんでしょ!!」

半狂乱になって叫ぶミルフィー、それを窘めながら、全力回避行動を続けるランファ。二人とも完全に普段の余裕などない。親友が、戦友が立て続けに3人も安否不明になってしまったのだ。までもでいられるわけではないが。

タクトは、もはや最後の抵抗とばかりに、エルシオールを『黒き月』に向けさせつつ、ミルフィーに通信を繋いで、叫んだ。

「ミルフィー、お願いだ、力を貸してくれ!!　オレは……　オレたちは君のことを……」

「12時方向からの砲撃!　回避できません直撃します!!」

「総員衝撃に備えるんだ！！」

しかし、その思いもむなしく、『黒き月』方面の艦隊からの攻撃が正面に命中してしまう。

天地を裂くような、激しい轟音の後、激しいノイズとともに『エルシオール』と紋章機達との通信は断絶してしまった。

「そんな、エルシオール、応答して！！」

「通信がなくなっちゃった！！」

今となつては二人とも、何をすれば解らないような状況になつてしまったのだ。

タクトの指示を受けられず、ランファは敵戦艦に囲まれ、攻撃を受けてしまう。最悪なことに命中したのは、機体背部のスラスターで、急激に機体の出力が落ちてしまう。

「きゃああああ」

「ランファ！！」

強い衝撃と振動を受け、悲鳴を上げてしまうランファ。ぐるぐると錐揉み回転をしながら、不安定に『カンフーファイター』は飛び続けた。ミルフィーはその光景を見て思わず彼女の名を叫ぶものの、それが何になるというわけではなかった。

しかし、ランファは、Gキャンセラーがあっても押しつぶされそう

なGの中で、ミルフィーに最後の通信を繋いだ。

「いい、ミルフィーあんたはねえ、へんてこな女で、いつも私から良い所ばっか掠めとってて、私ばっか割を食ってたのよ!!」

そこで、苦しいだろうに、彼女は笑顔を、心からの笑顔を作り、絶叫した。

「でもね、だからこそ、そんなへんてこなあんだからこそ、私はアンタと親友になれたのよ!!」

ミルフィーは、そんな彼女にかける言葉がなかった。この不甲斐ない自分が情けなかった。自己嫌悪と何かよくわからない、ぐちゃぐちゃな感情が混ざり合い、訳が分からなくなってしまった。

「だからね、絶対に自分を否定しちゃダメ、あんたなら、こんな状況でもどうにかできるって、そう思えるんだから、この宇宙一良い女の私がね!!」

「……ランファ」

そんな、いつも通り自信満々な笑顔でランファはミルフィーに伝えた。

「頼んだわよ……」

「うん」

その言葉を最後にランファの『カンフーファイター』のシールド残量は0となり、沈黙した。

ミルフィーは、操縦桿を強く握りしめて。決意を固めた。

「私は……」

しかし、今になってもまだ動き出さない彼女を、好機と感じたのか、敵艦の主砲から鋭くレーザーが照射された。

まだ、動き出す直前であつた、彼女の『ラッキースター』へと一直線で迫りくる敵の攻撃。たとえシールドが万全に近かろうと、くらつてしまえば、一撃のもとに機体が試算してしまうであろう。出力を一点に絞つた、その破壊的威力を持った光線が向かつてきたのだ。

ラクレットがそれに気づけたのは、偶然ではなかつた。彼はもう完全に限界を超えている疲労感を引きずり、話すことさえ億劫だつた彼は、エルシオール周辺に戻つてきて、レーザーを防ぐ作業をしつつ、彼女に意識を向けていたのだ。

もう、そう長く戦うことができるかわからなかつた彼は、いつ終わるかどうかが気になつていたのかもしれない。しかし、その光線が照射がされた瞬間、彼はもはや、操縦桿を強く握ることすらできないのにもかかわらず。機体を動かしていた。

敵艦と『ラッキースター』の間に割り込むように

彼の機体を盾にする形で、ただ、割り込むことしかできなかった……

一瞬で風前の灯レベルまで落ちていたシールドが剥ぎ取られ、機体をレーザーが貫いた。だが、それで出力が鈍つたのと、一瞬の時間

が生まれたせいで、『ラッキースター』は若干シールドが削られる程度の損害にとどまっていた。

ミルフィーは、目の前の突然の状況に驚いていたものの、この時を逃してはいけないという、強い感情によって
全身全霊を持って叫んだ

「今だけでいい、だから、私を幸運の女神にして！！」

その言葉と同時に、彼女の機体に生えていた天使の翼が、大きく開かれる。そのまま上方向に高く飛翔すると、付近の宙域に純白の、神々しく輝く羽が舞い降りた。

その刹那、エルシオールのシステムがすべて復旧した。
そう、まさに奇跡と思えるようなことが現実となったのだ。

「エルシオール、システムオールグリーン！！」『クロノブレイク
キャノン』へと、ものすごい勢いでエネルギーが充填されてゆきま
す！！」

「8、7、6……2、1　チャージ完了『クロノブレイクキャノン』
撃てます！！」

ブリッジから、そのような言葉と驚きの声が通信で聞こえてくる。
訳が分からんと、誰かが叫んだが、その直後に彼女は、大好きな声
で叫ばれる言葉を耳で拾った。

「目標、黒き月 『クロノブレイクキャノン！』 撃てえええええ
ええ！！！！！！！」

そして、まばゆい光とともに、極大なエネルギーが放たれ、『黒き
月』を貫き

爆散させた。

そして、その瞬間、彼女は初めて目の前を漂っている『エタニティ
ソード』の破片を、胸をえぐられるような気持ちで、認めるので
あった。

プロローグ

小鳥のさえずりで、彼は目を覚ました。状況確認のためすぐに周りを見渡すと、見知らぬ部屋にいるようだ。

プロローグ

どこか長い夢を見ていたようだが、全く内容を脳が再生しないところを見ると、大したものじゃないのかもしれない。

そこでようやく、今日の引っ越しの為に、昨日は安宿で一泊したことを思い出した。

ああ、今日はあの膨大な荷物を解かないといけないのかと思うと、朝からテンションは最低まで落ち込む中、自分が布団ではなく、愛機であるラップトップの前で胡坐をかいて寝ていることによりようやく付いた。

強張った背中を伸ばすため、立ち上がり柔軟をすることで、どんな意識はクリアになってゆく。

そう、確か自分は昨日、Er……ギャ……アドベンチャーゲームをインストールしていたんだ。だが、途中で眠くなってインストール中に寝落ちしてしまったのだった。

だが、不思議なことにスクリーンに映し出されているのは、インス

ツール完了しましたという、インストーラーの表示ではなく、文字のびっしり詰まった、テキストファイルだった。

不審に思っ、て、それを読むと2秒で疑問は氷解した。

なぜならば、それは彼が今現在、ネットに公開しようと温めている、永遠神剣の物語と、ギャラクシーエンジェルのクロスSSだった。主人公が転移という、特にクロス作品としては珍しくもない始まりで、書き出されていたのを見て、ああ、もう一度修正しなければという思いが浮かんでくる。

なぜ、今それが映し出されているのかを、少しだけ疑問に思うものの、きつと寝ぼけて開いたのだろうと結論付けて、ラップトップを閉じた。

主役を欠いた劇は、駄作にしなければならないであろう

だが、乱入してきた部外者が黒服に連れ去られ、消え去ったのなら？

しばらくの間、混乱は続くものの、役者たちはプロだ。何とか持ち直して、いつも通り、いや、評価だけなら下手したら、いつも以上のものを得られるような演技を進めるだろう。

この場合もそうだった。

しばらくの間の混乱といっても

同時に巻き起こった、貴族政の弱体化と同時に推し進められる、民主化への流れから始まる、激動の時代の幕開け。それらによってかき消されてしまい、一部でのカルト的な人気を除き、多くの人々は、戦勝記念式典では、大きく名前が取り上げられ、一時的に救国の英

雄となった『彼』の存在は、ほぼ忘れられていった。

英雄とは、表舞台を去って、初めて英雄となる。

その言葉は、真の英雄には適用されなかったが、『彼』には適用されたようだった。

すべての混乱が収まった時には、歴史の教科書に載るような人物になったのだから。

それは、『彼』の死後3年後のことだったのだが。

それはさておき、『彼』がいなくなった後、主役たちは見事な演技を続けた。

皇国の英雄は、さらに盤石な指揮をするようになり

幸運の女神は、軍をやめずに、彼の隣をずっと歩いて行った。

結果、来襲してきた侵略者を、より効果的に倒すことに成功した。

結果的には、ほぼ筋書き通りになったものの、皇国の平和を完全に取り戻すことには成功した。

それには、また別の部外者が、ある程度手引きしたからでもあるのだが、今は置いておこう。

ともかく、トランスバール皇国が平和になるまで、二人は戦い続けた。

贖罪が目的だったのか、今となってはそれは定かではないが、ともかく約1年に亘る戦いにピリオドをうつまで、戦場を離れなかったのだ。

彼ら二人の仲間たちは、彼らの心を酌んだのか、何も言わずに力を貸した。彼らも同じような気持ちが心のどこかにあったのかもしれない。『彼』の存在というよりも、『彼』がいなくなったこと。それによって、周囲の人々はいろと感じ入るところがあったのだらう。

今日、英雄と女神は、とある田舎の農業惑星の、片田舎の丘の上にある、小さな十字架の前に二人で来ていた。

安宿をでて、彼は、今日から住むことになる、自分より長生きしているアパートに向かった。

引越し業者にすべて頼む余裕などなく、荷物を郵送してもらっただけだ。故に数少ない友人に応援を頼み、先に部屋に到着した彼は、荷物が来るまでの間、部屋の中を右往左往していた。といってもそこまで広いわけではなく、すぐに飽きたのか、ラップトップを開いて、SSの続きをタイプし始める。

主人公の機体『セイクレッドフィロソファー』が剣で無双しているシーンを書いている途中で、突然彼は、強い衝動に駆られた。

ああ、自分もこんな風な活躍がしたいと

発作のように、SSを書いているとそのような衝動を感じる彼だったが、今日は一段とそれが強かったのだ。

自分が、こんなところに入ったら、きつと……大した活躍はできないで、へたれるような気がする

ヒロインとかとも、正直、意識しすぎてうまく話せない気がする、

そもそも、普段から空気読めないし

と、だんだん鬱になってきて、さっきの衝動は弱まっていくなものの、完全にはなくならずに、心の奥底でくすぶったままだった。

きつとそれが、大きな分岐点なのだったのだろう。

「ラクレット、俺たちは皇国の平和をとりもどしたよ」

「ラクレット君、私、君の分もがんばったよ」

英雄と女神の夫婦は、そう報告する。

ゲルンという巨悪を打ち破った今、皇国は平和というものを噛みしめている。

そんな中、二人はようやく、故人に報告に來ることができたのだ。

「もし、君がもついちど生まれ変わるのならば」

「こんどは、自分の為に生きてほしいの」

「君は皇国……いやオレ達のために、全力を尽くしてくれたんだから」

「来世があるなら、自由に暮らしてほしい」

「それがオレ達の願いだから」

「あー、G Aの世界行きたいなー、なんか面白い能力もってさ」

おや、ちょうどいい所に、一人いますね
ではその望み、叶えてもらいましょうか……
今度こそはね……

プロローグ（後書き）

タイトルはこれであってます

はい、『僕と兄貴と銀河天使と』はこれで完結です

これは、大体初期プロットの通り書いてます、といっても後半部だけですが

本当は もっと悲惨に死んでもらう予定だったんですよ、オリ主はしょせん、どんなに頑張って介入しても、登場人物の心を変えることなんて、不可能に近い、というか無理。みたいなコンセプトで死んでようやく、心に残るけれど それは救いなのか？

みたいな感じで

まあ、それは、どうなんだと 思って大分内容を差し替えたんですけど

せつかく2か所で書いてるんだから、初期プロットの方も書いてみようかと思って、書いた次第です。

といっても、初期まんまというわけでもないのですが

まあ、あんまり語るのもあれなので

最後にもう一度

このような作品を最後まで読んでいただき 本当にありがとございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6883o/>

僕と兄貴と銀河天使と

2011年5月15日04時24分発行